魔法少女リリカルなのはStrikerS～蒼天を愛した混沌～

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～

【Ｎコード】
Ｎ８１６９Ｊ

【作者名】
秋風

【あらすじ】
直人の物語、蒼天シリーズ第三作部！カオス・レイとの死闘を終えて再建された機動六課。その静かに流れ行く平和な時。世界を救った英雄はその流れに身を任せ、静かにその時を過ごす。しかし、その平和に流れる時の裏でうごめく黒い影。今まで明かされなかった英雄たちの悲劇の真実、そしてその鍵を握る謎の少女。その混沌の先に、いったい何があるのか！？そして、世界を救った英雄たちが見る、未来への道とは！？
魔法少女リリカルなのはＳｔｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～ＴＡ

KE OFF!

第零話「その混沌は静かに目覚める」（前書き）

第三部始動です。そして眠いです

第零話「その混沌は静かに目覚める」

そこはかつて人が夢見た楽園、アルカディア。その漆黒の地表から、静かに、そして神々しく光が放たれる。そこに成すのは人の形。それは女性や男性とも似つかない。その何かは一言呟く。

「彼らを、守らなければ・・・」

そういい残し、その何かは闇から抜け出し、まぶしい光を放って消えていった。この様子を見ていたものは誰もいない。そして、その平和に流れる歯車は軋み、再び戦いの渦へと巻き込まれていく。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～蒼天を愛した混沌～ＴＡＫＥ　ＯＦＦ

第零話「その混沌は静かに目覚める」（後書き）

次回より本編始動します

第一話「機動六課再建、生誕の宴再び」（前書き）

さあ、新しく第一話始動！あとがきにはゲストが来ますｗ

第一話「機動六課再建、生誕の宴再び」

機動六課が壊滅してから早2週間が経過した。その機動六課後地に建つ、新たな隊舎。

「しかしまあ・・・よくこんなに再現できたな」

そこにそびえ立つのは以前破壊された機動六課の隊舎そのもの。そしてそれを2週間で元に戻してしまうのだから、驚きだ。恐るべし管理局。

「パパ～」

「ヴィヴィオ。どうした?」

突然ヴィヴィオが走ってきた。あれ?ヴィヴィオはなのはのところにいたのに。

「あのね、今日遊びに行きたいの!」

「遊びにって・・・クナラガンにか?」

「うん!」

珍しいな。ヴィヴィオが自分から遊びに行きたいなんて。

「うーん、わかった。じゃあなのはママたちに聞いてきてごらん」

「駄目!パパがいいの!」

「わかったよ。じゃあ行こうか」

「わ～い！」

ヴィヴィオは嬉しそうだ。まあいっか。こうして俺はクラナガンへと足を運ぶことになった。

なのはｓｉｄｅ

私はフェイトちゃん、はやてちゃんと一緒に、その直人君が行くのを影から見送った。

「ふふっ、うまくいったね」

「でもなのは、大丈夫かな？」

「せや、ヴィヴィオがポロって言うてしまわない？」

「大丈夫大丈夫、いざというときのために、レイジングハートを持たせたから」

「ならええか。ほな、みんなを招集して準備開始や！」

「「おー！」」

こうして私たちの計画はスタート。ヴィヴィオ、レイジングハート、お願いね♪

直人ｓｉｄｅ

さてと、来たのはいいけどどこに行こうか。

「主、どうせならヴィヴィオが行ったことのない場所に行くのはどうでしょう？」

「そうだな・・・ってマリカ、お前隊舎で寝てなかったか？」

「楽しそうなので付いてくることにしました」

「あっそ」

「パパ！あれなあに？」

ヴィヴィオが指を指すのはゲームセンター。なるほど、ヴィヴィオは知らないな。

「行ってみるか？ゲームセンター」

「行く！」

こうしてゲームセンターに入る。地球のゲームが流行っていたりするこのクラナガンでは、その技術や物も半端ではない。とりあえず見ると、色々とある。ＵＦＯキャッチャーに始まり、格闘ゲームからアーケードゲームまで、幅が広いし、何よりその中が広い。

「パパ、あれ！大きいお菓子！」

見ると、普通のサイズではないチョコレートが置いてある。そういえば日本にもあるな。こういうの。

「やってみるか？」

「うん！」

こうしてヴィヴィオがチャレンジ。一発で取るのは難しいと思うが・・・

――ゴトン

え？

「やった～！」

「ヴィヴィオ、おみごとですね」

取れちゃったよ。アーム緩いのに良く取れたな。ま、お金はあるし、今回はとことん遊ぶか。

「よし、ヴィヴィオ。今日はたくさん遊ぼうか」

「うん！」

ここから俺とヴィヴィオの一日が始まる。ＵＦＯキャッチャーでいろんなものを取りまくる。そして大量にぬいぐるみやら何やらを入手。４：６の割合で多分ヴィヴィオの方が取ったものは多い。その

後はクラナガンのレストランで食事。とりあえずヴィヴィオ、ピーマン食べろ。んでもってマリカ、お前は俺の財布を空にする気か？

「パパ～」

「だ～め、食べなさい」

「マリカおね～ちゃ～ん」

「少しぐらいは手伝ってあげますが、食べないと大きくなれませんよ？」

「う～」

ま、こんな感じで昼食は終了。そして午後はマリカの提案で買い物へ行くことに。といっても、色々と見たいということで、最近できたショッピングモールへと足を運んだ。こっちの世界にもあるんだな、ショッピングモール。

「ヴィヴィオのお洋服、新しいのを買ってあげましょうよ」

「まあ、そうだな。」

確かにうちにあるヴィヴィオの服の大半はなのはとフェイト、それにはやてのお下がりだ。だが、何故か夏服が少なく、ヴィヴィオは連日似たような服しか着ていない。

「このＴシャツ可愛いですね」

「うさぎさん♪」

そこにはウサギが印刷されたTシャツがある。好きだな、うさぎ。

「あ、パパ！」

「ん？」

「これ！」

それは背中に天使の羽がプリントされたTシャツがあった。

「これでパパみたいになれるかな？」

「ああ、なれるさ、きっと」

こんな感じで服を大量に買った。今回持ってる金額がそろそろ消えそうで怖いな。まあ何とかなるだろ。

「パパ、アイス食べよう！」

「ん？ああ、アイスな」

そこはアイスクリーム屋さん。何を食べようか・・・

「ヴィヴィオ、何がいい？」

「んとねぇ・・・イチゴ！」

「マリカ、お前は？」

「私はキャラメルとチョコを」

「・・・太っても知らないぞ。それじゃあイチゴをシングル。キャラメルとチョコをダブルで」

「毎度ありがとうございます」

こうしてアイスを買い、ベンチで食べる。ああ、なんかいいな。こんな何もない休日も。ヴィヴィオはアイスを嬉しそうに食べている。

「はい、パパあーん」

「ん？あーん」

と、少し食べる。ヴィヴィオは嬉しそうだ。

「主、あーん」

「アホか」

「うぅ・・・ひどい」

「はいはい・・・」

俺は仕方なくアイスを食べる。ま、いいか。マリカも嬉しそうにしている。子供か、お前は。

「さて、そろそろ帰るか？部屋に荷物も来ているだろうし」

『しかし直人さん、マスターからは7時まで遊んでくるようにと来ていますが？』

今は6時か・・・うーん・・・ん?

「レイジングハート?どうしてヴィヴィオの首にかかってるんだ?」

『はい、ヴィヴィオが迷子になったときの為です』

なるほどね。あと一時間。だけど特に回るところもないし・・・

「じゃあ、歩いて帰るか?そうすれば一時間は潰せるだろ」

「そうですね。そうしましょう」

こうして、俺たちは歩いて、クラナガンから機動六課まで帰ることとなった。

歩く道中、ヴィヴィオが疲れたというので、俺が抱っこして歩く。

夏だから日が長いため、綺麗な夕日が見える。

「綺麗ですね~」

「ああ、そうだな」

その夕焼けを見ながら、俺たちは機動六課へと帰ってきた。そこにはなのは、フェイト、はやてが待っていた。

「おかえり」

「ただいま」

「ま～♪」

ヴィヴィオは嬉しそうになのはに抱きつく。

「お疲れ様。ヴィヴィオのわがまま聞いて大変だったでしょ？」

「いや、いつも通りヴィヴィオはいい子だったよ」

「直人君、その大量のぬいぐるみやらお菓子やらクッションやらは？」

「ああ、俺とヴィヴィオがゲーセンで取ったやつ。」

「ちなみにこれの6割はヴィヴィオです」

マリカの言葉に3人が驚き、ヴィヴィオは嬉しそうに笑っている。

「あ、そうそう。私たちの部屋、出来たんだよ。行こ♪」

こうしてなのはたちに手を引かれ、その部屋へと案内された。そこは以前より広い部屋だ。で、ここで思うんだけど。

「ベッド、でかくないか？」

「みんなで寝るんだから大きいよ」

「ふかふか～」

別に一緒じゃなくても・・・

「「「一緒がいいの！」」」

「はい・・・」

俺は荷物を置く。とりあえず夕食に行くか。

「あ、そうそう。今日はお祝いパーティーだよ？」

「お祝い？ああ、機動六課再建のか」

「それもだけど・・・」

「？」

「ま、行けばわかるから、行こか？」

俺はあまり事情を飲み込めないまま、食堂へ向かうこととなった。

食堂に着くと、突然クラッカーの音が鳴った。

『誕生日、おめでとうございまーす！』

「え？」

誕生日って・・・俺？

「忘れたの直人君？今日は７月の２５日だよ？」

「え・・・あ！」

そうだ、すっかり忘れてた。って、前にもそんなことあったな。

「ほら、主役は前前々だよ？」

俺は真ん中に座らせられる。そっか、俺今日で２０歳なんだ・・・悲しいような嬉しいような・・・。で、一同が歌を歌いだす。

『ハッピバースデイ　トゥーユー』

『ハッピバースデイ　トゥーユー』

『ハッピバースデイ　ディア　直人君～』

『ハッピバースデイ　トゥーユー！』

俺は歌が終わると同時に、蝋燭の火を消した。そして、みんなから拍手が巻き起こった。

「さ、一言！」

と、はやてに言われる。

「え、えっと・・・今日はありがとう！」

「いえー！」

みんなで騒ぎ、食事が始まった。今年から酒が飲めるということで、酒を飲む。まあ、騎士のときはたしなみで飲んでいることが多かっ

たから特に苦手ではない。すると、フォワードが駆け寄ってきた。

「直人兄ぃ、これ、フォワード一同からプレゼントだよ」

と、箱を渡された。

「ありがとう。開けていいかな？」

「もちろんです」

箱を開けると、そこに入っていたのは十字架に天使の羽が生え、十字架の真ん中に蒼いガラスが埋め込まれたペンダントだった。

「へえ、綺麗だな」

「みんなで選んだんですけど、どうですか？」

「俺はこういうのあまり持っていないから、嬉しいよ。ありがとう」

俺がお礼を言うと、フォワードのみんなは嬉しそうに笑っていた。

「直人君、これは私から」

「これは私」

「これはうちや」

と、３人からそれぞれ渡された。それも開けてみると、なのははマグカップ、フェイトはネクタイ、はやてはブレスレットだった。

「ありがとう、なのは、フェイト、はやて」

「パパ、はい！」

今度はヴィヴィオからだ。それは絵で、俺、なのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオが仲良く手を繋いでいる絵だった。

「これ、ヴィヴィオが書いたのか？」

「うん！」

「そっか、よく書けてる。ありがとな、ヴィヴィオ」

そう言って俺はヴィヴィオを抱き上げる。ヴィヴィオは嬉しそうに俺に抱きついた。

「えへへ、パパ大好き」

「主、私からはこれを」

「へえ、マリカも？」

マリカから渡されたのは袋だ。開けてみると、そこにはスケッチブックとペンが入っていた。

「主が新しいこの部隊で描くものをぜひ見たいと思いまして」

なるほどな、それも悪くない。

「ありがとうマリカ。大切に使わせてもらうよ」

「はい、主」

こうしてプレゼントを大量に渡され、その後はヴァイス陸曹や、アルト、スバルなどの騒ぐの大好き組によってカラオケ大会。もはやただの宴会だ。そんななか、ジュリアとサフィラから念話で呼ばれた。

「どうした？ジュリア」

「あ、すいません。その、私とサフィラもうすぐ地上本部に戻ることになっているんです」

「そうなのか。寂しくなるな」

「その、今までありがとうございました。直人さんと戦えてよかったです」

「（私たち、少しだけ強くなれた気がします）」

二人は恥ずかしそうに言う。でも確かに、この二人の力というのも色々な面で大きかった。二人には感謝するべきなのかもしれないな。

「俺も二人と戦えてよかったよ。」

「あの、それでですね。一緒に写真、撮ってもらえませんか？」

「ああ、構わないよ」

こうして、ジュリア、サフィラと写真を撮る。すると、サフィラがカメラを持った。

「（ほらジュリアさん、直人さんともっとくっついて？）」

「え、あの・・・ちょっとサフィラ」

「これでいいのか？」

言いながら俺はジュリアに近づく。ジュリアは顔が赤くなっていたが、そこは気にしないでおこう。シャッターが切られ、写真を撮った。

「ありがとうございました」

「どういたしまして」

「（あの、直人さん）」

「ん？」

「（その、本当にありがとうございました）」

「気にするなよ、写真くらいで」

俺がそういうと、サフィラが首を振った。

「（そうじゃなくて、キメラとの戦いのことです）」

「え？」

「（私は以前、キメラに首を攻撃されて声が出なくなりました）」

「サフィラ・・・」

「（でも、直人さんが世界に光をもたらしてくれた。だからキメラはもういない。そういう意味で、お礼を言いたかったんです）」

「・・・・・・そっか」

サフィラの笑顔が、どこか悲しく感じた。カオスやキメラが消えたからと言って、サフィラの声が戻るわけではない。何か、方法は・・・いや、待てよ？

「我が求めるは癒しの力。その姿を現せ、エルフ」

「（直人さん？）」

俺はエルフを呼び出した。

「お呼びですか？マイマスター」

「彼女の喉、どうにかして治せないか？」

「やってみましょう」

カナリアがサフィラに魔力光を当てる。

「（がっ・・・うっ！？）」

サフィラの口から、黒い煙が出てくる。カナリアの結界によって消滅した。

「これで声が出るはずです」

「あ・・・え、嘘・・・声が！」

サフィラの声が出る。それは美しい声。

「サフィラ、あなた声が！」

「はい！ジュリアさん！喋れます！直人さん、ありがとうございます！」

今度の笑顔はとても嬉しそうな笑顔だった。こうして、この二人は地上本部の勤務へと戻ることになった。実は、その送る会というのも、今回は含まれていたらしい。もうなんか、見境ないけど。

ジュリアｓｉｄｅ

ふう、これで終わり。機動六課にいるのも。すると、サフィラが寄ってきた。

「ジュリアさん」

「サフィラ、どうしたの？」

「伝えたんですか？自分の気持ち」

ああ、そのことね。

「いいえ、伝えなかった」

「なんでです？」

「さっきなのはさんたちを見てわかったの。ほら、直人さんと同じ指輪を揃ってしているでしょ？」

「あ、ホント・・・」

だからわかった。あの人の傍に入れるのは私じゃないってことが。

「いいのよサフィラ。ありがとね」

「はい、ジュリアさん？」

言いながらサフィラが飲み物を渡してくれた。

「何？」

「新しい恋を目指して、乾杯」

「・・・乾杯」

こうして、私達の機動六課での生活は終わりを迎えた。

直人ｓｉｄｅ

大騒ぎのうちに、パーティーは終わりを迎えた。みんなお酒が入っ

たため、ベッドに寝かせた。はあ、結局こういうことになるんだ。

「でも楽しかったですね、主」

「ああ、ここのところみんな働き詰めだったしな」

「パパ、歯磨いたよ」

「そっか、じゃあ寝ような、ヴィヴィオ」

「うん」

こうしてベッドに入る。今日はなんだかあっという間だったな・・・

・

「ではおやすみなさい主。明日も今日と同じように、平和が続くことを祈って」

「ああ、そうだな。おやすみ」

こうして、俺の２０回目の誕生日は終わりを迎えた。

第一話「機動六課再建、生誕の宴再び」（後書き）

秋風「第三部はつどーう！」

直人「おい、更新速度がおかしいぞ。どんなテンションだお前」

秋風「ふっ、なんかノリでやったらこうなった」

直人「どんなノリだ」

ハヤト「ども」

秋風「来たか、ムッツリ」

ハヤト「ムッツリ！？」

直人「ゲストにいきなり言うか？否定しなけど」

ハヤト「いや、否定してくれません！？」

直人「ってことで今日のゲストはハヤト・ロックウェル君です」

ハヤト「こんにちは」

秋風「ふむ、初めて来たな、チートじゃないキャラ」

直人「確かに、今まで来たのはチートキャラやクロスオーバーキャラばかりだしな」

ハヤト「そうなんすか？」

秋風「まあ、ウィズもそんなに大差ない？」

直人「でもまあ、ハヤトよりは強いかもな」

ハヤト「で、直人さんに聞きたいんですけど、どうすれば女の人って落ちるんすか？」

直人「直球に聞いてきたな。あれだ蒼雷一閃と虚空雷閃どっちがいい？」

秋風「まあまあ、落ち着けって」

ハヤト「だって、あの5人の他にどんだけ落としてるんですか」

秋風「スバル、ティアナは微妙だな。でもまあ、地上本部の二人とナンバーズ、それにルーテシアは落ちたな」

直人「そう書いたのはお前だろ。」

秋風「モードリリース、メシア」

直人「なんでお前ができんだよ！」

秋風「だって俺作者だし」

ハヤト「さすがに逆らえないのか」

秋風「ま、冗談はさておき、落としかたねぇ。ぶっちゃけスターズ

二人を落としたからよくね？」

ハヤト「だ、だ、誰があの二人を！」

直人＆秋風「「お前だよ」」

ハヤト「だ、だれが！」

直人「認めろ、じゃないと三枚に下ろすぞ」

ハヤト「ひぃぃぃぃぃ！」

秋風「でもまあ、あの二人は今は幼さ残るけど数年すれば美人だろ、あいつら」

ハヤト「数年先は・・・ってか、俺は年上が・・・！」

直人「しょうがない、なのはー！」

なのは「何かな？直人君」

直人「ああ、別世界のお前の部下がな、色々と認めないんだわ」

秋風「そんでもってスターズ二人を好きなくせに否定するんだわ。ちょっと焼き入れてやって？」

ハヤト「え！？ちょっと！待って！」

なのは「ま、直人君の頼みならしょうがないかな？スターライト・・・」

ハヤト「待って待って！」

なのは「なーんてね」

直人「おもしろいなーこんな写真を撮った」

ハヤト「！？」

秋風「今回はこれと、そうだな、とりあえずあれだ。これをやろう。二人に渡せ」

ハヤト「これは？」

直人「逆バレンタインチョコだ」

秋風「それ＋惚れ薬が混ざってます」

直人「間違っても男とかにはあげないほうがいいぞ？」

ハヤト「・・・・・・・・」

なのは「君の世界の私とかはやめてね？私は直人君のものだから」

秋風「なのは、デバイスはしまおうね」

ハヤト「気をつけます。じゃ、これで」

直人「進展したら報告に来るように」

秋風「待ってるよー」

ハヤト・ロックウェル　出演作品　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～とある新人の日常～

オリジナルキャラの割には強すぎでもなく、やる気もなく、たいした能力もない平凡な主人公。色々と突っ込みどころ満載だが、彼によってすでにスバル、ティアナが落ちている。この先どんな進展をするのかが楽しみなところだ。

直人「次回、第二話『そこは誰もが夢見た楽園』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

蒼天外伝「Ｍｅｅｔ　Ｋｙｏｕｙａ　Ｗｏｕｌｄ」（前書き）

リクエストにお答えしました。
今回はチートな彼が登場です。現在はウィズとのコラボも予定中ですが、あっちはかなり気合入れて書いているので、もう少しお待ちくださいｗ

では外伝どうぞｗ

蒼天外伝「Ｍｅｅｔ　Ｋｙｏｕｙａ　Ｗｏｕｌｄ」

俺は現在、色々とあって出撃中。理由は簡単、何か次元反応があったらしい。そうなると、嘱託魔導士である俺が赴かないといけなくなる。ついでにこの辺はスカリエッティが放ったガジェットが残っているとか。

「っと、この辺か？」

そこにはクレーターの後。何だこれ。魔力反応・・・ある。誰だ？

「おーい、そこのあんた」

そこにいるのは９歳、いや１０歳くらいの少年だ。髪はつんつんの少年で、どんな風にやったらあんな髪型になるんだろうな。

「ん？お前は？」

「俺？俺は氷上京谷だ」

「もしかしてこのクレーター、君が？」

「ああ、まあな。ったく、なのはのやつ・・・」

なのは？

「お前、なのはの知り合いか？」

「ああ、さっきは模擬戦しろってせがまれて逃げてきたところだ。」

「おかしいな、なのはは今教導でフォワードを見てるのに・・・」

「え？教導？」

少年が不思議そうな顔をする。間違ってはいない。なのはは朝早くから教導をしている途中だ。

「ああ、なのはは教導官だ。」

「・・・ったく、俺はＳｔｒｉｋｅｒＳの世界に来たのかよ」

「ＳｔｒｉｋｅｒＳ？」

「ああ、こっちの話。気にするんな」

「一応事情を聞きたいんだが？」

俺が言うと、少年は気だるそうになる。

「やだよ、めんどくさい」

言った瞬間、俺たちの足元に砲撃が来た。

「ガジェットか・・・」

「スカリエッティの言ってたことマジだったのかよ・・・」

俺がメシアを構えると、京谷も構えを取った。おいおい・・・

「おい、お前戦う気か？」

「おう、もちろん」

「まあいい、メシア！」

『了解です、わが主！』

メシアを起動し、剣を構える。うわ、何体いるんだよ・・・

「おらぁ！」

いきなりガジェット蹴り飛ばしやがった！こいつ滅茶苦茶だ。

「なあ、勝負しないか？」

「勝負？」

「おう。あんたが勝ったら俺が質問に答えるよ。俺が勝ったら見逃すってのどう？」

「ふっ・・・それも面白いな。いいだろう」

俺はメシア、そしてブレイブスワローを構える

「デバイス複合」

「な！？」

俺はメシアスワローを構え、ガジェットに斬りかかる。遅れて京谷

も斬りかかった。あれは、ロングブレード？それにあれは小刀？なんだ、あの蒼い炎・・・

「朝利雨月の変則四刀！」

「なんだ、その剣！」

すごい魔力？いや、別の何かだ。こいついったい・・！？

「行くぜ、時雨蒼燕流攻式八の型・・・篠突く雨！」

剣を振った瞬間、蒼い炎の火柱が上がりガジェットが吹き飛んだ。

すげえな・・・

「お前、剣術の心得が？」

「いんや、ない！」

言いながら斬る。こいつマジで滅茶苦茶だな。っと、負けてらんねえ。

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ』

「蒼天・虚空雷斬！」

俺もガジェット？型を潰しまくる。なんだかだんだん面白くなってきやがった。

「俺は今７８だぜ！」

「俺は８０だぞ？」

「ちっ！ならこれだ！」

今度は剣が消え、京谷が手に魔力を貯めた。なんだあれ！？

「リク・ラク・ライラック！来たれ雷精！風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！」

まさか、詠唱呪文だと！？ちっ！こっちも負けてらんねえな・・・

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼天・龍斬波！」

「雷の暴風！」

蒼い龍と、雷を纏った嵐がガジェットを飲み込んだ。そして残ったのはガジェットの残骸。

「なあ、この場合どっちの勝ちだ？」

「測定不能だな」

「この場合引き分けか。」

となるとどうするかな。

「そういえばさ、あんたの名前、聞いてなかったよな」

「ああ、俺は井上直人だ」

「俺の本名は赤羽公也だ」

本名って・・・偽名だったのかよ。

「色々あってこの世界に来ちまったみたいだ。でも大丈夫、俺帰れるから保護しなくていいよ」

「そうなのか？」

「おう、俺の魔法の次元転移魔法で帰るから」

「もう細かいこと突っ込まないでおくよ」

「そうしてくれ」

そう言ってお互いに苦笑する。

「にしてもさ、あんたなのは知ってるのか？俺あんた知らないけど」

「ん？ああ、なのはは一応俺の婚約者だけど？」

「はぁ！？今新暦何年！？」

「新暦７５年だが？」

「なるほど、俺が知るのとは別の平行世界ってわけか」

「お前の言ってることはよくわからないけど、お前が敵じゃないって事はわかったら行けよ」

「いいのか？」

「ああ、ガジェット。この量は一人じゃ厳しかったしな」

俺が言うと、京谷が笑い、足元に魔方陣が敷かれる。

「じゃ、元気でな」

「ああ、またいつか会おう」

こうして京谷は帰っていった。さて、俺も帰るかな。

京谷ｓｉｄｅ

あいつ強かったな、管理局員にしては井上直人・・・？ずっと引っかかってたけど誰だっけ。どっかで聞いたことあるんだよな。アースラに戻ると、死神がノーパソで小説を読んでた。

「お前、何してんの？」

「え？ああ、これですか？リリカルなのはの二次創作ですよ」

「懐かしいな、何読んでるんだよ。」

「魔法少女リリカルなのはＳｔｉｒｉｋｅｒＳ～蒼天の騎士伝説～」

「あー！」

そうだ！思い出した！あの俺みたいにチートで、ハーレムになってる主人公、井上直人じゃねえか！

「どうかしました？」

「いや、なんでもねえ」

まさかなのはから逃げるのに使った転移魔法で小説の世界に行っちまうとは思わなかった。なんてこと考えてると、なのはが部屋に入ってきた。

「見つけたのー京谷君」

すでにエクシードモードにしたなのはがエクセリオンバスターを撃ってから、扉の前に立っている。俺はまた転移魔法でその場を離脱した。

「あ、また逃げたー！」

死神ｓｉｄｅ

「さて、今度彼はどの世界に逃げるんでしょうね・・・・」

さて、続きを読むとしますか、第三部作「蒼天を愛した混沌」でも・・・

外伝　終

蒼天外伝「Ｍｅｅｔ　Ｋｙｏｕｙａ　Ｗｏｕｌｄ」（後書き）

さて、外伝として別キャラを登場させるという初の試みでした。次回の外伝にはウィズに登場してもらう許可を取っていますので、お楽しみに！

ちなみに申し訳ないんですが、明日は出かけてしまうので、小説が書けません。下手すると日曜も書けないかもしれないので、ご了承ください。
それでわｗ

登場キャラクター

氷上京谷

作品名　魔法少女リリカルなのは～転生した主人公は最強の設定を使う～

概要
事故で死んでしまった主人公は死神の力でリリカルなのはの世界へいろんな風にいろんなことを引っ掻き回します

第二話「そこは誰もが夢見た楽園」（前書き）

遅れてすいません、更新です！

では本編どうぞ♪

第二話「そこは誰もが夢見た楽園」

そこは美しい自然、そして城がある国、アルハザード。今日はフェイト、ヴィヴィオと共に、アルハザードを訪れていた。

「ここが、アルハザード・・・」

フェイトは少し驚きながらそこを見る。

「ねえパパ！お城があるよ！」

「ああ、あそこにはお姫様がいるんだ。」

「へぇ～」

と、ヴィヴィオは目を輝かせている。こうなったのも実を言えば数日前のこと。

昨日

『え？一度帰ってくる？』

「ああ、一応一件が片付いたし、皇女様にも報告とお礼に行ったほうがいいと思ってさ」

『それもそうね。わかったわ。明日にでも転送ポート開くから』

「ああ、頼む」

こうしてアリシアとの通信を切る。すると、フェイトが部屋に戻ってきた。

「直人、誰と通信？」

「ああ、アリシアだよ。明日ちょっと、アルハザードに行ってくる」

「アルハザードに？」

フェイトは少し驚いたようにいう。さっきのアリシアと反応が同じで面白いな。するとフェイトが少し考え始め、目を開く。

「ねえ直人、私も行ったら駄目かな？」

「ん？まあ、駄目ってことはないけど・・・でも」

「大丈夫、管理局には言わないから」

「ならよろしい」

こういうわけで、俺とフェイトはアルハザードへと訪れた。

「わ～い♪」

「ヴィヴィオー危ないよー」

「は～い！」

走っていたが、フェイトの声に反応し、素直に止まった。転んだら危ないからな。下レンガだし。

「あ、アリシアお姉ちゃん、直人お兄ちゃん！」

「え？」

「あ、レナ。久しぶり、元気だった？」

そこには花売りの少女、レナがいた。

「うん、元気だよ！はい、お花！」

「いくらかな？」

「ううん、余ってるから持っていって」

「駄目駄目、はい、お金」

そう言って俺はレナにお金を渡す。

「ありがとう！」

「んじゃ、頑張ってな」

「うん！バイバイ！」

そうしてレナは去っていった。すると、今度は別方向から声がかかる。そこにいるのは果物屋の店主だ。

「よう直人！元気か！」

「リットさん」

「アリシアとセットとは、ラムザに怒られても知らんぞ」

「あ、ああ。こいつはアリシアじゃないんだ。フェイトって言って、アリシアの妹だよ」

「フェイトです」

リットさんは少し驚くが、すぐに笑顔になる。

「ほう、そいつぁ悪かったな。ほれ、いつもの持ってきな！」

「ああ、ありがと！」

リンゴを受け取り、ヴィヴィオにあげる。

「いい人たちだね」

「ああ、この城下町は平和の象徴みたいなもんだからな」

「リンゴ～♪」

そんなことを話していると、城門にたどり着いた。で、門の兵士に声をかける。

「よう」

「た、隊長！お久しぶりです！」

「ああ、ただいま。アリシアたちは？」

「すでに城で稽古を行っています。して、そこの方は？」

「ああ、アリシアの妹のフェイトだよ。まあいいや、頑張れよ」

「はっ！」

こうして城の中へと入った。

「わあ～」

ヴィヴィオはその絵本のような世界に驚き、目を輝かせている。すると、誰かとぶつかってしまった。

「あら」

「あぅ」

そこにいたのは茶髪の髪の女性、俺が言う前に、フェイトが声をあげる。

「リニス！」

「フェイトですか！？」

リニスさんも嬉しそうに声を上げ、お互いに抱き合う。

「リニス！久しぶり！」

「はい、フェイト。お久しぶりです」

「リニスさん久しぶり。」

「はい、直人も久しぶりです」

リニスさんが微笑み、ヴィヴィオの手を離す。

「今日はどうされたのですか？」

「ええ、皇女様に一件の報告と、みんなの顔を見に。フェイトはプレシアさんとさ」

「なるほど。では最初にプレシアに会いに行きましょう。」

こうしてプレシアさんの研究室へ行くこととなった。フェイトは若干緊張しているようだ。

「フェイト」

「え・・・・」

「大丈夫、俺とヴィヴィオがいる」

「うん・・・」

フェイトは頷き、俺の手を握った。少し汗を掻いている。やはり過去のことを思い出してしまうのだろう。するとようやく、研究室に

ついた。

「プレシア、失礼します」

「ええ、入って」

俺が入ると、プレシアさんが微笑む。

「あら、直人。久しぶりね。」

「ええ、お久しぶりです。」

それに続いてフェイトとヴィヴィオが入る。それを見て、プレシアさんが目を見開く。

「フェイ・・・ト？」

「母さん・・・」

「フェイト！」

「母さん！」

二人が抱き合い、互いに涙を流す。感動の再会。こういうものを言うんだろう。プレシアさんは涙を流しながら、フェイトを強く抱きしめる。

「フェイト、ごめんなさい・・・本当に、辛い思いをさせたわ・・・・」

「いいの、母さんが生きていてくれればそれで・・・・・」

フェイトは目を瞑りながら、そのプレシアさんの謝罪を笑顔で許した。この瞬間が、プレシアさんの「罪」そしてフェイトの「罪」が消えた瞬間だった。二人が落ち着くと、俺たちは研究室のテーブルに腰を下ろした。

「そういえば直人、この子は？」

「ええ、俺の子供・・・まあ戸籍上はですけど」

「井上ヴィヴィオです！」

「プレシア・テスタロッサ・・・フェイトの母よ」

「リニスと言います。プレシアの使い魔です」

その自己紹介に、ヴィヴィオが首を傾げる。

「でもフェイトママのママはリンディママじゃないの？」

「ああ、まあリンディさんもフェイトのママだけど、プレシアさんもフェイトのママなんだ」

「ヴィヴィオと一緒？」

「うん、一緒」

するとヴィヴィオは嬉しそうにフェイトに抱きつく。すると、プレシアさんが少し驚いている。

「あの、聞き間違いかしら?フェイトが、母親?」

「あ、えと・・・実はね?」

こうして俺はフェイト、そしてなのは達と婚約したことを話した。
プレシアさんが滅茶苦茶驚いている。

「あの、母さん?」

「び、びっくりしてなんて言っていいのかわからないわ・・・・」

まあ、そりゃそうか・・・・・すると、アリシアが部屋に入ってきた。

「母さん・・・あ、フェイト、それに直人にヴィヴィオじゃない」

「あ、アリシアお姉ちゃんだー」

ヴィヴィオは嬉しそうにアリシアに抱きついた。アリシアもヴィヴィオを抱き上げる。

「直人、話を戻すけど、あなた、フェイト・・・それにその二人を幸せに出来るの?」

「はい」

俺が言うと、プレシアさんは目を閉じ、少し考えている様子だ。すぐに目を開くと、優しい笑みを浮かべていた。

「わかりました。今の生活面の母はあの管理局員だから、その人の決定は変わらない。けど、私も、あなたたちの結婚を認めましょう」

「何!?直人ってばフェイトだけじゃなくてあの二人とも結婚するの!?」

「あ、ああ・・・・」

「うわー大ニュースじゃない!みんなに教えてこよ!」

「おいアリシアやめろ!」

「そうだよアリシア姉さん!」

「なーんてね、冗談だよん♪」

こいつのことだからマジで言いそうで怖い。っと、これだけじゃないんだよな、用事。

「じゃあフェイト、ちょっと行ってくるからプレシアさんと話してなよ」

「あれ?どこ行くの?」

「ちょっと皇女の所にな。行くぞアリシア」

「うん、了解」

こうして俺たちは皇女の所へ向かった。

王の間。ここに来るのも随分久しぶりな感じだな。そこにはライ、ラムザ、アクアがいた。

「みんな、久しぶり」

「久しぶりって、そんなに経ってないよ」

「そうよね、精々3週間ぶりくらい？」

「で、今日は何で来たんだ？」

「ああ、一応レイン様に会いに。」

「なるほど、一件の報告だね？」

そんな話をしていると、奥の間からエレン様が現れた。

「久しぶりですね、直人」

「はい、お久しぶりです。今日は、マラキアの一件についてご報告に来ました」

そう言って俺は報告書を渡してそれを読み上げた。

「ご苦労様でした。私はこの4人しか援軍として送れなかったので、戦力にはなりませんでしたが、あなたが無事で、とてもよかったです。」

「いえ、4人を送ってくれただけでも助かりました。」

そんな話をして、ライたちは退場。そこにいるのは俺とアリシアとエレン様。

「そういえば、今日はあなたと一緒に別の方がいらっしゃっているとか」

「え？ああ・・・」

俺はジロリとアリシアを見る。

「あ、あはは～・・・」

喋りやがったな、こいつ。

「ま、しょうがないじゃない。フェイト、ヴィヴィオ、入ってきていいよ～」

言葉の後、フェイトとヴィヴィオが入ってきた。フェイトとヴィヴィオはそのエレン様の姿に驚いている。

「わぁ～綺麗」

ヴィヴィオが俺のところに寄ってきながらレイン様を見る。

「ふふ、ありがとう。それで、あなたが直人の・・・」

「え、あ、はい。フェイト・Ｔ・ハラオウンです」

「井上ヴィヴィオです！」

「なるほど、とてもアリシアに似ていますね。・・・・・うん。いいと思います」

「へ？」

エレン様が何故か一人で納得している。何？

「いえ、この方なら直人を任せても大丈夫だな・・・と」

「え、へ？」

「直人は一度私を守ると誓った騎士です。その本人が離れるとなれば、私も次に直人が守るべき騎士を見定めるべきだと考えたのです。だからこそ、あなたなら安心だと感じたわけです。」

「な、なるほど・・・・・」

「この後はどうするのですか？」

「え？はい。もうこれで失礼します。向こうの世界でも、まだ仕事は残っているので」

「そうですか。また時折、顔を見せに来てください」

「はい、エレン様」

俺が頷くと、エレン様が微笑む。その微笑はどこか寂しさがあった気がした。俺はそれを気にしながら、城を後にし、テスタロッサ家へと向かった。

アリシアｓｉｄｅ

私はその悲しそうな目で直人を見送るエレンを優しく抱きしめた。

「ア、アリシア！？」

「まったく、無理しちゃって」

「え？」

「ずっと泣きそうだったのバレバレ。ほら、泣きたいなら今だけだよ？皇女様？」

私の言葉に、エレンの目から大粒の涙が流れる。

「う、うえぇぇぇぇぇぇん！」

「はいはい、きっとまたいい出会いがあるよ。だから今は、直人の幸せをお祈りしよう？」

「アリシア・・・うわぁぁぁぁぁぁん！」

私はこの後一時間ほど、その涙を拭いてあげていた。

直人ｓｉｄｅ

俺たちは一緒の部屋で寝ている。もうヴィヴィオは夢の中だ。フェ

イトはずっとプレシアさんと今までの楽しかったことや嬉しかったことを話していた。フェイトは幸せそうに俺に引っ付いている。

「直人」

「ん？」

「ありがと」

「俺、何かしたか？」

「だって、直人のおかげで母さんと再会できた。それが一番嬉しいよ」

それはお前の願う気持ちだと思うけどな・・・ま、いっか。

「どういたしまして、フェイト」

「ん・・・・」

フェイトは俺と唇を重ね、離れてから横になる。

「じゃあお休み、直人」

「ああフェイト、お休み」

こうしてアルハザードの一日は終わった。

エレンｓｉｄｅ

今日から新たに騎士が入隊。この国のために。そう思って戦う騎士たちがたくさんいますね。頼もしい限りです。すると、そこでは必死に訓練時間後に騎士の一人がずっと鍛錬している姿がありました。

「お疲れ様です」

「エ、エレン様！」

「稽古のようですね？」

「は、はい！この国を守るためでなく、この世界にいる大切な家族を守るため、日々精進しています！」

その決意、何故か直人と似ていますね。

「そうですか。がんばってくださいね？」

「はい！がんばります！」

「そうそう、あなた、名前は？」

そう聞くと、騎士は片膝を着いて、頭を下げる。

「はい！レオン・ブレイブであります！」

「レオン、これからもこの国、そして民のために、私と共に剣を取ってくださいね」

「はっ！皇女とならどこまでも！」

その揺るぎのない瞳、そして強さ。直人、あなたが残してくれたものは、とてもこの国には重要なものばかりのようです。

「あなたも、私と同じ考えで力を考えているようですね。決めました。あなたを私専属の騎士に任命いたします。」

あなたもどうか、幸せになってね。私はこの国の幸せのために、戦いますから。

第二話「そこは誰もが夢見た楽園」（後書き）

直人「・・・・おい」

秋風「何？」

直人「どんだけ更新遅いんだよ」

秋風「しょうがないじゃん。」

直人「まあしょうがないけどさ。それにしても、ハヤト馬鹿だな」

秋風「そういうな。しょうがないだろ」

直人「ま、確かにあいつだしな。なのはたちに上げなかっただけ良しよしよう」

秋風「それにしてもお前、いつ解毒チョコのデータなんてあげたんだ？」

直人「だってブレイブハートがどうしてもって言うから」

秋風「ま、だよな」

直人「それよりさ、ちょっと次元に穴開けてくれ」

秋風「いいけど、何すんの？」

直人「やつの後書きコーナーに向けて・・・蒼天・龍斬波！」

秋風「おぃぃ！何してんの！？」

直人「二人にチョコを食べさせなかった罰だ。このままハヤトのところまで飛んでってしまえ」

秋風「ま、いいけど。んじゃ、今日はこの辺で」

直人「次回第三話『夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（前編）ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！』

第三話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（前編）」（前書き）

今回から結構ほのぼの話です

では本編どうぞ♪

第三話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（前編）」

ここは海鳴、そのビーチ。季節は夏。となるとやることは一つ。

『海だー！』

当然、こうなる。

「パパ！早く行こうよ！」

「ヴィヴィオ、ちゃんと準備体操してから海に入ろうね？」

「は～い！」

と、頑張ってヴィヴィオが準備体操する。自分の娘ながら、ちょっと可愛らしい。

「ねぇ直人君？私の水着、どう？」

「え？似合うよ」

そのピンクのビキニは色々となのはの肌を露出しているため、結構目のやり場に困る。

「ねえ直人！私にオイル塗って！」

「お、おいフェイト！」

フェイトが思いっきりくっつく、や、やばい！胸が手に・・・！

「駄目駄目、直人君はうちとビーチバレーやるんよ」

と、今度は首から両手を回し、はやてが俺にくっつく。

「ああもう、お前ら離れろ！」

「「「や～だ♪」」」

そんな様子を、周りの客から殺気を立てられて見られたのは言うまでもない。

「パパ～！準備体操したよ～」

「はいはい、じゃ今行くよ」

俺は結構逃げる感じでヴィヴィオの元へと走っていった。

「ヴィヴィオ、お待たせ」

「うん！パパ！」

こうして海へヴィヴィオと入っていった。で、こうなった経緯には実はこんな裏がある。

つい先日

俺は騎士カリムに連絡を入れていた。

「お久しぶりです、騎士カリム」

「ええ、お久しぶりです。蒼翼の天使様」

「その天使はやめてください。恥ずかしいので」

俺がそういうと、騎士カリムは苦笑する。

「そうですか？では直人さん、改めて今日はどのような御用でしょうか？」

「ええ、実はですね、機動六課に強制休暇を与えたいんです」

「休暇ですか？しかし休暇なら申請すれば・・・」

「それがですね・・・」

と、俺はデスクルームの映像を見せる。それはなのは、フェイト、はやてなどが、ニコニコしながらも、疲れきって仕事をしている様子だった。

「あらまあ」

と、騎士カリムが口を押さえる。

「この３人が仕事をすると、他の人間も無理に働くことになるんですよ」

次の映像には、もう死屍累々となった機動六課の面子が食堂で倒れ付している姿だった。その中にはフォワードやヴォルケンリッター

のみんなも含まれている。一応言えば、みんな机に突っ伏している。スバル、エリオなども、食事をまともに取ることが出来ていない。理由は簡単、あの3人が仕事をしていると自分たちもやらなければいけないという罪悪感に襲われるからだ。

「これはまずいですね。」

「ええ、出来れば創立者である騎士カリム、それに支援者のクロノ提督やリンディ統括に命令という形で休暇を執行させてほしいんです」

「なるほど、あなたの話は良くわかりました。レリックも、もうありませんし、彼女たちにも平穏に過ごして欲しいですね。クロノ提督達にも相談してみますから、安心してくださいね？」

「はい、ありがとうございます騎士カリム」

こうして騎士カリムのご好意により、機動六課は半場無理やり、休暇を取る形となった。はやてたちも最初は驚いていたが、それならお休みを取ろうと、海鳴に戻ってみんなで海に戻ることとなったのだ。メンバーは俺とヴィヴィオ、なのは、フェイト、はやて、フォワード、ヴォルケンリッター、それにアリサやすずか、ゼオンがいる。

「ゼオン、お前も水に入れよ、日射病になるぞ？」

「ああ、わかってる」

「えい♪」

ヴィヴィオがマリカに水鉄砲で水をぶつけて遊んでいる。

「ちょ、主！助けてください！」

「ヴィヴィオいいぞ、もっとやれ」

「主の鬼畜～！」

ヴィヴィオは楽しそうに遊んでいる。ヴィヴィオは海で遊ぶのが初めてだ。機動六課の前の海は入れるほど綺麗じゃないし、遊ぶ場所でもないからな。

「それにしても・・・」

言いながらゼオンは機動六課の面々を眺める。

「騒がしいやつらだ」

「あのな、そこまで落ち着いてるお前が不思議だって。」

「お兄さんも遊ぼうよ」

ヴィヴィオがゼオンの水着を引っ張る。するとゼオンは微笑み、ヴィヴィオの目のラインまでしゃがみこんだ。

「ありがとうございます陛下、後ほど遊びましょう」

「う？」

ヴィヴィオはゼオンの言葉に首を傾げる。

「何故ヴィヴィオを陛下と？」

「この子はオリヴィエじゃない、ヴィヴィオだ。そこを間違えんなよ」

「む、だがな・・・」

「じゃあねぇ、陛下って呼ぶの禁止！」

ヴィヴィオがいきなり言い始める。ん？

「ヴィヴィオ？」

「ヴィヴィオがへいかなら、お兄さんはへいかって呼んじゃだめ！」

なんとも、ヴィヴィオらしい考えだ。俺とマリカは思わず笑ってしまうが、ゼオンはあたふたとし始める。

「しかし陛下・・・」

「だから禁止ー！陛下って呼ぶの禁止ー！ヴィヴィオはヴィヴィオー！」

ヴィヴィオは困ったようにゼオンに言う。

「ゼオン、そろそろ観念したほうがいいですよ？」

「ふっ、そのようだな。わかったヴィヴィオ、後で遊ぼう」

「うん！」

ようやく納得したゼオンの様子に、ヴィヴィオはゼオンの顔面に水鉄砲をぶつける。

「あはは～♪」

「ぷっ！」

「ふふっ！」

俺とマリカは思わず噴出してしまう。こんな感じで午前は過ぎていく。

お昼になり、みんなで食事を取ることになった。俺はヴィヴィオやフォワードのメンバーにカキ氷を配ると、フォワードが首を傾げる。

「兄さん、これなんですか？」

「ああ、カキ氷って言ってな、氷を粉上にして、シロップをかけて食べる食べ物だよ」

「いただきま～す！」

フォワードやヴィヴィオたちが食べ始めると、この暑い日だからか、おいしそうに食べている。

「ん～♪おいふぃ～！」

「あ、スバルいい忘れてたが・・・・」

パクパクと食べるスバルに警告する。

「一気に食べたりすると、頭に頭痛が・・・」

「一――――！あ、頭がキンキンするぅ～！」

遅かったか・・・

「しばらくすれば直るからゆっくり食べろ。」

って言ったけどすでにエリオが二の舞になってたりする。俺はやれやれとため息をつきながら焼きそばを食べることにした。

食休みをしてからまたみんなで遊ぶこととなる。すいか割りに砂のお城。それに遠泳競争など、かなり遊んだ。遊んでいると、ティアナが水をじっと眺めていた。

「ティアナ、どうした？」

「あ、兄さん」

「気持ちがいいぞ？入ったらどうだ？」

「あの、その・・・ね？」

ティアナが俺に耳打ちする。なるほどね・・・

「お前、カナヅチなのか」

「兄さん！大声で言わないでよ！」

ティアナが恥ずかしそうに顔を赤くする。う～ん・・・

「じゃあ、練習するか？」

「え？で、でも兄さんなのはさんたちと・・・・・」

「妹が困ってるのに助けない兄がいるか？」

「・・・・・じゃあ、お願いします」

こうして、ティアナとの水泳特訓開始。顔に水をつけるのも少し怖いらしい。

「大丈夫だよティアナ、俺が手を持ってるだろ？」

「は、離さないでね！？」

「大丈夫大丈夫、ゆっくり顔つけて、出して、そうそう」

ティアナがバタバタと足を使って泳ぐ・・・てか、もがいてる？

「頑張れティアナ、うん、上手い上手い」

「ほ、ほんと？」

「ああ、手離すぞ？」

「え？あ！」

その瞬間にすぐにバシャバシャと溺れるので、すぐに支える。

「おいおい、大丈夫かティアナ」

「兄さんの馬鹿！離さないでよ！」

「ああ、悪い悪い。でもおしかった。そのうち泳げるようになるよ」

「うん、兄さん」

「直人君ー！ティアナー！」

おっと、なのはが呼んでる。また変なことにならないといいけど。

「行くか、ティアナ」

「はい、兄さん」

俺は手を引き、ティアナと浜に上がった。すると、はやてたちがなにやら準備をしている。

「何してんだ？はやて」

「えへへ、みんなでビーチバレーや！」

「チームは？」

「直人君とゼオンさん、エリオＶＳ全員」

「「なにぃ！？」」

「ええ！？」

つまりは男子ＶＳ女子。無理無理、シグナムさんとかのスパイク、打たれたらビーチボール割れるって。

「おい、さすがに無理があるだろ」

「えーでもそのほうが面白いやろ？」

「どうせならトーナメントでどうだ？」

「あ、それええかも」

ということでこういう組み合わせ。ちなみに３人一組。

男チーム　俺、ゼオン、エリオ

隊長チーム　なのは、フェイト、はやて

フォワード　スバル、ティアナ、キャロ

ヴォルケンリッター　シグナム、ヴィータ、シャマル

となる。すずか、アリサは審判、ヴィヴィオ、ザフィーラ、マリカは見学だ。

「ちなみに優勝したら翠屋のホールケーキやから」

へえ、なかなかだね。で、フォワードが燃えてる燃えてる。ん？ヴィータもすごい燃えてる。

第一回戦　男チームＶＳヴォルケンリッター

「とりあえずあれだ、エリオはソニックムーブでボール拾え」

「は、はい！」

「ゼオンはトス。ブロックとかも俺より背が高いからいけるだろ」

「ああ、そのほうがよさそうだ」

「俺は隙あらばスパイクやるから」

作戦が決まり、試合開始

「シュワルベフリーゲン！」

「おかしいだろぉぉっ！」

俺はなんとかそれを避ける。あ、危な！

「なんでデバイス使ってんだヴィータ！」

「あたしは翠屋のケーキが欲しいんだ！」

「はい、ヴォルケンリッター失格～」

すずかの言葉に、ヴィータが猛抗議する。

「なんでだよ！」

「デバイスを使うのは反則です」

こうして俺たちは不戦勝。ヴィータはがっかりして、シグナムさんはあきれ、シャマルさんはヴィータをよしよしと慰める。

二回戦

隊長チームＶＳフォワード

「よーし、がんば・・・」

俺たちは応援場所から見てるけど、スバルが固まった。なのはたち、怖いんですけど。

「スバルたち、頭冷やそうか・・・」

「「「ひぃぃぃぃ！」」」

「ゲームセット」

２０－０

「あれってもう脅しじゃね？ビーチバレーなってないよ？」

「確かにそうだな・・・」

「こ、怖かった・・・・・」

こうして決勝戦

「さて、勝負か」

「ふふ、負けないよ直人」

「別にどうでもいいけど、なのはは毎日食えるだろ、翠屋のケーキ」

「だめなの！私たちが勝って直人君にアーンってやるんだから！」

「そうだよ！女の子の夢だもん！」

「せや！うちらが勝ってこそ意味がある！」

おいおい・・・てか、ヴィヴィオは普通に俺にやってたけど、黙っておこう。

「んじゃ、俺たちが勝って男組みだけでおいしくいただくとしよう」

こうして試合開始。ちなみにスコアは右が俺たち、なのはたちが左だ。

5－6

８－１１

１６－１５

１８－１９

１９－１９

デュースはなし、これで決まるはずだったが・・・

「そーれ！」

なのはが撃った瞬間、ボールが割れた。原因はヴィータ。多分今に来てさっきのグラーフアイゼンが原因だろう。結局引き分け。ヴィータはこの後はやてに泣いて謝った。

第三話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（前編）」（後書き）

直人「うん、なんかギャグ満載だったな」

秋風「それにしてもみんな更新速度早くね？」

直人「確かに・・・」

秋風「仕方ない、もう一丁頑張るか」

直人「馬鹿かお前は。もう寝ろ」

秋風「だって・・・」

直人「明日バイトだし、色々とまずいだろうが」

秋風「はいはい・・・・・」

直人「てかさ、これって何話くらい？」

秋風「多分三話分。シリアスになるのはだいぶ先かも」

直人「なるほど、今回は和み系が多いのか」

秋風「まあな」

直人「ともかく、頑張るしかないな」

秋風「おう」

直人「次回、第四話『夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編）』
ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編）」（前書き）

今回重大発表があります

そして随時後書き参加希望者募集中です。

それでは本編どうぞｗ

第四話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編）」

海を満喫した俺たちは海鳴温泉と呼ばれる場所へ向かった。なんでも、昔なのはたちが泊まったことがあるらしい。そんなものがあったんだな。

「パパ、温泉ってなあに？」

「機動六課のお風呂より色んなお風呂があって、外にもお風呂があったりするんだ。」

「すごーい！」

ヴィヴィオにとって海鳴は未知だからな。別世界に来てからは興奮しっぱなしだな。旅館に来ると、結構和の雰囲気がある。なるほど、これはいいかも。で、部屋だけど・・・・

「なるほど、部屋は俺とヴィヴィオとなのはたちか。」

「いつも寝てるのと一緒だね。」

「畳か、久しぶりだな」

俺は座り、その手触りを確かめる。すると、ヴィヴィオが寝転がる。

「いい匂い～」

ヴィヴィオは嬉しそうにごろごろしている。どうやら匂いが気に入

ったらしい。

「じゃあ、みんなで温泉行こか？」

「だな。ほら、ヴィヴィオ温泉行くぞ」

「は～い！」

こうして俺たちは温泉に向かった。

温泉に向かうと、すでにみんなが待っていた。

「遅いわよ、直人」

「ごめんアリサ。さて、行くか」

と、温泉に入ろうとするが・・・

「（兄さん！助けて！）」

やっぱりこうなるか・・・・

「ねーエリオ！一緒に入ろうよ」

「フェ、フェイトさん、その、僕は・・・」

「エリオ君は私のこと嫌い？」

（あーあ、前回と同じパターンだな）

「おいフェイ・・・・」

ジロリ

キャロに睨まれてしまった。今回はどうしても女湯で入りたいらしい。

「なんでもない」

「（兄さーん！）」

「（すまんエリオ、今回は諦めろ）」

「（えー！）」

こうしてエリオは女湯へと引っ張られていった。ご愁傷様、エリオ。

「パパ、早く行こうよ！」

「はいはい、じゃあ行こうか」

「大変だな、直人」

「ああそうだねザフィーラ・・・って、何で人型？」

「こうしないと風呂に入れん」

ペット禁止だもんね。そりゃしょうがないか。ゼオンも風呂に向い、俺とヴィヴィオも風呂に入る。

「ヴィヴィオ、ちゃんと体洗おうな」

「うん！」

一人で上手に体を洗うヴィヴィオ。すると・・・

「直人さ～ん♪」

「直人～♪」

リインとアギトがこっちに来た。何故？

「どうして二人がこっちに来てるんだ？」

「はやてちゃんから伝言を預かってるです！ちゃんと混浴の露天風呂に来るようにだそうです！」

「・・・・考えておくって伝えておいて」

「はいです！」

っと、二人は混浴へ行くドアを通って、女湯に戻っていった。

『ほらエリオ、湯船にタオル入れたらだめだよ？』

『え、フェイトさん、タ、タオル取ったら駄目です！キャー！』

エリオ、助けられなくてごめんな・・・・・

「パパ～お風呂入ろうよ」

「ああ、そうだな」

こうして風呂に入る。ああ、気持ちがいい。ヴィヴィオも嬉しそうに風呂につかる。

「ふぅ、気持ちがいいな」

「確かに、悪くない・・・・・・」

「あれ、ザフィーラどこに行くんだ？」

「ああ、サウナに行って来る」

と、サウナルームに入っていった。確かにやりそうだな。

「パパ、ヴィヴィオ外のおふろ行きたい」

「え、露天風呂にか？」

なんか行くのが怖いんだけど。あの扉を開けたら世界が終わってしまいそうな・・・

「ゼオン」

「なんだ」

「先に行ってくれないか？」

「断る。俺もあそこに行ったら色々と終わってしまう気がしてならない」

同じ意見か。だって曇りガラスの向こうから殺気がものすごいんだもん。これは怖いでしょ。

「パパ～早く～！」

「はいはい、わかったよ」

俺は諦めて露天風呂に入った。で、当然ながらなのはたちがいた。

「直人君遅いよ～」

「あのな・・・・」

俺はため息をつきながら風呂に入る。

「マリカお姉ちゃ～ん」

「はいヴィヴィオ、どう？温泉」

「きもちいい～」

ヴィヴィオは嬉しそうにマリカのところで遊んでいる。俺はため息をつきながら空を見る。珍しく雲がない。綺麗な星空だ。

「ふぅ・・・」

「直人―♪」

「うわっ！フェイト！？」

フェイトの顔は赤い。で、想いっきり腕に抱きついてくる。

「お、おい・・・」

「えへへ～・・・」

「どうしたんだよフェイト」

「直人君♪」

「直人君♪」

ついでになのはとはやてまで・・・

「おい、お前ら・・・っ！まさか・・・」

なにやら息が酒の匂いがした。

「お前ら酔ってるな！？酒飲んだだろ！」

「飲んでないよ～シャマルからお水をもらっただけ～」

「それが酒だぁ！」

この後もみくちゃされたのは言うまでもない。この後どうなったかは言えないが、エリオが合唱していたのは見えた気がした。

とりあえずシャマル先生に頼んでヒーリングで無理やり3人の体に充満しているであろうアルコールを出してもらった。こいつらそうじゃないと暴走するから。そして、今はみんなで卓球をしている。

「えい！」

「あっ！」

スバルとなのはが勝負中。なのは強いな。

「スバル力みすぎだよ。もっと力抜かないと」

こんなときまで教導魂を忘れないなのははすごいな。

「直人、勝負しないか？」

「シグナムさん、わかりました。断りませんからレヴァンティン構えるのやめてください」

こうして俺ＶＳシグナムさん開始。

「シグナム頑張れ！」

「直人さん頑張るです！」

と、ちびズが応援してる。お前ら、夕食のおかず賭けるな。

「先ほどはヴィータに邪魔されたが、全力で行くぞ！」

「ええ、望むところです」

シグナムさんのサーブで始まり、激闘が続く。なんか途中からシグナムさんのスマッシュで紫電が見えるのは気のせいか?そして９－９

「はぁ！」

「うっ！」

しまった、上げてしまった!

「もらった!」

「くっ！」

対角線上で打たれるが、俺はタイミングを見てスマッシュを返した。

「ぬっ！」

「いけ！」

しかし、丁度ネットに当たってしまい、シグナムさんのコートには帰らなかった。

「ま、負けた・・・」

「ふっ、やはり私のほうが一枚上手だったな」

「直人さん負けちゃったです～・・・」

「へへん！これで魚の刺身はもらった！」

この後リインに怒られた。で、夕食。

「パパ、お魚いっぱい！」

「そうだね、好きなの食べていいよ？」

「うん！」

で、俺も順調に食べていくが、そこで箸を止めた。そこにある食材を目にして凍りついた。

「直人君？どうしたの？」

なのはｓｉｄｅ

直人君が箸を止めた。その先にあるのはわかめのサラダ。もしかして・・・

「直人君、わかめ駄目なの？」

「・・・・・・・・」

直人君が小さく無言で頷いた。で、それに対してはやてちゃんがいたずらっぽい笑みを浮かべていた。

「直人君～？ヴィヴィオに好き嫌いアカン言うてるのに残したらあかんで～？」

「ぐっ・・・」

直人君、ちょっと焦ってる。

「でも直人が残したりするところ見たことないけど・・・・・」

「その、和食で味噌汁に入ってるなら問題はないんだけど、生となると・・・」

と、ちょっと苦しそう。つまり生たまねぎは駄目だけど、カレーに入ってると大丈夫な原理だね。

「パパ、残しちゃメーなの！」

「うぐっ・・・・！」

ヴィヴィオにまで言われちゃったらさすがにダメージは大きいみたい。

「直人君、頑張って食べようよ」

「駄目だ、絶対食えない」

「もう、子供じゃないんだから・・・」

フェイトちゃんもちょっと呆れ気味。はやてちゃんが直人君のわかめを箸で取って、直人君に向ける。

「ほら、我慢しい？」

「やめろはやて。って、なのは、何バインドしてんだ！」

「我慢だよ直人君？」

「う、ぐっ・・・」

直人君は目を瞑り、わかめを一気に飲み込んだ。

「げ、ぇえぇ・・・」

苦そうな顔をして倒れそうになったので、私は直人君に抱き枕をする。

「えへへ」

「おい、放せ・・・」

「やだ♪」

私は直人君が恥ずかしそうにしているのを嬉しそうに頭を撫でる。

「ママ、パパが可哀想だよ」

「そうだね。」

ヴィヴィオに言われてしまったので、私はバインドを解いた。

直人ｓｉｄｅ

ひどい目にあった・・・・・とりあえず食事を終えたので、みん

なで外へ。なんでも、花火をやるそうだ。
「わぁ～い！」

ヴィヴィオは花火に大はしゃぎ。一応火だから、なのはが一緒に見てやっている。ゼオンと俺は清酒を飲みながら静かにそれを見ている。

「ふっ、さすがに疲れたか？」

「ああ、ちょっと限界だ。」

一方のスバルたちは色々と遊ぶ。打ち上げやら噴出やら。おい、ロケット花火は人に向けるな。

「それにしても、随分と楽しいもんだ」

「ああ、そうだな。もう４年・・・・か」

「もう随分前のように感じる」

４年前は、敵だった人間と酒を共に飲むことなど、夢にも思わなかっただろう。すると、ゼオンが清酒を酌み、お猪口を掲げる。

「平和に乾杯・・・だ」

「ああ、乾杯」

チンッと音を鳴らし、俺はそれを飲んだ。今日も綺麗な月と星が輝いていた。

今日、一日が終わり、それぞれが部屋に帰っていった。ヴィヴィオは遊びつかれたのか、気持ち良さそうに眠っている。で、今日はなのはが同じ布団で寝るらしい。

「なんで一人一人用意された布団に寝ないんだ?」

「えへへ、じゃんけんの順番でこうなったんだよ?」

後で聞くと、一日目なのは、二日目はやて、三日目がフェイトらしい。

「俺に拒否権は?」

「ないよ♪」

「ええもん!明日はうちが直人君と寝るんやし!」

「私だってトリだもん!後悔しないよ!」

と、怒っている二人。俺はため息をつきながら布団に入る。すると、なのはが俺の唇と自分の唇を重ねる。

「おやすみなさい♪」

「・・・おやすみ」

俺は静かに眠ることにした。

第四話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編）」（後書き）

直人「さて・・・・」

秋風「ああ！第二回！オリジナルキャラ募集～！」

直人「今回採用するのは1人だけ！」

秋風「皆さんの応募待ってます！」

直人「しかし、今回は必ずルールを守ってください！」

1　送るのはメッセージへ

2　期限は二月十八日まで

3　この小説の感想とコメントを添える

4　必ず下の順番どおりに書くこと

5　名前は日本人不可

秋風「ちなみに感想にきたら消すからそのつもりで」

名前
歳
性別
階級
身長

体重
性格
術式
髪の色
目の色
魔力色
備考

デバイス
名前
種別
性別
術式
性格
形状
技

秋風「万が一でも間違ってたら消しますので」

直人「というか、不採用です」

秋風「では皆さん、応募待ってます！」

直人「ちなみに賞品は・・・おい、なんで前回と同じなんだ」

秋風「それプラス私が採用者の書いている小説のキャラを絵で書きます」

直人「できんのか？」

秋風「下手で時間もかかるかもしれませんが必ず！」

直人「次回、第五話『夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴り旅行記（中編２）
『ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

蒼天外伝「チョコレートより甘いもの」（前書き）

遅いですがバレインタインネタですw

蒼天外伝「チョコレートより甘いもの」

今日はバレンタイン。乙女が愛する男性に想いを伝える機会だ。男性隊員が朝からそわそわしてる。お前ら中学生か。でもミッドチルダってキリストの信仰はないのに。まあ仕事には支障はない。午前も終わったし、このまま飯食いに行くか・・・

「おはよう直人兄ぃ！」

「ああスバル・・・」

「はい！チョコレート！」

「あ、ああ・・・って、なんで？」

「だって今日バレンタインだよ？」

スバルが不思議そうに首を傾げる。そうじゃなくてだな・・・・・・

「ミッドチルダにバレンタインなんて習慣があるのか？」

「うん、地球で流行ってる行事はなんでもやるよ。この前だってクリスマス会やったでしょ？」

「ああ、そうだな。」

「というわけで、かわいい妹からの愛のプレゼントだよ？バイバイ！」

行ってしまった。まあ、ありがたくもらうとしますか。とりあえず殺気もひどいし、逃げるとしよう。食堂に行くと、ティアナとキャロが来た。

「兄さん、バレンタインチョコだよ♪」

「お兄ちゃん、どうぞ！」

「ん、ありがとう二人とも」

二人からチョコレートを受け取る。すると、ヴァイスが近寄ってきた。

「ティアナ、俺のは？」

「はい、ヴァイスさん」

チロルチョコ・・・可愛そうに。

「にしても旦那、もてますね～・・・学校とか行ってる時はもっとすごかったんじゃ？」

「いや、あんまりもらったことはない。もらったのといえばなのはと本格的に話をしたりする前に一度もらったが」

「以外っすね」

「ん、まあ・・・あれだ。学校では目立たないように生活してたしな」

中学時代、別に女子からも評判が良いわけでも、悪いわけでもなかった。人と関わるのを避けていた俺としては、もらうことはない。姉さんからはもらっていたけど。すると、宅急便の人間が食堂に入ってきた。

「あの、井上直人さんで合っています？」

「ええ、そうですけど」

「お届け物です。ハンコお願いします」

「じゃあサインで」

で、あるのは2箱ほどの大きなダンボール。なんだこれ。「井上直人ＦＣ」

「ファンクラブじゃないっすか？」

「ファンクラブねえ・・・」

こんなとりえのない男にいらないだろ、ファンクラブ。ダンボールを開けると、そこには山のようにチョコレートが入っていた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「これ、全部チョコレートか？」

「みたいっすね」

胸焼けしてきた・・・・・・

「直人さん！」

「ん？ギンガ・・・・・と、セインたちか」

「久しぶり！」

「どうかしたか？」

そこにいるのは、ギンガとナカジマ家で引き取られたナンバーズと聖王協会にいるナンバーズの面々。

「はい、チョコレートです！」

「え、あ、ありがとう・・・・・」

「姉からもだ。受け取ってくれ」

「はい、直人さん♪」

「直人、どうぞ」

「僕も、一応・・・」

「べ、別にお前のためじゃねぇからな！」

「私も作ったから、食べて」

「あたしのも受け取って欲しいッス！」

「お兄様、どうぞ」

どさどさと渡されるのはいいんだけど、この量はえらいことになってる・・・・・・

「どーすんですか、このチョコ」

「んなこと言われても・・・・・・」

もうすでに山積みになったチョコレート。こんなに食えるかな。その瞬間。

「ディバインバスター！」

ダンボールのチョコが光になりました。テーブルはなんともなかったけど。

「おはよう、直人君？」

「なのは・・・・・・」

「直人、今のは何かな？」

「うちらというものがありながら」

「誤解だろ、あれは送られてきたんだよ。誰かは知らないけど。なあ、ヴァイス・・・って、いねぇ！」

あいつ逃げたな！

「まあいいや。それはフォワードやナンバーズでしょ？それは許してあげる。ほら部屋に戻ろう？」

こうして強制連行された。部屋に戻ると、大きなチョコレートケーキがあった。

「みんなでつくったのー！」

と、ヴィヴィオが鼻にチョコレートをつけて言う。

「はは、ありがとヴィヴィオ」

「えへへ、それとね？」

トテトテと俺に駆け寄り俺にしゃがむように要求すると、ヴィヴィオが俺の頬にキスをする。

「パパ大好き♪」

「ありがと、ヴィヴィオ」

と、俺もヴィヴィオの頬にキスをする。

「あ、ヴィヴィオずるーい！」

「私も！」

「うちも！」

と、結局三人からもキスをされた。なんだかチョコレートより甘いものをもらった気がする。

その後の数日間、俺とヴィヴィオのおやつがチョコレートだったのは言うまでもない。

蒼天外伝「チョコレートより甘いもの」（後書き）

今度はホワイトデー編も予定してます

第五話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編２）」（前書き）

う～・・・スランプだぁ

蒼天に代わる新しい小説が書けない。

では本編どうぞ♪

第五話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編２）」

旅館を出て、今日はみんなで遊園地に行くこととなった。昔なのはと行ったことのあるテーマパークだ。

「わー！」

ヴィヴィオが今回も目をキラキラさせている。さて、どれから乗ろうか。

「パパ！あれ乗りたい！」

と、ヴィヴィオが指差すのはジェットコースター・・・・・・パワーアップしてるよ。この４年間で。

「え、あれ！？」

なのはが顔を引きつっている。なのははあれで前回痛い目を見ているからな。

「なんや、なのはちゃん絶叫系駄目？」

「駄目じゃないけど・・・」

「じゃあママ達も行こ！」

と、ヴィヴィオがなのはとフェイトを引っ張る。はやてとマリカは特に反対せず、エリオとキャロもそれに賛同して乗ることに。最初の山の時点。

「へえ、前より高くなった・・・・」

「「「ドキドキ・・・」」」

「あ・・・ああ・・・」

「う・・・ううう・・・」

「～♪」

そして落下。

「「「わ～♪」」」

「「キャ～！」」

そして終了。なのはとフェイトは目を回している。俺とはやては特に変わったところはない。子供たちは楽しかったのか、とても嬉しそうだ。

「じゃあ次はあれに乗りましょう！」

「ヴィヴィオも乗る～！」

エリオが指差したのはタワーの絶叫マシン。

「「キャー！？」」

「次はあれです！」

今度キャロが指差したのはウォーター系の絶叫マシン。

「「イヤ～！」」

と、こんな感じでなのはとフェイトがダウン。この後も回ろうかと考えたが二人に限界が来たらしく、休憩することとなった。時間も丁度お昼になったので、みんなで昼食を取りにレストランへ。七人で席に座る。

「エリオ、キャロ、二人も好きなのを選んでいいよ」

「いいんですか？」

「ああ、小遣いはお土産買うのにでも取っておけ」

「じゃあ僕、このサーロインステーキスペシャルで！」

「私はえっと、人参がない料理を・・・・・・」

と、キャロはまだ散策中。

「ヴィヴィオお子様ランチ！」

「はいはい。なのはたちは？」

「うちはこのグラタンや。なのはちゃん？フェイトちゃん？」

「ふぇ～・・・じゃあこのオムライス」

「うぅ・・・私はこのパスタ」

「んじゃあ俺はこのシーフードピザにするか」

「私もエリオと同じで」

「マリカ、一品だけだぞ」

こいつに好きなだけ食わせたらえらいことになるからな。結局キャロはハンバーグセットを頼んだ。こうして料理を注文。なのはとフェイトはなんとか目が回っている状態から元に戻った。

「午後はどうしようか」

「そうだね、まだいっぱい回るところもあるし、ゆっくり回ろう」

「ねえパパ、トイレ」

「はいはい。はやて、頼む」

俺が言うと、はやてが頷き、トイレへと連れて行く。

「（なあフェイト・・・）」

「（何？直人）」

「（そろそろ、エリオとキャロには言うべきじゃないか？俺たち４人のこと）」

「（そうかな？）」

「（そうだね、でも、今言って大丈夫かな）」

と、俺、フェイト、なのはで考える。

「あの、兄さんたちどうかしました？」

「え？あ、ああ・・・いや、ちょっとな」

「あの、エリオ、キャロ、ちょっと落ち着いて聞いてくれる？」

「はい」

なんとなく空気を呼んでくれたのか、二人が姿勢を正し、俺たちを見た。

「実はね、機動六課が解散してからなんだけど、私となのは、はやては直人とその、結婚するの」

「え・・・！？」

「けっ・・・」

「「結婚！？」」

二人とも超びっくりしてる。

「その、兄さんと、フェイトさんたちが！？」

「それって、一夫多妻ってことですか？」

キャロ、どこでそんな言葉を覚えてきた。

「その、それでね？事実上だと、直人がエリオとキャロの父親になることになるの。」

そう、保護者として登録されているフェイトとエリオたち。俺がフェイトと結婚すれば自動的に俺は父親となる。

「それでね、その・・・エリオとキャロはどうかなって」

なのはが言うが、二人はびっくりしたまんまだ。

「おい、二人とも？」

「僕の、お父さん・・・」

「私の、パパ・・・」

ん？今なんて？

「どうかな？エリオ、キャロ？」

「は、はい。直人兄さんなら、全然大丈夫です！」

「すごく嬉しいです！」

と、二人は笑顔になった。俺たちはホッとする。

「まあ、機動六課が解散するまではお兄さんでいいから。」

「はい、その・・・お父さん」

「うん、パパ・・・」

エリオとキャロは恥ずかしながらも、俺を見てそういった。この二人に親と呼べる存在になれるかは不安ではあるが、今までの過去を忘れられるほどこの二人を幸せにしてあげたい。そう思った。するとヴィヴィオとはやてが戻ってくる。

「こうなると、なのはさんとはやて部隊長もお母さんか？」

「そうだね。」

「あれ、二人とも話したん？」

「ああ、まあな。二人はフェイトの子供だし」

俺の言葉に、はやてが頷く。

「せやね。六課解散したら3人の子持ちか・・・」

はやての言葉に、みんなで笑う。ヴィヴィオは意味がわかっていないようだ。

「3人？」

「ヴィヴィオと、エリオ、キャロ。ほら、3人だろ？」

「じゃあエリオお兄ちゃんと、キャロお姉ちゃん？」

ヴィヴィオが首を傾げて俺に聞く。

「そういうことだな」

「わ～い、お姉ちゃんとお兄ちゃんが出来た～♪」

「お兄ちゃん・・・」

「お姉ちゃん・・・」

子供としてもそれが嬉しいのだろう。二人は顔を赤くしていた。

「お待たせしました」

店員がカートで料理を運んできた。それぞれの食事を口にする。

「おいし～♪」

ヴィヴィオは幸せそうに料理を食べる。ないもんな、ピーマン。みんなで食事を終え、この後もシューティングゲームやら何やらをする。そして今回は俺の家へと向う。

「ただいま姉さん」

「あらあら、大勢でお帰りなさい。直人」

「うん、姉さん」

「パパ、このお姉さんは？」

「この人はね、パパのお姉ちゃんの千草姉さんだよ」

そういえばヴィヴィオは姉さんと面識がないんだよな。というか、結婚表明したときは朝から仕事を抜け出してきていたし、ヴィヴィオも俺の部屋でマリカといたから知らない。

「直人の子？でも、ちょっと似てない気も・・・」

「ああ、そうじゃなくてね？」

俺はとりあえず千草姉さんにヴィヴィオについて説明した。

「なるほど、そういうことね」

と、納得してくれた。で、一方フォワード陣はというと・・・

「ここが直人兄ぃのおうち・・・」

「兄さんの家、大きい」

「直人兄さんの部屋ってどこですか？」

「フリード！その辺飛び回っちゃ駄目！」

大騒ぎ。

「あらあら」

「でさ、姉さん。今日は確か夏祭りが海鳴神社であったよね？」

「ええ、そういえばそうね。浴衣は6でいいかしら？」

「浴衣？」

ヴィヴィオが首を傾げる。それはフォワードも同じことだ。

「私や母さんのおさがりだけど、いいわよね？」

「ああ、俺はエリオと着替えてくるから。」

と、とりあえず衣服をしまってある部屋から子供用の浴衣などを引っ張り出した。おじいちゃんが生きていたときは、祭りでは同じように浴衣を着ていた。なので、着せ方なども知っている。

「これでよし・・・っと」

「わぁ・・・」

エリオが嬉しそうに飛び跳ねる。

「それは俺がエリオと同じくらいの時に着てたやつだ。」

「父さんが？」

「ああ、よく似合ってるよ」

その蒼と紺のラインが入った浴衣に、エリオは喜びながら部屋を出る。すると、フォワードの面々も着替え終わっている。

「パパ、どう？」

「直人兄ぃ、どうかな？」

「兄さん、似合ってますか？」

「お兄ちゃん、エリオ君、どう、かな？」

それぞれ青、朱、ピンク、そして翠と紅の浴衣。それぞれ姉さんのだが、とてもよく似合っている。というか、よくこんなにあったな、浴衣。

「おじいちゃんが貯めてたのよ。どういうつもりだったんだか」

多分姉さんに着せるためだと思う。

「でもみんな似合ってるな。いいと思うぞ」

俺の言葉にみんな喜んでいた。で、その後なのはたちと合流。みんなは一度帰宅してから浴衣に着替えてきた。はやてに限っては、家がミッドにあるで、なのはの家から浴衣を借りているらしい。

「・・・・・・うん、やっぱりみんな似合うな」

「「「えへへ♪」」」

予想通りというか、想像以上に綺麗だな。こうしてみんなで神社へと向った。

神社に着くと、フォワードとヴィヴィオは目を光らせる。そりゃそうか。

「パパ！あのフワフワしたのなあに？」

「わたがしっていうお菓子だな。おじさん、ひとつくれ」

綿菓子を買ってヴィヴィオに渡す。そしてヴィヴィオがモフモフとそれを食べる。

「おいし～♪」

ということでお祭りをみんなで楽しむことに。なのはやフェイトは金魚すくいで遊んでいる。で、スバルやティアナは射的。当然ティアナは上手いけど、スバルは下手すぎ。エリオとキャロはたこ焼きをおいしそうに食べている。ヴィータとマリカはさっきから輪投げで奮闘。シグナムさんとシャマルさんはお酒を買って飲んでいる。ゼオンはアリサ、すずかとヨーヨー釣りをしている。こうして時は過ぎ、暗くなったころ、花火が上がり始める。

「わぁ～」

その日本で見る花火に、みんなは感動している。ミッドでも花火大会などはあるものの、いまいち迫力がない。

「綺麗やねぇ」

「ああ、そうだな。」

はやてとそんな話をしていると、はやてが歩行者とぶつかってしま

う。

「あっ」

はやてがこける寸前、なんとか受け止めるが足を挫いたようだ。

「いった～・・・」

「大丈夫か?はやて」

「うん、大丈夫」

とは言ったものの、立ち上がれそうにないので、お姫様抱っこで抱き上げる。

「な、直人君!?人前でそんな・・・」

「しょうがないだろ?はやて浴衣だし」

後ろからなにやら殺気を感じるが、気にしないでおこう。俺ははやてをベンチに座らせる。

「ほら、足を見せてみろ」

「うん」

足を見せると、見事に紫色に腫れている。そうとうこけ方が悪かったらしい。

「うーん、シャマルさんはどっか行ったし、ヒーリングはそこまで

得意じゃないしなぁ・・・」

エルフを呼ぶほど重症でもないんだが、呼ぶ必要があるんなら呼ぶけど・・・

「あの、その直人君？」

「どうした？はやて」

「あの、旅館までその、抱っこして欲しいんやけど・・・」

「え？」

それはいくらなんでも・・・ま、いっか。

「わかった。まあそろそろ帰る時間だし、帰ろうか」

「うん」

こうしてはやてをお姫様抱っこして帰るわけだが、終始なのはとフェイトからジト目で睨まれたのは言うまでもない。そして旅館に着き、就寝時間になった。今日ははやてと寝ている。なのはとフェイトは何やらフォワードたちの所へ遊びに行ってくると行ってしまった。ヴィヴィオももう寝ている。

「うふふ、今日はありがとな、直人君♪」

「どういたしまして。その足、ちゃんとシャマルさんに治してもらえよ？」

「うん、わかっとるよ。あんな、直人君・・・」

「どうした?はやて」

はやてが急に沈んだ表情になった。

「今日はホントに楽しかった。うち、管理局に入ってからこんな風に楽しんだこと、全然あらへんかったから・・・それにあの子のことも思い出してまう。」

「はやて・・・」

おそらくあの子とは初代リインフォースのことだろう。

「でもほんま、直人君に会ってからええことばっかり続いて嬉しいんよ」

「そっか・・・・」

はやてはニコニコ顔だ。俺も少し、笑っていた。

「だから、これからも一緒に幸せになろ?」

「ああ、そうだな。はやて」

はやてと唇を重ね、静かに眠りにつくことにした。

第五話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（中編２）」（後書き）

秋風「うーむ・・・」

直人「どうした？」

秋風「いやね？龍騎のエピソードファイナルからのリリカル小説を書いてみたんだけどさ」

直人「で？」

秋風「なんかしっくり来なくてさ」

直人「駄目じゃん」

秋風「で、新しく小説を書いてみたんだが・・・」

直人「どうだった？」

秋風「アイディアが浮かばない」

直人「駄目じゃん」

秋風「あれだ。蒼天シリーズ以外の話が浮かばん」

直人「おいおい・・・・・」

秋風「そして現在ここまで絞った」

・仮面ライダー龍騎×リリカルなのはＡＳ　ヒロイン：はやて
・仮面ライダーディケイド×リリカルなのは　ヒロイン：フェイト
・二次創作×リリカルなのはＡＳ　ヒロイン：なのは
・二次創作チート×リリカルなのは　ヒロイン：はやて
・二次創作チート×リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　ヒロイン：ティアナ

直人「なんかヒロインはやて率おおくね？」

秋風「それは俺も思う」

直人「でも一応言うと、３人とも好きだからな～お前」

秋風「ああ、意表をついてスバティアでもいいと思ってるんだよなぁ」

直人「こんな悩んでいる駄目作者に皆さん愛の手（アイディア）を」

秋風「前回のアンケートでもみんな僅差なので迷ってます。誰か助けてください（泣）」

直人「次回、第六話『夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（後編）』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第六話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（後編）」（前書き）

最近は悩むこと多くて辛いです。どうしたもんか・・・・

そういえばもう5万ヒットを超えていました。ありがとうございます。これからも頑張って生きます。

では本編どうぞ♪

第六話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（後編）」

今日と明日、とりあえずそれで帰ることになるのだが、今日はみんなでお食事会となった。で、俺は現在逃げています。

「ハァ・・・ハァ・・・なんで、こんなことに・・・」

俺はとりあえず逃げる。この街中なら追ってきてもすぐ逃げられるだろう。

「見つけたぞ！恭也！こっちだ！」

「くっ！」

クロノ提督が追ってくる。だがすぐにそれを撒いて逃げる。こんなことになったのは、今から数時間前。

朝の朝食の時間。なのはとフェイト、はやては先にヴィヴィオと翠屋に行き、準備をすることとなった。で、朝食。

「兄さんが、結婚！？」

「あ、ああ・・・」

スバル、ティアナが驚愕していた。どうやらエリオとキャロがポロっと言ってしまったらしい。

「しかも、隊長3人となんて・・・・・」

「一応六課解散まで婚約だから、あんまり騒ぎ立てるなよ?」

「そ、それでも兄さんでいてくれますか!?」

「あ、ああ・・・大丈夫だよティアナ」

ティアナも驚きまくり。俺は涙目のティアナをよしよしとあやす。
で、そこへいきなり砲撃が飛んできた。スティンガースナイプ?ってことは・・・

「久しぶりだな、直人」

「ク、クロノ提督・・・恭也さん・・・」

そこにいたのはクロノ提督。そして恭也さん。

「俺たちは認めんぞ、だから一つの考えにいたった。」

「考え?」

「「お前を無に帰す!」」

「ぎゃー!」

ということで逃走劇スタート。

「ハァ・・・ハァ・・・メシア、今どの辺に魔力反応がある?」

『翠屋に４つ。そして旅館に４つ。北西５００ｍに一つです。』

恭也さんは魔力を持ってないからわからないけど、ここからなら南に逃げて翠屋に行くしかない！

こうして俺の逃走劇は続く。

なのはｓｉｄｅ

「ただいま～」

「あら、お帰りなさい。」

お母さんがもう料理の準備をしている。お父さんとお姉ちゃんも久しぶりなんだけど・・・

「あれ？お兄ちゃんは？」

「あら、恭也はなのはを迎えに行くって行ってたけど・・・」

「あれれ？行き違いになったのかな？」

「なのはちゃん？うち、すごく不安で仕方ないんやけど」

「え？あ・・・」

私の脳裏に、いやなことが頭を過ぎった。

「レイジングハート、街中で魔力反応は！？」

『あります。どうやら直人さんとクロノさんです』

「リイン！直人さんのところ追って！」

「はいです！」

こうしてリインが直人君のところへ向ったけど、大丈夫かな・・・

フェイトｓｉｄｅ

「ただいま～」

「あらフェイト、お帰り」

「あ、フェイトちゃん」

「フェイトお帰り～」

「「お帰り～」」

アルフだけでなくリエルとカレラもいた。でも・・・

「あれ？クロノは？」

「クロノなら健やかな笑顔でフェイトちゃんを迎えに行くって言ってたけど。一緒じゃないの？」

そのエイミィの言葉を聞いた瞬間、私は嫌な予感がした。あのクロ

ノが健やかな笑顔？

「ねえ母さん、クロノに私たちの話はしたの？」

「ええしたわよ。」

「クロノすごい表情だったよね・・・・って、まさか？」

「私、ちょっと行ってくる！」

こうして私は飛び出した。

直人ｓｉｄｅ

「ハァ、ハァ・・・つ、疲れた」

俺は自然公園の中を走り抜けている。

「いた！」

「ちぃ！」

「逃がすか！」

『ブレイズキャノン』

「メシア！」

『防御魔法展開』

何とかシールドを展開し、攻撃を防ぐ。やばい！

「逃がさん！」

今度は恭也さんかよ！

「メシア、２モード！」

『２モード！』

メシアを双剣にし、恭也さんの攻撃を防ぐ。やばい、この人も腕が上がってる。俺は剣を弾き、距離を取った。

「ほぅ、強くなったじゃないか」

「し、死なない程度にはね・・・リミットブレイク！」

俺はリミットブレイクを使う。そしてやることは一つ・・・・

「・・・・・逃げる！」

「「なにぃ！？」」

俺は全速力でその場を離脱した。

俺は今度は商店街へと逃げる。すると、遠くに二人の姿が見えた。カンのいい人たちだ。すると、俺はいきなり通路とビルの影から伸びる手に引きずりこまれた。な、なんだ！？

「シーッ！」

「ですぅ！」

「（フェイト、リイン！？）」

なんと、俺を助けてくれたのはフェイトとリインだった。

「（どうして二人が？）」

「（私はクロノが私を迎えに行ったって言って帰ってこないのが気になって）」

「（私はなのはさんとはやてちゃんから直人さんを探すように指示されていたです！）」

そっか、だからリインは妖精サイズなのか・・・

「（とりあえずそうだね・・・あそこのデパートに逃げよう）」

こうして、俺とフェイト、そしてリインはデパートへと逃げ込んだ。

このデパートには昔はやてやなのはと来たことがある。とりあえずリインが元のサイズに戻りたいらしいので服と下着を購入し、そこを歩く。

「にしても、食事会は夜だし、朝食もまともに食ってないから腹減ったな・・・・」

朝食中に襲撃され、昼を抜いて逃げ回っていたのでおなかがペコペコだ。

「このデパートって上の階に食事できるところがたくさんあるから、そこで食べようよ」

「そうだな」

こうして俺たちは食事場所へ向った。

散々どれにするか考えたが、リインのことを考えて適当なファミレスにすることにした。

「リインはお子様セットにするです！」

「じゃあ私はこのシーフードグラタンにしよ」

「俺はそうだな、このハンバーグセットにするか」

と、注文し、一息ついた。

「そういえば、直人と一緒に出かけたのは久しぶりだね。」

「そうだな。こんな形で一緒になるとは思わなかったけど。」

「でも私は幸せだよ、直人」

「フェイト・・・」

フェイトが顔を赤くし、俺も若干体温が上がった。

「あの～・・・リインがいるの忘れないで欲しいです」

言われた瞬間思い出し、フェイトも顔を真っ赤にした。

「あ、ご、ごめんリイン」

「別に構いませんが、なんというか、二人っきりってこういう雰囲気だと学んだです」

「あ、そう・・・」

リインが少し大人になった。

「おまたせしました」

料理が来たので、みんなで食事をして、この後はデパートで買い物をして回った。

「あ、綺麗・・・」

「ん？本当だ」

そこにあるのは綺麗なネックレス。その蒼いひし形の石だ。

「ジュエルシード・・・」

なぜかその形を連想したフェイトは落ち込んだ顔になった。

「おいおい、なんでそんな顔するんだよ」

「ううん、別に落ち込んでるわけじゃないよ?その、ジュエルシードがなかったらなのはとも会えなかったし、直人とも、きっと会うことは出来なかったと思って。」

「・・・そうだな。」

俺はただ一言そう言った。

「・・・・・・・・・」

フェイトはそれをしばらく見つめていた。値段は・・・・・・4万2千円。一応金はあるけど高くないか?

「フェイト、欲しいわけ?」

「え?その、ううん!」

「正直に言え」

「はい、欲しいです・・・・」

「しょうがない、すいませんこれください」

「え!?直人!?」

「なのはたちには内緒な」

こうしてネックレスを購入した。そしてフェイトに渡す。

「今日一緒に逃げてくれたお礼だよ」

「あー！ずるいです！リインも一緒に逃げてあげたです！」

「あ、ああ悪い悪い。後でお菓子でも買ってあげるから」

「わー！約束ですよ！」

リインが喜ぶ。安いな、お前。こうしてデパートを出て、なんとか翠屋に逃げ込んだ。

「やっと、逃げ切った」

「直人君お帰り。大丈夫？」

「あれ？フェイトちゃん？」

「あ、うん・・・クロノが帰ってこないって聞いて直人が危ないと思って」

と、話をする。

「で、あの二人は？」

「まだ帰ってないよ。直人君たちの勝ちかな。」

そして遅れてクロノ提督と恭也さんが入ってきた。

「みつけ・・・」

「オニイチャン・・・・絶望がオニイチャンのゴールだよ?」

「クロノ、クロノの罪、数えて?」

「二人とも覚悟はええか?答えは聞かへんけどな・・・」

3人がデバイスを構える。お前ら!どっかで聞いたことあるぞそのセリフ!

「「ちょ、ちょっとま・・・」」

「「「問答無用!!」」」

こうして二人が光になった。後ろでヴィヴィオとクロノ提督たちの子供がガクガクと震えていたので、俺がよしよしと抱きしめることにした。

こうしてみんなで食事会になった。この食事会は実は婚約のお祝いも含まれているのだという。

「わ~おいしそう!」

スバルが涎をたらし、目を光らせる。あ、エリオも同じだ。

「まあいいか。みんな、乾杯!」

『乾杯!』

こうしてみんなが食事を開始。当然ながら、姉さんの料理の争奪戦が始まる。でも桃子さんの料理もおいしいな・・・

「パパ、お膝で食べていい？」

「ん？ああ、いいよ」

とりあえずヴィヴィオはちょこんと俺の膝に座る。

「ヴィヴィオ、姉さんの料理おいしいか？」

「うん！」

「ヴィヴィオちゃんピーマン食べれないからピーマンない料理を多くしたのよ？」

なるほど、だからご機嫌なのか、ヴィヴィオ。

「千草お姉ちゃん大好き！」

「あらあら」

姉さんも嬉しそうだ。まあ、姉さんは弟の俺がいても妹がいなかったし、嬉しいのかもな。

「でもヴィヴィオ、ミッドチルダ帰ったらちゃんとピーマンは食べろよ？」

「は～い・・・」

と、ショボンとなってしまった。可愛いやつめ。

「直人君もすっかり親馬鹿ねぇ、あなた？」

「はっはっは、確かにな」

士郎さん、あんた人のこと言えんでしょう。

「パパ、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ。ほら、このお肉おいしいぞ？」

「いただきま～す！」

この後もヴィヴィオは幸せそうに料理を食べ、デザートは翠屋のケーキを大勢で食べた。さすがにお腹いっぱいだ。みんなで帰るときは士郎さんとリンディさんが送ってくれた。そして夜。今日は最終日なので、フェイトと布団に入る。

「えへへ、やっと出番が回ってきた♪」

「あのな・・・・・・」

俺はため息をついてなのはたちを見た。実はフェイトが酔い潰した。ヴィヴィオはなのはたちのところで抱きついて寝ている。

「あそこまでするか？普通」

「だって直人と二人きりになりたかったし」

「まあ、いいけど・・・」

特に断る理由もないしな。

「もし子供が出来たら、今日みたいな日が来るのかな？」

「どうだろうな・・・って、フェイト？」

とんでもないことをさらっと言うな。

「だって私は直人が大好きだもん。だから私は幸せだよ・・・・ん」

「ん・・・・」

互いに数秒のキスをして、手を繋ぐ。

「お休み直人。今日もいい夢が見られますように・・・・」

「そうだな、お休みフェイト」

こうして海鳴でのひと時は終わりを迎えた。

第六話「夏だ！海だ！海鳴だ！海鳴旅行記（後編）」（後書き）

直人「うーむ・・・・」

秋風「どうした？」

直人「いや、今回は募集が少ないな」

秋風「ああそうだな。」

直人「というわけで２月の２０日まで延長します」

秋風「どういうわけだよ。主人公でもやっていいことと悪いことがあるぞ」

直人「いいじゃん。みんなのいいキャラを待たないと。いいキャラが出せなくて困ってるんだし」

秋風「まあ、そうだけどさ」

直人「でもって、次回もほのぼの？」

秋風「しばらくほのぼの」

直人「あ、そ」

秋風「んでもって現在第二作目も思案中。意見も待ってます」

直人「ついでにこのコーナーの名前と出演者、そして俺たちの絵を

イメージでかける人、待ってます」

秋風「では今日はこの辺で」

直人「次回、第七話『闇の断片、増殖と退化と（前編）』ＴＡＫＥＯＦＦ！」

第七話「闇の断片　増殖と退化（前編）」（前書き）

今回はあれです、キャラが恐ろしいほど崩壊してます。
その辺は私、秋風の文才のないことを考慮してお読みください。久しぶりにハーレムです。

では本編どうぞ♪

第七話「闇の断片　増殖と退化（前編）」

海鳴から帰ってきて早一週間。もうすぐ夏も終わる。といっても、仕事ばかりの機動六課に休みなどあまりないかもしれないが。で、今日は気持ちがいいくらいすっきりした朝を迎えた。それというのも、妙にあたりがすっきりしていたからだ。ヴィヴィオが引っ付いて寝ているのはいつものことだ。だが、何かおかしい。時刻は早朝の４時。なのははまだ寝ているし、フェイトやはやてだって同じことだ。だが、その三人の姿がない。その代りに３つの小さな膨らみがあった。俺は布団をめくる。

「は、はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」

俺はその膨らみの正体を見て、思わず大声を上げた。

「直人君・・・どうしたの・・・？」

「まだ４時だよ・・・？」

「ほんまや・・・そない大声だして・・・」

「お、お前ら・・・その体」

俺は起き上がったなのはたちを指差した。

「体・・・？」

なのはが視線を落とした。そしてフェイトとはやても同様。そして・・・

「「「えええええええええええええええええええええええええええ！！！！！？？？？？」」」

三人の絶叫が部屋に響き渡った。その原因は、三人の体が「縮んでいた」からだ。

会議室。緊急に副隊長達を呼び出し、シャマルさんとザフィーラも呼んだ。現在3人は六課の上着だけを着て、スリッパを履いている。ヴィヴィオの服はさすがに入らない。年齢的にも、3人とも9歳前後だ。

「どういうことだ、これは」

シグナムさんが唸る。そんなの俺だって聞きたい。

「昨日何事もなかったし・・・」

「うん、みんなで寝て・・・」

「明日なーて・・・」

そう、昨日だって普通に訓練して仕事して食事をして・・・特に覚えることはない。

「誰かの魔法の影響とかは？」

「うーん、それは特にないのよねぇ」

と、シャマルさんも検査結果を見る。あまりにも正常なのだという。

「ただね・・・」

「ただ？」

「何故かわからないけど、闇の書の反応が３人から出てるのよ」

「「「は？」」」

闇の書。といえば、はやてが所有する夜天の書からなってしまったというか、夜天の書と呼ばれる前の呼称というべきか。だが、それが破壊されたのは１０年も前の話だ。

「でも闇の書は１０年も前に・・・」

「そうなのよ。でも検査の結果では、微量の闇の書が持っていた魔力が残ってるわ」

「でも、どうして闇の書の魔力が？」

「なんか３人で共通するところはないのか？」

「「「うーん・・・」」」

３人そろって考える。みんな結構可愛いな。

「あ！」

お、なのはが気づいたのか？

「私とフェイトちゃん、一度蒐集されてる！」

「あ、そういえば・・・」

「蒐集？」

「闇の書は魔力、リンカーコアから魔力を蒐集することでページが増える。高町もテスタロッサも、確かに蒐集されている。高町はシャマルから、テスタロッサは私からな」

「つまり、その闇の書の時代であったあなた達の魔力から闇の書の魔力が流れ込んだと？」

「そういうことだ。」

でもそうなると・・・・

「じゃあ、はやては？」

「主はやてはもともと闇の書の保持者だ。しかし、初代リインフォースが消えることで、完全にその闇は消え去ったはずなのだが・・・・」

謎は深まるばかりだ。

「しかし、私たちは現にここにある。」

「そうだ、僕たちがいるから、闇の書が関係してるのは間違いない」

「そのとおりだ！塵芥！」

「それもそうだな・・・って、は？」

いつの間にか俺の周りに別のなのは、フェイト、はやてがいた。

「はあぁぁぁぁ！？」

「出来れば大声を出さないでいただきたい」

「そうだぞ、うるさくてしょうがないじゃないか」

「塵芥！声を下げろ！」

「え、な、なにこれ！？」

「わ、私！？」

「う、うちがおる・・・」

座っていた3人も驚いている。

「き、君たちは何？」

「私は星光の殲滅者ともうします」

「僕は雷刃の襲撃者だ」

「我は闇を統べる王だ、覚えておけ、塵芥」

なんだこいつら・・・

「そうじゃなくてだな、まあ呼び名も重要だけど、君たち自身はなんだ？」

「私たちは闇の書の欠片です」

「闇の書の欠片？」

「そう、僕たちはその封印されなかった部分の残りだ」

「それがお前たちの体にくっついていたというわけだ。わかったか塵芥ども」

と、説明するのはいいんだけど・・・

「君たち、降りてくれる？」

いつの間にか俺は3人のおもちゃにされている。星光の殲滅者と闇を統べる王が俺の膝に座り、雷刃の襲撃者が肩車で乗っかっている。

「ここが一番落ち着くので」

「いいじゃないか、僕はすごいから一番高いところにいたいんだ！」

「塵芥、感謝しろ。我はお前を気に入ってやったのだ」

「あのね・・・」

もうやだ。九歳前後の子供が3人も乗っかれば重い。で・・・

「直人君から離れなさい！」

「そうだよ！直人は私たちのだよ！」

「せや！なんであんたらがそこにおるねん！」

お前ら、怒るポイントが間違ってるぞ。てかフェイト、俺はいつからお前らの所有物になった。

「とにかく離れてよー！」

「嫌です。私はこの方が気に入りました」

「直人から降りなさい！」

「やだね！これはもう僕のものだ！」

「とっとと降り！そこは私が座る！」

「やかましいぞ塵芥。我は全てを統べる王なのだからな」

・・・・・・・・・

「なによー！」

「なんですか」

「うー！」

「なんだよー！」

「なんなんやー！」

「なんだ！」

「・・・・・・だあぁぁぁ！お前らやかましいぃ！」

マリカｓｉｄｅ

まったく、主ときたら眠いせいか気が短くなってますね。

「（ほらほら、主、みんな子供だから怯えてますって）」

「（知るか！）」

「で、シャマルさん、どうやったらこいつら元に戻るんですか？」

「え？ええ、そうね・・・・とりあえず原因がわからないし、当分このままかも・・・」

となると、苦労するのは主ですね。とりあえず怯えているみなさんを何とかせねば。

「み、みなさん、とりあえず主も眠いためか怒っているので、お茶を入れてきます。皆さんはどうします？」

「私コーヒー」

「私も」

「うちも」

「では私は紅茶を」

「僕はオレンジジュース」

「我は烏龍茶だ！」

「はいはい、入れてきますから大人しくしててくださいね？」

直人ｓｉｄｅ

「・・・・闇か。」

「直人君どうしたの？」

「いや、仮の話だが・・・なのはたちに微量の闇の力が残っていたとして、それが何かのきっかけで膨れ上がった。そう考えるのはどうだ？」

「でも直人、その原因は？」

「原因は、混沌の楽園・・・だと思う」

「どういうことや？」

いろいろとピースを繋げば簡単な話だ。

「カオス・レイとの戦いを思い出せ。あいつは自分という闇の塊から人間の負の力を糧にしていただろ？」
「つまり、私たちはその時余波を受けたから？」

「ああ、だからこそなのかもな。その心の隅、体のどこかに残っていた闇の欠片。それが増大、創造されたことで、この三人が姿を現した。」

「「「「「なるほど」」」」」

おい、なのはたちはともかく何でお前らまで頷くんだよ・・・

「いえ、私たちも確かに闇の欠片ではあるのですが・・・」

「僕たちはそこの小娘たちを元にされただけであって」

「現状が分からぬまま姿を現したのだ」

「あ、そ・・・」

「でももう一つ謎が残ってるよ」

「そうそう、どうして私たちが子供なのか・・・だよね」

「なんかないのか？三人とも」

「「「「「うーん」」」」」

六人が考える。俺はもう突っ込まない。３人に聞いたのになんでこ

いつらまで考えるんだよ。

「あ！」

「なんだ？なのは」

「あのね、夢を見たの！」

「夢？」

「うん、直人君と私がもしそのまま一緒に小学校を過ごしたらって・・・」

「それで？」

うん？つまり、俺が事故に合わなかったらっていう夢？

「うん、一緒に魔法を覚えて、フェイトちゃんと戦う夢だった」

「え？なのはも！？」

「は？」

今度はフェイトが声を上げる。なのは「も」？

「私もね、なのはの隣に知らない男の子がいる夢を見たの。でね、最後、なのはと友達になるときに、直人みたいな男の子とも仲良くなるの」

「うちもや、闇の書の防衛プログラムと戦うとき、見知らぬ男の子

がおった！」

「ん？つまり・・・３人の話からして、俺がお前らの過去にいる夢？」

「そうみたい。」

ますますわけがわからん！

「闇の書は主の願いを叶えるためにあります。闇の断片の力が働いたせいで、中途半端に夢が叶ったのではないのでしょうか？」

「だけど殲滅者、俺の身体に異常はないぞ？」

「だから言ったでしょう、中途半端に叶ってしまったと」

ようするにこいつらの願いは「今までの出来事に俺がいる世界にいたい」ってことか？だから体が縮んだ・・・と。でも待てよ？

「結局どうすれば直るんだ？」

「ようするに、３人とべったりくっ付いていれば直るんじゃないかしら？」

シャマルさん、さらっとそういう事言わないでくれ。ほら、３人、いや、６人の目が光ってるから。

「じゃあ今日一日、直人君一緒にいよ！」

「私も！」

「うちもや！」

3人が俺のところに寄りそう。すると、3人の闇の欠片たちも乗っかってくる。

「駄目です。この方とは私が共に一日過ごします」

「駄目だ殲滅者！僕がこいつと一緒にいる！」

「雷刃、我を忘れるとは何事だ？」

こいつら本当に闇の欠片か？むしろ可愛い方向にしか見えないんだけど。

「だめー！直人君は渡さないー！」

「そうだよ！なんであなたたちが一緒にいるようにするの！」

「せや！あんたら関係ないやろ！」

と、なのはたち猛抗議。しかし、殲滅者達も食い下がる。

「元はといえば、あなたたちが変な夢を見なければ済んだ話です。それに私はこの方が気に入りました。当分戻らなくていいです。彼と一緒にいられるなら全てを破壊しましょう。」

「ずるいぞ殲滅者！僕だってこいつが気に入ったんだ！だから僕が一緒にいる！」

「我もこの塵芥が気に入った。だから闇を統べる王としてこいつは私の僕だ」

ギャーギャーと喚きだす。ああもう、こいつらぁ・・・

「直人、抑えろ！」

「そうよ直人君、あなただって大人でしょ？」

シグナムさん、シャマルさん、だったら貴方達止めてくださいよ、この六人。

「「無理」」

「でしょうね」

「とりあえず・・・いい加減にしろぉ！」

俺の声で六人がぴたりと止まった。

「とりあえず雷刃！」

「は、はい！」

「俺はお前のものじゃない！」

「はい！」

「次、統べる王！」

「な、なんだ・・・」

「その塵芥って呼び方やめろ。不快だ！それと誰が僕だ！」

「ご、ごめんなさい！」

「殲滅者！」

「はい！」

「俺取るためにスターライト撃とうとするな！隊舎が吹き飛ぶだろうが！」

「も、申し訳ありません！」

闇の欠片組を叱り、今度はなのはたちに向く。

「3人！」

「「「はい！」」」

「これ以上騒ぐと協力はしないおろかしばらく口きかないからな！」

「「「ごめんなさい！」」」

やれやれ、俺は学校の引率者か・・・

「お茶持って来ましたよ～・・・って、主、なんか悪化してません？」

「気のせいだ」

「いや、明らかにみんな大泣きじゃないですか」

「もうその辺は気にするな。」

こうして、俺の一日が始まる。

第七話「闇の断片　増殖と退化（前編）」（後書き）

直人「何これ？」

秋風「いや、ポータブルやってるうちにさ」

直人「いくらなんでも設定無理やりじゃないか？」

秋風「いいじゃん、久しぶりのハーレムだぞ？」

直人「ロリコンの趣味はない」

秋風「親馬鹿がよく言うよ」

直人「ぐっ！」

秋風「ちなみに中編、後編と続くから」

直人「おいおい・・・」

秋風「けっして話を稼いでいるわけではない」

直人「ほんとうかよ」

秋風「とりあえず明日は学校ないし、書きまくるさ」

直人「早いところ終わらせてくれ。すごく大変なんだからよ」

秋風「まあまあ」

直人「人の気も知らないで・・・」

秋風「頑張れフラグ王」

直人「それを言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

秋風「ギャアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

直人「次回、第八話『闇の断片　増殖と退化（中編）』ＴＡＫＥＯＦＦ！」

第八話「闇の欠片　増殖と退化（中編）」（前書き）

久々にバトルです。ちょっと疲れました・・・

ちなみにキャラ募集は２０日の２３時５９分までですので、まだな人はお急ぎください

では本編どうぞ♪

第八話「闇の欠片　増殖と退化（中編）」

とりあえず朝８時。フォワードの朝の訓練はなしとなった。で、フォワードの反応はというと・・・

「なのはさんかわい～！」

「ほ、本当に小さくなってる」

「フェイトさん、か、可愛い・・・」

「エリオ君？」

こんな感じ。で、ヴィヴィオはというと・・・

「駄目―！パパはヴィヴィオのー！」

マテリアル３人と喧嘩中。

「駄目です、私はこの方は私のものです」

「いーや、僕のだ！」

「我のだ！」

「お前ら、いい加減にしろ・・・」

３人がビクリと体を震わせた。

「も、申し訳ありません」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ぬ、すまん・・・」

「う？」

ヴィヴィオはよくわからないと言った表情で首を傾げる。

「いいかヴィヴィオ、今日は小さいママたち、あとこのお姉ちゃんたちと仲良くな？」

「はーい」

「よし、いい子だ」

俺はそう言ってヴィヴィオの頭を撫でる。ヴィヴィオが嬉しそうにしていると、なのはたちも駆け寄ってくる。

「直人君！私も撫でて！」

「私も私も！」

「うちも！」

「おい・・・」

そして負けじと闇の欠片組も迫る。

「私も是非その、頭を撫でて欲しいです・・・」

「僕もやってー！」

「我の頭にも特別に触らせてやろう！」

こうしてみんなに迫られる。もうやだ・・・

「主、ただいま戻りました」

「ん、マリカお帰り。どうだった？」

「ええ、とりあえずリンディさんに連絡してなのはさん達の洋服は用意して来ました。してきたんですが・・・・」

「？」

「こんなものを、リンディさんたちが」

それは初等部の時の制服だ。しかもきっちり6人分・・・

「え、これ着るの！？」

「リンディさんがそれで写真を撮ってきて欲しいって」

「母さん、何を考えてるの・・・」

「さすがに恥ずかしいで、これは・・・」

「あ、それでですね、それを聞いてしまったこの3人がいたりする

んですよ」

マリカの言葉に首を傾げる3人だが、すぐに顔を引きつった。

「なのは、フェイト、はやて・・・なんだか面白いことになってるじゃない」

「そうだね、懐かしい～」

「ほう、不思議なこともあるんだな」

「ア、アリサちゃん!?すずかちゃん!?」

「ゼオン?どうしてここに」

なんとそこにいるのはアリサ、すずか、それにゼオンだった。

「ああ、今俺はリンディ統括のところで仕事をしていてな。それでマリカからの連絡を聞いた。丁度アリサと連絡している時にな」

なるほどな。てか、ゼオンはリンディさんのところで働いてるのかよ。

「さあなのは?観念するのよ?」

「な、何をかな?アリサちゃん・・・」

「フェイトちゃんとはやてちゃんもだよ?」

「す、すずか・・・なにその怪しげな笑み・・・」

「すずかちゃん、怖いんやけど・・・」

「「それー！」」

「「「キャー！？」」」

見事三人は捕まり近くの空き部屋へと連行され、着替えさせられた。

「うぅ・・・はずかしいうよぉ」

「アリサ、ひどい・・・」

「すずかちゃ～ん・・・」

「なかなか可愛いじゃない」

「やっぱりいいね」

当時の小学生の時の格好の3人。ご丁寧になのはとフェイトはツインテールになってたりする。

「いいなー！ヴィヴィオも着たい！」

「でもいいと思うよ？可愛いし」

「旦那、もしかしてロリk「それ以上言えば首と体が分裂するぞ？ヴァイス」・・・はい」

俺はメシアを首筋に当てた。

「では私もその服に着替えます」

「僕もだ！」

「我もそうするとしよう」

こうして私立聖祥大付属小学校の制服を着た６人だった。

この後フォワードは２対４でなのはたちと模擬戦をすることになった。なのは、フェイト、はやてＶＳフォワード。スバルたちも最初は戸惑ったが、それが間違いだった。なのはとフェイト、それにはやてがもう清々しいくらいにいい笑顔でフォワードと戦っている。

「全力全開！」

「疾風迅雷！」

「響け終焉の笛！ラグナロク！」

「あいつらまさか・・・」

「「ブラストシューット！」」

「ブレイカー！」

辺り一帯に大爆発が起きる。あーあー・・・大丈夫かあいつら。

「甘いですね、私ならもっとすごいのを・・・」

「僕だってここを吹き飛ばすくらいなら簡単に・・・」

「我ならここ一帯を闇に・・・」

「お願いだからお前ら、やるなよ？」

「「「はい」」」

なんか随分と大人しくなった。で、煙が晴れると目を回したフォワードがいた。あいつら、そんなに日頃からストレス溜めてるのか・・・また騎士カリムに相談しよ・・・

「じゃあ次、俺とお前ら3人、やるぞ」

「え、あなたとですか？」

「ああ、実力を見る意味でな。俺とゼオンで戦う。」

こうして俺とマテリアル3人のバトルがスタート。

『準備はいい？直人君、ゼオンさん』

「ああ、大丈夫だよ」

「戦闘準備完了・・・いいぞ」

画面から小さいなのはが聞いてくる。俺はすでにバリアジャケットを纏っている。すでにマリカはユニゾン状態だ。ステージは廃墟。

空中にはバリアジャケットとなった3人の姿。正直ちょっと無謀かもな。

「相手は小さくとも10年前のなのはたちか、それ以上・・・か」

「かのエースオブエースの闇人格と勝負できるとは、楽しみだ」

『レディー・・・ゴー！』

「パイロシューター！」

「電刃衝！」

「誘導弾か！」

俺とゼオンはその向ってくる光弾を避けるが、その高速追尾に驚く。アクセルシューターとかより速い！

「クリスタルダガー！」

「ダイヤモンドスピア！」

俺とゼオンは何とか避けるが、俺のほうへ星光が迫っていた。

「はぁっ！」

「何！？」

接近戦！？なのはとこういうところは逆なのか！？しかもなんて力を・・・！

「ぐっ！」

そのまま反動で吹き飛ばされると、闇を統べる王が待ち構えていた。

「捕らえた！アロンダイト！」

「なっ！？」

一点集中の砲撃か！

「マリカ！」

『防御魔法展開！』

あ、危ない危ない・・・・

ゼオンｓｉｄｅ

「光翼斬！」

「ぐっ！シャイン！」

『ロードカートリッジ』

「紅炎一閃！」

先ほど直人の方に攻撃が行っている。この子はいったい何を考えて突っ込んで・・・！

「どんどんいっくぞー！」

ま、まさかこの子は・・・・

「馬鹿、なのか？」

「馬鹿っていうなーーー！」

「うっ！」

パワーが上がった！こうなれば・・・！

「シャイン！」

『ロードカートリッジ！』

「虚空炎閃！」

「わぁ！」

外した・・・いや、今のは軌道を読んでいた・・・こいつ、馬鹿だが強い！

「今馬鹿って思ったろー！」

「ちぃ！」

直人ｓｉｄｅ

「なるほど、強いな・・・」

「当然です。私は星の光さえ殲滅できる」

「我は全ての闇を統べる王だ。当然だ」

「そうだな、なら全力で答えるよ、星光の殲滅者、闇を統べる王」

ゼオンｓｉｄｅ

「ふっ、馬鹿にしては強いものだな」

「馬鹿っていうな！僕は強いんだぞー！」

「分かっている。だからこそ、全力で答えよう、雷刃の襲撃者」

直人ｓｉｄｅ

「ここからが、本当の戦いだ。ブレイブスワロー！マリカ！」

『オーライ主。やりましょうか』

『いつでもいいですよ！』

ゼオンｓｉｄｅ

「イーグル、いや、新たに生まれ変わった『フレイムイーグル』」

『イエスマイロード。いつでもどうぞ』

直人ｓｉｄｅ

「デバイス・・・」

ゼオンｓｉｄｅ

「複合！」

直人ｓｉｄｅ

俺の背中に白い翼が現れ、バリアジャケットが白く染まる。久しぶりだな、これを使うのは・・・

「それは・・・」

「俺の二つ目のデバイス、ブレイブスワローとの融合だ。甘く見ると火傷するぜ？」

『（主、格好つけてないで行きますよ？）』

「（そうだなマリカ・・・行くぞ！）」

ゼオンｓｉｄｅ

「なんだそれ！格好いいぞ！」

「もうちょっとお前は危機感というものを持って欲しいんだが」

正直、そんな目をキラキラさせてこっちを見るな。調子が狂う。

「でも僕の方がかっこいいんだ！行くぞぉ！」

「ああ、全力で答えよう！」

直人ｓｉｄｅ

「どうした？こないならこっちから行くぞ！」

俺は空を蹴り、星光に斬りかかる。

「うぐっ！」

星光がメシアスワローを受け止める。なるほど、まだまだいけるわけか。

「っ！ブラストファイアー！」

何！？この体制から・・・！

「すごいな・・・」

「一瞬、あなたを天使かと思ってしまいました。」

「我もだ。」

「ははっ、そいつはまた。だけど、そう言われても手加減はしないぞ？」

「当然です。私たちも全力で・・・」

「行かせてもらおう！」

なんだ！？あの二人の周りに魔力が・・・まさか、スターライトブレイカー級！？

「ルシフェリオン・・・・」

「エクス・・・」

あれはまずい気がする！

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

俺もすぐにカートリッジをロードし、攻撃態勢をとった。これでも勝てるかどうかだな・・・

ゼオンｓｉｄｅ

なんだ、あいつの周囲の強大な魔力は・・・

「僕の本気、受けてみろ！」

「何をするかは知らんが、本気で行かせてもらう。シャインイーグル！」

『ロードカートリッジ！』

「雷神滅殺！」

直人ｓｉｄｅ

「ブレイカー！」

「カリバーッ！」

「・・・蒼天」

ゼオンｓｉｄｅ

「きょっこーーーざん！」

「・・・紅天」

なのはｓｉｄｅ

みんなすごい魔力を放ってる。そして直人君たちも本気みたい・・・

『・・・蒼天』

『・・・紅天』

「え、まさか・・・」

『『龍斬波！』』

二頭の龍の砲撃が姿を現し、直人君の蒼い龍は二つの砲撃へ。ゼオンさんの紅い龍は巨大な雷の砲撃に向っていく。

『『うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！』』

そして大爆発が起き、周囲一帯が光に包まれた。

直人ｓｉｄｅ

「や、やったか・・・？」

煙が晴れる。すると、星光と闇を統べる王、さらには雷刃まで近くで落下していた。

「やばっ！」

俺は猛スピードでおい闇を統べる王を抱きかかえて、星光、雷刃を片手ずつでキャッチする。あ、危なかった・・・。すると、ゼオンも飛んできて、同時に地面に着地した。

「お互い、少々やりすぎたな。」

「ああ、だがまあ・・・正直本気でやらないとこっちが負けてたかもな」

俺は眠る3人を横にし、バリアジャケットを解除して上着をかける。マリカとゼオンも、上着を脱いでかぶせることにした。正直、こう眠ってると普通の女の子なんだけど。そう思ったことはとりあえずなのはたちが来るとまずいので言わないでおこう。

第八話「闇の欠片　増殖と退化（中編）」（後書き）

直人「久々にバトルだったな」

秋風「ああ、疲れた」

直人「寝てたくせによく言う」

秋風「ぐっ！」

直人「だが次回で闇の欠片たちの話は終わりだ。」

秋風「本当かよ・・・」

カケル「こんにちは」

直人「ああ、こんにちは・・・って、一人？」

秋風「馬鹿かお前は。カイは確かカケルの中にいるんだろ？」

カケル「はい。」

カイ『こんにちは、お二人とも』

秋風「ほらな？」

直人「なるほど、そうだったな。そしてこの小説に無印から来るのは珍しいな」

秋風「確かに。今だとクラウドとナナキ、孝俊だけか？」

直人「ソラと京谷はＡＳだし、シン、ハヤト、昶、ウィズ、紫藤、正宗、レイはＳＴＳだからな」

カケル「そうなんですか」

秋風「そう。だから無印から来たの君達は結構希少かも」

直人「それにしても、カイはあれか？遊戯王のアテムみたいな感じなのか？」

カケル「頭の中に声が響くから念話に近いですね。似てるかもしれません」

カイ『というか、もう一人の自分って第一話で説明してるしな』

直人「でも面白いな二重人格というかなんというか・・・」

秋風「本格的に遊戯王っぽいけど、なのはとどう絡んでくるか楽しみだな」

カケル「まあ、魔法についてはまだ先だと思いますけどね」

直人「だけどなんというか、強そうだ」

秋風「強そうもなにもちゃんとチートって書いてあるぞ」

カイ『確かに』

直人「てかさ、設定とかがクロスって・・・」

秋風「多分あれじゃね？Ｆａｔｅの技とか・・・」

直人「エクスカリバー？」

カケル「どうだろ・・・」

カイ『そこはお楽しみにしていて欲しい』

秋風「それもそうだな」

直人「ま、今後に期待するよ。」

秋風「そしてカケルは今なのは、すずか、アリサの中で誰がいいの？」

カケル「え！？」

直人「おい秋風、そういうこと言うなよ、まだ９歳だぞ、こいつ」

カイ『僕は違うけどね』

秋風「それともあれか？お母さん大好きか、妹命か。」

カケル「あの、僕そこまで変なキャラじゃないんですけど」

直人「じゃああれか？桃子さん？」

カイ『さすがに人妻は・・・』

カケル「え、えと！僕もう失礼します！」

秋風「まあ、また進展したら教えてくれ。これ、商品券5万円分あげるから」

直人「おい、その金まさか・・・」

秋風「もちろん、お前の金だよ」

直人「きさまー！」

カケル「ありがとうございます！じゃ！」

カイ『またいつか』

相羽カケル　出演作品　魔法少女リリカルなのは～光と影の二つの心～

小学3年生で、体の中にカイという人格を宿している。飛びぬけた身体能力を持ち、小学生ながら引ったくりを倒すほどで、ソウルと呼ばれる力を有している。温厚な少年だが、お金にうるさく、商店街で値切ったり福引の商品券に燃えたりする。父親を亡くし、母親は車椅子生活のため、色々と苦労の多い少年。この先なのはとの出会いによってどう魔法が絡んでくるか楽しみなところ。

カイ・シュナイダー　出演作品　魔法少女リリカルなのは～光と影の二つの心～

カケルの中に宿る人格。プロローグの経緯からして、何かの戦いによって負傷し、まだ母のお腹にいる胎児、のちにカケルとなるその少年に呼ばれ宿った。色々とカケルに教えるが、カケルのお金にう

るさいところは少々呆れている。今後カイの正体などが気になる。

直人「次回、九話『闇の断片　増殖と退化（後編）ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！』

蒼天外伝「英雄の夢～Ｐｒｅｓｅｎｔ　ｏｆ　ｇｏｄｄｅｓｓ～」（前書き）

今回はＵ．Ｔ先生からの特別リクエストです。かなり崩壊してるので、その辺を考慮して読んでください。文句は受け付けません☆

では番外編スタート♪

蒼天外伝「英雄の夢～Ｐｒｅｓｅｎｔ　ｏｆ　ｇｏｄｄｅｓｓ～」

今日は管理外世界へと足を運ぶことになった。それというのも「女神の贈り物」と呼ばれる古代遺物（ロストロギア）を取りに、それが置いてあるという遺跡に向ったからだ。

「女神の贈り物・・・ねぇ」

「とても神秘的な名前ですね」

その概要は異常なまでの魔力増幅をもたらすらしい。そして無限書庫のデータでは、それは強者を引き寄せるのだそうだ。

「強者を引き寄せる・・・どんなロストロギアなんだ？」

「主も強者の一人では？」

「さあな。っと、着いた」

俺は管理外世界へ着くと、遺跡へと向った。遺跡まではかなりの距離で、人はいない無人の星だ。性格には滅んだ星らしい。廃墟と化した街には、無数の骨などが転がっている。

「さてと、遺跡は・・・あれか？」

街の遠くにそびえ立つ塔。

『あそこから巨大な魔力を感知しました』

「そっか、じゃあいこう」

「主、待ってください」

こうして俺とマリカは塔へと向った。

塔はあまり大きいものではない。東京タワーより小さいか？

「一番上か、一気に飛んだほうが楽かな」

俺はそのまま上へと飛び、屋上へと着地した。そこには神々しく光る球体があった。屋根はおそらく風化して壊れてしまったのだろう。

「これが『女神の贈り物』？」

「のようですね」

すると突然、空中より斬撃が飛来した。

「うわぁ！」

「きゃあ！？」

メシアで何とか耐える。なんだ、今の威力は。すると今度は誰かが着地した。

「誰だ！？」

「私は星に選ばれ者・・・」

そこにいたのは銀髪の長い髪の男。黒いコートを着て、手には長い太刀を持っている。

「星に、選ばれし者？」

「主、あの人、危険です・・・」

マリカが怯えている。確かに、只ならぬ雰囲気だ。その殺気、只者じゃない。

「俺は時空管理局嘱託魔導士、井上直人。お前は何者だ？」

「我が名はセフィロス・・・ここにある魔力の源、もらっていく。私が約束の地へと行くために」

「悪いが、そうはさせない。あんたを拘束させてもらう」

「出来るかな？」

セフィロスが消える。速い！

「ぐっ！」

「ほぅ・・・」

メシアと太刀が交わる。何度か交錯して火花が散り、互いに距離を取る。こいつ、強い！

「マリカ！来い！」

「はい主！英雄の力、見せてあげましょう！」

「「ユニゾン・イン！」」

俺はユニゾンして、改めてメシアを構える。

「ほぅ、英雄か・・・」

「だったらなんだ・・・」

俺が言うと、セフィロスはかすかに笑っていた。その笑い方は何かを小馬鹿にするような笑みだ。

「英雄など、所詮は人が作り出した虚像に過ぎん」

「・・・その英雄の力、試してみるか？」

普段は英雄と呼ばれると何か抵抗がある。だが、今は何故かそうは思わなかった。

「おもしろい、来い」

「メシア！リミットブレイク！」

『リミットブレイク！』

リミットブレイクによって甲冑とメシアが変わり、俺はそのままセフィロスに斬りかかる。

「はぁっ！」

「ふん・・・！」

剣が激突する。しかし、セフィロスはその太刀を片手で扱い、捌く。

「かわせるか？」

「何！？」

何回もの斬撃が現れる。そんな馬鹿な！

「ここだ・・・」

渾身の一振りを受け、俺は吹き飛ばされる。

「ぐぅっ・・・！」

「愚かな・・・」

今度は俺の周囲に黒い魔力弾が現れる。これはまずい！

「くっ！」

何とか避けるも、セフィロスの攻撃が来る。

「はっ！いい顔だ・・・」

「ぐうぅっ！」

さらに斬撃をくらい、吹き飛ばされる。なんとか空中で体制を立て直し、メシアを構えなおす。

「ぐっく・・・・」

「その程度で英雄を名乗るか・・・・愚かだな」

「まるで・・・英雄だった・・・・・ような、口振りだな・・・・」

「さあ、どうだろうな。人は英雄を求める。力があれば、英雄は誰でもなる」

セフィロスの言葉が、俺は何故か許せない。俺はメシアを持ち、ブレイブスワローを掲げる。

「ブレイブスワロー・・・本気で行くぞ・・・！」

『了解です、マイマスター！』

「デバイス複合！」

メシアとブレイブスワローが一つとなり、俺の背には白い翼が生える。

「ほぅ・・・お前もモンスターか」

「モンスター？」

俺が疑問を持つ。今まで天使と呼ばれたことはあったが、怪物（モンスター）と呼ばれたのは初めてだ。

「ふっ・・・私も同じだ」

「なっ！？」

セフィロスの背中にも黒い翼が生える。だがあいつの太刀はデバイスじゃない。特殊な魔法も使ってない。なんなんだ・・・コイツ！

「なんだ、その翼・・・！」

「ふっ、これが星に選ばれた者の・・・・・力だ！」

一気にセフィロスが距離を詰める。

「ぐっ！はぁっ！」

「どうだ？英雄・・・」

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「舞え・・・！」

「蒼天・虚空雷閃！」

互いの斬撃がぶつかり合う。

「はあぁぁぁぁぁ！！」

「斬る・・・！」

互いの刃が再び交わり、火花が飛び散る。それと同時に、衝撃波が当たり一帯に広がった。

「くっ！」

「ぬっ！」

互いに屋上から吹き飛び、空中で静止する。あいつ、空も飛べるのか！

「お前も、ある意味人形だな」

「なんだと？」

「お前は組織、そして民衆の人形だ」

「どういう意味だ」

俺はセフィロスを睨みつける。しかしセフィロスは構わず言葉を続けた。

「貴様は時空管理局という組織の命でここに来たのだろう。そしてその英雄と呼ばれることで、お前はここに独りで送り出された。民衆に英雄と呼ばれたことでな・・・・」

「っ！」

「与えられることだけに喜んで飛びつく・・・・貴様は英雄ではない。人に操られた人形だ」

「黙れ！」

俺はメシアスワローを強く握り、セフィロスに斬りかかる。

「ふっ・・・違うというのなら、なぜそうも強く否定する？」

「くっ！」

「それは貴様も心のどこかでそう思っている証拠ではないか」

セフィロスが俺の剣を払うようにして振る。俺は続けざまに連続でメシアスワローを振る。

「自分の意思もない愚かな人形ならば・・・・・・ここで消え去れ！」

「うわぁ！」

俺はセフィロスの攻撃を受け、そのまま塔の屋上に叩きつけられた。

「ぐっ・・・うぅ・・・」

「（主！主！しっかりしてください！主！）」

マリカの声が小さくなってる。やばい、意識が。気を失う寸前、女神の贈り物が輝いた気がした。

気がつくと、そこは黒い何もない空間にいた。目を開けると、女性が俺のことを呼んでいた。

「もしもーし」

「え？」

「よお」

そこには黒い髪をした男と、茶髪の女性が立っていた。

「誰？」

「俺か？俺ザックス」

「私はエアリス」

「ここはどこだ？」

俺は辺りを見渡す。何もない、黒い空間。その広がっている闇の中、俺とザックスと名乗る男、そしてエアリスと名乗る女性だけが立っている。そういえばここ、どっかで見たような・・・・・

「ああ、ここ？ここはそうだなあの世とこの世の境ってやつだな」

「そう、なのか・・・・」

「女神の贈り物。あれが私たちとあなたを引き寄せたの」

女神の贈り物・・・あの古代遺物が？

「セフィロスがああなっちまったのは、俺のせいでもある。」

「え？」

「セフィロスも英雄だった。だからこそ、あなたをあそこまで言える。」

「そう、なのか・・・」

英雄と呼ばれた男・・・だからあそこまで強いのか・・・

「そう落ち込むなって！お前はまだ戦えるだろ？」

「だけど・・・」

「そうだな、お前さ、夢ってあるか？」

「夢？」

「ああ、俺からのアドバイスだ。英雄になるなら、英雄でいたいなら、夢を持つんだ」

ザックスが笑顔で言い、膝を着いていた俺に手を差し伸べる。

「夢・・・」

「ああ、そうすれば、お前は誰よりも強い英雄さ。」

「あなたに、夢はある？」

「俺の夢・・・俺の夢は・・・」

もう随分前、大切な人との約束を思い出す。

「俺の夢は、大切な人を守る騎士になることだ・・・」

「いい夢だ」

「ほんと」

俺が立ち上がると、扉が出来た。

「行けよ。行って思い知らせてやれ。夢を持った英雄が、どれほどのものかさ。」

「がんばってね。私たちも見守っているから」

「ああ、ありがとザックス、エアリス。忘れない、二人のこと」

「おう、またな！」

「じゃあね」

こうして、俺は扉をくぐった。

「さあ、星に還るがいい」

俺は目を覚まし、セフィロスの一撃を避けた。

「何・・・？」

「わかった・・・お前がそこまで英雄を貶す理由が・・・・・」

「ほぅ・・・」

「お前は英雄が怖いんだ・・・だからそれを恐れ、軽蔑し、消し去ろうとする」

「・・・・・・・・・・・・・」

セフィロスの表情が若干変化する。そして太刀を構えた。

「ならば、お前はなんだ?人形以外の何がある」

「確かに俺は人から呼ばれるだけの英雄かもしれない・・・・でもそれで、その英雄という名で人が守れるのなら・・・・」

俺は一層メシアスワローを強く握った。

「俺は英雄になってやる!」

「ふっ、人形風情が・・・!」

「俺は迷わない!みんなを守るためなら!俺は自分の意思で戦う!守り通す!」

『ロードカートリッジ!』

「蒼天・蒼雷一閃!」

「斬る!消え去れ!」

互いの剣が通り抜け、静寂が訪れた。突如、俺の頬に切り傷が入った。

「っ！」

「ふっ・・・・・・・・っ！」

セフィロスは肩を抑え、膝を着いた。

「なる、ほどな・・・今日は引くとしよう。だが忘れるな・・・・遠くないいつか、私はお前の所に必ず舞い戻ってやろう・・・」

セフィロスが飛び、次元反応が発生した。

「なっ！待て！」

「忘れるな？英雄が人々の作り出した虚像であることを・・・・・・」

こうして、セフィロスは消えていった。

「主、怪我は・・・」

「ああ、大丈夫。それより、はやく女神の贈り物を持って帰ろう」

俺は女神の贈り物に封印処理を施し、六課へと帰っていった。

セフィロスｓｉｄｅ

ふっ、今日は面白いものだな。

「あら、笑うなんて珍しいわね」

「プレシアか・・・なに、面白いことがあっただけだ。それより、ジュエルシードはどうなっている」

「フェイトが持ってくる。時空管理局が迫ってるし、時間もないわ」

「そうか・・・ならば私の人形を動かさねばな」

クラウドよ・・・お前と似た男のように、あがいて見せてくれよ?

「そういえばあなた、どこに行っていたの?」

「ふっ、少し無理をして強い魔力を追ったら、平行世界のどこかに辿り着いた。それだけだ」

「そう、あなたに不可能はなさそうね・・・」

私はその言葉を無視し、外へと向う。

「どこへ?」

「人形の様子を見にな・・・」

「そう、頼んだわよ、セフィロス」

精々利用させてくれよ?私が約束の地へ行くためにな・・・

直人ｓｉｄｅ

「ただいまー」

「あ！パパ！おかえりなさい！」

「お帰り直人君・・・って、どうしたのその傷！」

「い、いそいで医務室に・・・」

「せや、ひどい怪我、何があったん？」

「大丈夫だよ、ひどい箇所はカナリアに直してもらったから」

俺が言うが、３人は止まらない。

「いいから早く！」

「あ、おい！」

このまま医務室へと連行された。そして夜。全員でベッドに入った。

「あのさ、みんな・・・・」

「なあに？」

「俺、英雄なのかな・・・？」

「どうしたのいきなり？」

なのはたちが不思議そうに首を傾げる。

「いつもは英雄じゃない言うのに」

「今日色々あって、古代遺物を狙った男に、英雄は人間が作り出した虚像だって言われたんだ。確かに人からは英雄とか言われてるけど、俺は本当にそう呼ばれるべきなのかなって・・・・」

「私は直人君は英雄だと思ってるよ。」

「なのは・・・」

「だって、私たちを救ってくれて、世界まで救ってくれた」

「そうだよ直人。直人は私たちの英雄で、大切な人」

「うちらの英雄は直人君。その事実は絶対に動かへん」

「パパはえいゆう！」

「主以外、英雄はゼオンくらいです」

「みんな・・・」

みんな温かいの言葉が嬉しかった。

「直人君は世界を救って、私たちを守ってくれる英雄だよ。高町なのはが保障します」

「フェイト・T・ハラオウンもだよ？」

「八神はやてだって認めるで」

「ヴィヴィオもー！」

「私、マリカもですよ」

みんなが笑顔でいい、みんなで笑った。そしてしばらくしてみんなが眠りについた。俺は一人、天井を見上げていた。

（そうだ・・・俺はみんなを守るんだ。そして、そのためなら英雄になってやるさ。そうだよな、ザックス、エアリス・・・）

俺もいつしか闇に落ちた。

蒼天外伝「英雄の夢～Ｐｒｅｓｅｎｔ　ｏｆ　ｇｏｄｄｅｓｓ～」（後書き）

今回は魔法少女リリカルなのは～片翼の天使が導いた世界～の世界とのコラボです。先生から直人ＶＳセフィロスが見たいということで書きました。

一応戦闘中のセリフはディシディアです。色々悩んで書いた結果こうなりました。

一応補足ですが、セフィロスが約束の地へいくために次元世界を超えたら平行世界へ飛び、直人と出会ってしまったということです。矛盾もありますが突っ込まないでくれると幸いです。

Ｐｒｅｓｅｎｔ　ｏｆ　ｇｏｄｄｅｓｓは直訳で「女神の贈り物」なんですけど、間違ってたらコメントしてくれると嬉しいです。

それでわｗ

コラボ作品

魔法少女リリカルなのは～片翼の天使が導いた世界～

まだまだ、リリカルの二次作、クロス作のコラボ依頼、お待ちしています！

第九話「闇の断片　増殖と退化（後編）」（前書き）

こんかいでゲームネタは終わりです。意外な結末と、その理由は後書きでどうぞ。
あと沢山の応募感謝です。近日中に検討します。

では本編どうぞｗ

第九話「闇の断片　増殖と退化（後編）」

マテリアルの3人が目を覚ますのはそう時間の掛かることではなく、ものの数分で目を覚ました。で、昼食を取り終えると、雷刃の襲撃者がとんでもない事を言い出した。

「ねえ、外に遊びに行こうよ」

「え？」

「いい考えですね。私もこの世界の街に行ってみたいです」

「そうだな、我らはこの世界をよく知らぬ」

「それは何か？俺に街で案内しろと？」

「「「そのとおり」」」

えー・・・超が付くほど面倒くさいんだけど。で、そんなことを言い出せば・・・

「ヴィヴィオも行く！」

「私も！私も行くよ！」

「私も連れてって！」

「うちも！」

当然こうなる。というか、予測の範囲内だけどさ・・・・

「おいゼオン、まさか逃げようなんて思うなよ?」

「俺はこれから仕事がある」

「ざけんな・・・俺一人で七人も見れない」

「じゃああたしたちも行くわ。ゼオン、行くわよ」

「おいアリサ・・・」

アリサの言葉に、ゼオンが焦る。こいつが焦ってるの初めて見たな。

「そうだよ、どうせなら有給使っちゃおう?」

「すずかまで・・・」

こうして、全員でクラナガンへと向うこととなった。当然仕事はあるのだが、ヴォルケンリッターのみんなと、フォワードがなんとかすると言ってくれた。大丈夫か?あの書類の山。

町に出ると、とりあえずなのはたちがべったりくっ付いている。当然制服というのもまずいので、みんな普通の私服になっている。なのはは白とピンクを基調とした服。フェイトは白いシャツに黒い上着。なんでも、なのはと友達になった時に来ていた服なんだとか。それに半ズボン。はやては白いパーカーとピンクの半ズボンだ。それに対して星光の殲滅者は紫を基調とする服に、青いスカートで、雷刃の襲撃者は黒いシャツと白い上着。簡単に言うとフェイトと相

対している。闇を統べる王は紫と赤を基調としたワンピースだ。で、またしてもこの6人、現在揉めている。

「そろそろ交代してください」

「駄目！まだ約束の時間じゃないもん！」

「そろそろそこを降りろ！そこは僕が乗る場所だ！」

「だ、だめ！まだ時間ある！」

「塵芥、その手を離せ」

「いやや！」

解説すると、なのは、はやてがそれぞれ俺の片手に両手で必死に絡んでいる。で、フェイトは雷刃に対抗してか、肩車をねだられた。フェイトってこんなキャラだったろうか。そしてその遠くで、ヴィヴィオがマリカと歩いている。

「ママ達いいなー・・・」

「ヴィヴィオ、今日はママ達が元に戻るためです。我慢しましょう。ママ達が戻ってから、思い切り甘えればいいんですから」

「うん、マリカお姉ちゃん」

「それにしても、相変わらずなのはたちはべったりねー」

「本当だね、あれは事情を知らない人が見たらすごい光景だよね」

「お前ら、人のことを言えたことではないだろう」

ゼオンは呆れながらため息をつく。それというのも、アリサとすずかが片方ずつ手を持って絡んでいる。そして当然ながら、周囲から殺気を浴びている。もちろん俺もだが。こいつら、俺たちの身にもなって欲しい・・・

「あ！あれはなんだ！？」

雷刃が指差す先にあるのはアイス屋だ。まあ、知らないのも無理ないのかな。

「ん？ああ、アイス屋さんだね」

「アイスとはなんですか？」

「うーん・・・氷に味が付いたお菓子って言えばいいかな」

「我は食べてみたいぞ！」

「はいはい・・・」

俺がアイス屋さんの前に立つと、なのはたちが必死に叫ぶ。

「直人君！私も！私もー！」

「直人、私にも買って欲しいな・・・」

「うちもこうて？」

お前ら、給料もらってんだろうが・・・

「パパ！ヴィヴィオも！」

「もう何でも良いや。すいません、アイス８つください」

「ゼオン、当然買ってくれるわよね？」

「ゼオンさん、私もアイス食べたいです」

「はぁ・・・」

こうして苦労する男二人だった。

この後はデパートへ行くわけだが。その道中ではマテリアルの３人がさっきのなのはたちと入れ替わっている。

「沢山人がいますね・・・」

「ん？まあ今日は日曜日だし・・・買い物客も多いんだろうね」

「そうなのか。で、あれはなんだ？あそこが人の出入りが一番多いぞ」

「デパート・・・大抵のものは何でも揃ってる場所だよ。」

「じゃあさっきのアイスも！？」

雷刃はどうやらアイスを気に入ったようだな。

「じゃあ入るか？丁度欲しいものもあったしな・・・」

こうしてデパートへとみんなで入る。で、こうなるとみんな偉い方向へ行ったりする。

「ほう、これは面白いな」

統べる王、お前おもちゃばっかりいじるな・・・

「これ、買ってはいただけませんか？」

それいくらするんだよ・・・星光、それってミッドチルダの歴史書か。

「ねえ、アイスってどこで売ってるんだー？」

雷刃、お前はアイスから頭離せ。

こいつら闇の欠片とか言ってるわりには本当に子供だ。その辺にいる子供と、本当に変わりない。

「わかったわかった、みんな順番にな？」

「「は～い！」」

「主、多分なのはさん達の子供が生まれたらこれよりすごいと思いますよ？」

「・・・・・・・・・それは今言うな」

この先不安になるから。まあ、こんな騒動もありながら、なのはたちとデパートを歩く。

「あ、この紅茶いい匂い」

「本当だな、アップルティーか」

「千草は紅茶を入れるのが上手いですよね」

「ああ、姉さんが入れるのは本当においしい」

姉さんとも最近会ってないなぁ・・・

「本当ですね、いい匂いです」

「星光も紅茶が好きか？」

「はい、記憶の断片を受け継いでいるためか、こういった茶の葉の匂いは好きです」

「そっか、んじゃこれと、あとはアッサムでも買ってくか」

こうして日本円で３０００円の紅茶購入。意外と安かったな。

「むー・・・」

「うー・・・」

統べる王とヴィヴィオが二人して何かと睨めっこしてる。

「二人とも、どうした？」

「パパ、ハムスターさんいないよ？」

そこはペットショップ。夜行性だからか、ハムスターたちはごそごそと巣の奥で寝ている。

「ああ、ハムスターは夜に起きるから、寝てるんじゃないか？」

「そっかー・・・」

「でもヴィヴィオ、ヴィヴィオはちゃんと夜に寝るもんな」

「うん！」

ヴィヴィオは頷いているが、統べる王は別のものに夢中だ。

「ぬ・・・小動物なのに、なんだこのひきつけるものは・・・」

要するに犬が可愛いってことだろうが。素直じゃないなまったく。

「ほら、行くぞ？統べる王」

「う、うむ・・・でももう少し・・・」

「わかったわかった。ちょっと待ってろ」

俺は隣のおもちゃ屋から犬のぬいぐるみを買って渡す。

「本物は買ってあげられないけど、これで我慢しろ」

「我はこんなもの欲しくはない！」

「んじゃヴィヴィオ、いる？」

「いいの！？」

ヴィヴィオがキラキラした目で喜ぶが、それを耐えかねた統べる王が叫ぶ。

「だ、駄目だ！これは我のだ！」

「えー？」

ヴィヴィオは不満そうに声を上げるが、統べる王はそれを無視して気持ち良さそうにそのぬいぐるみをすりすりとしていた。

「ねえ直人君、雷刃さんは？」

「え？さっきまでその辺うろついてただろ？」

「それが、どこか行ったみたいで・・・」

「探しても見あたらへんねん」

おっかしいなぁ・・・さっきまで色々見て騒いでいたのに。すると、アナウンスが鳴り響く。

――――ピンポンパンポーン

『お客様に、迷子のお知らせです』

「迷子？」

まさか・・・

『機動六課からおこしの、井上直人様、機動六課からおこしの井上直人様、雷刃ちゃん９歳を、迷子センターにて保護しております。至急迷子センターまでお越しください』

それを聞いた瞬間、全員がずっこけた。あいつ、やっぱり迷子になってたのかよ・・・

「まったく、闇のマテリアルともあろう者が情けない・・・」

「フェイトちゃん、ちゃんと見てなきゃ・・・」

「え？あたしのせい！？」

「せやかてあの子はフェイトちゃんから生まれたんやで？」

なんて会話の後、統べる王がこんなことを言い出す。

「まあ、あいつは馬鹿だから仕方あるまい」

『なるほど』

何故か全員で納得していた。

それからすぐに迷子センターに行くと、雷刃が大泣きで飛びついてきた。

「うわあああああああああああああん！！！！！！！！！怖かったよおおおお！！！」

「あーはいはい、わかったから泣かない泣かない。」

雷刃は手にキャンデーを持ちながら泣きじゃくる。

「うっぐ、ひっぐ・・・」

「また後でアイス買ってあげるから、もう離れるなよ？」

「うん・・・」

まったく、今日は厄日だ・・・

「お騒がせしました。ほら、行くぞ・・・」

こうしてデパ地下へと訪れる。というのも、雷刃がアイスを食べたいと言って聞かないからだ。なのはたちの話だと、ここはとてもおいしいものが多いという。

「うわ、高い・・・」

値段は数千円で一個のロールケーキやら、５００円以上で普通のサイズのケーキが売っていた。

「どうせならアイスじゃなくて他のお菓子にするか？」

「アイスがいい・・・」

「私はこのケーキが食べてみたいです」

「我はこの魚の形の菓子がいい！」

お前ら、値段を見てから言え・・・

「じゃあ私はこれ！」

「私これね、直人」

「うちはこれや！」

なのはたちはなのはたちで高いやつを選ぶな。

「ゼオン、あたしこのケーキね」

「私はこの羊羹がいいです」

「おい、高いだろ・・・」

多分今日は俺とゼオンが一番出費が激しいかもな・・・

そして夕方。みんな歩きつかれたのか、眠っている。ヴィヴィオはマリカが抱いているが、マテリアル3人組は俺がおんぶしている。さらにゼオンはなのはを、アリサはフェイトを、すずかははやてを抱いている。

「まったく、こういうところは子供か・・・・」

「直人・・・」

「なんだ?」

「そのマテリアル3人、今日こいつらが満足したからには消えるのだろうか?」

「どうだろうな・・・」

話を聞く限りでは、もともとこの子達の目的は闇の書の復活だったのだとか。しかし、もう闇の書は存在しない。今回彼女たちが生まれたのはカオスの闇の影響だったからだ。この子達が消える理由は無い。本来なら、現れるはずもなかったのだ。

「この子たちにとっては、小さな夢だった・・・消滅してしまえばそうなんだろう。でも・・・・」

今日一日、この3人は本当に子供のように楽しそうに過ごしていた。この子達は本当に消えるべきなのだろうか。

「直人さん」

「ん?星光、起きたのか?」

ん?名前を呼ばれたのは初めてだな。

「はい・・・私たちは恐らく長い夢を見ていたのです。だから、あなたたちは何も気にすることはありません。」

「だがな・・・・」

「私も、雷刃も、王も、今日一日楽しい日々を送ることが出来た。闇である私たちがそんなことを出来るなんて思ってもいない。闇ではない安らぎ・・・それを私たちは知ったのですから」

「星光・・・」

「だからこの二人の分も言います。今日はありがとうございました」

「・・・・・どういたしまして」

俺はただ一言、そう言った。

六課に帰ると、オフィスでみんなが死屍累々となっていた。なので、デパートで買ったケーキやら何やらを出した。するとさすがは女性か、みんなが見事に復活を果たした。なんていうか、甘いものが疲れを癒すのは本当のことらしい。マテリアルの3人も、嬉しそうにケーキやお茶を飲んでいる。なのはたちも、どうやら満足したようだ。で、就寝時間になった。

「なんでこうなるんだ?」

「私たちはいつもだもん！」

「でも・・・」

「なんであんたたちまでおんねん！」

そう、マテリアル組はご丁寧にパジャマまで着て、枕を持って俺に密着している。

「別に良いではないですか」

「そうだそうだ！お前たちだけいい想いなんて駄目に決まってるだろ！」

「そのとおりだ雷刃！我らにも権利はある！」

「うー・・・そこヴィヴィオの寝るところなのに・・・」

「ヴィヴィオ、抑えましょう」

こうして9人が同じベッドに寝るということになった。ま、いいか・・・

なのはｓｉｄｅ

やっと一日が終わった。今日はこんな体験ができて楽しかった。満足だなぁ・・・。あ、直人君はもう寝てる。今日は無理させちゃったからなぁ・・・

「オリジナルの3人、起きてらっしゃいますか？」

「「「え？」」」

「そのまま聞いてください」

星光さんの声が聞こえた。どこか寂しそうな感じだった。

「今日は、願いは叶ったでしょうか？」

「・・・そうだね、楽しかったよ？」

「そうですか・・・そうなると、私たちもじきに消えるでしょう」

「え！？」

思わず声を上げてしまった。フェイトちゃんとはやてちゃんも驚いている。

「僕たちはもともと闇のマテリアルだ。お前たちの願いが叶えば、消えるのも当然だ」

「我らも、本来なら闇の書の復活を望まなければならなかった・・・闇という安らぎを手に入れるために」

「でも違いました。闇の安らぎではなく、この方の優しさの安らぎ・・・光の安らぎを知りました」

「我らに光をくれた、唯一の存在だ」

3人は声しか聞こえないけど、とても嬉しそうな声だった。笑ってる？

「だから、このひと時の夢を忘れずに、眠ります」

「「おやすみ」」

それっきり、3人の声は聞こえなかった。私も小さくおやすみと呟く。そうか、この子達は可能性だったんだ。闇に取り残され、「孤独を受け入れてしまった高町なのは」。私やはやてちゃんたちに合うことの無い「絶望に染まったフェイト・テスタロッサ」。悲しみに染まったことで「闇を受け入れてしまった八神はやて」。そんな3人だったんだ。でも、直人君の出会いが私を変えて、私との出会いでフェイトちゃんが変わって、私とフェイトちゃんが出会うことではやてちゃんを闇から救った。きっとこの3人は、直人君がいない世界の私たちだったんだと思う。だからもう一人の私、もう一人のフェイトちゃん、もう一人のはやてちゃん、おやすみなさい。この先も、いい夢を見てね？こうして、私も静かに眠ることにした。

直人ｓｉｄｅ

次の日、なのはたちの体は元に戻った。戻ったのはよしとしよう。だが・・・

「星光、お前たちは消えるんじゃなかったのか？」

マテリアル3人組は特に異常もなくそこにいた。もちろんそのままの姿で。

「わかりません、もしかしたらこの世界の闇の何かが私たちを留ま

らせたのかも」

「というか、変な夢を見た」

「夢？」

「うむ、目が紅と翠の女が『あなたたちは新たな人生を歩みなさい』などとほざいておったぞ」

「紅に、翠・・・？」

ま、まさか・・・

「ブレイブスワロー？」

『確証はありませんが、３人の取り込んだカオスの残滓と一緒に、オリヴィエの残滓も取り込み、体内の維持システムが何らかの形で確立してしまったのでは？』

「そうなると・・・？」

『普通の人間と変わりない・・・ヴィヴィオと同じような形となったのでしょう』

「何じゃそりゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

こうして、新たに厄介ごとが増えた機動六課だった。

第九話「闇の断片　増殖と退化（後編）」（後書き）

直人「・・・・・・・・・」

秋風「その、なんだ・・・すまん」

直人「また、厄介ごとが・・・」

秋風「えー、今日は主人公壊れたので、解説します。」

直人「ああ・・・また、厄介ごとが・・・」

疑問1「なぜ今回3人があらわれたのか?」

秋風「3人の元はご存知、闇の欠片。マテリアルです。それがカオスの負を取り込んだため、その姿を現したのです。ちなみに姿は当時の蒐集および、はやてに限り本人が所有者だった時代が模索され、構成されました」

疑問2「どうしてなのはたちの願いが叶っても3人は消滅を免れたか?」

秋風「今回いろいろと考えまして、第二部の『蒼天の騎士伝説』の話の中で、聖王の力がミッドに振りそそいだのは覚えているでしょうか?それはオリヴィエの聖王の力、すなわち浄化の力でもあり、それの一つ一つに、わずかなオリヴィエの意思が存在するわけです。それをカオスの力と一緒に取り込み、3人で行動していたことで、数時間オリヴィエの意思が存在したということです。そしてオリヴィエの力が闇の欠片のプログラムを制御し、3人の消滅を取りやめ

たというわけです」

疑問３「３人の今後」
今後も変わらず登場します。ご期待ください。というか、この３人強すぎです。

疑問４「カオスと闇の欠片の関連性」
同じ闇であること、そして負を吸収する闇の欠片の特性が今回のことを引き起こしたと思われます。

秋風「こんなところだな」

直人「もうしょうがない・・・」

秋風「まあ、がんばれよ」

直人「次回、第十話『訪れた厄災』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十話「訪れた厄災」（前書き）

今回からちょっとシリアスに入ります。
んで、あの3人の名前も考えました。意味などは後書きでどうぞw

では本編どうぞ！

第十話「訪れた厄災」

闇の欠片の3人の騒動から約一週間。とりあえずというか、必然的に、俺はこの3人を引き取ることとなった。本来であれば施設などに行くのだが、3人はそれを拒んだ。というか、そんな施設潰してやるなどと言い出したため、仕方なく3人を引き取ることになった。そんな3人はというと・・・

「父上、早く今日も教導を教えてください」

「待て待て！お前は昨日やっただろ！今日は僕がパパに教えてもらうんだ！」

「おい、今日は我が父君に教えてもらう日だぞ」

お前ら、お願いだからそこでデバイスを構えようとするな。危ないから。

「シエル、ルミノ、セレス、いい加減にしろ。教導の順番、たしか今日はセレスだっただろう」

「ふふっ、父君はよくわかっている。」

まあ、ここで疑問に思うだろう。誰のこと?と。というのも、今から数日前。

「なあ、星光」

「なんでしょうか？」

「お前らは名前ってないのか？」

「ありませんね、なにぶん闇の書のマテリアルとして生み出されただけの存在ですから」

そう、これだ。これが一番の問題だった。保護責任者になる以上、3人には名前が必要になる。自分たちの名前がないため、本人たちは呼称で呼び合ったり、呼称の一部で「星光」とか「雷刃」とか「王」とか呼んでいる。これでは日常生活でも色々と困る。

「なあなのは、名前ってやはり考えたほうがいいのかな」

「そうだよね、私たちもなんと言うか呼びにくいし」

「僕は気にしないけど」

「あなたが気にしなくても、私たちが困るんだよ？雷刃」

フェイトが言うと、雷刃はうーん、と首を捻る。どうやらよくわかっていないようだ。

「ならばお前がつけてくれ、名前を」

「え、俺？」

「それはいい考えです、王」

「そうだな、考えてよ！」

いきなりの事態に驚く。名前ねぇ・・・。散々迷って数時間、なんとか3人に合うであろう名前をつけることにした。

「まず、星光」

「はい」

「お前の名前は今日から『シエル』だ」

「シエル、ですか？」

「ああ、意味は『空』とか、『天空』なのはのイメージと照らし合わせてみた」

とりあえず色々考えたけど、なのはのイメージはやはり空なんだよな。

「次、雷刃」

「僕はどんな名前？」

「名前は『ルミノ』」

「ルミノ？」

「意味は『輝き』雷を使うフェイトとお前のイメージだ」

「ルミノ・・・ルミノかぁ・・・」

雷や稲妻だとあまり女の子らしくない名前だからな・・・

「で、最後は王」

「我はどんな名前だ？」

「少しシエルと意味が似てるけど、お前の名前は『セレス』だ」

「セレス？」

「そう、本来の読みは「セレスティア」・・・『天上の神』『天を統べる』という意味。闇、そして夜天の王のための名前だ」

「セレス・・・」

3人とも不思議な表情で自分の名前を復唱した。

「どうだ？気に入らないなら考え直すけど」

「いいえ、素晴らしい名前です。ありがとうございます」

「うん、ありがとう！」

「感謝しよう、名を与えてくれたことを」

3人とも嬉しそうに笑っていた。

「でもこうなると、直人君が名づけ親だね」

「そうだね、直人が保護責任者なわけだし」

この言葉に、シエルがとんでもない事を言い出す。

「では、直人さんは父上ということに？」

「ん・・・なんか流れからしてそうなるのか？」

「せやね、なんというか、また子供が増えてもうた感じ？」

「じゃあ僕はパパと呼ぶ！」

「では我は父君と呼ぼう」

こうして、３人の闇のマテリアルは名を得て、父を得たということになった。

「はぁ・・・・」

俺はテーブルでコーヒーを飲み、ため息をつく。ヴィヴィオ、エリオ、キャロは兄弟ができたと喜んで入る。だが、こうなると気苦労が多くなるのは俺だ。

「直人君♪」

「なのは・・・教導おつかれ」

「うん、直人君もお疲れ様。どう？シエルたちは」

「どうもこうも、最終的に三対一で戦ったり、体が滅茶苦茶だよ・・

・」

「あはは、お疲れ様。スバルたちもね、随分と強くなったの。今度模擬戦やらせてみようかな」

「やめとけ、フォワードにトラウマ作るだけだ」

そう、というか俺でもギリギリ引き分けたり勝ったりする相手に、フォワードが勝てるわけがない。

「にゃはは、まあ私たちが元だもんね」

「ああ、よくわかってるじゃないか。でも、シエルたちはシエルたち。なのはのコピーじゃない」

「うん、わかってる」

そんな話をしていると、放送が入った。

「井上直人さん、井上直人さん、部隊長室までおこしください」

「はやて、どうかしたのかな・・・」

「さあ」

俺はそこでなのはと別れ、部隊長室に向うことにした。

「はやて、来たぞ?」

「あ、来た。ちょう頼みごとがあるんよ」

「頼みごと？」

「うん、実はな、シエル、ルミノ、セレスの歓迎会をしようかと思うんよ」

「いいんじゃないか？あいつらあれでも子供だしな」

「それでな？クラナガンのケーキ屋さんに予約したケーキを取りに行って欲しいんよ」

「なるほど了解。地図くれる？」

こうしてはやてから地図をもらい、部屋を出た。クラナガンでもなかなか有名なケーキ屋さん。予約ケーキ、デコレーション使用のショートケーキ３０個・・・多くないか？

「主、どうかしたんですか？」

「ん、マリカ。丁度よかったよ。これからクラナガンへ行くんだ。車で行くけど人手がいるから、来てくれるか？」

「はい、我が主」

こうしてマリカとクラナガンを目指すこととなった。

クラナガンに着くと、いつもどおり人がごった返している。うわ、やっぱりここは休日にくるもんじゃないな。っと、ケーキ屋は・・・

「主、あれじゃないですか？」

「ん、本当だ。あれだな」

ケーキ屋に着き、ケーキを購入。そのまま転送魔法で車の中に送った。

「さて、ケーキは買ったし、帰るか」

「主、どうせなら少しデートしてくださいよ」

「あのな・・・」

ま、たまにはいいか。夕食まで時間はあるし。

「どこ行きたい？」

「そうですね、ショッピングがいいです」

「はいはい・・・」

こうして俺とマリカはクラナガンを歩く。マリカは俺と離れないように腕をしっかりと持っている。

「ふふふ、主と歩くのはやっぱり楽しいです」

「あのな・・・」

また視線が痛い。殺気が・・・

――――ドオォォォン！！！

「え！？」

「爆発！？」

こんな街中で？そもそも、何故？新手のテロか！？

「こちら直人！はやて、聞こえるか！」

『どうしたん！？急に緊急回線なんて・・・』

「クラナガンで謎の爆発を確認した！行動する許可が欲しい」

『・・・！うん、わかった！後でなのはちゃんたちにも出撃してもらう！無理したらあかんで！？』

「わかってる。蒼天の騎士、井上直人！出撃する！」

通信を切り、メシアを起動させた。

「メシア、行くぞ！」

『はい、我が主！スタンバイレディ！』

騎士甲冑を纏うと、マリカと共に爆発現場へと向った。

爆発現場は何もない道路。幸い人が怪我をしている様子はない。その周囲には人がいない。あるのはクレーターだ。その中、煙が立っている。

「これじゃあ視界が悪い・・・」

「主！あれを！」

「あれは！？」

そこにいるのは一人の少女。そして数人の男女だ。あれはいったい！？

？？？ｓｉｄｅ

もう追っ手が・・・！

「くっくっく・・・やはりこの世界に来ていたか」

「もう逃がさないわよ？」

「おとなしく観念しなぁ！苦しむ死と絶望の死、選ばせてやるからよぉ！」

「うるさい！私はあの人に会うんだ！」

目の前の男と女たちがデバイスを構えた。まずい、こっちにはもう魔力も・・・

「そこまでだ！」

そこに、凛とした声が響き渡った。

直人ｓｉｄｅ

なんだこれ。どういう状況でこうなってるんだ？

「時空管理局機動六課所属の騎士、井上直人だ。市街地での魔法は使用禁止されている。おとなしくしてもらおうか」

「これはこれは・・・英雄ではありませんか」

「ほぅ、あれがな・・・」

「関係ねぇ！ぶっ飛ばしてやるぜぇ！」

男の一人が襲い掛かる。だが、遅い！

「はっ！」

「ぎゃひっ！？」

妙な手ごたえだ。浅いか・・・。男は回転し、同じ場所に着地した。

「あぶねえあぶねえ・・・」

「ほう、あれが英雄か」

「お前たち、何者だ？」

俺が聞くと、クレーターの近くにいた女の子がこちらに来た。

「あなたが、井上直人？」

「そうだ。」

「やっと、やっと会えた！」

少女が喜びの笑みを浮かべる。すると、３人組の女がデバイスから魔力弾を発射する。

「な！？」

「トランス！ルイーナ・アバルエ（鷹の翼）！」

少女が叫ぶと、背中に翼が生えた。そしてその魔導弾を弾く。

「貴様・・・邪魔だてをするか」

「悪いけど、直人は何があっても守る。それが私の存在意義」

「ふっ、なら始末はこいつらに任せ、退散するとしよう」

男が指を鳴らすと、その地面に黒い水たまりが出来た。そしてそこからライオンとも似つかぬ怪物が出現した。それも一体や二体ではない。数十体はいるだろう。あれは・・・！

「キメラ！？」

馬鹿な、あれは消滅したはず！

「では英雄、さらばだ」

「待て！お前らは何者だ！」

「我らは闇の使徒・・・・この世界の混沌を受け継ぐもの」

「闇の、使徒！？」

俺が言うと、男たちは転移魔法でいなくなってしまった。

「っ！逃げたか！」

「主！来ます！」

「ああ！行くぞマリカ！」

「「ユニゾン・イン！」」

マリカとユニゾンし、戦闘態勢をとった。すると、少女も戦闘をする気なのか、構えている。

「君は逃げろ」

「駄目だよ！私の使命は直人を守ることなんだ！」

「え！？」

「トランス！コル・ペディス！」

少女の手、足が狼の手足に変化した。それだけではない。四つん這いになり、ほとんどその形状は狼だ。

「君はいったい・・・」

「私はあなたを守るもの！そして、キメラを殲滅する者！」

少女が駆け出し、キメラを一撃で引き裂いた。さらに背後に迫ったキメラを回し蹴りで吹き飛ばした。
凄まじい戦闘力だ。

『主！ぼさっとしてないで！』

「あ、ああ！」

俺もキメラを斬り捨て、数を減らしていく。すると、少女がとんでもない事をしだした。

「テイク・オーバー！オムニーア・ファンドレ！」

少女の体が黒く光る。すると、弱っていたキメラのうちの一体が、それに吸い込まれる。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！」

「な！？」

キメラが少女に吸収された。今のはいったい！？

『主！前！』

「え！？」

別方向からキメラが襲い掛かる。速い！

「危ない！」

少女が飛び出し、俺をかばう。

「ああっ！」

少女はその場に倒れ伏した。くそ！

「リミットブレイク！」

『リミットブレイク！』

装甲を紅く染め上げ、俺はキメラたちに踊りかかる。

「紅蓮一閃！」

キメラを斬りながら、倒れる少女を守る。その数分の後、キメラを殲滅した。すると、キメラの欠片は少女の中へと消えた。

「この子は、いったい・・・・」

いったいなんなんだ！？

第十話「訪れた厄災」（後書き）

直人「さて、今回から新キャラが出てきたな」

秋風「ああ、紹介は次回だな」

直人「で、あのマテリアルたちの名前の解説しろよ」

秋風「了解。ま、星光の殲滅者のシエルはフランス語で『空』を表す。まあ、なにかとでてくる名前だけど、意味を考えてみました」

直人「雷刃は？」

秋風「ああ、あの子はルミノトンってフランス語で『輝き』って意味だ。」

直人「最後に王」

秋風「セレスの正式は『セレスティア』これはラテン語で『天上の神』『天の支配』とかを意味する」

直人「なんで王だけラテン語？」

秋風「しょうがないじゃん！考えるの大変だったんだぞ！？」

直人「はいはい・・・」

秋風「で、今後だが、シリアスをやりつつ、ほのぼのを混ぜていくつもりだ。」

直人「ほう」

秋風「たとえばヴィヴィオ主軸のストーリーとかな」

直人「ほう」

秋風「では今日はこの辺で」

直人「次回、第十一話『少女の名はアリス』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十一話「少女の名はアリス」（前書き）

はい、今回から新しく新キャラの正体が明らかに！

本編どうぞ！

第十一話「少女の名はアリス」

とりあえずあの騒動から2時間ほどが経過した。少女を連れて帰ってきた俺に待っていたのは3人の修羅と＋3人の黒い笑みだった。事情を説明し、今は医務室にいる。そして、シャマルさんが検査結果を持って入ってきた。

「どうでした?シャマルさん」

「ええ、その・・・この子は・・・」

「人ではない・・・ですか?」

俺の言葉に、その場にいたなのは、フェイト、はやても驚いていた。

「直人、どういう意味?」

「そのままの意味だ。でしょう?シャマルさん」

「ええ、直人君の言うとおりよ。この子、人間じゃないわ」

フェイトはその言葉に不信感を持っているようだ。まあ、仕方はないのだが。

「・・・実はな、この子さっき、キメラを取り込んだんだ」

「キメラを・・・取り込んだ?」

俺はメシアが記録した映像を見せる。

「これは・・・」

そう、その少女の手が漆黒の光を放ち、キメラを吸収していく姿。

「これだけじゃない」

翼に、爪・・・・明らかに魔法を使用していないその戦闘、そしてその能力。

「すごい・・・・ね」

「ああ、この子がどこから来て、何者なのか・・・聞く必要はある」

「この、3人は?」

「町で爆発を起こした連中だ。闇の使徒と名乗り、キメラを召喚していた。」

「キメラを・・・?」

わからないことだらけだ。いったい、何が起こっているんだろうか。

「う、うん・・・・」

すると、少女がゆっくりと目を開ける。

「気がついた・・・ようだな」

「ここ、どこ?」

「ここは時空管理局機動六課の隊舎だ」

「あ！直人！直人だ！」

「「「え！？」」」

突然少女が俺に抱きつく。少女は嬉しそうに笑っている。

「ちょ、ちょっと待て！」

俺は急いで少女を引き離した。

「お前、いったい？」

「私はアリス！アリスっていうの！」

アリス・・・どうやら名前のようだ。

「ゴホン・・・アリス、色々と聞くことがある。が、その前に・・・お前ら、デバイスしまえ」

なのはたちがデバイスをこちらに向けていたので、それを下げさせる。すると、アリスが一瞬にして消え、医務室にあったはさみを向けた。

「直人をいじめるな！」

「え・・・」

いじめるって・・・

「あ、あの・・・私たち本気でやったわけじゃ・・・」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い！直人を傷つけようとする奴はみんな私の敵だ！」

「落ち着け・・・」

なんなんだコイツの戦闘能力。俺が反応できなかったなんて・・・

「やだ！直人をいじめるなら・・・」

「落ち着けって言っている！」

言うことを聞かないアリスに、おもいきり拳骨を食らわせた。

「うぅ～・・・」

「ったく、とりあえずはさみは没収。話を聞かせろ。」

こうしてアリスの話を聞くことになった。

「まず最初の質問だ。お前はどうして追われていた？」

「私、直人に会うために世界を渡ってきたの。そしたらあいつらが追ってきたの。」

「あいつらは一体なんだ？」

「闇の使徒・・・そう名乗ってる。あいつらがカオス・レイを蘇らせた原因」

「なっ!?」

アリスの言葉に、俺たちは驚いた。アリスも嘘を言っているようではない。

「マラキアが復活させたんじゃないのか・・・・」

「マラキアは愚か者・・・闇の使徒にそそのかされて、カオス・レイを蘇らせた。」

「カオス・レイ・・・これの詳細は?」

「あれははるか昔に存在した混沌の魔王。聖王、覇王、冥王と並ぶ武人だった男。でも、闇に飲まれて、三人の王に封印された。」

覇王と冥王はわからないが、聖王はヴィヴィオのことだろう。そして、俺はこの質問をした。

「お前は、人間か?」

「私は、人間であり、人間じゃないの・・・私は、直人から生まれた」

「は!?」

またわけのわからないことを・・・

「詳しく教えてくれ」

「4年前のアルカディアでの戦い・・・・カオスのコピーと戦って、あなたが闇の衝撃波を受けた時に心の光が私に降り注いだの。だから私は人の形を得て生まれた」

「つまり、お前は・・・」

「うん、キメラ・・・それに近いもの」

やっぱり、そういうことか・・・

「じゃあ、あなたの爪や翼は・・・」

「キメラ特有の能力。その戦闘にあわせて体を作り変える。もともとカオスのキメラの材料は闇と悪意。普通のキメラは動物と動物。私は複数の動物と闇から生まれた」

段々話が見えてきたな。

「つまり、ゼオンが操られていたときの複数のキメラ、それとカオスの闇が合わさり闇のキメラができた。そして俺の蒼天龍斬波から流れる魔力で変異を起こしてお前が出来た。こういうことか?」

「大当たり!直人すごい!」

アリスは嬉しそうに笑う。

「じゃあ、次の質問だ。何故、俺を守ろうとする?」

「直人だけじゃない。ゼオンも守る。」

「何故だ？」

「人の未来、世界の未来・・・それを担う英雄を守る。それが私の使命。そしてキメラを消す。私は影の礎」

アリスが突然表情を変えて言う。なんともころころ表情が変わるものだ。

「はやて、どう思う？」

「うーん・・・まあ、話の筋は通ってるし嘘をついているようには見えへん。」

「だね、でもアリスちゃん、闇の使徒の目的は何？」

「あいつらはカオスを蘇らせるつもり。世界を闇に染める。それがあいつあらの目的だから」

だから闇の使徒・・・か

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そこはクラナガンから離れた森の奥地。そこには直人を襲った3人の姿があった。

「キメラたちは全滅か・・・」

「どうするのよ、アリスが井上直人のところに行ってしまったじゃない」

「どうせなら一気に潰しちまおうぜぇ！」

「やめておけ・・・」

その森の暗い闇から人影が現れる。その黒いマントで体を覆った男。
3人は片方の膝を着く。
「これはこれは・・・」

「余計なことは言わなくていい。今は派手に動くな」

「はい・・・・・」

男は言いながら頭を下げる。

「お前たちに次の指令を言い渡す。封印された『本物』のカオスを得るために現在散らばっている同胞たちに呼びかけろ」

「「「はっ！」」」

「そして世界を闇へと帰すのだ」

男はそう言って消えていった。

直人ｓｉｄｅ

「とりあえず、お前はこれからどうするつもりだ」

「うん、直人を守るよ」

「・・・・俺を守る・・・か」

「うん、守る。直人を敵から、闇から、そしてカオスから」

何故だろうか、この子の蒼と紅の目からはなにか不思議な感じがした。

「なのは、フェイト、はやて・・・俺はどうするべきだと思う？」

「うん・・・アリスちゃんがそう言っているならいいんじゃないかな？」

「そうだね、力になってくれるならいいと思うよ」

「せやね。うちらに協力する。その条件があるならアリスちゃんを六課に迎え入れるで」

「だそうだが？アリス」

俺が言うと、アリスは強く頷いた。

「うん！いいよ！」

軽いな、コイツ・・・

「まあいい、アリス、よろしくな」

「うん！そういえばあなたたちの名前知らない」
「私はなのは。高町なのはだよ」
「私はフェイト・Ｔ・ハラオウン」
「うちは八神はやてや」
「なのは、フェイト、はやて！うん！覚えた！」
アリスは無邪気に笑っていた。

話の後、食堂で夕食を取る事となった。その際、シエルたちがアリスを見つめ続ける。
「私になにかついてる？」
「いえ・・・あなたから強力な闇を感じるので」
「僕たちは闇には敏感だ」
「お前、何者だ？」
「私はアリス。直人を守るためにいるの」
「私はシエルと申します」
「僕はルミノだ」

「我はセレス」

そう自己紹介してから、全員が食事を再開していた。

「それにしても、アリスも食事はするのか」

「うん。動物であり、人型だから、一定量の水分や食事は必須。だからいっぱい食べる。でも・・・」

「でも？」

「あれは人間？」

アリスが指差す先にいるのはスバルとエリオだ。まあ、あいつらは色々とおかしいな。うん。

「ああ、あいつらは食事になると色々とすごいから気にするな」

「パパ、僕もあれくらい食べればフェイト母さんみたいになるのか！？」

「背を伸ばしたいなら牛乳を飲め」

「違う！胸だ！」

その言葉に、俺と近くで食事を取っていた男性隊員（エリオを含む）が食事を噴出しそうになった。

「ルミノ、あ、あなた何を言って！」

フェイトが顔を真っ赤にしている。

「どうしてフェイトママと同じ姿なのに大きくならないんだ！不公平だ！」

「我も、このまま成長してもはやて母君と同じように胸が小さくなるんだろうか・・・」

「セレス！そういう悲しいこと言わんといて！」

その後ろでもリインがなんか落ち込んでいる。ヴィータもシグナムさんをじっと見ている。

「私は・・・（チラリ）将来に期待します」

「シエルちゃん？今なんで私を見たのかな？」

なんてギャーギャーと騒いでいる。ヴィヴィオはペタペタと胸を触っている。

「ヴィヴィオ・・・おっぱいない・・・」

「大丈夫ですよヴィヴィオ、大人になればなのはママみたいになれますから」

「うん・・・」

「みんなおっぱいが大きいほうがいいの？」

アリスが不思議そうに聞く。こいつ、見た目は１５くらいなのに中身がヴィヴィオ並みだ。

「そうだ！そうすればパパをたぶらかせる！」

「ルミノ、お前人聞きが悪いこと言うな」

「こう？」

すると、アリスの胸部が膨れ上がった。

『ええ！？』

と、女性陣

『おお！』

と、俺とザフィーラを覗いた男性陣。これはまさか・・・

「これもトランスの一種か？」

「うん、アリスはやろうと思えば男にも女にもなれるよ？」

「ほぅ、これはなかなか・・・」

「ひゃうわぁ！はやて！何してる！」

この先は言わずともわかるだろうが、どうやらはやての中にある『スイッチ』が入ってしまったらしい。なのはとフェイトも顔を赤らめる。

「おいはやて、子供の前でそれはやめろ」

「セレス、あなたはやらないでくださいね？」

「するか！」

シエルの言葉に、全力で怒るセレスであった。

そして就寝時間。ベッドが拡張され、俺となのはたち、ヴィヴィオ、シエルたちがベッドに入った。なんでもはやてが頼んだ特注らしい。めちゃくちゃベッドがでかい。

「わーい！ふかふかだ～！」

「ふかふか～！」

ルミノとヴィヴィオが遊んでいる。言葉に出してはいないが、シエルとセレスもちょっと嬉しそうだ。んでもって・・・

「アリス、お前なにしてるんだ？」

そこにはアリスが戦闘態勢で扉の前に座っていた。

「直人が寝ている間はアリスが起きてみんなを守る」

「アホ、六課の隊舎でここ来る奴ら少ないから大丈夫だ。お前も寝ろ」

「寝ること、したことないの。いつも命の危険があったから」

アリスは確かに、闇の使徒の連中に狙われていた。その辺の話はアリスは最初の質問で少しはぐらかしていた節があった。俺は黙っている。あの子にも何かがあるのだろう。そう思うから。

「大丈夫だ。一緒に寝るぞ」

「直人が言うなら、そうする」

そう言ってアリスもベッドの端に入った。

「ん、フカフカ・・・」

アリスは数秒で寝てしまった。恐らくその眠っていないことの緊張という鎖が解けたからだろう。

「じゃあ俺たちも寝ようか」

今日は俺の腕の中にはヴィヴィオ。その隣にシエル。反対側にはなのはが寝ている。マリカはいつもどおり、俺の枕の上辺りで寝ている。

「おやすみ、直人君」

「直人おやすみ」

「おやすみや、直人君」

「パパ、おやすみなさい」

「主、よい夢を」

「父上、お休みなさいませ」

「パパ、また明日」

「父君、我も眠る・・・」

こうして、アリスを迎えた機動六課の一日目が終わった。この先何があるかはまだわからない。だが、今ここにある命を、俺は絶対に絶やさない。そう誓い、俺も目を閉じて眠ることにした。

第十一話「少女の名はアリス」（後書き）

秋風「はい、ということでアリスです！」

直人「もともとは投稿の採用キャラが元だ。第二回は審査中なので待ってくれ」

秋風「今回はアリスについてです」

アリス　??歳
種別　半キメラ（半身は人間）
直人の魔力の光によって変異して出来たキメラの集合体。今のところ明確な目的は不明だが、直人を守ることを第一としている。ちなみに外見は１５，６歳だが、頭の中はヴィヴィオとそう変わらない。さらに言えば闇と光が入り混じった存在のため、精神が不安定でもある。
戦闘について
戦闘ではキメラ特有の変化を武器に戦う。前の話では鷹の羽、狼の爪を使用したが、アリス本人のイメージをすれば、無機物も一体化して生み出すことができる。

秋風「まあ、詳しいことは話の中で」

直人「次回、第十二話『親子として』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十二話「親子として」（前書き）

すいません、今回もタイトルが変わっちゃいました。ほんと申し訳ない

んで、今回はヴィヴィオのお話。そしてあとがきにはゲストもw

では本編どうぞw

第十二話「親子として」

アリスが来た次の日。アリスをフォワードのメンバーに紹介した。

「井上アリス。直人の遠い親戚なの」

というのがアリスの紹介。俺の半身でもあるアリス。結果的にはこうだとは思う。べつに保護責任者になったわけではないが、アリスのことを隠すためには一番これがいいだろう。フォワードの自己紹介も終わり、訓練が始まった。最近はフォワードにまざってシエルたちも訓練している。まあ、その後に残るのはフォワードの死屍累々となった姿なのだが、なのはも薄々感じている新しい戦いのため、気合を入れて訓練をしている。

「パパ～！」

「ヴィヴィオ、走ったら危な・・・」

「あぅ！」

言わんこっちゃない。でもまあ、下は芝生だし大丈夫だろう。

「ヴィヴィオ、立てるか？」

「パパ～・・・」

ヴィヴィオが涙目でこちらを見る。しょうがないなぁ・・・・

「ヴィヴィオ、頑張って立ってみろ」

「パパ・・・・・」

弱弱しくも、涙をぼろぼろとヴィヴィオが流す。やっぱりまだ早かったかな。俺はゆっくりと近づき、ヴィヴィオを抱き起こした。

「パパの言うことを聞かないからこうなるんだぞ？」

「ごめんなさい・・・・・・・」

「まったく、直人君は甘いんだから・・・」

「なのは」

訓練を終えたなのはが立っていた。どうやら一部始終を見ていたようだ。

「しょうがないだろ、あそこまで泣かれたら」

「ま、そうだよね。ヴィヴィオ？次は頑張ろうね？」

「うん・・・」

なのはの言葉に、ヴィヴィオは頷く。すると、遠くでアリスがシエルとにらみ合っている。

「何してるんだ？あいつら」

「なんだかシエルちゃんがアリスちゃんと戦ってみたいって」

「なるほど・・・」

俺はそのままヴィヴィオを抱え、その戦いを見る。

「パイロン・・・・シューター！」

無数の弾光が飛び、アリスに向かっていく。

「トランス・・・コル・ペディス！（狼の爪）」

アリスはそれを引き裂き、跳躍する。狼の脚力の利用か・・・

「っ！はぁ！」

シエルがレイハでアリスの攻撃を防ぐ。こういうところはなのはと違って得意のようだ。

「トランス！クワトロブレイド・ダンシング！（四剣演舞）」

いきなりアリスの手と足が剣へと変わる。おいおい、何でもありだな。

「うっ・・・！」

シエルは吹き飛ばされながらも体制を整え砲撃モードへ切り替えた。

「ブラスト・・・ファイヤー！」

「トランス！ガード・ディフェンサー（鉄壁の盾）！」

今度は両手が盾となり、その砲撃を防ぐ。すると、アリスの背中に羽が生える。

「ルイーナ・アバルエ！（鷹の爪）」

そしてその羽根が追尾でシエルに向かっていく。

「速い！」

シエルは防御をするも、回りこまれて刺される。

「ぐぅ！」

「トランス！ナックル・ブラスト（必勝の一撃）！」

今度は右腕にガントレットが構えられた。

「これで終わり！ナックルエクステンション（衝撃突破）！」

スバル流のディバインバスターのようなものが発射され、シエルが墜落する。墜落してきたシエルをセレスたちが支え、こちらに降りてきた。

「シエル、大丈夫か？」

「はい、父上・・・負けてしまいました」

「いいよ、そこまで大きい傷もないし、ゆっくり寝てろ」

「はい・・・・」

シエルは頷くと静かに眠った。アリスも慌ててこちらに降りてきた。

「シエル！シエル！大丈夫！？」

「静かにしてやれ、今寝たから。」

「ごめんなさい・・・やり過ぎちゃった・・・・うえぇぇぇぇぇん！」

何故かアリスがおお泣きする。なんでお前は泣くんだよ・・・

「だってだって！シエルに嫌われちゃうよぉ！」

「大丈夫、シエルはそれくらいじゃ人を嫌いにはならないから」

まったく、本当に赤ん坊だな。見た目は１５くらいだけど、アルカディアの戦いといえば４年も前のことだ。つまり、正確にはアリスは４歳ということだ。

「ま、いいや。とりあえず隊舎に戻ろう」

こうして隊舎へと戻っていった。

シエルはすぐに目を覚まし、必死に謝罪をするアリスを許した。そして食堂で朝食を取っていると、あることに気がついた。

「ヴィヴィオ、どうした？ぜんぜん食べてないけど」

「ううん、なんでもないよ・・・・」

「じゃあしっかり食べろ。大きくなるためにもな」

ヴィヴィオは頷き、フォークを動かす。どうしたんだろうか。なのはやフェイト、はやても心配そうだ。すると、ヴィヴィオが意を決したように俺を見た。

「パパ！」

「ん？」

「パパ、ヴィヴィオに魔法を教えて！」

「「「「「「「「「ええ！？」」」」」」」」」

その席にいた全員が驚きの声を上げた。当然だ。ヴィヴィオはまだ６歳だからだ。

「あの、ヴィヴィオ？どうして魔法を覚えようと思ったのかな？」

なのはが優しく聞くと、ヴィヴィオは真剣・・・多分真剣な表情をしているけど、かわいい顔にしか見えない。

「だって！だってみんな強いのにヴィヴィオだけ弱いんだもん！」

「ヴィヴィオ、魔法は強さ弱さのものじゃないよ？」

フェイトが言うが、ヴィヴィオは首を振る。

「ヴィヴィオだって戦いたいもん！」

「ヴィヴィオ？戦うって・・・どないしたん？」

なんだかいつもとヴィヴィオの様子が違う。なんというか、迫力があるようなないような。

「それは言えないけど・・・・でも、ヴィヴィオも強くなりたいの！」

「ヴィヴィオ・・・」

「だからパパ！魔法を教えて！」

「・・・駄目だ」

「ふぇ・・・」

泣きそうなヴィヴィオ。だが我慢してヴィヴィオを見る。

「ヴィヴィオ、魔法は強さを得るために覚えるものじゃない。いたずらなんかだったらもっての他だ」

「ヴィヴィオいたずらに使うなんて言ってないもん！」

「まだヴィヴィオに、魔法は早すぎる。」

「パパの馬鹿ぁ！」

ヴィヴィオは泣きながら食堂を出て行ってしまった。

「ヴィヴィオ！」

マリカが後を追い、食堂を後にするとフェイトが不安そうに俺を見る。

「直人、少し言いすぎじゃない？」

「・・・一応、自覚はあるよ。でも、ヴィヴィオにはできればもう少し大きくなってから魔法を覚えてもらいたいんだ」

「どうしてや？」

「ヴィヴィオの力は間違いなく強い。でも、今強くなって力をつけ過ぎたら過信を生む。それこそ、数年前のなのはみたいに」

「・・・・・・・・・・」

「それに、まだヴィヴィオは六歳。魔法で無理が掛かると大変なことになる」

一同は黙ってしまう。だが、これもしょうがないと思っている。

「ヴィヴィオ悪くない、直人、アリスがヴィヴィオに魔法教える」

「アリス、お前魔法使えるのか？」

「一応できる。」

俺の魔力と同系統なのか？まあ、それは今はいい・・・

「駄目だアリス。教えるな」

「わかった」

ヴィヴィオは心配だが、マリカが付いているし、大丈夫だろう。

マリカｓｉｄｅ

「パパのばかばかばかばかばか！」

「ヴィヴィオ、落ち着きましょう？ね？」

「うえぇぇぇぇん！」

ヴィヴィオが泣きまくりです。ああもう、主も言いすぎですよ。

「ヴィヴィオ？主もきっとヴィヴィオのことを考えてるんですよ？だから・・・」

「でも！パパを守れないもん！」

そう、一応聞いていました。ヴィヴィオの『魔法を習いたい理由』を。しかし主ときたら・・・ヴィヴィオがいたずらに使うと勘違いしていたのですから。ヴィヴィオは前回の戦いの後、強くなっているエリオ君やキャロちゃん、それにシエルたちをいつも羨ましそうに見ていました。「自分も父親を守りたい。」多分最近の戦いから出た想いなんでしょうね・・・

「いいもん！パパじゃない人に教わるもん！」

「言っておきますが、私は教えられませんよ？多分この機動六課の人は主に止められてしまうでしょうし」

「むー・・・」

ヴィヴィオが腕を組んで考えてます。ああ、ちょっと可愛いです。抱きしめたい。ヴィヴィオはしばらく考えると、走って外へ行ってしまいました。

「あ、ヴィヴィオ待ってください！」

私はヴィヴィオの後を追うことにしました。

直人ｓｉｄｅ

食堂の一件が終わってから一時間後。俺はザフィーラからこんな話を聞いた。

「ヴィヴィオがいない？」

「ああ、こんな手紙を置いてな」

『さがさないでください　ヴィヴィオ』

「家出かよ・・・」

「た、大変だよ直人！どうしよう！」

「大丈夫だよ、マリカが付いてるし。それに今は、そっとしておけ」

「でも大丈夫かな・・・マリカさんがいるのはいいけどヴィヴィオどっかで怪我していたら」

「・・・後で連絡取ってみるか」

マリカｓｉｄｅ

とりあえずヴィヴィオはというと、私と長い時間電車に乗っています。何故かは知りませんが、どこかを目指しているようです。

「ヴィヴィオ、どこを目指すのですか？ここからは管理局の関係施設しか・・・」

「いいの！お迎えの人も来てくれるから！」

電車はとうとう終点についてしまいました。改札を出ると、そこには見た顔がありました。

「ヴィヴィオ、よく来たわね」

「ギンガさん！」

「お迎えって・・・ギンガだったんですか？」

「はい、ヴィヴィオから聞いてませんでした？」

となるとここはつまり・・・・

「海上隔離施設？」

ここは確か彼女たちが保護されている場所でしたね・・・

施設に入ると、セインたちが迎えてくれました。

「ヴィヴィオ！マリカさんもいらっしゃい！」

「おじゃましまーす！」

「こんにちは。どうですか？勉強は」

「うん、社会復帰のためにも頑張ってるよ」

セインさんは相変わらずいい笑顔ですね。すると他のナンバーズも来ていました。

「ふむ、ヴィヴィオ久しいな。今日はどうしたんだ？」

「あのね！みんなに相談があるの！」

こうしてヴィヴィオが今朝の出来事を話しました。

「なるほど・・・父を守るためにか」

「立派だねヴィヴィオ」

「でもね、パパ魔法を教えてくれないの」

「しかし、それはヴィヴィオに負担がかからないようにでは？」

セッテさんの言葉に、ヴィヴィオは強く首を振ります。

「でもエリオお兄ちゃんやキャロお姉ちゃんだって魔法を使ってるもん」

「そういやそうっスねぇ・・・」

「だからヴィヴィオに戦い方を教えて！」

「しかし陛下、我々のは魔法ではありませんよ？」

「そうなの？」

ヴィヴィオが首を傾げています。そういえばそうですね。ナンバーズの力はＩＳと呼ばれる力が主軸。魔法ではありません。

「ならギンガがいいんじゃないの？ギンガは魔法使えるし」

オットーさんの言うとおりですね。ギンガさんはシューティングアーツができますし。

「でも私は母さんに教わってるけど。結構自分使用に直したりしてるから無理があるわ。それに直人さんが魔法を教えるなって言って

るんだから、私の一存じゃ教えられないわよ」

「ふむ・・・なら姉にいい考えがあるぞ。ノーヴェ！」

「んにゃ・・・どうしたのチンク姉」

遠くで寝ていたノーヴェさんがこちらに来ました。相変わらずですね。

「実はな・・・」

チンクさんが話すと、ノーヴェさんが状況を把握したらしい。

「この子にあたしがストライクアーツを？」

「うむ、姉はそれがいいと思ってな」

たしかにそうですね。ストライクアーツはミッドチルダでも数多くの方が使う格闘技ですし、打撃による徒手格闘ですから。しかし・・・

「チンクさん、ヴィヴィオの体ではまだ無理があると思いますが？」

「簡単に体を動かしたりするならできるだろう。なにも技などを覚えるわけではないしな」

「でもチンク姉、あたし人に教える柄じゃないよ？」

「そこは姉上がなんとかするだろう」

「そうね、ちょっとだけ、やってみましょうか」

こうして、ヴィヴィオの特訓が始まりました。とりあえず着替えて、拳の突き出し方、足の蹴り上げ方などをノーヴェさんとギンガさんが教えます。なるほど、これは私も少し勉強になりますね。

「いいか？サンドバックを殴るときは、体の姿勢を丸くしたりするなよ？まっすぐ突け」

「はい！」

ヴィヴィオは元気に返事をして突きを繰り出しますが・・・

「痛い・・・」

「チンク姉、やっぱりサンドバックは無理があるんじゃない？」

「だな、エアーの人形にするか」

まだまだ、ヴィヴィオが強くなるには先が長いですね。

こうして夕方まで特訓したヴィヴィオはギンガさん、そしてノーヴェさんと一緒に帰ることになりました。主、怒ってないといいですけど。

「あ、着いた」

車から出ると、隊舎の前には主となのはさんたちが待っていました。

「あ、パパ・・・・・」

「・・・・・・・・・」

主は無言、無表情です。あ、これは・・・・

――――――パァン！

気持ちがいいほど高い音が鳴りました。ヴィヴィオは一瞬何されたかわからないほど驚いてます。まあ、いつも甘やかされていればこうでしょうね。主もやりすぎだと思いますが。

「連絡もつけず、あんな手紙まで残して、今まで何してた・・・」

「パ、パパ・・・」

「あ、あの！直人さん実は・・・」

「ギンガには聞いてない。黙っててくれ」

「は、はい・・・」

ギンガさんもさすがに驚いてますね。まあ、そうなんですけど。

「ヴィヴィオ、俺はお前の父親である以上、お前が一人前になるまで見届ける責任がある。そして、お前がいけないことをしたら怒る必要もある。けどな・・・・」

主が動くと、またヴィヴィオがビクリと体を動かします。また殴られると思ったのでしょう。

「俺に、心配をさせるな、ヴィヴィオ。俺は、お前を誰よりも大切に思ってるんだぞ？」

主は強くヴィヴィオを抱きしめています。そうでしょうね、何よりも命を失うことの恐怖と寂しさを知る主なら、そういうと思いましたよ。

「パ、パパ・・・ごめんなさい、ごめんなさい！うえぇぇぇぇぇぇぇん！！！」

あらら、ヴィヴィオも大泣きで強くしがみついてますね。やはりいい親子です。しばらく泣くヴィヴィオを、主は優しく抱き上げていました。

直人ｓｉｄｅ

ヴィヴィオは泣きつかれたのか、ぐっすりと眠ってしまった。今ははやての膝で眠っている。ロビーでギンガ、ノーヴェに俺は謝罪をすることにした。まったく、一時はどうなるかと思ったが、まさか海上隔離施設まで行くとは。

「ギンガ、ヴィヴィオが迷惑かけたな、ノーヴェも」

「いえ、ヴィヴィオ一生懸命でしたよ」

「そうだよ、頑張ってた。なあ、兄貴」

「ん？どうしたノーヴェ」

俺がノーヴェに聞く。ちなみに兄貴というのは、ディートが「お兄様」と呼んでいたからだという。

「ヴィヴィオにストライクアーツ教えたら駄目かな？」

「・・・どうしてだ？」

「魔法は確かに、まだちょっと早い気もする。でも、格闘技なら教えても良いと思うんだ。ヴィヴィオもヴィヴィオなりに強くなろうとしている。あいつの目は本気だったよ」

ノーヴェが真剣な表情で言う。確かにそこまでしてでもヴィヴィオは強くなろうとしている。それは今日のヴィヴィオの行動ではっきりした。

「私も良いと思うよ、直人君。魔法は学校に入ってからにすれば。」

「そうだよ。ノーヴェもこう言ってくれてるし」

「それにヴィヴィオも、習い事のひとつでもそろそろあっていいんとちゃう？」

なのはたちも、そう言ってるし、そうだな・・・・

「わかったよ。ノーヴェ、ヴィヴィオを頼めるか？」

「お、おう！」

「ヴィヴィオにも、やるからには最後までやるように言わせる。」

こうして、ヴィヴィオはノーヴェの元でストライクアーツを学ぶこととなった。

第十二話「親子として」（後書き）

秋風「ごめんなさい」

直人「なぜに土下座？」

秋風「いや、前回の予告と今回のタイトルが違ってるからさ」

直人「いつものことじゃん、そんなの」

秋風「まあ、そうだんだけどさ・・・」

直人「そしてあれか、オリジナルに４期に繋がる物語か」

秋風「ああ、でもちゃんと４期が崩壊しないようにするよ」

薫「こんにちは～♪」

紅麗「・・・・・邪魔する」

秋風「お、来たね。こんにちは」

薫「どうも、直人さん久しぶり」

直人「おう、薫。紅麗も久しぶり」

紅麗「ああ、そうだな」

薫「それにしても本当にフラグメーカーだね」

直人「それは言うな。気にしてるから」

秋風「それにしても、ずいぶんと話が進んでるよな。今アグスタだろ？」

薫「そうだよ、兄者と一緒に警備抜け出してきたから」

紅麗「・・・・・後で、はやてから色々と言われそうだがな」

直人「ま、気にするな。それは秋風（こいつ）のせいにしてくれれば良いから」

秋風「おいっ！」

薫「そういえばさ、今回の話だけど、ヴィヴィオに初めて怒ったね」

直人「ああ、まあな」

紅麗「今回は、少しだけ立派だったな、直人」

秋風「そうだよね～・・・」

薫「え？なんで？」

紅麗「この話や前の第二部などを見る限り、いつも直人はファザコンに近い状態だった。なのはの父、士郎もアニメではなのはを殴ったことなどないしな」

秋風「それに、魔法を教わるのを禁止するときヴィヴィオの泣き顔に負けなかったもんな」

直人「まあな」

薫「兄者は？ヴィヴィオにあんな顔されたら？」

紅麗「・・・・・・・・・さあな」

秋風「多分烈火だったらすぐに折れるけど、紅麗や水鏡はそういうキャラじゃないよね、烈火の炎のキャラの中では」

薫「確かにそうだね。烈火兄ちゃんは結構弱そう」

紅麗「それ以前に直人と同じような考えに至らないであろう馬鹿だ」

直人「・・・・まあ、そうだよね」

秋風「おっと、そろそろ時間かな？お土産にこれをどうぞ。『メル』の「アーム」のシルバーリング」

薫「いいの？でもいいのかな、安西先生の次回作のグッズって。でもありがと、バイバイ」

紅麗「一応、もらっておこう。それと・・・・・直人」

直人「ん？」

紅麗「俺が言えた義理ではないが、大切な者を亡くしたときの絶望、味わいたくなければ守り通すのだな、すべてを」

直人「わかってるよ。そっちも頑張れよ紅麗」

紅麗「ああ・・・・ではな」

紅麗　出演作品　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～

「メル」の作者の全作品「烈火の炎」に登場する主人公　烈火の兄でありながら、本編では烈火の敵として登場した手から炎を出す炎術士。しかし最後には烈火と共に戦い、次元を超える禁術を使って戦国時代へと戻った。だが出演作品であるこの作品では戦国時代に戻らず、ミッドチルダに流れ着いた。そしてシグナムなどに嫌われながらも、ミッドチルダで機動六課に協力することとなる。

小金井薫　出演作品　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～

同じく「烈火の炎」に登場。１３歳ながら少々小柄で子供っぽい明るい性格。しかし、孤児の時代には一度自殺を図ろうともしている。元々は紅麗のところにいたが紅麗を裏切り、主人公の烈火の仲間になった。魔導具「鋼金暗器」を使いこなしていた。最後の戦いの後紅麗を「兄者」と呼び、義兄弟として共に戦国時代へと帰っていった。紅麗と同じく戦国時代ではなくミッドチルダに流れ着き、機動六課に協力することとなった。

直人「次回第十三話『秋のスポーツ大会（前編）』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十三話「秋のスポーツ大会（前編）」（前書き）

新しく新連載が始まりました。よければそちらも見てください！

それでは本編どうぞ♪

第十三話「秋のスポーツ大会（前編）」

今日は何故かミッドチルダの地上本部の大演習場に来ている。その理由はというと・・・・・

「第１５回！秋の時空管理局体育大会！」

ということらしい。どういうわけか、年に一度、陸、海、空に所属する魔導士の中でも選抜された人間が色々な魔法を使った競技で親睦を深めるらしい。どこがスポーツなんだろうな。機動六課は３種混合なので、特別枠で出ることとなった。ハンデとして、出ているのは４人。俺、なのは、フェイト、はやての３人。＋αでマリカとリインがいるが、他のチームは１５人、倍の人数がいる。

『では大会を始めます！今回の商品はこちら！リゾートホテル４泊５日の旅！』

普段果てしなく仕事を強いられている管理局にとってこれは嬉しい商品だろう。周りが燃えている。で、その後ろではなのはたちも頑張ろうと意気込んでいる。

「直人君！頑張ろうね！」

「ああ、そうだな」

こうなったのは約一週間前

「スポーツ大会？」

「せや！3部隊合同の」

「しかも豪華商品が出るんだよ！」

「機動六課は特別枠だって！」

と、気合が入っているが・・・

「まあ、頑張って」

俺はスポーツが嫌いだ。というよりも、模擬戦以外で汗をかくつもりなど、毛頭ない。

「何言ってんの！直人も参加するんだよ！」

「やだよ、汗かきたくないし」

「なにオヤジみたいなこと言ってんのや！頑張って商品ゲットで旅行行こ！」

「パパ！ヴィヴィオも旅行行きたい！」

ヴィヴィオまで・・・

「一応、ルールは聞いておく」

「えっと、多くの種目でポイントが多ければそのチームが優勝。で、機動六課はハンデとして通常の参加者より少なくて、４人や」

まさか・・・

「私とフェイトちゃんとはやてちゃん、そして直人君で万事解決！」

そうだと思った。

「そんなことしなくてもフォワード４人に出させればいいじゃないか」

「そ、それが・・・」

「？」

「日頃の訓練でみんな体が動いてないんだよね・・・・」

おいおい、どんなハードな訓練したんだよ。

「ちなみにシエルたちも同じで、アリスは局員じゃあらへんし・・・」

「シグナムさんたちは？こういうの大好きだろ」

「それが、剣を交えないものはしないって」

マジかよ・・・

「ねえ、直人君、お願い！」

「一緒に出よう！」

「お願いや！」

ああもう、そんな上目でこっちを見るな！

「わかった！わかったよ！出ればいいんだろ出れば！」

「「やったー！」」

と、大喜びの３人。ハァ・・・やだな、運動。

回想終了

『それでは！第一種目の発表です！第一種目は・・・・』

なんか無駄に長いためと音楽・・・あんまよろしくない。

『ターゲットブレイク！』

ターゲットブレイク？

『ルールは簡単、チームでそれぞれ持つターゲットを他のチーム同士で破壊しあうゲームです。』

なるほど、それだと俺たちかなり不利だろ。

「大丈夫、私たちを誰だと思ってる？」

「・・・白い魔王」

「魔王じゃないもん！」

「冗談だよ。エースの３人」

確かに、こいつらとなら問題はない・・・かもな。

こうして、全員が位置へと着いた。陸海空に勤めていても、みな空は飛べるらしい。とりあえず勝つか・・・

『では！ゲーム・・・スタート！』

スタートの文字が表示され、全員が動く。そして・・・

「死ねぇ！英雄！」

一斉に俺に仕掛けてきた。なるほど、先に魔導士を潰す作戦か・・・

「俺たちのアイドルとよくもぉ！」

「世界を救ったあんただが、彼女ために死ねぇ！」

あ、あれ？なんか趣旨が違わないか？

「ちぃ！メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「虚空雷閃！」

これで数人の局員を倒すが、まだまだ襲ってくる。何人いるんだよ！

なのはｓｉｄｅ

あらら、大変だなぁ・・・直人君

「直人、大丈夫かな」

「大丈夫やろ、とりあえずうちらもがんばろ」

「それはどうかしら？」

突然声がして、ターゲットに向けて魔法が発射された。私が相殺すると、そこには数人の女性局員がいた。

「あ、あなたたちは！？」

「私たちは井上直人ＦＣよ！」

ＦＣ・・・ファンクラブ？

「直人様のため、死んでください！」

な、なんかすごい迫力・・・

「なのは、怯んだら駄目だよ？」

「わかってるよフェイトちゃん、直人君は私たちのものだもん」

こうして私たちも戦闘を開始する。

「ディバイン・・・バスター！」

「一斉攻撃！ファイヤー！」

うわ、みんなすごいなぁ・・・これってもしかしてチーム融合してる？

「あなたたちは個人で勝てなくても、みんななら負けません！」

「なるほど、考えてるね・・・でも・・・甘いよ！」

『ロードカートリッジ』

「シューット！」

「ファイヤー！」

アクセルシューターとプラズマランサーのダブル攻撃。さらに・・・

「ディバインバスター！」

「サンダースマッシャー！」

中距離火力。これで・・・・！

「タイタンリッパー！」

「「え！？」」

突然私たちの砲撃がさえぎられ、女性局員も一掃された。これは・・・！

「お久しぶりです、なのはさん、フェイトさん」

「「サフィラ！？」」

そこにいたのはかつての仲間、サフィラ。そっか、サフィラも地上本部の代表なんだ。

「私は直人さんのＦＣではありませんが、とりあえず休暇が欲しいので勝たせてもらいます！」

やっぱり地上本部もすごいハードワークなんだ・・・

「ジュリアもいるの？」

「ええ、ジュリアさんはターゲット優先で動いてますから」

スコアを見ると、私たちより少し多い。これはまずいかも！

直人ｓｉｄｅ

「はぁ、はぁ、疲れた・・・」

とりあえず数十人を倒しターゲットを壊す。それにしてもさっきから目に入るのは・・・

「ジュリアか！」

「直人さん、お久しぶりです！」

「なるほど、地上本部のチームの得点の高さはお前か」

「ええ、私はリゾートに行きたいので」

「悪いけど、ここで潰させてもらうよ」

「直人さん、上等です！」

こうしてジュリアとの戦いが始まった。

「蒼雷一閃！」

「アサルトストライク！」

互いの刃がぶつかり合う。こいつ、腕を上げたな！

「やるなジュリア、それにスラーク」

「ええ、どうも。」

『ありがとうございます』

槍と剣ではこちらが少々不利だな。だが・・・

「負けるわけにも行かない、そうだなメシア！」

『そのとおりですわが主！』

「私たちだって負けません！だよね、スラーク！」

『もちろん、その通り！』

「「はあああああああああああ！！！！！！！！！」」

互いの刃が交わり火花を散らす。すると互いに衝撃で距離を取る。

「スラーク！」

『ロードカートリッジ！』

「ランサーブラスト！」

「何！？」

ランサーレイじゃない！？それにこの威力は！

「私たちだって強くなってるんです！」

『だから負けません』

なるほど、これはなかなか！だが・・・

「これでやられるほど俺はやわじゃないぞ！メシア！」

『５モード！』

メシアを太刀に変え、衝撃波でランサーブラストを斬る。

「くぅ！さすが直人さん！でも負けません！」

「ふっ、こっちもそのつもりだ！いくぞ！」

こうして再び刃が交わった。

なのはｓｉｄｅ

まえよりもサフィラが強い。切り返しもうまいし、魔法を使うタイミングもやっかい！

「マグナショット・アーツ！」

召還された剣がいくつも宙を舞う。なんというか、すごい！

「アクセルシューター・・・シューット！」

相殺して煙が出る。あれ！？いない！

「なのは！右！」

そこにはサフィラが剣を構えていた。

「もらいました！」

「させないよ！」

フェイトちゃんがバルディッシュで防御してくれる。でもギリギリ!?

「強くなったねサフィラ・・・」

「はい、負けませんよフェイトさん!」

あらら、フェイトちゃんスイッチ入った?はやてちゃんはどうだろ・・・

「響け終焉の笛!ラグナロク!」

「きゃあああああ!!!!」

順調にＦＣの皆さんを倒してるね。私もしよっと♪

直人ｓｉｄｅ

「なかなかやるようになったな」

前の戦いで消費が激しいから結構もたん!まずいな・・・

「このまま、押し切らせてもらいます!」

「やって、みろぉ!」

再び空を蹴り、剣が交わる、その瞬間だった。

『終了――――！！』

突然司会者の声が鳴り響いた。

「え！？」

『ここでタイムアップです！結果を見てみましょう』

1位　機動六課

2位　地上本部

3位　本局

4位　航空部隊

『えー、これから二時間の休息を取りたいと思いますが・・・・全員ゲーム内容無視するなー！』

司会者の叫びが響いていた。ま、たしかにね。

第十三話「秋のスポーツ大会（前編）」（後書き）

秋風「今回はおやすみです。私の体力の問題で」

直人「駄目作者」

秋風「うるさい・・・ｚｚｚｚ」

直人「ハァ、次回第十四話『秋のスポーツ大会（中編）』ＴＡＫＥＯＦＦ！

第十四話「秋のスポーツ大会（中編）」（前書き）

同時連載ってきついですね。でもめげませんよ。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～星を見つめる者～も連載中です。よかったら見てください！

第十四話「秋のスポーツ大会（中編）」

とりあえず先ほどのゲームで午前は終了した。今はみんなで昼食を取っている。

「パパ！すごかったよ！」

「そうか？ありがとうヴィヴィオ」

俺は駆け寄ってきたヴィヴィオを抱き上げ、よしよしと撫でる。ヴィヴィオはそれを嬉しそうにしている。すると、遅れて応援席にいたフォワードやヴォルケンリッター、そしてナンバーズの面々が訪れた。そして・・・

「おいスカリエッティ、なんでお前がここにいるんだよ」

なぜかスカリエッティがいた。

「はっはっは、久しぶりだね直人。今日はウーノから連絡を受けて応援に駆けつけたわけさ」

「そう、そりゃどうも。」

なんというか、普通な理由でなんというか気が抜けた。で、弁当が開かれた。

「一応先に聞いておくで？これ、シャマルが作ってへんよな？」

「大丈夫です主はやて。シャマルには内緒で作ったので」

「みんなひどいわ！私だけ仲間はずれなんて！」

いやシャマルさん、腹壊して辞退とかになったら洒落にならないしベタ過ぎですからね？

「直人、この後の競技も頑張ってね！」

「ああ、頑張るよ。そういえば次の競技は？」

「姉が先ほどもらったプログラムには『クラナガンレース』とあるぞ？」

「つまりマラソン？」

俺が聞くと、チンクが首を振る。

「ルールには用意されたコースをチーム代表８人（機動六課は２人）が飛ぶ、走るなどをするらしい。

ただし特別なリミッターをかけるので、みな最高スピードは決まっているのだという」

「なるほどねぇ・・・じゃあ誰が行く？」

「私と直人君で決まりだよ！」

そういうのはなのはである。

「一応、理由を聞こうか？」

「だって広域の攻撃は私が優れてるし、接近されたら直人君が一番対応できる。」

「広域だったらウチも・・・」

「はやてちゃんは詠唱が長いから移動しながらは向きません」

「私だって移動しながら砲撃魔法なら・・・」

「私のディバインバスターとプラズマスマッシャー、どっちが威力高いか知ってるフェイトちゃん?」

なのはの黒いオーラ、久しぶりに見た気がする。それをみたフォワードとナンバーズが震えてる。ヴィヴィオに関しては俺に抱きついて半泣き状態だ。

「わかったよ、なのはと俺で出ればいいんだろ?」

俺がそういうとなのはがニコニコ顔になった。それに対照してフェイトとはやてが怖かったけど、見なかったことのしておこう。まあ競技に出る人間も決まったわけなのでお昼ご飯だ。量はまあ、俺たちとフォワード、それにナンバーズなので、かなりの量だ。多分3食分はあると思う。まあその中でもスバル、エリオ、ギンガ、ノーヴェが尋常でないほどの量を食べる。なるほど、姉妹って似るもんだな。

「こらスバル、食べすぎよ」

「だってティア、食べなきゃ戦はできないよ?」

「あんた出ないでしょうが。兄さんやなのはさんたちが優先よ」

「そんなー！」

そんな話を聞いてギンガとノーヴェはこっそりと食べる速度を落としていたりする。今更速度を落としたところでバレバレだよ、二人とも。

「はいヴィヴィオ、あーん」

「あーん♪」

ヴィヴィオに食事を食べさせる。それと言うのも、ヴィヴィオはまだ箸を使えないので食べさせている。フォークやスプーンは用意してあげるべきだったな。

「それにしても、スカリエッティは今何してるんだ？」

こいつ、仮釈放されてから話聞いてなかったけど。

「ああ、私は色々と自分の施設やアジトなどの廃棄などをしていたよ。管理局の監視の下でね」

「廃棄？」

「色々と上層部に絡んだ証拠も提供するが、私のような科学者が二度と出ないようにね」

こいつ、随分と丸くなったな。ま、いい事だけど。

「あの、スカリエッティ・・・・さん」

「ん？なんだい、スバル・ナカジマ」

「その、私やギン姉を作ったのは・・・「私じゃないよ」え？」

「基礎理論は組んだが私が最初に生み出したのはウーノだからね」

「そう、多分ドクターの技術を盗用した人間がいるんです。」

「なるほどな、でもまあ今は良いだろ、その話は」

「あ、そうだね直人兄ぃ」

そう言ってスバルは食事を再開するが、ギンガは心配そうにスバルを見つめていた。

「（大丈夫だよギンガ、きっとスバルは気になどしないさ）」

「（はい・・・・・・・）」

「パパ！ご飯！」

「あー、はいはい。ごめんな」

そう言ってご飯を食べさせて上げる。そんなことをしてから食休みをして、とうとう午後の部へと突入する。

『それではこれより、クラナガンレースを開始いたします。ルールは簡単。クラナガンの道路、そして空を基準どおりに飛んでいただ

きます。ただし、スタミナは別として最高速度は特殊なリミッターをかけているので、皆さん同じになりますので。そして妨害や進行を防ぐのはありですので。』

「直人君、頑張ろうね！」

「ああ、ヴィヴィオも見てるしな」

なのはが手を取って微笑んでいる。当然ながら周囲からの殺気がすごい。そしてさらに・・・

「直人パパー！なのはママー！頑張ってー！」

ヴィヴィオが殺気の増大を手伝うのだった。

『それでは、レディー・・・ゴー！』

こうしてレーススタート。男性局員がまたしても俺に襲い掛かる。

「俺たちの女神を汚しやがってー！」

「いくら英雄でも許さねー！」

「ここで死ねー！」

どんだけ不純な理由なんだお前ら。そして一方の女性隊員はというと・・・

「そんな、直人様に子供がいるなんてー！」

「高町なのは！私たちはあなたを討つ！」

「あんな大きい子供なんてあなたそれでも局員だったのー！？」

「にゃあああ！誤解ですよー！」

なのはもなのはで大変なことになっている。俺たちに襲ってくる局員は全員血の涙で襲ってくる。

「くっ！リミットブレイク！」

『リミットブレイク！』

「全力全開！」

『ロードカートリッジ』

「紅蓮・・・」

「ディバイーン・・・」

俺たちは襲ってくる局員たちに全力をぶつける。

「雷空！」

「バスター！」

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！』

こうして半数がリタイア。そのまま俺たちは呆然とする局員たちを引き離す。順位は・・・二位!?

「一位は・・・なるほど、サフィラとジュリアか!」

あいつらはなんだかリゾートが目的みたいだし、まずいな・・・

「急ぐぞなのは!」

「うん!」

こうして俺となのははあの二人を追った。

追っていると、途中途中休憩しているのか、ようやく見えてきた。最高速度なのでこれ以上は出せない物の、狙うことはできる。

「なのは!」

「うん、直人君!アクセル・・・シューット!」

アクセルシューターが二人へ行く。しかし、それに気がついたサフィラが無数の剣を出し、それを斬り払った。なるほど、一筋縄じゃいかないか・・・!

「なのはさんに直人さんですか、よく追いつきましたね」

「二人はさっさと前行ってるから追いつくのは大変だったよ。他のメンバーはどうした?」

「多分伸びてますね。直人さんたちの攻撃で」

なるほど、自分たちだけでもゴールできることになってた訳か。ちなみにルールの中ではチームの全員がゴールしなければいけないというルールではない。というのも、早くゴールすることで個人賞がもらえるからだ。

「ちなみに個人賞は豪華なアイスセットですから、負けませんよ」

なんで大会の主催者は女性の心をくすぐるようなものしか景品に出さないんだ？

「ま、どちらにしろ一位独走にはお前ら倒さないとな」

「上等です！」

こうして第二ラウンドスタートとなった。

「ブレード・ダンシング！」

「7本の剣が宙に！？」

サフィラは剣を持ちながら俺に襲ってくる。なるほど、民族でもありがちな『演舞』だな。こいつはハンパねぇ！

「くっ！メシア！」

『リミットブレイク』

リミットブレイクしてもぎりぎりで追うことができるほど速い。こ

いつ、強くなってるな・・・！

なのはｓｉｄｅ

「ランサーシュート」

「シューット！」

互いの光弾がぶつかり合う。なるほど、強いね・・・でも！

「私は負けないよ！」

「私も負けません！」

今度はジュリアが槍に戻して突っ込んでくる。エリオより速い！？

「っ！」

「知ってますよ、なのはさんが接近戦が苦手なのくらい！」

「レイジングハート！」

『エクシードモード』

私はエクシードモードで対抗する。これは本気にならないとまずいね！

「ディバイィン・・・バスター！」

「ツインバスター！スタンバイ！ファイア！」

今度はジュリアの分離した槍がビットになる。私のブラスターと似てる！って、言ってる場合じゃなかった。押されてる！

「くっうう！」

「ふっうぅ！」

互いの力が均衡を崩し、強い光が迸った。

「うっ！」

「きゃっ！」

直人ｓｉｄｅ

あっちすごいことになってる。大丈夫かよ。

「余所見して大丈夫ですか！直人さん！」

「くっ！」

こいつ、本当に強くなったな・・・！

「今度は新技ですよ！行きます！さんグレビエント・ドラゴン！」

砂鉄の竜巻が龍になって俺に襲い掛かる。こいつ、やる！

「メシア！カートリッジロード！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷龍斬波！」

いつもの龍斬波よりは出力がないが、しょうがない。これでもいけるはず！

「「いけえええええ！！！！！」」

激しい爆発が起きる。これはまずい・・・！

「もらいました！」

「なんの！」

再び剣と剣が交わる。これなら行ける！

「くっ！マグナショット！」

「ちっ！」

「知ってますよ直人さん！直人さんが遠距離、中距離の対処が少ないのくらい！」

スバルｓｉｄｅ

さっきも戦ってたけど、二人ともすごーい・・・

「すごい二人とも！直人兄ぃとあそこまで・・・！」

「どうやら、高町や直人の力などを分析して挑んでいるようだな」

シグナム副隊長の言葉に、私は首を傾げた。

「そーなんですか？」

「よく見ろ、あいつら互いに苦手な先方が有利になる相手同士で戦ってんじゃねーか」

「副隊長の言うとおりだわ。あの二人、あそこまで強いなんて」

私たちはそのまま観戦を続けた。

直人ｓｉｄｅ

いつの間にか俺となのはは並んで攻撃をしている。こうでないと、二人に対処しながら進めないからだ。

「次で決めるよ！直人君！」

「ああ！行くぞなのは！」

「ジュリアさん！行きます！」

「ええ！行くわよサフィ！」

互いに攻撃をしようとしたその時・・・

『ゴール！』

「「「「は？」」」」

『一位は航空部隊だ！』

モニターには局員らしき男がゴールするのが映された。まさか・・・

「私たちが戦ってるところを隠れて通ったの！？」

「そ、そんな・・・！」

また決着が着かなかったよ。司会者、あんた狙ってんのか？

『狙ってませんよー！』

聞こえてんのかよ！

「では休憩を挟んで最終種目に入りますので！休憩にしてください！」

どうやら、大会は次で決着が着くようだ。

第十四話「秋のスポーツ大会（中編）」（後書き）

秋風「ふぅ・・・」

直人「なにため息ついてんの？」

秋風「同時連載ってきついな」

直人「何を今更。頑張れよ」

秋風「おーう・・・」

ナナシ「やっほー！」

直人「あ、ナナシ」

ナナシ「初めましてや。どや？最近」

直人「どうって？」

ナナシ「フラグ立ててどうかと思うてな」

秋風「何言っているナナシ。もうこいつは確定まで持ってるから」

ナナシ「なるほど」

直人「ナナシ、首飛ばそうか？」

ナナシ「勘弁してーなー！たこ焼きあげるから！」

秋風「関西人だから？」

ナナシ「途中のコンビニで偶然。」

直人「なんだそりゃあ！」

ナナシ「ま、ええか。でもここ可愛い子おらへんのか？」

マリカ「主―、お茶もって来ましたよー」

ナナシ「おったー！」

マリカ「きゃあああああ！？何ですかあなたぁ！」

直人「落ち着けマリカ。今回のゲストだ」

マリカ「そうですけどって、どこ触って！」

ナナシ「なかなかええからｄブルアァァァ！！」

マリカ「い、今までのゲストの中で一番最低です！」

秋風「まあまあ、胸触られたぐらいで・・・・」

マリカ「男と女では触られたら色々と違うんです！」

直人「おーい、ナナシー、生きてるかー？」

ナナシ「あかん、綺麗な川と花畑とかが見える・・・・」

秋風「間違っても渡るなよナナシ。炎の堕天使に戻れなくなるよ」

ナナシ「そ、そら困る・・・ナンバーズのみんなも待っとるしな」

直人「そういえばお前はナンバーズにはやさしいよな」

ナナシ「そらあんさんもやないか。まあこっちの世界のナンバーズはワイのもんやけどな」

秋風「特にノーヴェとか？」

ナナシ「うーん、まあ可愛いやつや。ツンデレっていうんや」

直人「大丈夫、お前の敵となる部隊にもっとすごいツンデレいるから」

ナナシ「そら楽しみや」

秋風「俺はこの後多分だけどナナシは全員とフラグが立つと思う」

ナナシ「そらすごい、直人より多い一夫多妻制やないか」

直人「嬉しいのかよ」

ナナシ「そらそうや。ええ匂いやで？」

直人「ノーコメントで」

秋風「おっと、そろそろ時間かな？」

ナナシ「せやね、もうアジト戻る。ほなサイナラ」

直人「まあ待て。これをやるよ」

ナナシ「これはチョコレート・・・ほう、ハヤトに聞いたことあるもんか？」

秋風「ああ、あまったから持っててよ。あとこれ、メルのシルバーリング。前のゲストにもあげたから」

ナナシ「なかなかええな、これ。ありがとうさん！ほな！」

ナナシ（ジョーカー？）　出演作品　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～炎の堕天使～

スカリエッティのアジトにたどり着いた記憶喪失の男。ノーヴェがナナシと命名。紅麗の転移のタイミングと合わせても、ジョーカーである可能性が高い。女たらしで、スカリエッティをどう思ってるかは不明。今のところはまだ活躍がないが、今後活躍するとおもう。

秋風「ちなみに現在新連載で魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～星を見つめる者～を連載中！ぜひ見てくださいね！」

直人「次回、第十五話『秋のスポーツ大会（後編）』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十五話「秋のスポーツ大会（後編）」（前書き）

すいません、旅行で更新ができませんでした！

そして現在スランプでかなり文が駄文です。もうしわけありませんけど・・・

では本編どうぞ♪

第十五話「秋のスポーツ大会（後編）」

レースの後、とりあえず休憩。そして最後の種目となった。最終種目ということは、ようやくこのスポーツ大会から開放されるということだ。

「直人君！がんばるよ！」

「ああ、そうだな。」

今のところ機動六課と地上本部は2位タイ。一位は先ほどのレースで勝利した航空部隊だ。この最終種目は負けられないだろうな・・・

・

「でも、最終種目ってなんだろうね」

そう、未だに発表されない競技の内容。せめて最後くらい、スポーツ大会らしく終わって欲しいと思う。

『お待たせしました競技を発表します！』

ようやくか・・・さて、どんな競技だ？

『競技は予定していたスポーツを取り消し、魔法を使ったバトルロワイヤルです！』

えー・・・なんでバトルロワイヤル？

『ルールは簡単！通常の模擬戦同様、敵を倒せばよし！』

なんだそれ。というか、なんでスポーツを取り消したんだよ。

『一応なぜ全体模擬戦かというと、もはや作者に・・・ゲフン、第一試合で競技場が滅茶苦茶だからです！』

今何か変なことが聞こえたが気のせいだろう。で、まあ周りを見ると、さっき俺たちが暴れたせいで滅茶苦茶だったりする。演習場が。

『では！１０分後スタートです！』

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ここは競技場の地下。そこには男が数人いた。

「兄貴！これでＯＫだ！」

「ああ、管理局の犬どもめ、一泡吹かせてくれるわ」

そこにあるのはこの世界ではあってはならない時計がついた火薬。それは約２０分後に始動する。

「さあ行くぞ！これで後は競技で弱ったやつらを叩くだけだ！」

こうして数人の男たち、テロリスト集団はその地下から脱出した。

直人ｓｉｄｅ

とりあえず俺たちは作戦会議中。

「いい？多分また私たちに一斉に来ると思うの、だからね？ゴニョゴニョ・・・」
「なるほど、それじゃあ・・・」
「そうだね、それで行こう」
「せや、これで行ける！」
『さあ！準備はよろしいですか？レディー・・・ゴー！』
こうして競技、もとい戦闘スタート
『死ねぇー英雄！』
『直人様のためにここで死んでください！』
3人のファンである男性局員、そして俺のファン？らしき女性局員が一斉に襲い掛かる。
「なのは、フェイト！」
「全力全開！」
「疾風迅雷！」
すでに魔力をチャージしたなのはとフェイト。それによって局員たちの表情がひきつった。
「「ブラストシューット！」」

『ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！』

これでかなりの人数を排除に成功。さて、次は俺とはやてだ。

「はやて！」

「うん！響け、終焉の笛！ラグナロク！」

「蒼天・龍斬波！」

二人の主砲級の攻撃を後から来る局員にぶつける。

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！』

はい、掃除おしまい！

「さて、残るは・・・・と」

そこに残っているのは数人の局員と、サフィラとジュリア

「お前らとの決着から行きますか」

「はい、お願いします！」

「ジュリア今度は負けないよ？」

「お願いします！」

こうして決着のついていないこの戦いがスタートした。

「はあああああああ！！！！」

「召還！クワトロブレイド！」

サフィラの手に四つの剣。それぞれが連結し、長刀っぽくなる。これはまた・・・

「たあああああああああ！！！！」

互いの剣が交わり、火花が飛び散る。

「メシア！2フォーム！」

『2フォーム！』

手数が足りないならこちらも増やす！襲ってくる剣を捌きながら、反撃に転じる。

「はあっ！」

「うぅっ！」

よろけた。チャンス！

「これで終わりだ！」

「まだです！マグナショット！ディフシオン（拡散）！」

放たれた剣が分裂し、俺に襲い掛かる。

「なるほど、考えたな。だが・・・マリカ！」

『ええ主！クリスタルダガー！』

「同じようなのはある！」

互いに剣が相殺され、爆発が起きる。それを合図に、再び剣を握り締めて空を蹴った。

「「はあああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

互いの剣が音を鳴らし、すれ違った。そしてサフィラは俺の当てた一閃により下に落ちた。

「ったく・・・」

俺は気絶したサフィラを抱え、地面に寝かせることにした。あいつら、大丈夫かな・・・

フェイトｓｉｄｅ

とりあえず残った局員はなのはとはやてがしてる。私はジュリアと戦う。ジュリアのスラークと私のバルディッシュの魔力刃がぶつかり合う。

「っく！さすがフェイトさんです！」

「ありがとう、でもジュリアも強いね」

「どうも！私もただではやられませんよ！」

再び離れて刃がぶつかり合う。

「バルディッシュ！プラズマバレット！」

『プラズマバレット』

「ランサーレイ！」

『ランサーレイ』

互いの魔力弾がぶつかり合い、爆発が起きる。すると、ジュリアが突っ込んでくる。

「バルディッシュ！ハーケンフォーム」

『ハーケンフォーム』

バルディッシュをハーケンにして受け止めた。なんて威力！

「スラーク！」

『エアダッシュ』

急に視界からジュリアが消えた。そして背後に現れる。これは・・・！

「はぁ！」

「っく！」

なんとかガードするけど、かなり強い。今の、私のブリッツアクションみたい。ジュリア、本当に強くなった。

「さて、どんどん行くよ！ジュリア」

「望むところです、フェイトさん！」

「バルディッシュ！」

『ザンバーフォーム』

私はザンバーを構える。すると、ジュリアもカートリッジをロードした。

「スラーク、行くよ！」

『了解した。スタートアップ』

スラークの外装が変わった。さらに斧のような物がでる。これは・・・？

「これは対騎士用の突撃フォーム、スラークアクスフォームです」

なるほど、同じように形状変化があるんだ。
「なら、改めて・・・」
「はい、尋常に・・・」
「「勝負！」」
再び戦闘が再開した。
直人ｓｉｄｅ
上でフェイトがやりあってるけど、あれはもう援護要らないな。
「さて、なのはたちも終わってるし、もうすぐ決着が・・・」
――ドオォォォン！
突如地下から爆発が起きる。なんだ！？上を見ると、なにやら数人の男たちがいた。
『我々はミッドチルダ解放軍だ！管理局の犬どもに覚悟しろ！』
どうやらテロリストのようだ。
「聞いたことないぞ、解放軍なんて」
『うるせぇ英雄！こいつが目にはいらねえか！』

「パパぁ！」

「ヴィ、ヴィヴィオ！？」

そこに捕まっているのはヴィヴィオだった。いつの間に応援席からいなくなったんだ！？

『さあ！おとなしく武器を捨てろ！』

「くっ、くそ！」

これでは手出しができない。でも、なにか手は・・・

『速く捨てろ！』

「えい！」

すると抱えられていたヴィヴィオが足を振り上げ、その足が振り子のように後ろへ行き、男の大事な部分にヒットした。

「――――――！」

観客席の男性局員や観客はそれに恐怖し、その部分を押さえる。しかし、それによってヴィヴィオは会場へと落ちていく。

「きゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「ヴィヴィオ！」

落下するヴィヴィオを支え、メシアを強く握った。

「ヴィヴィオ！」

「パパ！」

「よかった、怪我はないな・・・てめぇら・・・生きて帰れると思うなよ！」

ヴィヴィオをはやてに預けると、デバイス複合によってメシアスワローを構えた。

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「真・蒼天龍斬波！」

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！』

魔力を全て使い、テロリストを殲滅した。

こうして大会は中止。まあ、一応活躍したと言うことでヴィヴィオと俺がいる機動六課にリゾートの権利を渡された。

「やったね直人君！」

「ヴィヴィオ、大丈夫？怪我はない？」

「ほんまや、ヴィヴィオ、知らない人にはついてったらあかんで？」

ヴィヴィオの話ではヴィヴィオはお菓子を上げるからと付いて行って捕まったらしい。

「ごめんなさい・・・」

「でもよかった、ヴィヴィオが無事で」

俺はヴィヴィオをやさしく撫でる。

「直人さん、みなさん」

「ジュリア、サフィラ」

激闘を繰り広げた二人がいた。

「お疲れさま」

「ありがとうございました。乾杯です」

「そんなことないよ？ジュリアもサフィラも、強くなったね」

「またやろう、ジュリア」

「はい、是非」

こうしてスポーツ大会は幕を閉じた。そして司会者一人が残る。

『とりあえず司会は私、秋風でした！』

おい・・・

第十五話「秋のスポーツ大会（後編）」（後書き）

直人「なんか、ぐたぐただったね」

秋風「のりでやっちゃだめだね。小説は」

直人「大丈夫か？ふらふらじゃん」

秋風「もう、寝ます・・・」

直人「というか、スポーツのかけらもなかったよな」

秋風「本当にすいません、次回は真面目路線に戻りますので・・・」

直人「次回、第十六話『紫色の輝き』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十六話「紫色の光」（前書き）

今回はドラマＣＤをオリジナルネタにしました。聞いて涙しました。

それでは、本編どうぞ♪

第十六話「紫色の光」

スポーツ大会から3日後、俺は聖王病院を訪れていた。理由はある人物に会うためだ。病室を開け、その人物に挨拶した。

「久しぶり、ルーテシア」

「うん、直人・・・」

そう、ここはルーテシアの母、メガーヌさんが入院している場所だ。

「こんにちは、メガーヌさん」

「・・・・・・・・」

声を掛けるも、返答はない。目は空ろで輝きがなく、ただそこにいるだけだった。

「お母さん、ずっとこの調子なの・・・」

「そんな・・・」

原因不明の植物人間の状態。これは何故なのだろうか?それが疑問だ。すると、スカリエッティが部屋に入ってきた。

「やあ、ルーテシア、それに直人」

「ドクター・・・」

「スカリエッティか。」

「メガーヌはまだ目が覚めないかい？」

スカリエッティはメガーヌを見る。ルーテシアは頷いた。

「話が違うぞスカリエッティ、メガーヌさんは・・・」

「ああ、本来であればすぐにでも目を覚ますはずだった。だが、イレギュラーがあった」

「イレギュラー？」

「カオスさ・・・」

その言葉に俺は驚く、まさか・・・

「カオスの闇が、メガーヌさんを蝕んでいる？」

「そのとおりさ」

その後のスカリエッティの話によれば、メガーヌさんは現在性質の悪い風邪をひいているのだという。カオスの混沌の粒子がメガーヌさんの体内にある状態。ウィルスが入り込んでいるのだ。あの時唯一昏睡状態にあったメガーヌさんは、体に一番混沌の粒子の影響を受けているからだと言う。

「治す方法は？」

「現在調べている。無限書庫などでもね」

「そうか・・・」

『マスター』

「ん？ブレイブスワロー？」

『メガーヌさんの治療方法、あるかもしれません』

「本当か！？」

ブレイブスワローの言葉に、ルーテシアも期待の目でブレイブスワローを見た。

『はい、昔聖王オリヴィエが治療した方法なら、あるいは・・・』

「その方法は？」

『その方法はある薬草を使うことです』

「薬草？」

『精霊の草（スピリットリーフ）と呼ばれるものがあります。』

「精霊の草？」

聞いたことのない名前だな。

『は混沌とは真逆の力、『調和』を持つと言われています』

「なるほど、それによって相殺すると？」

『はい、あるのはスプールスと呼ばれる世界です』

ん？それって確かキャロが前にいた世界じゃないか？

「わかった、行こう」

「まって、私も行く・・・」

「でもメガーヌさんを見てなきゃだめだろ？」

「私、お母さんを助けたい・・・」

強い意志を持った目が、俺を見ている。

「一緒に連れて行ってあげるといい。」

「スカリエッティ？」

「私が彼女を診ておこう。ルーテシアも、一度言い出したら聞かないからね」

「・・・わかった、行こう！」

こうして、ルーテシアとともに、スプールスに向かうこととなった。

管理世界６１番「スプールス」それは自然が多く、様々な動物などが暮らしている。現在でも確認されていない新種の動植物、昆虫な

どが多く存在するという。管理局では自然保護区のしていがなされており、キャロが以前所属していた場所でもある。

「ここがスプールスか」

「お兄ちゃん、この近くに私がお世話になった保護地区の局員の人がいますから、そこに行きましょう」

「ああ、そうだなキャロ」

「それにしてもすごい自然・・・綺麗だなぁ・・・」

今回はキャロとエリオ、つまりライトニングの二人が同行している。それというのも、キャロが以前ここで勤めているのが理由で、どうせならとエリオもついてきている。すると、遠くにテントが見えた。

「ミラさん！タントさん！」

「キャロ！」

ミラ、タントと呼ばれる女性がキャロを見て驚きつつも、喜びの笑みでミラと呼ばれる女性がキャロを抱きしめる。

「キャロ、今日はどうしたの・・・？」

「はい、実は・・・」

こうして、キャロが今回の事情を説明した。

「・・・というわけです」

「なるほど、精霊の草か・・・」

「あれって、確か・・・」

「ああ、特に絶滅危惧には瀕してないが、環境が特殊なんだよな」

「特殊？」

「ええ、この自然保護区から外れた危険指定の自然区域の奥地にある泉にあるんです」

なるほど、一筋縄じゃいかないのか・・・

「行く先々にも食人植物などもいますし、かなり危険です」

「それでも、行く。お母さんのために・・・」

「そうだな、行こう」

「なら私も行きます！」

「キュルク～！」

「僕も！」

当然こういうと思ったよ。でも正直危険だよな。

「でもキャロ、危ないよ！？」

「そうだぞキャロ、道中は危険ばかりだ」

「それでも、大切な友達のためにも頑張るんです！」

そう、キャロとエリオはルーテシアと友達になっていた。歳が近いことと、互いにあるその暗い過去。それによって互いを励まし、仲良くするようになった。

「そっか、キャロも強くなったね・・・」

「見ないうちに一回り大きくなったな」

二人の言葉に、キャロは嬉しそうだった。

「さあ、行くぞ！」

こうして奥地へと進むことになった。

自然保護区から外れるその理由は簡単。「人に害をなす物」だからだ。食人植物に底なし沼。何でもありだ。

「うわぁ！？」

「エリオ君！？」

エリオが底なし沼にはまる。

「ガリュー！」

ルーテシアの言葉に、ガリューが反応してエリオを救い出した。

「あ、ありがとガリュー」

ガリューは一度頷いた。ガリューは強く、ルーテシアが最も信頼する仲間であり、召還の契約者だ。その虫である点や、マフラーをつけていることから色々と想像してしまうが、それは置いておこう。

「きしゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

今度は食人植物か・・・

「蒼雷、一閃！」

「フリード！ブラストフレア！」

フリードの吐く火と、俺の一閃によって食人植物が吹き飛ぶ。

「ったく、三歩歩くごとにバトルなんてきりがないな・・・・」

「遠いね・・・」

「ああ、でも精霊の草はなぜそんなところに？」

『オリヴィエの話では、その泉が世界で一番澄んでいるからだそうです』

なるほど、だから精霊に好まれると？

「でもブレイブスワロー、どうして精霊の草と呼ばれているの？」

キャロの疑問。確かにな。

『なんでも、多重に重なる葉が精霊のように見えるからだそうです』

「ふーん・・・」

どんなものなのか楽しみだな。

「きしゃあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

またか・・・

「蒼雷一閃！」

俺たちの苦労は続く。

それから2時間後、すっかりあたりは暗くなった。これ以上進むのは困難なので、広い場所で野宿となった。夜間は危険区域の食人植物はともかく、猛獣が姿を現すのだという。なので、火をたいて俺が見張りをすることとなった。

「直人・・・」

「ルーテシア、眠れないのか？」

「うん・・・」

ルーテシアは俺の隣に座る。

「お母さん、心配か？」

「うん・・・」

ルーテシアは頷き、火を見つめる。

「お母さん、目が覚めてくれるかな・・・」

「ああ、草を取ってくればきっとな」

「でも、目が覚めたらどうすればいいのかわからない・・・」

ルーテシアは母とあった記憶はほとんどないらしい。俺はため息をつく。どうして、こんな子供たちばかりが犠牲になるのだろうか。

「ルーテシア、俺は昔、両親が帰ってこなかったことがあったんだ」

「え？」

「両親はもういない。でも、そのいた頃、一度帰ってこなかった日があった」

その日は俺と姉で震えていた。その二人しかいない恐怖と寂しさ。

「でも、姉さんは俺にこう言った」

『帰ってきたら、お帰りって言おう』

「だってさ」

「・・・・・・・・」

「言いたい気持ちはたくさんある。でも、まずは帰ってきた人に挨拶して、思いっきり泣けばいいさ」

「おかえりって・・・・言う・・・」

「そう、そのとおり」

俺はにっこりと笑い、ルーテシアの髪をなでる。

「だからそのためにも、がんばろうな？」

「うん・・・」

こうして、夜が過ぎる。

次の日の早朝、俺たちは出発する。相変わらず敵は多いが、とうとう、その泉に着いた。

「これが・・・精霊の草」

そこにあるのは綺麗な泉に輝く草。確かに、一枚一枚重なっている葉は本などに登場する精霊のようだ。

「これで、お母さんが・・・」

その瞬間、泉から何かが出現した。それは水色の竜だった。

「な！？」

「まさか、ここを守ってるのか！？」

「ガアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「エリオ！」

「はい！兄さん！」

二人で斬りかかるが、鱗が硬いためか、刃が通らない。そして尻尾に吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

「うっ！」

「蒼穹（そうきゅう）を奔る白き閃光。我が翼となり、天を翔けよ。来（こ）よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

フリードが巨大化し、戦う。竜VS竜・・・滅多に見ることができない戦いだ。

「があああああああああああああ！！！！！！！！！」

フリードが竜に噛み付く。しかし、そこで俺はあることに気がついた。

「キャロ！フリードを戻せ！」

「え！？」

「いいから早くしろ！」

「は、はい！」

こうしてフリードは元に戻り、それによって水にいた竜もおとなしくなった。

「お前・・・ここを守ってたのもあるけど、子供を、守ってたのか」

そこにあるのは竜の卵だ。おそらく、俺たちが卵を奪いに来たと勘違いしたんだろう。

「なあ、実はこいつの母親もさ、そこにある草がないと元気になれないんだ。頼む、俺たちにその草を譲ってくれ」

「お願い、お母さんを助けたいの」

俺とルーテシアの言葉に、竜は沈黙する。そして反対を向き、卵の近くにあった草を2、3本加え、ルーテシアに渡した。

「ありがとう・・・」

ルーテシアの言葉に、竜は頷き、卵の近くでまた目を閉じた。

「さあ、早く戻ろう！」

こうして危険区域をフリードに乗って脱出。俺たちは聖王協会へと帰還した。

メガーヌｓｉｄｅ

ここはどこからしら・・・私は何をしていたのかしら・・・あら、先に見える紫の綺麗な光、あれは何かしら?私はそこまで歩き、手を伸ばす。すると、小さな手が私の手を掴む。それは小さくもやさしく、暖かい手だった。この手は・・・

「ルーテシア?」

私は現実の世界へと、娘が待つ世界へと戻ることができた。

直人ｓｉｄｅ

「・・・よかった、目が覚めましたか」

「あなたは?」

「私は時空管理局嘱託魔導士の井上直人です。」

「お、母さん・・・」

「ルーテシア・・・」

メガーヌさんも成長した自分の子供に驚いているな。俺は現状と、

今までのことを説明した。

「そうだったんですか・・・」

「ルーテシアが頑張りましたから」

俺の言葉に、車椅子に座ったメガーヌさんがルーテシアを見た。

「ルーテシア・・・・・・」

メガーヌさんが涙を目に溜めながらルーテシアの手を取る。

「眠ってる間に苦労をかけてごめんね。これからはずっと一緒にいるから」

メガーヌさんの言葉に、無表情だったルーテシアの顔がだんだんと歪む。そして涙をぼろぼろとこぼし、抱きつく。そして・・・

「おかえりなさい」

ただ一言、ルーテシアはそう言った。俺達はそれを離れて見守っていた。こうして騒動が終わり、俺とキャロ、エリオは帰路についた。

第十六話「紫色の光」（後書き）

秋風「今回はドラマＣＤを聞いて書いてみました」

直人「これは感動できるよな・・・・さて、今回はゲストを招き（らち）しました」

ハヤト「ガクガク・・・」

直人「どういうことか説明しようか、ハヤト君」

ハヤト「ひいぃぃぃぃ！」

秋風「落ち着けって、でもまあ、チョコも無残な結果に終わったし、ティアナの気持ちにも気がつかないし、これは読者としてもイラッっとするよね」

ハヤト「しっしらないって！」

直人「ほう、そういうのはこの口か？」

ハヤト「待って！俺死んだら話終わっちゃうよ？」

秋風「大丈夫、死なない程度にしておくから」

ハヤト「ブレイブハート！助けて！」

ブレイブハート「今回は貴方が悪いです。反省しなさい」

直人「さあて、最初はどこがいい？」

秋風「足あたりかな？」

ハヤト「待って待って！」

カシャッ

ハヤト「？」

直人「ふっふっふ・・・」

秋風「ハヤトの恥ずかしい写真ゲット！」

ハヤト「なにぃ！」

直人「今回はこれをさき～とある新人の日常～のコーナーに送り、自動的に貼り付けられるようにした。」

秋風「頑張ってね、あれは1秒で5枚に増えるから」

ハヤト「えええええええええええええええええええええええええええ！？」

直人「さてと、では今回はこれをやろう。」

ハヤト「これは？」

直人「ツンデレのデレがめちゃくちゃでかくなるドリンクだ」

なのは「なのはさん登場♪」

ハヤト「え！？」

なのは「帰りは異次元の穴に向けて撃ってあげるから、頑張ってね？」

ハヤト「え、ちょっとまっ・・・」

なのは「スターライトォ・・・」

レイジングハート「ブレイブハート、自分にだけバリアを」

ブレイブハート「了解しました姉上」

なのは「バスター！」

ハヤト「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

直人「さて、頑張れよ？ハヤト」

秋風「ではまたｗ」

ハヤト・ロックウェル　出演作品　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～とある新人の日常～

前回に表示してから、スバル、ティアナからフラグを確立。今後を楽しみです。

直人「次回、第十七話『消えない傷跡』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十七話「消えない傷跡」（前書き）

今回もアンケートがあります。皆さんよろしくお願いします

では本編どうぞ♪

第十七話「消えない傷跡」

そこは燃え盛る建造物の中、そこに俺はいた。

「ここは・・・・」

そこは見たことのある建物だった。そして、一人の子供が泣いていた。それは・・・

「俺・・・？」

燃え盛る炎の中、泣いているのは幼い頃の俺だった。

「うっ、ううぅ・・・」

だが倒れているのは母さんじゃない・・・そこにいたのは・・・

「なのは・・・！？」

そこに倒れているのはなのはだった。そして、泣いている子供はヴィヴィオに変わった。そして建物は機動六課へと変わった。そこに倒れる隊員たち・・・これはいったい！？

「う、うわあああああああ！！！！！！！」

俺は目の前が真っ暗になった。

「う、うわあああああああ！！！！！！！」

俺はそこで目を覚ました。ベッドにはヴィヴィオが寝ている。なのはとはやては既に起きて仕事を始めているのだろう。そして俺の声でフェイトが驚いて起きていた。シエルたちもまだ寝ている。

「な、直人!?どうしたの!?」

「あ、ああ・・・」

「お、落ち着いて!直人!」

「あ・・・フェイ、ト」

「大丈夫?」

フェイトが俺に抱きつく。

「大丈夫だよ直人、私はここにいるよ?」

「あ・・・」

一層強く俺を抱きしめるフェイト。

「また、夢を見たんだね?」

「・・・ああ」

「大丈夫、私たちはここにいるよ?」

「・・・ごめん」

「なんで謝るの、大丈夫だよ？」

フェイトが俺の謝罪に困ったように笑っていた。

「・・・もう、大丈夫だ。シャワー浴びてくる」

汗だくだった。もうそれは酷いほどに。俺は脱衣所で服を脱ぐと、シャワーを浴びる。この部屋は日本使用の風呂となっているので、少し広い浴槽がある。これもはやてのオーダーだったりする。

「涙・・・」

いつの間にか零れ落ちていた涙をふき取り、俺はシャワーを浴びて浴槽に浸かった。

「なんなんだ・・・あの夢は」

俺はため息をつきながら目を閉じる。今まで見た悪夢・・・それ以上に性質が悪いものだ。いったいなんだというんだろうか。

「まさか、現実に起こるのか？あれが・・・」

ヴィヴィオが泣き、そしてなのはたちが倒れる夢。あんな夢を見て俺は不安だった。何故、あんな夢を見たのかわからない。すると、バスルームの扉が開く。ヴィヴィオが起きたのか？

「直人♪」

「フェ、フェイト！？」

そこにいたのは、タオル一枚に身を包んだフェイトだった。

「な、なんで・・・」

「だって私も汗掻いちゃったから」

「そ、そうじゃなくて・・・！」

「いいからいいから」

フェイトはそのまま風呂に入る。さすがに恥ずかしいのか、俺と背中合わせで風呂に入った。

「・・・・・・」

「あの、直人？」

「何？」

「もしかして、怒ってる？」

「いや・・・」

俺が言うと、フェイトが笑う。俺は笑い事じゃないけど。

「あのね・・・私も、悪い夢を見たの」

「え？」

「みんなが、死んじゃう夢・・・」

フェイトも、見ていた・・・？俺と同じ夢を？

「どうして・・・」

「わからない。でも、本当に起こってしまいそうで、たまらなく怖い」

フェイトの声が震えている。そしてフェイトは後ろから俺に抱きついた。

「私も不安でたまらない。だから今は、こうさせて？直人・・・」

「ああ、そうだな・・・」

そんなことをして、俺たちは風呂を出た。すると・・・

「うわあああああああああああああああん！！！！！！！！！！！！！！！」

ヴィヴィオの泣き声がした。急いで着替え、部屋に戻る。

「ヴィヴィオ！？どうした！？」

「うわあああああああああああん！みんな死んじゃったぁぁぁぁ！！！！！！！！」

「落ち着けヴィヴィオ、それはただの夢だ！」

俺がヴィヴィオを抱き、よしよしとあやす。

「う・・・夢？」

「そうだよヴィヴィオ、直人パパもフェイトママも、ちゃんとここにいるよ？」

「うわあああん！パパァ！」

ヴィヴィオは大泣きだった。俺と同じ夢を見ていたなら、無理もないかも知れない。こうしてこの騒動は隊舎の中へと広がったのだった。

食堂で朝食をとる俺たちだが、全員が暗かった。なのは、はやても同じ夢を見たのだと言う。

「どうして・・・・」

「ここまで来ると、恐ろしいで」

「みんな、どうしたの？」

アリスが不思議そうに言う。俺はアリスに事情を説明した。

「・・・もしかして」

アリスは俺の頭に触れた。

「アリス、何を？」

「少し、黙る」

「あ、ああ・・・・」

すると、俺の頭から何かが出てくる。それは黒い煙。

「「「え!?」」」

「ひっ!」

みんなが驚きの声を上げた。これは・・・!?

「これはカオスの残滓・・・多分、睡眠している時の因子の活性化が悪夢を見せたの」

「それじゃあ・・・」

「多分、カオスの戦いの時のがまだ残っていた」

つまり、メガーヌさんと同じだ。メガーヌさんは眠っていたことからこうなったが、俺たちは健康だったためか、その人間の弱い部分を突かれたのだろう。

「大丈夫、アリスが全部吸収するから」

こうして、なのは、フェイト、はやて、ヴィヴィオは因子を取り除かれた。

「ありがとうアリス」

「どういたしまして、これでもう安心」

こうして、この騒動は治まった。
騒動から2時間後。俺ははやてに呼び出された。
「どうしたはやて？」
「あんな、この前テロリストおったやろ？」
ああ、スポーツ大会の時のな。
「あの爆弾、質量兵器みたいなんよ」
つまりダイナマイト？
「で、ここがそれを密売していたアジトや」
モニターに移される。つまり・・・
「俺に検挙しろって？」
「せや」
「なら、そうだな・・・フェイトかティアナを連れて行くか」
「フェイトちゃん、ティアナは本局や。だから直人君に頼んだんやん」
まだ嘱託だからか、となると・・・しょうがない
「シエルたちを連れてく」

「ええんか？」

「あいつらも時期に管理局員になりたいと言い出すだろうし、いい経験だ。報告はよろしく、はやて」

こうして、シエルたちを連れて俺はそのアジトへ向かうことになった。

「シエル、どうだ？」

「人の気配はあります。用心が必要かと」

「パパ、なんでこんなコソコソするんだー？」

「ばか者ルミノ、資料を見ろ。この組織は人身売買も行っているだろう。人質をとられるのは厄介だ」

「さすがだセレス、やっぱり母親似だな」

俺が褒めると、セレスはちょっと困った顔になった。

「正直、将来は母君よりは胸が大きくなりたいものだ」

「あ、そう・・・」

とりあえず裏から周り、侵入する。しかし、おかしい。

「妙だな、人がいない？」

「ですね、見張りも・・・」

「生き物の気配もない・・・」

「どうなっている、まさかはずれか?」

いや、はやての資料では確かにここのはずだ。何かの罠か?すると、シエルが立ち止まった。

「父上!」

「どうした」

「これを・・・」

そこにあるのは組織の男たちの死体だった。おそらく組織の人間だったのだろう。

「誰かの、襲撃を受けたのか・・・?」

それは無残にも斬られたり、こげている。

「これは、炎の魔法でしょうか」

煤となった人の形のなにか。おそらく燃やされた人間だ。この荒れていない様子だと、壊滅状態か・・・

「奥へ、行ってみよう」

さらに奥に進むと、捕まったであろう女性たちがいた。

「大丈夫ですか？」

「ひぃ！」

「安心してください、我々は時空管理局です。あなたたちを助けに来ました」

俺たちは彼女たちの拘束を解き、事情を聞いた。

「いったい、何が？」

「化け物が・・・」

「え？」

「化け物と、それを従えた人が、ここを襲撃して、『せいぜい恐怖しろ』って、私たちを残して奥へ」

「わかりました・・・シエル」

「はい」

「お前たちはここの人たちを保護、はやてに連絡してくれ」

シエルは頷くと、捕まった女性たちを連れ、外へと向かった。俺は暗い奥地を見つめる。

「行くか・・・」

こうして俺は奥へと進む。暗い階段、そこで見つかる、人間の臓器、麻薬、質量兵器、ありとあらゆるものが見つかっていく。俺は恐ろしいと思う。人間の欲望が。

「まだ、続くのか・・・」

「やっとか・・・」

終わらない地下へと続く階段。すると、ようやく終わりが見えた。

俺は扉を開ける。するとそこにいたのは・・・

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

三つ首を持った龍だった。

「化け物・・・か」

「くっくっく・・・」

「誰だ？」

そこにいるのは、髪が赤く、さらに赤い服を着た男。いや、服は赤黒い。あれはまさか、血！？

「よう、英雄？」

「・・・俺は嘱託魔導士、井上直人だ。お前はなんだ？」

「闇の使徒」

「！」

まさか、こんなところにいるとは！

「こんなところで、その闇の使徒が何をしてる？」

「決まってるさ、闇を集めている。人の心にある、闇をな」

「だから殺したのか、ここの組織の人間を」

「お前の仕事が減っただろ？」

「ふざけるな！どんな理由があっても、人が人の命を奪う理由はあったらいけない！」

俺はメシアを強く握る。マリカは今日いない。メシアとブレイブスワローだけで戦わなければならない。

「くっくっく・・・ご高説だね。ま、それが英雄だ。さあ始めようか・・・主役は俺様、闇の使徒が一人フィアマ・・・・貴様を浄化しよう」

「いいだろう、来い！」

こうして、俺の戦いは再び幕を開ける。

第十七話「消えない傷跡」（後書き）

直人「というわけで、バトルか」

秋風「つらい」

直人「がんばれ。で、今日はまたアンケートだろ？」

秋風「ああ、とりあえずこんな質問」

蒼天シリーズ３つ。それぞれＯＰ　と　ＥＤ　をつけるとしたらどんな曲？

秋風「私としてはＯＰは最初からテンポがいい曲。ＥＤはしんみりできる曲がいいです」

直人「一応アーティストは問いませんが、グループは不可です」

秋風「挿入歌でもＯＫ」

直人「たくさんの応募待ってます！」

秋風「ちなみに感想と一緒に感想のほうへお願いします」

直人「次回十八話『英雄の悲劇、その真実』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十八話「英雄の悲劇、その真実」（前書き）

今回はちょっと短いです。アンケート、まだまだ待ってます！
では本編どうぞ♪

第十八話「英雄の悲劇、その真実」

目の前に立つ男・・・フィアマは炎を纏ったトンファーを構えた。
あいつ、おそらくだけど、強い・・・

「さあ、始めようか・・・おっと、安心しなぁ、こいつは黙らせておくからよ」

龍が消える。あいつ、召喚なんかできるのか。だが、まどわされない。

「よく喋るな・・・さっさと来い」

その瞬間、フィアマと武器が交わる。俺もメシアを強く握った。

「楽しいなぁ！おい！」

「・・・・・はぁ！」

俺はメシアを振るい、フィアマを斬り飛ばした。しかし、手ごたえがない。今の・・・確かに当たったはずなのに。

「危なかったなぁ・・・」

「・・・メシア、今のは」

『はい、見切られていました。速いですね』

攻撃が当たる一瞬、フィアマは体を引いて避けていた。

「今度はこっちからいくぜぇ！」

「メシア！」

『5モード！』

俺は太刀でその攻撃を受ける。そして反撃。こいつ、なんて素早い動きを・・・！

「どうしたどうした！」

「リミットブレイク！」

『リミットブレイク！』

リミットブレイクによってスピードを上げ、攻撃する。

「ちったあやるなぁ・・・・・」

肩の傷をさすりながらフィアマが笑う。

「だが、俺のが速い」

一瞬で後ろに回られ、攻撃を受けて吹き飛ばされた。

「くそっ！」

「おいおい、しっかりしろよ。祭りはまだ始まったばかりだぜ？」

いったいなんなんだ?さっきから・・・体が、重い!恐れている?
俺が?たった一人の敵に、恐れているのか?いや、それよりも・・・

「英雄もたいしたことないな」

「お前、なんで速いんだ」

「はぁ?お前が遅いんだろ?」

俺が、遅い?あいつはまだ速くなれるのか?

「俺は火を見るのが好きでね。火を見てると心が躍るのさ」

すると一瞬、あの時のホテルの惨状が映った。そこに、フィアマがいたように見えた。なんでだ?なんでこんなビジョンが・・・

「何!?」

「くっくっく・・・楽しいねぇ、人間が恐怖したり、怒りを浮かべるのは」

「なんだと?」

「俺は負のエネルギーを集めるときは絶望から奪い取る。例えばそう、リゾートなんかの人が楽しいところに爆発させて絶望を奪い取る」

「・・・・な、に?」

「そうだなぁ・・・最近やってないけど、十数年前とかは大仕事し

たな。地球のリゾートを火事に見せて破壊したり。あれは楽しかったなぁ・・・」

「お前、今なんていった？」

「あん？だから言ってんだろ？リゾートを家事と装って潰したってよ」

まさか、いや間違いない、こいつが・・・こいつが俺の両親を・・・！

「うあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺はフィアマに襲い掛かる。

「うおっ！？やるようになったじゃねぇか」

「お前が、お前があのリゾートを！」

俺は言いながら斬りかかる。

「はっ！あそこにいたのか？ご愁傷さまだなぁ！」

フィアマは醜く顔を歪ませて笑い、トンファーを振るう。

「貴様が！母さんを！父さんを！」

「関係ないなぁ！」

互いに火花がはじける。

「よくも！よくもぉ！」

「ああ、あのホテルでかかったよな。潰しがいがあったぜ」

「貴様ああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！」

俺は無我夢中でメシアを振るう。

「メシア！ブレイブスワロー！」

『『デバイス複合』』

メシアスワローにして、さらに斬りかかる。

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

「ちぃ！」

許さない、

許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない、許さない！許さない、許さない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「許さない！絶対に、お前を殺す！」

「やってみろぉ！」

互いの件がぶつかる。とにかく殺す！こいつは、こいつだけは！

「おおお！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「なめんなよ屑がぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！」

「だあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

俺は力任せにフィアマを吹き飛ばした。

「があぁ！」

「これで、止めだ・・・殺してやる」

シエルｓｉｄｅ

声がしたので駆けつけると、そこには三つ首の竜がいました。そしてメシアスワローを装備した父上。遠くには壁にめり込んだ男。倒したのでしょうか？しかし、父上の様子がおかしかった。純白のはずのバリアジャケットが、鮮血に染まっていました。

「父上！？」

「殺してやる・・・」

「なんだ、どうしたんだ！？」

「シエル、何があった！」

ルミノとセレスもその父上の姿を見て驚愕しました。それは闇の力さえも飲み込めるような負の力。もともと闇から生まれた私たち。その大きさがどれほどのものかはすぐにわかりました。

「殺す、殺す！！！！」

父上が壊れている！しかもメシアスワローが殺傷設定に！？あれはまずい！

「シエル、あれは！」

「ええ、とめますよ！」

私たちは全員で父上に飛び掛りました。

「！？」

「父上！」

「パパ、目を覚まして！」

「父君、しっかりしろ！」

「放せ・・・・・」

「いいえ、放しません」

私たちはがっちりとバインドをした上から、体で押さえつけました。母様たちならきっと何とかできるほどの体格ですが、私たちは母様の幼少期の姿。これではまずいですね。

「父上、落ち着いてください」

「そうだぞパパ！こんな奴殺しても何にもならないぞ！」

「父君、闇に飲まれるな！戻ってこい！」

私たちの必死の言葉に、父上の瞳の色が輝きを取り戻しました。

直人ｓｉｄｅ

「あれ、俺は・・・」

「父上、大丈夫ですか?」

シエルが不安そうに俺を見ている。あれ、俺って・・・

「シエル、ルミノ、セレス?俺は・・・」

そうだ、あいつ、フィアマを倒そうとして、それでどうした?前を見ると、壁にめり込んだフィアマがいた。

「これは・・・」

その瞬間思い出した。自分のしたこと、使用としたことを。

「俺は・・・また、暴走したのか?」

「父上・・・」

「くっくっく・・・あっはっはっはっはっは!」

「!?」

フィアマが起き上がる。

「おしかったなぁ・・・俺を殺すことで、お前は負の因子を作ることができたのに・・・」

「何!?」

「あーあ、失敗失敗・・・帰るか」

「待て!」

「じゃあな、哀れなガキンチョ。せいぜいママのところで泣いていろ?ああ、ママはもういないんだっけ?ヒャッヒャッヒャ!」

不気味な笑い声とともに、フィアマは消えていった。

「待て!待ちやがれえぇぇぇ!!!!!!!!!!!!!!」

俺の声だけが、虚しく響いていた。シエルたちは俺を心配そうに見つめている。そして俺は、そこで意識を手放してしまった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そこは同じ、どこかの世界のアジト。

「たーだいまっと」

「どうだった?フィアマ」

男がフィアマに聞く。すると、フィアマはにんまりと笑った。

「面白かったぜぇ？あんないい獲物がいるなんてな」

「ほう？」

「あの英雄、ガキのころ俺と会ったことがあるらしい」

「なるほど、復讐の負か・・・」

フィアマは頷き、トンファーを下ろした。

「きっとおもしろいぜぇ、あいつは」

「カオス復活のためにも、お前は働いてもらう」

「・・・勘違いするなよ？俺は俺のためにやるんだ」

言いながら酒を手に取り、一気に飲み干した。

「どこへいく？」

「俺の勝手」

「そうか・・・」

こうして部屋には男独りになった。すると、壁から女が現れた。いや、女はそこにいた。

「いいの？」

「あいつは使える。なにより、従えている龍もな」

「そう、ならいいわ。私はカオスの復活を願っているのだから」

「それは私も同じだ。本物のカオスのオリジナル母体、一刻も早く手に入れなければな」

「そうね・・・」

男は言いながら酒をコップに注いでいた。

フィアマｓｉｄｅ

まったく、おもしろくねえ。だが、いい獲物だった。

「まったく楽しいねぇ」

「よう、フィアマ」

「クルスか・・・なんのようだ？」

「なに、獲物を見つけたと聞いてな」

いけ好かない風野朗。俺はこいつが嫌いだ。

「言っとくけど、やらねえぞ」

「なに、奪わないさ。私も見つけたからな」

クルスの野朗の後ろには龍がいた。ったく、相変わらず不気味な三

つ首竜だぜ。

「さて、行くとするか」

「どこへ行く気だ？」

「獲物を見つけたのでな。私も負の収集だ」

「あ、そ」

俺はそういってそこを後にした。どうも、こいつとは馬が合わないんだよな。

第十八話「英雄の悲劇、その真実」（後書き）

直人「秋風、今回は短くないか？」

秋風「気のせいだ。気にしたら負けだぜ？」

直人「それにしてもアンケートは集まり悪いな」

秋風「でも確実に集まってる。うれしいね」

直人「ま、お前のわがままだろ」

秋風「しょうがないだろ」

直人「まあいい、今日はこれで終わりにしよう」

秋風「そうだな、よろしく」

直人「次回、十九話「崩れた心」ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第十九話「崩れる心、触れる優しさ」（前書き）

最近感想がなくて寂しいです。ああ、だんだんと俺がこの小説から消えていく・・・

みなさん、感想どしどし待ってます。ここが悪いとか、つまらないとかも教えていただけると嬉しいです。でも励みとかが一番力になります・・・

それでは本編どうぞ♪

第十九話「崩れる心、触れる優しさ」

そこはまた、燃え盛るリゾートホテルだった。

「また、これか・・・」

だが今回いるのは紛れもない、俺自身。俺は立ち上がり、俺をにらみつける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだ」

こういう光景は初めてだった気がする。そして、俺が俺を指差す。

「人殺し」

「っ！」

すると、目の前には俺自身だけでない、周りに色んな人間が立っていた。

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

『人殺し』

なのはが、はやてが、フェイトが、スバルが、ティアナが、エリオが、キャロが、六課のみんなが、そして姉さんでさえ、俺を指差してそう呼ぶ。

「違う！俺は、俺は人殺しじゃない！」

違う、俺は殺してなんかいない、俺は！

「受け入れろ・・・」

「カオス！？」

「貴様は絶望に染まりつつある」

「違う、俺は絶望なんて・・・・！」

「だが、お前は真実に絶望した」

言い返せない。事実だ。

「殺すことがどれほど罪か?そうではない。お前は闇が怖いのだ」

「・・・違う!」

「何が違う?貴様は我に近づきつつあるのだ」

そんな、そんなことない!人を殺すことなんて望んでない!

「思っても、発しても、それは事実、お前の本能だ」

「違う!俺は・・・俺は・・・・・」

「我を倒したのだ、お前がその状態でどこまで闇を拒めるか、楽しませてもらおう」

俺はただ耳をふさぎ、人の人殺しという言葉を聴かないためにうずくまった。

俺が目を覚ますと、そこは医務室だった。機動六課の医務室。俺、どうしたんだっけ?そうだ、俺は、人を殺そうとしたんだ。そして殺せなくて、逃げられて、それから・・・・・それから、どうしたんだ?とりあえず、目を開けよう。

「うっ・・・・あ?」

「あ、直人君、目が覚めた?」

目の前にはなのはがいた。

「なのは・・・・俺・・・・」

「シエルたちが運んでくれたの。みんな心配したんだよ？」

なのはが笑ってくれる。落ち着くけど、なんというか・・・その笑顔が眩しすぎた。

「・・・・・・・・・・シエルたち、何か言ったか？」

俺が聞くと、なのはは首を振った。

「ううん、直人君から直接聞いたほうが良いって・・・」

「そっか・・・」

俺はそういって天井を見る。シエルたち、どう思ったのかな・・・父親失格、かな。

「ねえ、何があったの？」

「・・・ごめんなのは。言いたく、ないんだ」

「そう・・・・」

俺が言うと、なのはは沈んだ顔になる。

「そういえば、フェイトたちは？」

「フェイトちゃんとはやてちゃんは直人君が行った組織のアジトを色々調べてるよ」

そっか、あいつらにまで俺、迷惑を・・・

「・・・・・・」

「何があったか、直人君は言えない？本当に？」

「言ったら、お前は俺を軽蔑する」

「どうして？」

「・・・・・・・・」

何もいえなかった。壊れかけた心。敵の言葉に我を忘れて「人を殺そうとした」など。言える訳がない。復讐に駆られ、自分を失ったなど、言える訳がない。何が大切な人を守る騎士だ・・・俺は、何をしているんだ・・・

「俺は・・・・・・」

「直人君」

なのはに呼ばれ、振り向く。すると、なのはが強く俺を抱きしめていた。

「なの・・・は？」

「直人君・・・」

「どうしたんだよ、いったい・・・」

「強がらなくていいんだよ？」

「っ！」

見抜かれた・・・？

「直人君、ずっと強がってる。大丈夫、ここにいるのは私と直人君だけだから」

「なのは・・・」

言われた瞬間、俺の目から涙がボロボロと零れ落ちた。

「うっうぅ・・・」

「何があったか、教えてくれるよね？」

なのはの優しい声が、俺の心を潤していく。俺は無言で頷く。

「なのは・・・」

「何？」

「その、もう少しだけ、こうさせてくれ・・・」

「うん、いいよ」

なのはの声は嬉しそうだった。俺もそのなのはの優しさが嬉しかった。だけど、俺の手になのはの涙がかかっていたことは言わなかっ

た。

それから３０分後、俺は話した。出会ったのは闇の使徒の一人であったこと、そしてその男が俺の両親、つまり父さんと母さんが死ぬ原因となった火災を起こしたこと。それを聞いて俺自身が「壊れかけた」こと、さらにはシエルたちがいなければ俺はその男を殺し、闇に染まってしまう所だったこと。

「そっか・・・」

「・・・軽蔑、しただろ？」

怖かった。それが一番。いつの間にか築き上げてきた多くの絆。そのうちで一番大切なもののうちの一本が切れてしまうことが。切れてしまうことで、他の絆が消えてしまうことが怖かった。

「そんなことないよ」

なのはは笑顔だった。

「むしろ、話さなかったら軽蔑したかも」

「・・・でも」

「大丈夫だよ。直人君は直人君だもん。ね？二人とも」

「え！？」

まさか・・・

「そのまさかだよ、直人」

「まったく、心配かけんといてや」

部屋のカーテンの裏。二人はそこにいた。

「な、なんで！二人は組織のアジトで調査してるって・・・」

「そんなん、嘘に決まってるやん。ほんとはフォワードが調査しとるよ」

やられた・・・しかし俺も相当混乱してる。二人の気配がわからないなんて。

「直人」

「直人君」

するとフェイトとはやても抱きついてきた。

「直人・・・ひっぐ、えっぐ」

「ほんまに、ほんまに心配したんやで？うっうぅ・・・」

「二人とも・・・ごめん」

俺も涙を流し、二人のぬくもりを確かめた。暖かい・・・・・

「私たちはいつも一緒なんだよ？この指輪は、その証でしょ？」

なのはも少し涙ぐんで、その指輪を出す。そうだ、忘れてた。そうなんだよな・・・・・・

「俺は、一人じゃないんだ・・・」

「うん、そうだよ?」

「私たちは、いつも一緒」

「うちらは苦しいときも、つらい時も、一緒や」

「うん・・・・・・そうだな」

俺はその輝く指輪を見つめていた。

それから体調が回復して、俺は食堂へ向かった。すると、シエルたちが駆け寄って、抱きついた。

「父上!」

「シエル・・・」

「父上、よかった・・・」

「パパ、心配したんだぞ・・・」

「父君、どうしてこう、心配ばかりさせるのだ」

「ごめんな・・・あんな所、見られたら父親失格だな」

俺が言うと、シエルは首を振った。

「いいえ、私たちはそんなことで父上を嫌いになどなりません」

「そうだ！パパを止めるのも娘の僕たちの役目だからな！」

「我はそれくらいなら許容の範囲内だぞ」

「みんな・・・」

うれしかった。3人の言葉が。俺は強く3人を抱きしめた。

「ありがとう」

「ち、父上・・・」

「く、苦しい・・・」

「それに、恥ずかしい・・」

「ああ、ごめんな」

俺は離れる。すると、アリスとヴィヴィオが走ってきた。

「パパ！」

「直人！」

「ヴィヴィオ、アリス」

「パパの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！」

「うっ！」

「うえぇぇぇん！」

また、泣かせてしまった・・・

「ごめんヴィヴィオ」

「直人、誰と戦ったの？」

「フィアマって男だ」

「・・・炎帝、フィアマ。炎を使う闇の使徒」

確かに、その通りだな。

「闇の使徒の強い奴らにはだいたい二つ名がある」

「どんなものだ？」

「炎帝、嵐王、氷統、影斬・・・後はわからない」

「最低でも、後3人は強いのか」

『主』

「どうした？メシア」

『今回の戦いですが、主の動きは鈍くなっていました』

「どういうことだ？」

いきなり何を言い出すんだ？メシアのやつ。

『おそらくフィアマの行動が体に染み付き、動けなかったのでしょう』

「そんな馬鹿な」

『事実です。リミットブレイクを使っても、いつもの３０％も使えてませんでした』

そんな・・・

「じゃあ、俺は勝てないのか？」

「大丈夫、アリスに任せる」

「え？アリスに？」

アリス、何か策でもあるのか？

「とりあえず闇の眼に飲まれるのはいけない」

「闇の眼？」

「そう、こんな感じ」

言った瞬間、アリスの目から殺気が放たれた。気負いされた?俺が?

「これが闇の眼。闇の眼は恐怖、絶望、憤怒を増大させ、動きを止めたりする。動けるのはごく少数」

「なるほど・・・」

だから俺は動けなかったのか?

「フィアマは龍を連れている。そいつが恐怖を煽る。」

「確かにな・・・」

「だから直人だけじゃなく、みんな闇の眼に慣れて戦えるようにしないといけない」

「・・・わかった、頼む」

俺がそういうと、アリスはにっこりと笑った。

「任せる!そしてその前にご飯!」

その言葉に、俺は思わずズッコケた。

第十九話「崩れる心、触れる優しさ」（後書き）

秋風「今回はおやすみです。すいません」

直人「駄目作者め」

秋風「ほんと、すいません」

秋風「次回、第二十話『輝きのカケラ』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十話「輝きのカケラ」（前書き）

今日で高校を卒業になりました。それによって打ち上げで色々とやらかしていたので更新が遅れました。そのうち「星を見つめる者」も更新します。
ちなみにアンケートですが、挿入歌を中心にお願いしたいです。

では本編どうぞ♪

第二十話「輝きのカケラ」

あの戦いから、およそ3日。俺はアリスの「闇の眼」を耐え抜く。
特訓をしていた。

「ぐっ・・・」

「全然駄目。気負い負け」

「くそっ・・・」

何度やっても、闇の眼を受ければ動きは遅くなるし、体は震えるし、
思い通りの攻撃ができない。

「一応、これって何倍も弱めてるよ?」

「駄目だ・・・」

俺はその場に座り込む。もう3日もやってるのに、できたためしがない。

「やはり、主の傷は大きいのでしょうか」

「みたい。多分これを食らっても大丈夫な人間はまずいないし」

「でしょうね」

心の負を増大させる反則とも取れるこれ。対抗策はあるけど・・・

「通じないだろうな」

「ああ、主が考えた、目を見ないで戦う、ですか？」

そう、目を見なければいいのだが、そんなのは無理に近い。戦いにおいて、相手を見ないで戦うなど無理だ。

「今日はここまで。そろそろ向こうも終わるから」

アリスの指差す方向には、相変わらず死屍累々のフォワードと、疲れた様子のなのはの姿だ。

「なのは」

「直人君、大丈夫？」

「それは俺のセリフ。疲れてんだろ」

「うん。でも大丈夫だよ？」

なのはが笑うが、目の下にクマがあっては説得力のカケラもない。

「よっと」

「ふぇ！？」

俺はなのはを抱える。一応、この体制はお姫様抱っこだろうか。

「直人君！スバルたち見てるってば！」

「良いよ別に」

「は、恥ずかしい・・・」

よく言うよ、前は俺に飛びついてきたのに。

「ならなのはさん、変わってください。私も兄さんに抱っこしてもらいたいです」

「ふぇ!?だ、駄目だよ!絶対、ぜーったい駄目!」

なのはが俺にしがみつく。そんな大人気ない・・・

「あーティアナ、落ち込むなよ」

「はい・・・」

まさか本気だったのか?

「ほら、戻るぞ。飯にしよう」

俺の言葉に全員が頷き、隊舎へ戻っていった。

隊舎に戻ると、近くでヴィヴィオがストライクアーツの練習をしていた。講師はもちろんノーヴェ。それを見ているのはチンクだ。

「えい!」

「駄目だ、腰がなってねぇ。もう少し体重を乗せてみろ」

「そんなのわかんないー！」

ヴィヴィオが困った顔になった。確かに、６歳には難しいと思うぞ。

「これこれ、ヴィヴィオはまだ６歳だ。もう少し優しく教えないか」

「わかったよチンク姉」

「やあ、二人とも」

「あ、パパー！」

ヴィヴィオが駆け寄ってくる。汗びっしょりだな。

「どうだ？ヴィヴィオは」

「まだ子供だからだけど、まだまだ」

「だな」

ノーヴェの言葉に全員が納得。６歳が格闘技って・・・

「でも私は１２歳からアーツを始めたからなぁ・・・ヴィヴィオすごいね」

スバルが笑顔で言う。話だとスバルは俺となのはをきっかけに一般の学校から魔法学校へ転校したという。しかも１３歳までに覚えたらしいので、それもすごい気もする。

「えへへ～」

「おいスバル、甘やかすなよ。調子乗るから」

「はは、ノーヴェはヴィヴィオの師匠だね」

「師匠じゃねぇ！コーチしてるだけだ！」

「それを師匠というのではないか？ノーヴェ」

チンクの言葉に、みんなが笑う。確かにそうだな。

「うるさいなー！師匠じゃないって！」

「はいはい、そのくらいでストップ。ノーヴェ、もう夕食だし、食べてったら？チンクも」

「いいの？兄貴」

「ああ、姉妹で仲良く食べるのもいいことだろ？」

「うむ、そうだな」

チンクが頷き、スバルがえへへと笑う。

「言っとくけどあたしの姉はチンク姉だけだ！」

「ひどーい！お姉ちゃん泣いちゃうよー？」

スバルがくってかかる。仲がいいのやら悪いのやら。

「ねえパパ、なんでなのはママが抱っこされてるの？」

「えっと、それはね、パパが無理やり・・・」

「ああ、疲れているみたいだから運んだんだよ。ヴィヴィオもママが倒れたらやだろ？」

「うん！ママ、早く元気になってね！」

「うん、ありがとうヴィヴィオ」

ヴィヴィオの言葉に、なのはは笑顔だった。

とりあえず汗だくだったのでシャワーを浴びる。するとヴィヴィオも入ってきたのでヴィヴィオの頭を洗い、一緒に湯船に浸かることにした。別にそういう趣味じゃないからな？

「あー、疲れた」

「うぅ～・・・気持ち良い～♪」

ヴィヴィオも満足そうにお風呂に入る。

「なあヴィヴィオ？」

「なあに？パパ」

「ヴィヴィオはこれからノーヴェに色々戦い方を教えるわけだけど、

約束をしないか？」

「う？約束？」

ヴィヴィオが首を傾げる。でも、これは守ってもらわないとな。

「ヴィヴィオが手に入れた力は、喧嘩やいたずらでは絶対に使わないこと。力は何に使うか、考えること。あと、ノーヴェに習うならサボったりしないでしっかりと勉強すること。これは魔法を習うことになってもだぞ？」

「うん、パパ！ヴィヴィオは大丈夫だよ！」

「そっか、良い子だな」

「えへへ♪」

頭をなでると、ヴィヴィオは嬉しそうに笑っていた。

風呂を上がり、食堂に向かうと、みんな準備はできているようだ。

「直人君、お疲れ様」

「ああ、みんな早かったな」

「うん、スバルとかはもう食べてるよ」

ホントだ、ノーヴェもすごい勢いだな。

「「「「「「「「「いただきます」」」」」」」」」

こうして食事をするわけだが・・・

「チンクはあまり食べないのか？」

「ああ、私はそんなに食べたりはしないが？」

「いやさ、ギンガもスバルもノーヴェも、すごい食べるじゃん」

「確かに・・・」

正直あの食いっぷりは異常だと思う。

「ああ、そのことだがな、あの3人は我らの義父であるゲンヤの妻、クイントの細胞が元だ。それで・・・」

「もしかして、クイントさんもすごく食べてたとか？」

「義父（ちち）の話ではそうらしい」

なるほど、そういう所もきっちり受け継いじゃったのか。

「エリオも食べるよな」

「そうだね。でもエリオがあんなに食べるのは六課に来てからだよ？」

「そうなのか？」

「うん、施設の時は普通の量しか食べてなかった」

写真でも、確かに少ししか食べてない。

「でもすごい食べてる予兆を見たのは訓練校にエリオが入ってからかも」

「なるほど、そうなんだ」

じゃあ訓練がハードになってくるから、カロリーの消費が激しいと。

「世の中って不思議だな」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そこはどこかの洞窟。

「あった、これが封印か」

そこにはフィアマがいた。目の前には巨大なクリスタルがある。

「らあっ！」

フィアマがクリスタルを砕く。すると、洞窟が奥へと続いた。置くには蒼、紅、桜、金、白銀、水、橙、桃、黄、紫の色をした丸い石があった。その奥の扉にはそれをはめるであろう穴が開いている。

「さてと、封印をご開帳と・・・」

フィアマが触ろうとした瞬間、それははじけ飛ぶ。そして飛び、さ

まざまな方向へと消えていった。
「しまった・・・！」
フィアマは洞窟の外へ出た。
「ちぃ！ボスになんて報告すればいいんだ！」
直人ｓｉｄｅ
次の日、俺は朝は早くから外にいた。それというのも、ヴィヴィオの特訓を見学するためだ。
「えい！えい！」
「だいぶ良くなったぞヴィヴィオ、そこから足技！」
「はっ！」
足を上げるが、それでこけた。
「あうっ！」
頭からいったけど大丈夫か？また泣くんじゃ・・・
「大丈夫か？ヴィヴィオ」
「はい！大丈夫です！」
「よし、足技はもっと体が柔らかくなってからだ。朝練はおしまい。

ストレッチして上がれ」

「はい！」

ヴィヴィオ、俺が知らないところで少しずつ強くなってる。嬉しいような、寂しいような・・・

「パパ！どうだった？」

「うん、よく頑張ったな。頭を見せてごらん？」

血も出てないし、大丈夫かな。こぶもないみたいだ。

「パパ！お風呂に入ろ！」

「ああ、ヴィヴィオは汗びっしょりだもんな」

「うん！」

「ノーヴェも風呂入って朝食に行こうか」

「ああ、兄貴」

こうして隊舎へ戻る俺たち。すると・・・

「パパ！あれ！」

「ん？」

そこに落ちているのは丸い、桜色に光る石だった。

「これは？」

「綺麗～！」

魔力の反応がある。ロストロギア？だけどそこまで大きな反応もないし、機能だって警報もなっていなかった。

「はやてに確認してみるか」

「それにしても本当に綺麗な玉だな、兄貴」

「ああ、みたいだな」

太陽の光に照らされてそれは美しく輝いた。

「魔力反応もあるから魔力を込めてみたけど何の反応もないな」

歩きながら考える。なにか特別な条件でもあるのか？デバイスでもないし、レリックなんかとは似ても似つかない。俺は隊舎に戻り、それを部屋においてヴィヴィオと風呂に入る。そして上がり、いつもどおりに朝食をとった。そこにはなのは、フェイト、はやてがいる。

「なのは、フェイト、はやて、後で部隊長室か会議室集まれる？」

「へ？なんでや？」

「ああ、ちょっと妙なもの見つけたから」

「うん、わかった」

こうして俺たちは部隊長室へ向かうこととなった。

部隊長室のソファに座り、俺はその見つけた玉を置いた。もちろん、封印処理は済ませてある。

「なんやこれ？」

「綺麗だね」

「ほんと、どうしたのこれ？」

「ああ、朝ヴィヴィオが見つけたんだ。魔力反応はあるのに特に反応を示さないし」

「ふーん、でも確かに魔力を感じるのに何もないのはおかしいね」

「だろ？」

みんなで考える。これはなんなのかと。

「一応無限書庫かなんかに要請しとこか？」

「そうだな」

「でも、本当に綺麗だね」

そういってなのはが持ち上げた、その瞬間だった。

「え！？」

突然、桜色の玉が光を放つ。

「これは！？」

「なのは、その石を放せ！」

「駄目！取れない！」

こうして、俺たちはその光に巻き込まれた。

第二十話「輝きのカケラ」（後書き）

秋風「いやっほぉぉ！」

直人「うるさい」

秋風「いいじゃん！卒業だぞ！」

直人「ニートを？」

秋風「違うわ！」

直人「今日で高校を卒業！だっけ？」

秋風「そうだよ！そっち！いやー、高校生活長かったわぁ・・・」

直人「まあ、だろうな」

秋風「これから春休みなので、更新にはよりいっそう努力してまいります！」

直人「これからもよろしく！」

秋風「次回はゲストも登場！お楽しみに！」

直人「次回、第二十一話『桜花の紋章、見えてきた希望と絶望』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十一話「桜花の紋章、見えてきた希望と恐れ」（前書き）

今回新展開です。お楽しみに！

本編どうぞ♪

第二十一話「桜花の紋章、見えてきた希望と恐れ」

「にゃあああ！」

なのはの声が響き渡った。また子供にでもなったのか？しかしなのはに変化などはない。しかし、その隣には誰とも知れない人間が立っていた。なのははその人物がいきなり現れたことに驚いていたのだろう。金髪に赤い瞳。そしてピンクと白の機動六課の制服。額には赤い宝石がついている。そのロングヘアーの金髪はフェイトより濃い金色。

「だ、だれ！？」

「マスター、私です、私」

「え！？へ！？その声、もしかして、もしかして・・・」

「「「「レイジングハートォォォォォ！？」」」」

全員が叫んでいた。

とりあえず、マリカ、シグナムさん、ヴィータ、シャマルさん、ザフィーラを呼んだ。そして事情を説明すると、全員が目を丸くしていた。

「あの、レイジングハート？」

「なんですかマスター？」

「一体どうしちゃったの？」

それは全員が思う疑問だった。何故レイジングハートが人になったのか？いや、人ではないとしても、何故人の形を成してそこにいるのか？

「わかりません。先ほどの宝玉が私の中に入り、このようにプログラムが再構成されてこうなったようです」

「プログラムの再構成って？」

「私はインテリジェントデバイスですが、ユニゾンデバイスに近い形に構成されました」

よくわからない。インテリジェントデバイスは発動の手助けとなる処理装置であり、状況判断を行える人工知能も有している。意志を持つのでその場の状況判断をして魔法を自動起動させたり、主の性質によって自らを調整したりする。その上、人工知能を有しているためかインテリジェントデバイスは会話・質疑応答もこなせる。この辺はアームドデバイスも同じだし、違う部分は武器である部分であり、さほどの変わりはない。だけどユニゾンデバイスはベルカによって開発されたデバイスで、言うなればミッドチルダ式のインテリジェントデバイスを極端化したもの。姿と意志を与えられたデバイスが状況に合わせ、術者と「融合」して、魔力の管制・補助を行う。この形式では他の形式のデバイスを遥かに凌駕する感応速度や魔力量を得ることができる。この辺は一般的にも知られている。今のレイジングハートはユニゾンデバイスということになるのかはわからないが、色々と根本から術式が違うのでそれはない。全員が首を傾げた。

「それにしてもレイジングハート、綺麗・・・」

「ありがとうございます、マイマスター」

なのはが言う。確かに美人だ。その清楚な姿とスタイル、すべてが完璧ともいえる。すると、アリスが入ってきた。

「直人、ここにいた？訓練しよう！」

「あ、アリス・・・今立て込んでいるからちょっと待って」

「誰？」

アリスが指を指し示す。まあ、そうなるだろう。するとレイジングハートが一礼する。

「レイジングハートです、アリスさん」

「ふぇ？レイジングハート？ソウルデバイスになったの？」

アリスの一言に、全員が首を傾げた。

『ソウルデバイス？』

「前に闇の使徒のアジトに潜入したときに見たけど、古代ベルカの諸王時代に一部の魔王のカオスを封じるために作ったソウル・エレメント。」

「そんなものが・・・」

「開発はクラウン家がやった」

「またかよ・・・」

久しぶりに聞いたな、その名前。

「でもおかしい。ソウル・エレメントは魔王本体を封印した聖壇に置かれてる。闇の使徒でも今は手を出さないって言ってた。」

「ってことは、まさか誰かが聖壇にたどり着いて触って、そのソウル・エレメントが弾け飛んだってことか!?」

闇の使徒がそこまでたどり着いていたのか。

「となると、機動六課本来の仕事をせなあかんな・・・」

「そうだな、こちらが回収して魔王復活を阻止する。それしかない」

「ちょ、ちょっと待って!まだ疑問はあるよ?」

「そうだよ、ソウルデバイスってどうなってるの?」

「簡単に言えば、インテリとユニゾンの中間的役割を持ったデバイス。多分なのはのソウル・エレメントは桜のエレメント。力は『魔力増大』。ソウル・エレメントはその自分の特性と合っている人間を選び、適合者に認識する」

その言葉に全員が納得する。なのはは言うなれば「生きた固定砲台」だからな。

「なんか解釈が酷いの直人君！」

「しょうがないだろ、それが一番合うんだから」

「うぅ・・・」

「でも戦うときどーすんだよ」

ヴィータの言葉に、なのはがはっとする。そうだ、杖にならなければなのはだって戦えない。

「その辺はレイジングハートがわかる」

「はい、データでは私が『ソウル・イン』することでできるようです。それにより私の杖の状態を使うことができ、私がマスターの体内でサポートします」

なんというか、ハイブリットだな。

「じゃあ、やってみよう」

「はい、マスター」

「「ソウル・イン！」」

その瞬間レイジングハートがなのはの中へ吸い込まれ、なのはのバリアジャケットが生成される。されたが・・・

「ふぇ！？なんかデザイン違うよ！？」

たしかに、通常のなのはのバリアジャケットは赤いリボンがついたかわいらしいもの。しかしそれはなく、金色のレイジングハートの一部がついており、赤い宝石がそれに取り付けられている。そしてそこには桜の花びらのようなものが描かれている。手も突起のようなものがあり、ラインは灰色や青がメインだ。

『どうやら桜の紋章を受け継いだことで変化があったかと』

「このときはデバイスに戻るんだ」

『そのようです』

レイジングハートの形状も少し違った。ピンク、金、白で構成されるはずのレイジングハートだが、青と薄い白に近い水色が混ざった状態だ。こうなると魔法使いの杖というよりも機械の杖に見える。

「わぁ・・・色々違うし、力もみなぎってるよ・・・」

この瞬間、嫌な予感がした。なので俺は退避しようとしたが・・・

「直人君」

見事に呼び止められた。

「な、なんだ？なのは」

「私と、模擬戦しようか？」

「な、なんで？」

「だって、知りたいんだもん、どれくらい強いか♪」

こうして俺はなのはと模擬戦をすることになった。

場所は移り訓練場。一応マリカとユニゾンはしている。ソウル・デバイスの力、油断はできない。

「準備はいい？直人君！」

「ああ、久しぶりだな。お前とやるのは」

正直、相性悪いからやりたくない。

『ほないくで？レディー・・・ゴー！』

こうして模擬戦スタート。俺はメシアを構えてなのはの方へと向かう。だが・・・

「アクセル・・・シューット！」

『ネオ・アクセルシューター』

ネオ？って・・・！

「ふぇ！？」

その桜色の光弾はフェイトのプラズマ・ランサーに似た槍の形状だ。

そして何より・・・

「なんだ、この数！」

そう、２０にも３０にも飛んでくる。途中で分裂を繰り返し、どんどん数が増していく。

「クリスタルダガー！」

クリスタルダガーで対抗するも、数が多すぎる。俺は廃ビルの後ろに入り、それをよける。

「なんだよあれ！」

『あれがソウル・エレメントの力みたいですね、主』

「だったら！デバイス複合！」

『デバイス複合』

俺はメシアスワローを持ち、一気に上空へと駆け上がった。しかし・・・

「やっほー♪」

「！？」

後ろに回りこまれた。

「な！？」

「ディバイィィン・・・」

やばい！

「バスターァァァ！」

その桜色の砲撃。だがいつもと違い、渦のようなものとして形成され、発射された。避けるが、それでは終わらない。

「追尾だと！？」

追尾してくるディバインダスター。こんな砲撃、操ったらなのはに相当な負担がかかるはず。だがなのはは特に苦しい様子などは見せていない。

「まさか、オート追尾！？」

なんて能力だよ！

「迎え撃つぞ、メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「虚空雷斬！」

虚空雷斬を放つが、相殺される。嘘だろ！？

「ちぃ！」

「見つけた！アクセル・・・シューット！」

再びアクセルシューターが放たれるが・・・

「なんだこれは！？」

今度はひとつだけ、しかし早い上、でかい！

「アクセル！」

さらに速くなる。そして・・・

「ぐあっ！」

見事にぶつかり、墜落する。

「ちぃ！」

『あれは異常ですね。』

「ああ、適合した人間が強いからな、さらにプラスされればああなるだろう」

そう、その強さははるかにいつものなのはとは違う。多分空戦のＳＳＳくらいあるんじゃないだろうか？

「さて、どうするか・・・」

もうカートリッジも残り少ない。それに俺自身の魔力も防御に回しているのでピークだ。

「やるか、蒼天龍斬波」

『勝てますかね？』

「どうだろう、厳しいな。だが、このまま終わるわけにもいかないだろう」

このまま負けるってのも、俺としては楽しくない。俺は空に上がる。なのはも待っていたと言わんばかりににっこりと笑みを浮かべる。

「直人君、そろそろ終わりにする？」

「ああ、次の一撃でな！」

「私が勝ったら、今度デートしてもらうからね」

「じゃあ俺が勝ったら、ヴィヴィオの修行の面倒一週間見ろよ？」

「レイジングハート！」

「メシアスワロー！」

『『ロードカートリッジ！』』

「スターライト・・・」

「真・蒼天・・・」

互いに魔力が収束し、それを発射する。

「バスター！」

「龍斬波！」

蒼い龍が桜色の砲撃に向かっていく。

「おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

龍が桜色の砲撃を飲み込んだ。しかし桜色の砲撃はそれを破り、俺に向かってくる。

「・・・・負けか」

俺はそう呟き、砲撃を食らって意識を手放した。

目を覚ますと、なのはが俺に膝枕をしていた。

「な、なのは！？」

「ごめん直人君、大丈夫？」

「ああ、完敗だよ」

俺が言うよ、なのはが少し沈んだ顔だった。

「・・・・・・・・」

「どうした？」

「直人君、傷つけちゃった・・・」

模擬戦だろうが。どうして気にしてるんだ?

「模擬戦だったんだ。当たり前だろ?」

「そうだけど、その・・・」

「あー、はいはい、わかったよ」

俺はなのはを抱きしめる。

「ふぇ!?」

「力が怖かった?」

「・・・・・うん」

戦ってるとき、なのはは力を制御できていなかった。それが怖かったのだろう。

「大丈夫さ、なのはなら強くなれる。」

「ありがとう、直人君」

「さて、みんなのところに戻るか」

「そうだね」

そういって二人で歩き出す。俺となのははバリアジャケットを解除する。すると、レイジングハートは再び人間体に戻った。

「私は先に行ってますね、お邪魔のようですので」

「そうですね、レイジングハート、行こ！」

「そうですねマリカ」

こうして二人は先に行ってしまった。

「なんか、あいつらは空気を読むようになったな」

「そうだね」

言いながらなのはが俺と腕を絡める。

「私の勝ちだから、今度デートね？」

「あれ、本気だったの？」

「うん、もちろん」

こうしてみんなの所に向かう俺たちだった。

第二十一話「桜花の紋章、見えてきた希望と恐れ」（後書き）

秋風「とりあえず新展開です」

直人「レイジングハート擬人化」

秋風「これからどんどんやってくよ？」

直人「となるとメシアも人になるのか」

秋風「一応言っておくけど、メシアは女だよ？」

直人「知ってるわ」

秋風「ブレイブスワローもな」

直人「それにしてももう遅いな」

秋風「ああ、寝るから」

直人「次回、第二十二話『機動六課、新任務』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

蒼天外伝「巡りあいの剣～選ばれた戦士達～」（前書き）

はい、更新遅れました。今回は二階堂先生のリクエストにお答えして、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ＆ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍの神藤昶とのコラボレーションですｗ
随時こういうのは私のネタがあったときに公開します。募集も待ってますので。

「とりあえず、この辺か・・・」

「ええ、みたいです。」

俺はある人物と森にいた。

「昶、君が来たのはこのあたりでいいんだね？」

「はい、直人先輩」

昶と行動することになったのは数時間前のこと。

「確かこのあたりだな」

ロストロギアの反応を追って、遺跡にやってきた俺は違法ハンターに遭遇した。手にはロストロギアであろう剣が握られている。

「時空管理局だ。お前、違法ハンターだな？」

「ちぃ！見つかったか！」

「待て！」

俺は違法ハンターを追い、遺跡の奥へと進む。その時だ。違法ハンターの持っていた剣が光りだしたのは。

「うわぁ！」

「なんだ！？」

ハンターの男は気絶し、俺は男を拘束して宝剣を拾い上げる。すると、はやてから通信が入った。

「はやてか。違法ハンターを確保。ロストロギア・・・えーっと、『巡りあう剣』を確保したよ」

『お疲れや、直人君。ほんなら悪いんやけど、魔力反応がそのあたりにあったんよ。追ってくれるか？』

「了解、んじゃ、この違法ハンターは頼むよ？」

俺は遺跡の外の木にハンターを縛り付けると、その反応へと飛んだ。空を飛んでいると、何かクレーターのようなものがあった。

「ん？」

よく見ると、クレーターの中心には俺より年上の男が倒れていた。

「おい、しっかりしろ！」

「う、うぅ・・・」

「こちら直人。はやて、反応地点で男性を発見した」

『了解や。事情を説明してもらいたいから、その人連れて来てや？』

「あいよ」

こうして俺は男を担ぎ、空へと飛んだ。

しばらくして、男が目を覚ました。

「よう、目が覚めたか？」

「ここは？」

「ここは機動六課の隊舎だ名前言えるか？」

「え？俺は神藤昶・・・・元機動六課のメンバーだけど・・・」

「は？」

これが、昶との出会いだった。

話によれば、昶は単独調査でロストロギアを追って遺跡に入ると、その反応のロストロギアに触れ、意識を失ったという。だが、俺たちの機動六課に神藤昶という名前は聞いたことがない。

「なのは、どう思う？」

「うーん、よくわからないよね」

「あ、なのは先輩・・・」

「先輩？」

なのはが首を傾げる。彼の年齢は２２歳。なのはは１９歳なので、普通逆になるのではないのだろうか？俺たちはさらに話を聞くことにした。

「なるほど、この世界とは違う、先の未来か」

「そう、俺は一応なのは先輩たちより年下で、近所なんだけど・・・・」

「詰まる話、平行世界から来たってことか・・・」

「やあ、面白い話をしているね」

すると、そこにスカリエッティが現れる。すると、昶は驚いて身構えた。

「スカリエッティ！？お前は捕まったんじゃ・・・」

「それは昶の世界で・・・じゃないか？」

「あ・・・・・」

「どうやら、君の世界の私は何かしたらしいね？」

「ああ、歴史に残る大事件だよ」

こうして俺たちは昶から『ＪＳ事件』の概要を聞いた。

「で、機動六課が鎮圧したと？」

「そういうこと」

「なるほど、私も一応計画はしていたのだがね」

「この世界では・・・」

「起きてないよ。起こせなかったのさ」

スカリエッティの言葉に、昶は首を傾げる。

「私はそこにいる直人に心を動かされ、自首したのさ。もっとも、ゆりかごが破壊されたことでことを起こせなくなってしまったからね」

「なるほど・・・」

「で、話を戻すけど、さっきの話からして君はロストロギアで平行世界へと飛んだんだな？」

「はい、巡りあう剣というものを追って」

「それ、本当か？」

「？はい、そうですけど」

なるほど、話が繋がったな。

「この世界にもその剣は存在するんだ。そして俺はそれが光るのを

見た。ということは？」

「巡りあう剣が、俺を転送させた？」

「どうやら、平行世界を飛ぶロストロギアらしいな」

「となると、もう一度同じように握れば戻れるって事？」

多分というか、それしかないな・・・

「昶君は、その剣は？」

「そういえばどうしたんだろう・・・・」

手持ちにもなかったし、飛ばされたときに落としたのか？

「しょうがない、調査するか・・・」

「ええ、お願いします」

「何を言ってんだ。お前も行くぞ」

「え？あ、はい！」

こうして、俺と昶の調査が始まった。

俺は巡りあう剣を腰に挿し、森を進む。

「この周囲いったいは遺跡のせいで魔力が充満している。調査は難

しいな」

「ええ、そうですね・・・・・・」

そんな会話をしていると、そこには突き刺さった巡りあう剣があった。

「あった、あれだ」

そういいながら近づこうとするが、足元にビームが発射された。

「なんだ!?」

「あれは・・・・」

そこにいるのは黒い何か。

「・・・剣を守っている?」

「この地は色々と人が死ぬらしい。魔力を持った人間の怨念がロストロギアに反応しているんだ」

「面倒ですね」

「だが、あいつらをぶっ飛ばしてお前が剣を掴み取ればお前は世界に帰れる。お前は剣を掴み取ることだけ集中しろ」

「お断りします」

祀の言葉に、俺は驚いて祀を見た。すると、祀はにやりと笑ってい

た。

「ちゃんと最後まで付き合いますよ」

「そうか、じゃあ行くか！メシア！」

「はい！エクスカリバー！」

「「セットアップ！」」

『『スタンバイレディ』』

互いに剣を構え、黒い何かに突っ込む。

「メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

黒い何かは蒼雷一閃で崩れ去る。簡単に倒せるが、なかなか数がいるな。

「風王一閃！」

昶も風を斬撃に変えて撃ち放つ。

「やるじゃないか」

「ええ、先輩も」

「先輩？」

「ええ、なのは先輩から聞きましたよ。３人の婚約者なんでしょ？」

昶の言葉に驚く、なのはのやつ、そんなこと昶に教えたのかよ。

「だから、俺は直人先輩って呼びます」

「ふっ、そうか・・・では行くぞ、昶！」

「ええ！先輩！」

こうして俺と昶はアンノウンを倒しながら突き進んでいく。

「これ以上は埒が明かないな」

「どうせなら、互いの最大火力で吹き飛ばすのはどうですか？」

「・・・悪くない案だ」

俺はリミットブレイクを発動し、カートリッジをロードする。すると、俺に黒い何かが襲い掛かる。

「無限の剣製！」

昶の手に包丁のような剣が出てくる。

「月牙天衝！」

それによって敵が吹き飛ぶ。

「すごいな」

「ええ、これは自分でもチートだと思います」

「ははっ、まあいいや。お互い全力で潰しちまおう」

「はい！」

「メシア、ブレイブスワロー！デバイス複合！」

「え！？」

デバイス複合を行い、「英雄の燕」ブレイブスワローがその姿を現す。

「先輩もチートっすか？」

「どうだろ、メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「エクスカリバー！」

俺と昶、それぞれのデバイスに光が宿る。それを見て黒いアンノウンは驚きを見せた。

「蒼天龍斬波！」

「約束された勝利の剣！」

二つの砲撃が黒いアンノウンを飲み込み、大爆発が起きた。

「「・・・・・やりすぎた」」

同時に声が重なった俺たちだった。

こうしてアンノウンを撃退。昶が巡りあう剣を握った。

「おっ？」

反応してる。多分重ね合わせろってことか？

「それじゃあ、元気でな、昶。向こうのなのはたちにもよろしく」

「ええ、先輩もお元気で」

「もしよ、また会う機会があったら、今度はお互い本気で模擬戦をしよう」

「いいですね、それ」

互いに笑い、剣を掲げて重ね合わせた。

「またいつか、争いのない地で・・・」

「平和なときに、また会いましょう」

こうして昶は粒子となって消えた。多分、自分の世界に帰れたんだろうな。

「じゃーな！」

俺は天に昇っていく粒子に向かってそう言った。

昶ｓｉｄｅ

「えーっと、ここは・・・」

そこは本局の前だった。

「あ、昶！」

「スバル、ティアナ」

「どこ行ってたのよ。みんな心配したのよ？」

「ああ、悪い悪い、とりあえずロストロギアの報告するから、行こうぜ？」

「ええ、そうね・・・」

こうして俺は穂本局の中に入っていく。そして俺は巡りあう剣を見る。

「またいつか・・・か」

「昶、どーしたの？」

「ううん、なんでもない」

またいつか、争いのない世界で・・・・

蒼天外伝「巡りあいの剣～選ばれた戦士達～」（後書き）

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｃａｌｉｖｅｒ&ａｍｐ;Ｐｈａｎｔｏｍ
神藤昶
とりあえず格闘技大会のちょっと前ということにしてください。昶のチート具合とあわせるのが大変でした。二階堂先生、駄文で申し訳ありません。

第二十二話「機動六課、新任務」（前書き）

本編遅れました！申し訳ない！

とりあえず忙しかったのですいません！それでは、本編どうぞ♪

第二十二話「機動六課、新任務」

レイジングハートが人間体になった次の日。はやては騎士カリムにことの事情を説明。それにより機動六課に新たな任務が与えられた。それは「ソウル・エレメント」の回収だ。

「とりあえずそういうことだから」

「えー！じゃあレイジングハートなんですか！？」

「はい、スバル」

その清楚なレイジングハートに、フォワードはたじたじだ。もちろんシエルたちも同じだったりする。

「レイジングハート・・・綺麗」

「ありがとうヴィヴィオ。そう言ってもらえると嬉しいです」

ヴィヴィオはレイジングハートに引っ付く。どうやら懐かれてしまったようだ。

「で、ソウル・エレメントだけど、レリックと違って魔力反応は少ないの。スカリエッティの協力でガジェットで調査もしてる。だからアタリやハズレもあるから、気をつけてね？」

「ちなみにアリスの話では、後9つのソウル・エレメントがあるらしい。これを一つも闇の使徒に渡さないことを努力してくれ」

『はい！』

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ここはあるアジト。そこにフィアマがいた。

「貴様、自分が何をしたかわかっているのか？」

「わかってるさ。俺がヘマしただけだ」

フィアマは面倒くさそうに頭をかいた。

「貴様の失態はボスにも報告する。覚悟しておくのだな」

そう言ってマントの男は消えた。

「うざってぇ・・・」

フィアマは小さく呟いた。

直人ｓｉｄｅ

とりあえず緊急な朝の話を終え、おれ達は訓練場にいる。レイジングハートとマリカが戦っているのだ。理由はもちろん、レイジングハートについての把握。

「クリスタルダガー！」

「アクセルシューター」

互いの攻撃を相殺する。さらにマリカはクリスタルダガーを強化したクリスタルブレイドを構えて斬りかかる。

「このっ！」

「プロテクション」

「え！？」

「不用意に突っ込みすぎですね。ディバインバスター」

桜色の砲撃が放たれ、マリカはそれをクリスタルブレイドで抑えて防御する。

「くぅ！」

「はっ！」

そのままレイジングハートが蹴りを入れる。普段のレイジングハートからは考えられない。そんな戦いの様子を、なのはは目を丸くしてみる。

「レイジングハート・・・すごい」

「というか、なんだあの戦闘能力。軽くBランク以上ありそうだな」

二人の戦いにヴィータも驚き半分、呆れ半分で見ている。

「なのはとは正反対のスタイルだね」

「そうでもないぞ？あの砲撃のタイミングの合わせ方や砲撃の選択肢、なのはそのものだな」

ユニゾンデバイスがそうであるように、インテリジェントデバイスも成長し、所有者である主人に似ていくところは同じなのか？それにしても・・・

「なんかレイジングハート楽しそう」

「だね、なんか笑顔だし」

なのはの言うとおり、笑顔でマリカと戦うレイジングハート。確かに、楽しそうだ。

「今まで主のサポートしかできなかったから、こうして戦えるのが嬉しいんじゃないか？」

インテリジェントデバイスはＡＩを持ち合わせていても、人間と同じ体を持ってはいない。そのため主の補助などしかできない。しかしそのインテリジェントデバイスが意思のとおりに動く体を持てばこのとおりだ。

マリカｓｉｄｅ

「マリカ、そろそろ終わりにしませんか？」

「ええ、そうですね。でもレイジングハート、楽しんでます？」

「はい、このようになったのには驚きですが、これならマイマスターを守れますから」

なるほど、それは同じ意見ですね。姿は違えど、レイジングハートの意思は揺るがないのですね。

「いいでしょう、全力を持ってお答えします。不屈の心、レイジングハート」

「お願いします、天使の支え、マリカ」

沈黙が流れ風が吹いた瞬間、互いに駆け出します。

「「はあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」」

互いの魔力の拳が重なり、光が私たちを包みました。見事、ですね・・・

「私の・・・負け、ですね」

私はそこで意識を失いました。

直人ｓｉｄｅ

まさか、マリカに勝つとはな・・・

「シャーリー、データは？」

「はい、すごいですよ～！これユニゾンデバイスでも出ないような数値です」

「マリカを倒すんだ。相当だろうな。機能的には？」

「ええ、ユニゾンデバイスに近い傾向です。メンテはリインさんとあまり変わらない処置でやれば大丈夫だと思います」

すると、レイジングハートがマリカを抱えて降りてきた。

「お疲れさま、レイジングハート」

「はい、マイマスター。申し訳ありません直人、やりすぎました」

「いいよ、マリカもいいライバルができたみたいだしな」

「はい」

レイジングハートは嬉しそうに笑う。

「マイマスター、これからは私も共に戦いますから」

「うん、レイジングハート」

なのはも嬉しそうに笑っていた。

とりあえずレイジングハートの戦いの後、マリカが悔しがっていた。これはお互い、いい刺激なのかもな。そして現在食堂にいるのだが、

レイジングハートはイスに座ったままだった。

「どうかしたの？レイジングハート」

「ええ、私は食事というものをしたことがありませんので・・・」

「じゃあはい、どうぞ！」

ヴィヴィオが皿にパスタをよそった。

「ありがとうヴィヴィオ。しかし、私は食事をしても大丈夫なのでしょうか？」

「いいと思いますよ？検査でも私やリインと同じようなものらしいので」

「そうですか、では、いただきます」

レイジングハートが口にパスタを入れる。

「これが、食事ですか。初めての経験です」

「ふふっ、レイジングハート、良いだけ食べてね？」

「はい、マイマスター」

こうして食事を取るレイジングハート。確かに、インテリジェントデバイスであるレイジングハートに人間の私生活をするというのは初体験だ。

食事の後はデスクワーク。ここでもレイジングハートの能力には驚かされた。

「終わりました、マイマスター」

「え、もう！？」

レイジングハートは一応インテリジェントデバイスだ。処理などは早いし、手の動きとかはジュリアより速い。というか、見えない。

「す、すごい・・・本当に終わってる」

デスクワークなどで、デバイスを補助に仕事をするのはよくある話だ。ユニゾンデバイスなどは仕事をする際人間と同じような形で作業するため、スピードはかなり普通で、正確なだけ。しかしインテリジェントデバイスが手と足を持った場合どうなるだろうか？異常なまでの解析スピード、そして正確な打ち込みと、ただ腕にスピードを設定してキーボードをたたけば、最速でデスクワークが完成する。仕事開始からわずか２０分。一日かかるなのはのデスクワークが終了した。

「は、速い・・」

「すごいな」

「それほどでもありません」

レイジングハートはそう言って一礼する。いや、すごいよ実際。

「マリカとは大違いだな」

「酷いです主！私はヴィヴィオの世話をしてるんですから！」

「まあ、その辺は助かってるけどよ。お前、今までデスクワーク手伝ったことある？」

「・・・・・・・・・」

ないよな。

「そして最近はノーヴェが面倒見てるからお前は世話をしないよな。」

「うっ！」

「その間にお前は何をしてる？」

「な、直人君、なんか黒いよ・・・？」

なのはの言葉を聴くが、俺はとことん尋問する。

「さあ、どうなんだ？マリカ」

「そういえば僕が部屋に戻ったときなんかしてたよ？」

「ルミノ！」

「ほう？」

「ち、違うんです主！ちが、あぅ・・・うわぁぁん！」

マリカが泣きながら走り去っていった。

「あ、おいマリカ！」

「ルミノ・・・」

「え！僕のせいなの？」

「どこからどう見てもそうでしょう。お姉さまが秘密にしてるんですから。」

と、コソコソ話すシエル達。まる聞こえだぞ、お前ら。

「まあいい。とりあえず終わらせるか、仕事」

こうして俺はもう一度机に向かい、仕事を再開した。

マリカｓｉｄｅ

「ああ、ばれてないかな・・・・」

ルミノときたら、口が軽いんですから。私はそのものを手に取って本を開く。

「えっと、ここがこうで・・・ここが、こう？」

それは糸を合わせて縫う毛糸のマフラー。最近主が大変そうなので

作っていたのですが・・・

「うう、やっぱり難しいです」

なのはさんやフェイトさん、それにはやてさんにも教えていただいてるのですが、最近は時間も取れないみたいですし、どうしましょう・・・・

「マリカさん？」

「ひゃい！？」

へ、変な声が出てしまいました。そこにいたのはレイジングハート・・・仕事が終わったんですね。

「マフラー、できました？」

「え！？えと、その・・・全然・・・」

「もしよろしければお手伝いします」

「え？いいんですか？」

「はい、あなたが一生懸命なのはいつも見ていたので」

レイジングハートは笑顔でそう言ってくれた。嬉しい。そんなことを言ってもらえるなんて。

「ありがとうございます、レイジングハート」

こうして、私はレイジングハートと主たちが帰ってくるまでマフラーの作成を続けました。

それから数日後の夜

直人ｓｉｄｅ

「あ、主！」

「ん？」

「その、いつもその、寒くなったからというか、そのとき仕事が大変そうなのでその、これ！」

「これは・・・？」

それは蒼い、綺麗なマフラーだった。

「えと、その、頑張って作ったのですが・・・」

仕事しないと思ったら・・・

「あ、主？」

俺はマリカを抱きしめた。

「ひゃ！？」

「ありがとうマリカ。うれしいよ」

「あ、主・・・その、喜んでいただけて、嬉しいです。あと・・・」

「ん？」

「あんまり、無茶はしないでくださいね？私は、主の味方ですから」

マリカ、最近気にしてると思ったのはそれか。

「ああ、約束するよ」

「なーおーとー君？」

「え！？」

俺たちの後ろになのはたちがいた。

「なーんでデバイスにまで手を出すかなー？」

「いや、その、これは・・・あ、マリカ！逃げるな！」

「「「お話しようか？」」」

地獄を見た俺だった。

マリカｓｉｄｅ

脱出した後、私はレイジングハートにお礼を言いました。

「ありがとうレイジングハート」

「いいえ、お役に立ててよかったです」

「何かお礼をしなくちゃいけませんね。何が言いですか？」

「そうですね・・・私とこれからも友達でいる・・・でどうでしょうか？」

レイジングハートが顔を赤くしてる。ふふっ、レイジングハートって意外と可愛いところがあるんですね。

「ええ、喜んで！」

レイジングハートは、きっとこの部隊で良い意味でプラスになってくれますね。

第二十二話「機動六課、新任務」（後書き）

直人「さて、何かいいわけは？」

秋風「すいませんでしたぁ！」

直人「即答かよ」

秋風「しょうがないじゃん、色々と大変なんだからさ」

朱兎「こんにちはっと」

直人「お、いらっしゃい」

朱兎「小説から強制転移させられました。」

秋風「まあまあ、いらっしゃい。チート2号君」

直人「一号は？」

秋風「京谷」

直人「だよね。で、朱兎は9歳・・・だけど」

朱兎「実際は21だから30オーバー？」

直人「・・・・まあ、転生ってすごいよね」

秋風「なんでもありだからな」

朱兎「ですよねー・・・」

直人「で、神様の力か」

秋風「現在３つ目はチートを考えてる」

直人「その癖に知らないんだよな、Ｆａｔｅ」

秋風「そうなんだよな。エクスカリバーとかしか知らん」

直人「駄目駄目だな」

秋風「今に見ていろ！なんとかして知ってやるからな！」

朱兎「アニメ見れば？」

直人「そんな暇ないんだよ、こいつ」

秋風「そのとおり！」

直人「胸を張って言うな！」

朱兎「まあ知らないもんはしょうがないでしょ」

直人「まあそうだな。３つ目は主にライダーとガンダムの力を使うチートを考えてるようだしな」

秋風「俺はカブトのクロックアップだけで世界を統べることができると思ってるけどね」

直人「まあ、確かに」

朱兎「俺の場合なんでもありですから」

秋風「エリクサーを手を切っただけで飲むとか。超無駄使いだな」

朱兎「まあいっぱいあるから」

直人「それはそれで異常だけどな。っと、そろそろ時間かな？」

朱兎「おう、帰って作者ぼこしてくる」

秋風「じゃあ一応伝えて。本編は難しいけど、番外編は考えておくと」

直人「ちなみにそっちにも俺が行きたいって」

朱兎「了解、伝えておくぜ」

秋風「そしてお土産。クラウドの技全集」

直人「とりあえずあのＫＹをぼこしてこい」

朱兎「オーケィ、任せておきな」

秋風「それじゃ、ばいばーい！」

橘　朱兎　出演作品　幻想と現象と残像と・・・・・現存？

現在人気上昇中のチートキャラ。２１歳で神様の手違いによって命

を落とし、その神様たちの謝罪の一つとしてリリカルなのはの世界に転生した。といっても赤ちゃんから転送し、天然かつ若すぎる母の元で苦労する。しかしチートの能力は確かで、プレシア・テスタロッサの不治の病を治したり、アリシア・テスタロッサをフェニックスを召還して蘇生させたりなど、反則全開。これからおそらくＡＳ、ＳｔｒｉｋｅｒＳと移ると思いますが、先が楽しみです。

直人「次回、第二十三話『祝福の風、再び』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十三話「祝福の風、再び」（前書き）

とりあえず今回ははやてのお話です。最近はやての話がないもので。

では本編どうぞ♪

第二十三話「祝福の風、再び」

新たに任務を与えられて早くも1週間がたった。未だに魔力の反応は見られない。もしかしたら闇の使徒の手に渡ったのではないかと心配されたが、アリスの話では闇の使徒はそれを発見しだい破壊するらしいが、アリスには破壊されたか否かがわかるらしく。まだ破壊されていないとのこと。で、今ははやてと一緒にお茶を飲んでいる。

「うふふ、久しぶりやねぇ、直人君と一緒なんは」

「そうだな、あまり時間も取れないし」

現在はやてとデート中。ヴィヴィオは六課で修行に励んでいるし、マリカはシエルたちの世話をしている。なのはとフェイトは本局に特別講習会に呼ばれている。はやては俺の休暇と自分の休暇を重ねたらしい。ロングアーチってめちゃくちゃ仕事あった気がするけど・・・まあ、いっか。

「これからどこ行く？」

「せやねぇ・・・自然公園なんてどう？」

「いいね、自然は好きだし、落ち着ける」

こうして俺たちは自然公園に向かうことになった。そういえばここって4人でマリカを助けるって誓った場所だったっけ？

「懐かしいな」

「せやね・・・もう、４年ぶりやもん」

二人で歩くその道は、もう枯れた木の葉が舞う季節。もうすぐ冬が訪れる。

「せや、１２月はクリスマス会でもしよか？」

「いいな、みんなが地球の文化を知る機会でもある。それにみんなでいると楽しい」

「個人的には直人君と一緒にいられるだけで十分嬉しいんやけどな♪」

はやては俺の腕に絡み、頬を寄せる。

「・・・俺だって嬉しいよ、はやて」

「ふふっ、そう言ってもらえると嬉しいわぁ」

そんな話をしながら俺とはやては自然公園を歩く。すると、緊急のアラートが鳴り響いた。

『八神部隊長、休暇中失礼します』

「ルキノ、どうしたん？」

『ソウル・エレメントの反応を確認しました。ミッドチルダの山岳部です！』

「了解、直人君とうちで見る。そこからの方が近い！フォワードと両隊長の指揮はグリフィス君に！」

『了解です！』

「ちゅうわけで、休暇は終わりやな」

「そうだな、こんな職業だし。仕方がない、行くぞメシア」

「リイン、行くよぉ！」

「はいです、はやてちゃん！」

「「セーットアップ！」」

俺とはやては騎士甲冑を纏い、空を飛んだ。

ミッドチルダ山岳部・・・かつて俺がミッドチルダに転送されたときの場所でもある。その自然の量はミッドチルダでも多い地帯だ。理由は貴重な酸素を放出する光合成にある。さまざまな世界において、機械が発展した世界の滅亡には必ず人間の手による自然、または環境破壊が原因とされている。貴重な酸素を生み出す木々を己の欲望で刈った結果だといえる。それを理解してか、時空管理局は自然を重要物と考えているとか。俺としては癒されるから好きだな、自然。

「とりあえず、そう遠くない位置だけど・・・」

「があああああああ！！！！！！！！」

「お出ましか。はやて、お前は先に反応地点へ。俺はあいつ等を片付ける」

「わかった！気をつけてな？」

「わかってるよ、はやて。そっちも恐らく闇の使徒が要るかもしれない。発見したら目を合わせず、ソウル・エレメントを持って逃げるんだ。いいな？あと、これを持ってけ」

「これは・・・・」

「使えるかはわからないが、多分闇の眼を防ぐ良い道具だ」

「うん！」

こうしてはやてが俺が渡したものを持って降下していく。さあてと・・・

「とっととこいつら片付けてはやてのところへ行こう。メシア」

『いつでもどうぞ？』

「なら行くか、『蒼天の騎士』井上直人！行くぞ！」

俺はキメラの群れに突っ込むことにした。気をつけろよ、はやて・・・

はやてｓｉｄｅ

うちは直人君が時間を稼ぐ間、うちは降下してソウル・エレメントを捜索した。

「あった！あれや！」

その木の陰には白銀の宝玉があった。あれがソウル・エレメント！

「待ってもらえる？」

私が手にしようとした瞬間声がした。背後・・・目を合わせたらあかん・・・

「闇の使徒・・・やな」

「あら、知ってるの？私は氷を統べる『氷統』・・・リーヴァよ」

その妖艶な声。正直名前と声があってへん。

「こちらを向いて話さない？」

「闇の眼を食らう気はないで？」

「あらあら、そこまで知ってるのね？あなた、何者？」

「うちは機動六課部隊長・・・八神はやてや！」

うちは直人君から貰った手製の閃光弾のピンを抜いて叩きつけた。

「うっ！？」

「どや！目を封じればこっちのもんや！」

「なるほど、考えたわね・・・」

そこにいるのは大蛇。そして目を覆っているのは黒い髪をした女性。

なるほど、この人が氷統か・・・

「目を塞げば攻撃の命中は下がる上、闇の眼は一時的に使えない。

リーヴァ！あなたを・・・」

言おうとした瞬間、私は直人君の言葉を思い出した。

『いいか？目を合わせず、すぐにソウル・エレメントを持って逃げるんだ』

「今回は見逃したる！」

そう言ってソウル・エレメントを手にかけようとした瞬間だった。

「くっくっく・・・あっはっは！！」

「！？」

「面白い子だわ！八神はやて！かつて闇の書の犠牲になった哀れな娘（こ）」

「違う、あの子は闇やない！夜天や！」

うちが叫ぶと、リーヴァは笑っとる。

「単なる言葉の違いじゃない。名前が変わったからってヴォルケンリッターが人を殺した過去は変わらないわよ？」

「！？」

どうしてそのことを知っとるんや・・・どうして、いや違う！

「だったら、うちはあの子達の罪を一緒に背負う！それが最後の夜天の主の使命や！」

「ふふふ・・・だった見てみる？あの子達の、過去！」

行った瞬間、リーヴァの手から目が出現した。

「しもた・・・！」

「絶望しなさい！」

こうしてうちはヴィジョンを見た。

それはヴォルケンリッターのみんなの記憶。今のような甲冑はない。黒い布切れだけを着たみんなの姿。シグナムが何人もの人を斬り殺していく。

――――やめて

ヴィータが涙を流しながら、人を吹き飛ばし、潰し、消し去っていく

――やめて

ザフィーラがその拳で人を殴り殺した

――やめて

シャマルが誰か知らん人の魔力を吸収した。そしてシグナムが斬る

――やめて

そして、もっとも大切な祝福の風・・・それがお城を闇に沈めた。

――やめて

みんなの目に光などない。そこにあるのは悲しみの目だった。

「いやあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

私は思わず大声を上げてしまった。

直人ｓｉｄｅ

なんだ！？はやて、どうしたんだ！？

「（はやて！？どうした！？）」

念話を送るが、返事がない。そしてキメラが次々と襲ってくる。

「くっ！どけ！どきやがれー！」

俺は怒りに任せてキメラの殲滅をするためにリミットブレイクを発動した。

リーヴァｓｉｄｅ

ふん、他愛もないわね・・・

「ほら、さっさとどこかに逃げなさい？」

「・・・・・・・・・・・・」

「あらあら、壊れちゃった？」

当然ね。信じていた人間の負の感情なんて毒以外のなんでもない。まあ、どの道生きて帰らせるつもりはないんだけどね。私は大蛇を剣に変え、ゆっくりと歩み寄る。

「さあて、さよなら？夜天の主・・・いえ、闇の主さん？」

この子を殺せばたいそうな闇が得られるわね。

「ばいばい」

こうして私は剣を振り下ろした。

はやてｓｉｄｅ

そこは何もない、黒い空間・・・うちは、間違っていたんやろうか？

「みんなを受け入れた、はずなのに・・・」

うちはただただ涙を流す。

「どうして・・・」

みんなの過去は聞いていた。でも知らなかった。あんなみんなの表情を。

「うちは結局、何も救えへん・・・」

闇がうちを包む。

「やっぱり、うちは『闇』なんや・・・」

体が序所に黒く染まっていく。ああ、うちはここまでか・・・

「もう何も考えられへん・・・いっそこれが夢だと考えよか」

眠気も出てきた。考えるより、寝たほうがええやろ。

――眠ってはなりません

どこか、聞きなれた声。懐かしく、暖かいその声がした。でも誰やったかな。思い出せへん。

「もういやや・・・何も考えとうない」

――あきらめないでください

「どうしてや?」

――あなたは夜天に輝く星なのですよ?

「星だって、いつかは死んでまう」

――あなたはまだ死んでいません

うちが呟くと、少し強い声が響いた。

「でも、うちはわからへん。どうすればええんや?」

そう、闇の眼を浴びて、これだけの衝撃を受けた。うちにはもう戦う力なんて残ってへん。それに、この先どうすればええかもわからん。

――そんなこと、簡単なことです

「そうなん？」

――ええ、もちろん

「是非教えてもらいたいで・・・そんなん」

――あなたの勇気を、もう一度私にください

なかなか思い出せなかった声。何故だが、だんだんと思い出してきた。

「うちの、勇気？」

――そうです。かつて闇を夜天に変えた勇気。それを今一度お貸しください

迷った。それが最初の考え。どことも知れない・・・いや、どこかで聞いた声だけに力を貸すなどいかがなものか？そして次に来たのは不安。はたしてうちは目が覚めてみんなになんて言えばええんやろうかと・・・・

「うちは・・・」

――決断するのは、貴方です。『我が主』

「！！」

うちは思い出した。その声を、かつて失ったその力を。かつて失ったその闇・・・いや、夜天を。うちの大切な風、『祝福の風』を。

リーヴァｓｉｄｅ

「ばいばい」

私が剣を振り下ろしたその瞬間だった。小娘の手元にソウル・エレメントがあった。そしてそれが光り輝く。

「な！？」

そして剣が防がれた。そこにいるのは銀髪に紅い目をした女だった。

はやてｓｉｄｅ

暖かい・・・誰やろ？うちはゆっくりと目を開ける。そしてその目に映ったのはありえない光景だった。

「お目覚めですか？我が主」

「えっ・・・あ・・・」

「ゆっくり眠っていてください。ここは私がやります」

するとリーヴァが汗を流して焦っとる。

「あなた、何者？」

「私は主、八神はやてを守る『夜天の書』リインフォース！」

うちの前に、初代・祝福の風が再来した。

第二十三話「祝福の風、再び」（後書き）

直人「さて、理由を聞こうか？」

秋風「ついかっとなって・・・」

直人「お前はどこぞの殺人犯か！」

秋風「しょうがないじゃん、タイトルだってあんなだし」

直人「別にいいが、あれはどうなんだ？リインが宝玉と一つになったのか？」

秋風「それは違う。とりあえずその辺は本編で教えるよ。」

直人「まあいい。で、現在番外編は？」

秋風「あとは朱兎の番外編と、ウィズの番外編」

直人「大丈夫かよ」

秋風「・・・・多分」

直人「まあいい。で、お前何を読んでるの？」

秋風「Ｆａｔｅに決まってるじゃん」

直人「結局買ったのかよぉ！」

秋風「おう、まだ2巻だけな」

直人「呆れた・・・だから金がなくなるんだ」

秋風「うるさい！もう終わり！続き読むから！」

直人「駄目作者」

秋風「フラグ主人公！」

直人「後で覚えておけ・・・次回、第二十四話『夜天と蒼天』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十四話「夜天と蒼天」（前書き）

ども、眠いです・・・誤字があるかもしれません、でもドンマイです

では本編どうぞ♪

第二十四話「夜天と蒼天」

はやてｓｉｄｅ

うちは驚きを隠せんかった。そこにいるのはかつて私のために死んでもうた祝福の風。

「お前の相手は、この私だ！」

「あらあら、どういうカラクリ？あの闇の書の管理人格が出てくるなんて。二代目がいるのは知っているけど、あなたは見たところ初代のようね」

せや、リインは！？

『はやてちゃん！起きたですか！？』

はっとする。リインはまだうちとユニゾンしとる。

「じゃあ、あれはいったい・・・・」

なのはちゃんの時はレイジングハートがソウル・エレメントを取り込んだ。なら、なにに憑依を？そんなことを考えていると、うちの手元に夜天の書があらへんかった。

「まさか・・・」

ストレージデバイスの「夜天の書」に憑依したんか！？

「穿て、ブラッティダガー！」

ブラッティダガーが敵を包み込む。しかしリーヴァは無傷だった。

「うふふ・・・この程度なの？」

「何！？」

「面白いわ・・・本気を見せましょう」

言った瞬間、リーヴァが消える。そしてリインフォースの背後に回りこんだ。

「なっ！」

「いただき♪」

斬撃を食らい、リインフォースが吹き飛んだ。

「リインフォース！」

「大丈夫です、我が主」

リインは立ち上がり、構えを取る。

「あらあら、心臓を狙ったのに軌道を逸らして避けるなんて・・・・・さすがね」

「貴様が何者かは知らぬし、興味もない。だが・・・・」

リインフォースは手に魔力を宿す。

「主の心を傷つけることは許さん！」

「あらあら、怖いわ。いいでしょう、来るがいいわ。愚かな呪われし魔導書」

「違う、私は夜天！そして名は祝福の風、リインフォースだ！」

リインフォースが砲撃を放つ。リーヴァはそれを避けて蹴りを入れる。

「甘い！」

「くっ！」

でもリインフォースはそれを腕でガードし、顔面に一撃を入れる。

「いったぁい！女の命の顔を殴るなんて・・・・」

「情けをかけるほど、私は甘くないぞ！」

「このクソ女（アマ）ぁ！」

壮絶な殴り合いが展開される。そして今度はリーヴァの手にしていた剣が離れる。そしてそれは大蛇に変わった。

「な！？」

「驚いたかしら？これはビーストデバイスよ」

「ビーストデバイス！？」

「闇の使徒のテクノロジー・・・そして新たなる力よ」

ビーストデバイスなんて聞いたこともない。でも実際に大蛇が声を上げる。

「キシャアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「ならそれごと破壊してくれる」

「あら、これで終わりなんて言ってないわよ？」

声と共に、リーヴァと大蛇が氷に包まれる。そしてそこに現れたのはリーヴァではなかった。水色の髪に、白と水色の体と服。そして大蛇は氷を纏い、とぐろを巻く龍になった。

「そんな・・・！」

「私のこの時の名・・・・それはレヴィアタン。聞いたことないかしら？リヴァイアサンの別名よ？」

「化け物と取ってよさそうだな」

「ふふっ、面白いことを言うわね。闇の使徒はそれぞれ炎帝、嵐王、氷統、影斬・・・・まあ、他にもいるわけだけど、それぞれが闇の力を代償に得ることができるわ。私は氷を統べる者・・・氷統の女王、レヴィアタン。そしてこの子はアイスドラゴン」

アイスドラゴンが吼え、リインフォースに襲い掛かる。

「っく！」

「あはははは！踊りなさい！」

「リインフォース！」

「私は大丈夫です。我が主はお逃げください！」

「いやや！うちはリインフォースのロードでもある！絶対に逃げん！」

「我が主！」

リインフォースを、うちは二度と見捨てへん！

「あら、あの子が心配？なら・・・・」

レヴィアタンが手を上げた。

「あの子から始末してあげるわ！」

「しまった！我が主！」

うちに氷の槍が降り注ぐ。うちは目を瞑った。絶対に、逃げへん！

「我が主！」

大丈夫・・・・きっと彼が来てくれる。

「はやて！」

うちはその氷のやりは当たらなかった。そして抱きかかえられている。

「ごめんはやて。お待たせ」

「ううん、ありがとお、直人君」

うちの前に、蒼い天が来てくれた。

直人ｓｉｄｅ

「さてはやて？できればこの状況を簡潔に説明できる？」

「正直無理や」

「だよね」

目の前には氷の龍にそれを従える女。恐らくあれは闇の使徒。で、あの銀髪の女の人は・・・・？

「リイン？」

『はいです！』

「あれ？じゃあ、あれは・・・・」

「あれは、初代リインフォースや」

リインフォース?だって、本物の夜天の書は・・・・

「うちの夜天の書に、ソウル・エレメントが入ったんよ」

「・・・なるほど」

そんな話をしていると、リインフォースが下がってきた。

「あなたは・・・」

「初めまして。蒼天の騎士の井上直人だ。こっちはデバイスのメシアとブレイブスワロー」

「あなたも、天?」

「ええ、夜天の魔導書さん?」

俺が笑うと、リインフォースは少し顔を紅くした。

「そ、そうなのか・・・・それより、いつまで我が主を抱きかかえている?」

「え?あ・・・」

そういえばそのままだったな。

「ごめんはやて」

「ううん、平気や」

俺ははやてを降ろし、メシアを構えた。

「あいつは？」

「闇の使徒や。ビーストデバイスっちゅうデバイスをもっとる。あの氷の龍がそうや」

なるほど、また厄介なものを・・・・

『主、ビーストデバイスはクラウン家の技術です』

「・・・だと思った。」

実を言えば、そんな感じはしていた。ソウル・エレメントはその所有者を強化するデバイスだ。闇の使徒だって、それなりに力を持っているはずだ。ならば、そんな風に技術を持っていてもおかしくはない。

「だが関係ない。叩き斬る。行くぞメシア！」

『了解です、我が主』

俺は駆け出し、メシアを振るう。もう魔力も残り少ない。一気に決める！

「アイスドラゴン！」

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

氷の龍が襲い掛かるだが・・・

「遅い！」

敵の突進を避け、そのまま斬りかかる。

「甘いわよ！闇の眼をくらいなさい！」

俺はその瞬間目を閉じ、そのまま斬りかかった。間一髪で避けたらしいが、手ごたえはある。よし、いける！

「な！？」

「目を見なければたいしたことはない。」

「馬鹿な、目を閉じた状態で！？」

「剣の道を極めていけば、人の気配などは簡単に感じることができる！」

士郎さんに昔教えられたことだけど、できるとは思わなかったな。俺はそのまま気配を追って斬りかかるだが・・・

「ガアアアアアア！！！！！！！！！」

「何！？ぐっ！」

氷の龍に吹き飛ばされた。くそ、やっぱり人の気配しか読み取れな

いのか！

「直人君！」

「だい、じょうぶだ・・・・」

「・・・・井上、直人」

「なんだ？直人でいい」

「私があの女の相手をする。だからお前は、あの龍を何とかしてくれるか？」

リインフォースの言葉に驚きながらも、俺は頷く。確かに、それがいいかもな。

「ああ、わかった・・・・ブレイブスワロー」

『了解です、マスター』

「デバイス複合！」

『『デバイス複合』』

デバイス複合はマリカなしだと持っても１０分・・・それまでに決着をつけないといけない。

「１０分が、この姿の限界だ。できるか？」

「ああ・・・・夜天の名において、必ずや」

「なら俺は、蒼天の名にでも誓うかな」

こうして、俺とリインフォースは駆け出した。

「行くぞ！」

俺はメシアスワローを振るい、氷の龍へ斬りかかる。だが鱗か、それとも氷の影響か、剣が弾かれる。

「ちぃっ！」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「そのでかい口、塞げぇぇ！」

俺はアイスドラゴンの口の中に剣を刺す。

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

突き刺さったまま、蒼い雷が走る。

「ガアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

アイスドラゴンが苦しむ。俺はそのままメシアスワローを降ろすように斬り落とす。

「蒼雷、一閃！」

「ガアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

氷のドラゴンが倒れる。だが、死なない。やはりデバイスだからか？だが、これならもう戦えないだろう。

リインフォースｓｉｄｅ

コイツの闇の眼。それに我が主はやられた。あの男も、それを警戒していたからこそ、目を瞑って戦おうとしたのだな。

「遠き地にて、闇に沈め・・・・・」

「氷の風よ、吹きすさべ・・・・・」

私の手に黒い闇の魔力光、あの女に氷の魔力の塊が蓄積された。

「デアボリックエミッション！」

「アイスランス！」

互いの魔力砲がぶつかり合う。

「ぐっ！くぅ！」

「はははは！やはり欠陥品ね！」

押され始める。まずい、このままでは！

「くっ・・・！」

「消えなさい！愚かな闇の書！」

「違う！私は・・・私は！」

「せや！この子は夜天！闇と違う！」

私の隣に、いつの間にか我が主がデアボリックエミッションを同じように発動していました。

はやてｓｉｄｅ

「わ、我が主！？」

「リインフォース！頑張ろ！」

「駄目です！こんなところにいては・・・！」

「・・・・・うちは、ずっと後悔しとった」

「え！？」

「リインフォースを救えなかったことや」

ずっと後悔しとった。どうしてあの時助けることができなかったのか。もっと他に方法はなかったのか、後悔がずっと、心の中に残っていた。そして残ったのは、その悲しみを隠すために作った笑顔。

「我が主・・・」

「だから、後悔しとうない、一緒に、戦って生き残るんや！」

「あはははははは！たった二人で何ができる！」

「でも、負けへん！」

「・・・そのとおり、二人じゃないさ」

『４人です！』

いつの間にか、直人君がメシアスワローでその力を抑えつけた。

「行くぞ、はやて！」

「うん、直人君、リインフォースたちもいくよぉ！」

「了解です、我が主！」

『はいです！』

一気に魔力が押し戻される。そしてデアボリックエミッションはレヴィアタンに激突した。

「あああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「ど、どや！」

「この、小娘がぁぁ・・・」

すると大蛇が元に戻る。

「今日は、ここまでね・・・この屈辱、覚えてなさい」

「あ、待て！」

直人君が叫ぶが、レヴィアタンは姿を消してもうた。

「・・・・・逃げたな」

「ですぅ！」

「リインフォース・・・・・・」

「我が主・・・・・」

互いに名を呼ぶ。感動の再会ってやつ・・・・・やな

直人ｓｉｄｅ

「（リイン、ちょっと席を外してあげよう？）」

「（はいです）」

俺はこっそり、リインと俺はその場を離れていった。

はやてｓｉｄｅ

「リインフォース・・・・」

「はい、我が主」

「お帰り！」

うちはリインフォースに抱きつく。

「我が主・・・」

「うっ、うぅ・・・」

「申し訳ありませんでした、我が主・・・・・」

「謝らんといて？でも今だけ、こうしていたいんや・・・」

「はい、我が主」

うちはその祝福の風の温もりを抱きしめた。

第二十四話「夜天と蒼天」（後書き）

直人「さ、寒い・・・・・」

秋風「もうやだ・・・・」

直人「おい、感想に来てるぞ、応募の話」

秋風「あ、ああ・・・・・・あれな」

直人「・・・・？」

秋風「じ、実は・・・・プリンターが・・・」

直人「・・・・・・ああ、お前印刷してから審査するからな」

秋風「修理に、多分もう少しかかる」

直人「だめじゃん」

秋風「ごめんなさい」

直人「まあ、気をつけろ」

秋風「はい」

直人「次回、第二十五話『雷光の魂』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十五話「雷光の魂」（前書き）

はい、バイトのせいで遅くなりました。ごめんなさい。

でも頑張りましたのでどうか読んでください

では本編どうぞ♪

あ、そうそう、今回新しくお題を作りました。

お題1

「皆さんが小説を書くときに聞く曲。または小説が進む曲は？」

暇があればお答えくださいね！

第二十五話「雷光の魂」

はやてとリインフォースが再開してから数時間後。俺たちは隊舎に戻ってきた。当然驚く六課メンバーだが、中でも驚いていたのはなのはたちとヴォルケンリッター一同。消えてしまった彼女が蘇ったことで、全員が会議室へと集まった。

「久しぶり・・・・・だな」

「・・・ああ」

シグナムさんは少し微笑んで頷いた。

「とりあえず、私もよくわからない。何故、私がここにいるのか」

「・・・・ソウル・エレメント。その力なのはわかるが・・・」

「そうですね。私のように、インテリジェントデバイスなどではなく、ストレージである夜天の書に入ったこと。そしてリインフォースさんに以前の記憶が存在していること・・・・」

レイジングハートの言葉に、全員が考える。だが、これだけはいえる。

「今そこにいるのは、正真正銘、本物のリインフォースさんってことだな」

「みたいやね。」

「となると・・・やっぱりシエルたちの時みたいにはやての体に残っていた闇の書の意思がカオスの影響によって増幅し、それが夜天の書に移った。で、ソウル・エレメントが引き金になってリインフォースさんが姿を現した・・・・」

「だがいずれにしろ、リインフォースは強い味方・・・・そう考えていいんだろう？」

「そのとおりだ、将。私も主のため、力をあわせて戦おう」

「でもそうなると・・・」

「リインと呼び名が一緒で不便です！」

確かに。二人ともリインフォースだからな。

「そうだな、お前は？（ツヴァイ）なら私は、？（アイン）だ」

「なるほど・・・ええかもな」

こうして、アインは機動六課に受け入れられた。

そして食堂。アインがみんなに紹介され、食事になる。

「ほらヴィヴィオ、またピーマン残して」

「うー！ピーマン嫌ーい」

「ったく・・・」

ヴィヴィオが駄々をこねる。まったく強くなってもこういうところは成長しないのか。

「駄目やでヴィヴィオ？パパ困らせたら」

「ごめんなさいはやてママ」

「な、なに！？」

ヴィヴィオの言葉にアインが驚く。あ、そういえば知らなかったけ・・・

「我が主が、母親に？」

「落ち着けアイン。お前が眠っている間に、色々あったのだ」

シグナムさんが状況説明。してくれたのはいいけど、火に油だったかもしれない。

「お、お前は主だけでなく、そこにいる二人の小さな勇者たちまで・・・・！」

「え、あ、ちょ、ちょっとアインさん！？」

「許さん・・・！」

「あーちょっと！アイン！ストップストップ！」

はやてが必死に止めてくれる。こ、殺されるかと思った。

「あのな?その、確かにアインがなっとくせえへんとは思う。でもな?なのはちゃんもフェイトちゃんも納得の上で、一緒になるんや」

「し、しかし・・・」

「あーもう、グダグダ言うんじゃねーよ」

「ヴィータ・・・」

「お前だってはやての幸せ願うならそれくらい察してやれよ」

意外な人物に、シグナムたちはおろか、俺たちも驚いていた。

「それによ、直人だって悪い奴じゃないし、いいやつなんだ。ちゃんと知らないで言うなよ」

「うっ・・・」

「ヴィータ・・・・」

「か、勘違いすんなよ!あたしはアインの奴が恥を掻かないように言ってやったんだ!」

「そのとおりです。父上は優しい方ですから」

シエルたちを見て、アインはまたしても驚く。

「お前たちは・・・何故、闇の書のマテリアルが・・・・」

「僕たちのことはいい、パパを侮辱すれば僕たちは許さないぞ」

「ルミノの言うとおりだ。いかに母君のデバイスだろうと、父君を侮辱することは許さん」

三人がデバイスを構える。

「おい、やめろお前ら」

「で、でもパパ・・・」

「ヴィヴィオが怯えてるだろ?」

「あ・・・」

ルミノとセレスがはっとする。ヴィヴィオが涙目でその光景を見ていた。

「す、すみませんヴィヴィオ、怖がらせてしまいました」

「ごめんヴィヴィオ」

「すまないな」

「シエルお姉ちゃんたち怒ってない?」

「はい、もう大丈夫です。ごめんなさい」

シエルは優しくヴィヴィオの頭を撫でた。アインは驚いて三人を見る。すると、はやてが近寄ってきた。

「アイン？あの子達は、もう闇のマテリアルとちゃうんよ」

「どういう、ことですか？」

「話したらちょう、長くなってしまうけど、簡単に言えばアイン同様、あの子達は確立された個人なんよ。意思を持って、ちゃんと人として生きることを選んだ、うちらの子供たちや」

はやての優しい言葉によって、アインは落ち着きを取り戻した。

「井上直人」

「・・・何？」

「その、申し訳ありませんでした。私が間違っていたようです」

「・・・いいさ、気にしてないよ。それに俺のことは直人でいいって」

こうしてお互い、誤解が解けた。」

翌日

「ソウル・エレメントの反応をキャッチ！」

「了解した、飛行可能な俺となのはとフェイトが出る！フォワードは後から来い！」

「「「「はい！」」」」

こうして俺たちは飛翔し、現場に向かう。そこはミッドチルダから大分離れた海辺。

「ここは、いつ来ても綺麗なまんまだな」

海鳴同様、その透き通る青い海がある。

「ソウル・エレメントは・・・」

『マイマスター、キメラです』

「えっ！？」

『１２時の方向！』

１２時の方向を見ると、確かにキメラが大量に迫っていた。

「どうする？」

「私とレイジングハートで足止めする。直人君とフェイトちゃんはソウル・エレメントを」

「わかった」

「なのは、気をつけて？」

「うん、大丈夫」

こうしてなのはが足止め、俺とフェイトが捜索に移った。

なのはｓｉｄｅ

「さてと、団体様ご到着・・・かな？」

『マイマスター、遊んでる暇ありませんよ？』

「うん、行こうかレイジングハート」

『オーライ、マイマスター』

「高町なのはとレイジングハート！行きます！」

こうして私はキメラに躍り掛かった。

直人ｓｉｄｅ

「さ、寒い・・・」

「もう１１月だからね」

海が綺麗だからと言って、この季節に入る馬鹿はいないだろう。

「あ、あれ！」

フェイトが指差す方向には、金色に光る宝玉があった。

「あれか」

「みたいだね」

「ちょっと待った・・・」

「「!?」」

俺たちの他に、第3者の声が響く。ちっ、もうお出ましか。

「誰だ?」

「僕は嵐王(らんおう)のノワール・・・闇の使徒さ」

「黒い風ってか?」

「面白いことを言うなぁ、あなたは」

ノワールが笑っている。ちっ、闇の眼の対策。閃光弾はもう使えないだろうな・・・

「ああ、ちなみに僕は闇の眼を使うの嫌いだから。こっち向いてよ?」

「俺たちがそれを信じるとでも?」

「だって、闇の眼なんて使わなくても僕は強いから」

この言葉と自信・・・・そうとうなものだ。

「・・・いいだろう」

「直人!?」

「・・・・・コイツ、強い」

みると、緑色の髪と蒼い目をした青年が立っている。それのしたには鷹が空中で静止していた。

「さあ、祭りを始めよう。僕を楽しませてよ?」

「行くぞ、フェイト」

「うん!」

俺たちはデバイスを構え、ノワールに斬りかかった。しかし、それは何かに受け止められた。

「疾風の鎌、デスゲイル・・・・・僕の最高の相棒さ」

風が逆巻く。そして鷹が翡翠の炎に包まれた。俺たちは距離をとる。

「アイスドラゴンと同じ・・・ビーストデバイス」

「そう、これが僕のデバイス、フェニックスだ。」

「不死鳥、だと!?」

「そう、誰にも殺されない、無敵の鳥さ!」

言った瞬間こちらに迫った。速い!

「くっ！」

「あぅ！」

「フェイト！」

「ほらほら、楽しませてくれよ！」

「マリカ！」

『了解です、我が主！セカンドリミッター解除！』

俺は一定時間の解除を行い、フェイトに迫る攻撃を防御する。

「へえ、それがリミッター解除？」

「馬鹿な！押されている！？」

そう、かつてカオス・レイと渡り合ったはずのこの力が、押されている。

「このフェニックスはパワーだけならカオス・レイより上さ」

俺たちはそのまま海にたたきつけられる。くそ、冷てえ！

「フェイト、しっかりしろ」

「う、うん！」

すると、俺の手元にソウル・エレメントが転がっていた。

「フェイト、これを持って逃げろ！」

俺はフェイトのその手にソウル・エレメントを握らせる。

「で、でも！」

「大丈夫、俺が守ってみせる、フェイトも、なのはも、はやても、みんなも！だから行け！」

「直人・・・・」

「お喋りは終わった？」

再びノワールが攻撃態勢に移っている。これは勝てるかわからないな。

「行け！フェイト！」

「・・・すぐにみんなを呼んでくる！」

そう言ってフェイトは戦闘空域を離脱する。

「逃がさないよ！」

ノワールが炎をフェイトに向けて発射する。させるかよ！

「真・虚空雷閃！」

「！？」

「お前の相手は、俺だろ？」

フェイトｓｉｄｅ

私はただひたすら、空域を飛び続けた。

「直人、待ってて！今助けを・・・！」

そう思った瞬間、私は止まってしまった。助け？いったい誰を頼る？なのはは今戦っている。じゃあはやて？シグナム？シエルたち？フォワードのみんな？駄目だ、みんなでもあれには勝てない。勝ち目なんてない。本当は怖かった。私はあの男を見た瞬間鳥肌がたった。

「でも、私がいたところで・・・」

なのはのように力を得ていない私では、とても力にはなれない。このままでは直人は殺されてしまう。みんなは到着できない。敵うとも思えない。ならどうすればいいの？私は、私はどうしたら・・・

「あ、あれ？」

わずかだけど、ソウル・エレメントが輝きを見せる。

「私に、戦えというの？」

答えるかのように、そのソウル・エレメントが輝いていく。

『サー』

「バルディッシュ？」

『戦いましょう、あなたの大切な人のために。私ももう、後悔したくありません』

そうだ、かつて母さんを救えなかった。母さんは生きていたけど、今度は違う、直人は確実に「殺されて」しまう。

「私が、勝てるかな？」

『サー、勝てるかではありません、勝つのです』

バルディッシュの強い一言。珍しい、バルディッシュが自分の意見を言うなんて。

「そうだね、バルディッシュ・・・・・忘れてた。大切な人を守ること」

『サー・・・』

「私は戦う、あの人との、明日のために、未来のために！」

その瞬間、ソウル・エレメントが強い輝きを放ち、私を包み込んだ。

直人ｓｉｄｅ

「はあ、はあ・・・」

「もうゲームオーバー？つまんないなぁ」

「くっ！」

こいつ、まだ余裕なのか・・・

「これが英雄なの？拍子抜けだね」

くそ、何故だ！？まだこの前に後遺症が残ってるってのか！？それとも、俺になにか原因があるっていうのか？

『主、どうしたのですか！？５０％の力も出せてませんよ！？』

「わかってる・・・・」

「もういいや、死んで？」

フェニックスから炎が放たれた。くっ・・・・・ここまで、なのか・・・

『ネオ・プラズマランサー』

突然金色の矢が飛び、炎を消した。そして俺の前に何かが降りてくる。

「何！？」

「えっ・・・・・」

「直人には、指一本触れさせない！」

そこにいたのは・・・・

「フェイト！？」

ソウル・エレメントに選ばれたであろうその力を得て、フェイトが俺の前に立っていた。

第二十五話「雷光の魂」（後書き）

秋風「はーい、とりあえずフェイトも強化」

直人「バルの擬人化は？」

秋風「それは次回だ」

孝俊「よ～っす」

拓也「こんにちは」

直人「孝俊久しぶり」

秋風「そして拓也もいらっしゃい」

拓也「なるほど、あなたが直人さんと秋風さんね」

孝俊「一応説明はしたからね」

直人「そっちは色々大変だったな」

孝俊「ああ、ヴァンテモンの奴は大変だったよ」

秋風「結局二人はなのはたちにおいしいところ持ってかれたな」

拓也「持ってかれたんじゃなくて、託したんだよ」

直人「なるほどね」

秋風「それにしてもそっちの次回はプレシアの呪いと、アリシアについてか」

直人「ヴァンテモンがどうしてプレシアを利用したのかも気になるな」

拓也「ま、その辺は本編だな」

秋風「で、二人はさ、なのはとフェイト好きなわけ？」

拓也「えっ、えと・・・その」

孝俊「俺は嫌いではないぞ？」

拓也「孝俊！？」

孝俊「でも、年齢がなぁ・・・・」

拓也「まあ、９歳だからな。というか、俺は士郎さんに殺されるって」

直人「その辺は愛の力で頑張れ」

秋風「まあ、色々と犯罪だけどね」

孝俊「それは言ったら駄目でしょ」

秋風「ああ、スマン」

直人「で、今後だが？」

拓也「一応、ＡＳに行くんじゃないか？」

孝俊「それは向こうの作者しだいだな」

直人「続き期待してるよ」

秋風「おっと、そろそろ時間か」

拓也「楽しかったよ、初めてこういうことしたから」

孝俊「俺は2回目だな。また来ていいか？」

直人「もちろん」

秋風「そして今回のお土産はこれだ！」

孝俊「おお！カステラ！」

直人「あとデジモンのグッズだ」

拓也「ありがと！」

秋風「では、また来てね！」

神原拓也　出演作品　リリカルなのはフロンティア～魔導士と少年たちの記録～

原作、デジモンフロンティアの主人公。原作からはしばらく時が流れ、中学、高校の年齢となっている。リリなのの世界に飛ばされ、

なのはに協力する。炎のスピリットを宿す少年で、強い意志と行動力を兼ね備え、5年前からは大人になり、落ち着きを持っている。今後なのはと進展するかは不明。でも私としてはなって欲しいと思っている。

面林孝俊　出演作品　リリカルなのはフロンティア～魔導士と少年たちの記録～

前回も登場したオリジナル主人公。龍のスピリットを持ち、フェイトの味方となってジュエルシードの回収を続けていた。管理局に保護されてからはプレシアの真実を知り、フェイトを助けるために奔走する。最終決戦では切り札を使い、ヴァンテモンを追い詰めた。フェイトとのフラグは確実に立っている気がする。今後に期待。

直人「次回、第二十六話『決意の証』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十六話「決意の先に」（前書き）

はい、新連載始めました。よかったら見てください。
んで、今回は色々あって眠いです。

では本編どうぞ

第二十六話「決意の先に」

やられると思ったその時だった。俺の目の前には、金色の光を纏ったフェイトの姿があった。

「フェイト？」

「ごめんね、直人。大丈夫だった？」

フェイトのバリアジャケットの襟元には、稲妻の形を模したソウル・エレメントがある。マントも白と金が織り交ざり、バリアジャケットにも、金色が入っている。さらに言えば、バルディッシュには突起が多くできており、その形状も異なっていた。

「直人、下がってて。ここは私が！」

「だが・・・うっ」

傷が痛む。今の俺は、足手まといなのか・・・・？

「へえ、適合者だったの・・・・・びっくりだ」

「・・・あなたを逮捕します」

「できるなら、やってみなよぉ！」

ノワールが鎌を構えて襲い掛かる。

「フェイト！」

「バルディッシュ！」

『ネオ・ハーケンフォーム！』

ハーケンの形が、違う？なんだあの形は・・・

「はあぁぁぁぁ！」

「なっ！？」

そのハーケンフォームがフェニックスに突き刺さる。

「ピイイイイイイイイイイイ！」

「フェニックス！？」

その突き刺さるのは目の部分。うわぁ・・・フェイト、えげつない・・・

「いくら不死であろうとも、生物上の弱点は変わらない」

「くっ！貴様ぁ！」

「直人を傷つけた事、絶対に許さない！」

「らあああああああああ！」

激しい攻防が繰り広げられる。くっ・・・力になれないなんて・・・

フェイトｓｉｄｅ

「バルディッシュ！」

『イエッサー！』

魔力出力を上げる。そして斬りかかる。これならいける！

「はあああああああああ！！！！！」

「がああああああああああ！！！！！」

激突し、そのまま私は下にいるフェニックスにバルディッシュの魔力刃を突き刺す。

「ピイイイイイイイイイイイイイ！」

そのままフェイニックスは落ちる。

「もらった！」

「甘いな・・・甘い！」

突然フェニックスがデスゲイルに吸い込まれる。

「な！？」

「フェニックスはビーストデバイスだ。武器化も当然できるのさ」

デスサイズの姿が変わり、槍ができる。

「フェニックスランス・・・・これなら無敵だ」

ノワールが空をける。空が飛べたの!?

「スパイラルブレイク!」

『ネオ・プロテクション』

ノワールの魔力刃が折れる。すごい、こんな威力・・・

「な、なにぃ!?」

「バルディッシュ!」

『ザンバーフォーム』

ザンバーフォームにも変化があった。いつもとはちがうそのザンバーを構える。

「撃ち抜け、雷神!」

『ジェットザンバー』

ジェットザンバーを発動し、ノワールを地面に叩きつけた。

「調子に乗るなよ、この人間がぁ!」

魔力が上がった！？

「らあああああああああああ！！！！！！！！！」

再び接近され、攻撃を防ぐ。速い！さっきなんかとは比べ物にはならない！

「くっ！」

「消えろゴミがぁ！」

強烈な一撃。ザンバーで支えたけど、私は地面に叩きつけられた。

「ぐっくぅ！」

「フェイト！」

直人が駆け寄ってきて抱き起こしてくれる。

「フェイト、しっかりしろ！」

「うん、大丈夫・・・・一太刀食らわせたよ」

「この小娘・・・・」

そう、私は吹き飛ばされる瞬間に一太刀を入れた。

「大丈夫、私とバルディッシュで・・・・・」

『待ってください、サー』

「え？」

『先ほどの覚醒前のダメージが大きすぎます。ここは私に任せてくれませんか？』

「え？」

「つまり、こういうことです」

いきなりバルディッシュが光ると、セットアップしていた状態が解除された。そしてそこに粒子となって現れたのは黒いコートに、金髪の髪をした男の人。

「えと、バルディッシュ？」

「そのとおりです、サー」

なんというか、声の通りかなり体が強そう・・・・・

「ほう、デバイス自身が来るか・・・・」

「サーと、その大切な方を傷つけるわけにはいきません。あなたはここで倒す」

バルディッシュが地面を蹴り、空中を飛ぶ。拳を構えた。

「遅い！」

「ソニックムーブ！」

「何！？」

バルディッシュが背後に回りこみ、拳を入れる。

「ガハッ！」

「サンダー・・・・」

「なめるなデバイス！」

「レイジ！」

「デススピア！」

黒と金の光が激突する。そして爆発し、煙が包まれた。

「バルディッシュ！」

「大丈夫です。」

「死ねえええええ！」

ノワールが迫る、危ない！

「ザンバーフォーム」

バルディッシュの言葉と共に、バルディッシュの手が剣に変わる。

「何！？」

「申し訳ないが、技はすでに見切った！」

バルディッシュが斬る。しかし、それはビーストデバイスに帰ったフェニックスに阻まれる。

「くっ！」

「ピイイイイイイイイイイイ！」

「しねぇ！」

「メシア！」

その瞬間、直人が飛び、バルディッシュの盾になった。

「直人！」

「今だバルディッシュ！」

「了解した！ジェットザンバー！」

直人をすり抜け、バルディッシュがジェットザンバーを放った。直人はそのまま海に落下する。

「グアアアアアアアアアア！」

「このまま降伏するべきだ。降伏を！」

「誰が、するかアアアアああああ！！！！！！！！！！」

ノワールがジェットザンバーを受けながら力を解放する。あんな力、いったいどこに!?

「くっ!」

バルディッシュは再び弾き飛ばされ、私の所に叩きつけられた。

「バルディッシュ、しっかり!」

「大丈夫、問題ありません」

「もう一度一緒に行くよ、バルディッシュ」

「しかし・・・・」

「大丈夫、一緒なら勝てる。ずっとそうして来たでしょ?」

「そうですね、サー・・・私が間違っていました」

「バルディッシュ、セットアップ!」

バルディッシュが再びデバイスの形態に戻る。私はバルディッシュを強く握り締めた。

「スタンバイレディ」

「行くよ、オーバードライブ、真・ソニックフォーム」

『真・ソニックフォーム確立、ネオ・ソニックフォーム発動』

いつものソニックフォームの柄に、金色のラインが入る。これは、バルディッシュが強くなった証。

「はあああああああ！！」

「あああああああああ！！」

剣と槍がぶつかる。くっ！まだこんな力を！

「俺は勝つんだ！そうさ、いつだって！」

「勝つのは私たち！絶対にまけない！」

『その通りです、サー！』

私は双剣だったバルディッシュを元のザンバーフォームに戻す。

「はあああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「う、うわあああああああああああ！！！！！！！！！！」

ノワールを吹き飛ばした。やった！

『まだです、サー！』

「え！？」

突然、その場所にマントの男が現れた。

「あ、あなたは!?」

「ふっ・・・・嵐王をここまでにするとは見事・・・・いや、恐るべきはソウル・エレメントと言ったところか・・・・」

「シャドウ様・・・・」

「よくやった。今日はもういい。いいデータも取れたしな」

「申し訳、ありません」

退却するつもり!?逃がさない!

「待ちなさい!」

「私たちを捕まえるより、あそこで浮いている彼を心配すべきではないのかね?」

そこには気絶して浮いていたが、沈んでいく直人の姿があった。

「直人!」

「ふっふっふ・・・・英雄もここまでのようだな。私を捕まえるのもいいが、恐らくその間に彼は死ぬだろう」

(死ぬ・・・・直人が?いやだ、そんなのいやだ!)

私はそんな感情に任せて直人のほうへと飛んでいく。

「直人―!」

すでに沈んでいる直人を助けるため、私は海へと飛び込んだ。

？？？？ｓｉｄｅ

ふっ、絆を優先するか・・・・あれが選ばれしものか

「シャドウ、様・・・・・」

「嵐王、お前もまだ強くなれる。帰ろうか」

「はい、シャドウ様」

そうして私は出現させたキメラを消し、この空域を離脱した。

フェイトｓｉｄｅ

（直人！直人！直人！）

私は必死にその寒い１１月の海の中をもぐり、直人の手を掴む。

「（バルディッシュ！）」

『イエッサー』

魔力を底上げして、全力で上に上昇した。そして、海辺へたどり着いた。

「直人！直人！」

いくらゆすっても返事がない。まさか、水を吸い込んだの！？私は急いで人工呼吸をした。

「直人！」

「ごほっ！ごほっ！」

直人が水を吐き出した。やった！

「直人、しっかり！」

「フェイト・・・・？」

「うん、フェイトだよ、直人」

「あいつは・・・・？」

「大丈夫、撤退したよ」

私が言うと、直人は安心した顔になった。

「そっか・・・・よかった・・・・フェイト、ごめん」

「えっ？」

「俺、力になれなかった・・・・・」

直人が悔しそうに顔を歪め、目を閉じる。

「フェイトが来なかったら、俺は死んでいた。約束も守れない、駄目な男だ」

「ううん、そんなことない。直人はバルディッシュまで助けるために頑張ってくれたもん」

「フェイト・・・・」

「だから今は、ゆっくり休んで？ね？」

直人は私の言葉に、小さく頷いた。

「じゃあ、少しだけ・・・・眠るよ」

直人は気持ちよさそうに、私の膝元で眠ってしまった。あれ、なんだか私も・・・・

「バルディッシュ、周囲の警戒お願い。私もちょっと・・・・」

『はい、ゆっくりとお休みくださいませ』

「うん、お休みバルディッシュ」

こうして、私も直人と一緒に眠りについた。

第二十六話「決意の先に」（後書き）

秋風「祝！新連載３本目！」

直人「大丈夫なのか、それ」

秋風「多分スウェンのほうが更新できなくなる」

直人「お前がいいならそれでいいけど」

迅「よう！」

直人「新主人公か」

迅「おう、頑張るよ！応援よろしく！」

直人「んで、終わり？」

秋風「おう、俺は眠い」

直人「次回、第二十七話『恐怖』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十七話「恐怖」（前書き）

更新遅れました。すいません

では本編どうぞ♪

第二十七話「恐怖」

戦闘が終了して2時間後。俺は医務室で目を覚ました。

「あ、主。目が覚めました？」

「ん？ああ・・・・大丈夫だよ」

俺は起き上がる・・・が

「あ、あれ？」

フラフラする・・・・。再びベッドに倒れこんだ。

「やはりダメージが大きいのですね。寝ていてください。シャマル先生呼びますから」

「あ、ああ・・・・」

マリカは部屋を出てシャマルさんを呼びに行った。

「・・・・・負けた」

カオスとの戦い以来の敗北。

『主・・・・』

「ごめんなメシア、ブレイブスワロー・・・・また傷つけちゃったな」

『そんなことはいいんですよ、主』

『そうです。マスターの体、大丈夫なんでしょうか？』

「どうなんだろうな・・・・・」

すると、いきなり医務室のドアが開く。

「パパ！」

「ヴィヴィオ」

「パパ！パパ！パパァ～！」

泣きながら俺に抱きつくヴィヴィオ。そっか、また俺心配させたのか・・・・

「ごめんなヴィヴィオ。よしよし」

「うえぇぇぇん！よかったよぉ！」

どうして俺は、みんなを悲しませることしかできないんだろうな・・・俺は強くヴィヴィオを抱きしめる。すると、今度はシエルたちが入ってくる。

「シエル、ルミノ、セレス・・・」

「父上！大丈夫なのですか！？」

「パパ！どこか痛くないのか！？」

「というかヴィヴィオ！そこにも我を乗せてくれ！」

「ごめんみんな。俺は大丈夫だよ」

俺は笑顔でそう言った。すると、シャマルさんを連れたマリカがやってきた。

「あら、もう起きて大丈夫なの？」

「まあ、それなりに」

こうして、俺はシャマルさんの検診を受けた。

しばらくして、検診が終わった。体に異常はないらしい。しばらく休めば回復もするという。

「でもよかった。傷が軽くて」

「ああ、ごめんななのは。そっちは大丈夫だったのか？」

「うん、キメラも途中で消えて。眠ってる直人君とフェイトちゃんを発見したの」

「そっか」

「でもずるいよフェイトちゃん。直人君に膝枕なんて」

なのはの言葉に、フェイトが顔を紅くする。

「そ、それはなんというかその・・・・・」

「いいもん、今度私もするから」

なのは、最近お前もキャラが変わってきている気がするぞ。

次の日、俺はシグナムさんと模擬戦を頼んだ。

「どうしてまた私となんだ？」

「ええ、あなたが一番剣を使う中でも達人ですから」

『じゃあいくよ？レディーゴー！』

なのはの合図によって戦闘が開始される。

「はああああああああああ！！！！！！」

「おおおおおおおおおおおお！！！！！！」

剣が交わり、火花が散る。なんだ、この違和感は・・・・

「紫電・・・・一閃！」

「くっ！メシア！」

『ロードカートリッジ』

「蒼雷、一閃！」

互いの一閃がぶつかり合う。馬鹿な、押されている！？

「くっ！」

「どうした、いつもより反応が遅いぞ！」

「このぉ！」

またしても火花が散る。その瞬間だった。

――ガキィン！

メシアが俺の手から吹き飛んだ。

「しまった！」

「ここまでだ・・・・・・」

レヴァンティンが俺の首筋に当たっている。

「まいり、ました・・・・」

俺の一言で模擬戦は終了した。

「・・・・・・・・・」

「どうしたんだ直人。お前らしくもない」

「わかりません・・・・どうして俺、剣を？」

今まで、戦闘で剣を吹き飛ばされること、否、剣を手放すことなどなかった。

「・・・・まさか」

シグナムさんが呟き、俺に斬りかかった。

「う、うわあああああ！！！！」

俺は思わず目をつぶった。しかし、レヴァンティンは俺の目の前で止まっている。

「どうした、いつものお前ならブレイブスワローを発動させて防いだだろうに」

「えっ？」

そういい残し、シグナムさんは訓練場を後にした。

なのはｓｉｄｅ

訓練のあと、私たちはシグナムさんに会議室に呼び出された。

「どうしたのシグナムさん」

「せや、うちら三人を呼び出すなんて」

「ええ、実は直人のことで」

「「「え？」」」

ま、まさか・・・・

「直人君は渡さないよ！？」

「そうだよ！いくらシグナムでも！」

「主として許さんで！」

「い、いえ・・・・そうではありません」

「「「へ？」」」

じゃあいったいなんで呼び出したの？

「高町、テスタロッサ。お前たちは今日の直人と私の模擬戦を見ただろう」

「え、はい・・・・」

「うん。見てたよ？」

「そのとき、直人はおかしかっただろう？」

そういえばいつもと動きが違ったような・・・

「あれの原因がわかった」

「本当!?シグナム」

「どうしたのフェイトちゃん」

「この前嵐王と戦ったとき、直人の動きが鈍かったの。それもすごく」

じゃあ。今回やられたのにも原因があるの?

「直人は外傷的な問題でああなったのではない」

「というと?」

「奴の、心の問題だ」

「どういう、ことや?」

私たちは驚いてシグナムさんを見た。

「つまり、直人の心の傷です。」

「心の傷って、まさか・・・・」

あの事故のこと!?

「そう、その事故によって起きた悲劇の真実。そして負けたことによって力がなくなった・・・・つまり」

シグナムさんが一拍入れ、口を開いた。

「奴は剣士の心が死んでしまった」

「「「!?」」」

「ど、どういうことやシグナム!?」

「例えるなら、野球選手の心の障害に『イップス』というものが存在します」

「イップス?」

「はい。これは投手に見られる心の障害で、打者を前にすると、ボールを投げられなくなる精神的ダメージを指します」

「つまり、トラウマ?」

「そうだ。直人はこれに近い状態だ。簡単に言うと、直人の心は闇という打者を直視できない投手ということになる」

そんな・・・

「治す方法は!?」

「正直、治すのは本人の気力しだいです」

「直人の気力?」

「そうだ。力を取り戻すためには、直人は過去を乗り越えなければならない」

過去を乗り越える・・・・でもそれは、どうすれば・・・・

「そんなの無理だよ！直人の傷は、深すぎる・・・・・・」

フェイトちゃんの言うとおり。本当に、直人君の抱えている闇は大きすぎる。

「フェイトちゃんのいう通りや・・・・直人君は、とんでもない闇を抱えとる」

「確かに、そうですね」

シグナムさんも考える。なにかいい手はないのかな・・・・

「どうにか、直人がその死線を越えなければいけない」

「直人が、過去を見つめて、乗り越える方法・・・・」

本当になにも浮かばない。力になれないなんて、悔しすぎる。

「本当に、何かいい手は・・・・」

「主はやて」

「なんや？シグナム」

「一つだけ、方法があります」

「ホンマか！？」

「ただ、かなりの荒治療です」

荒治療・・・・

「でも、直人君が治るならそれでもやるしかない」

「せやね。具体的には？」

「ええ・・・・まず・・・」

こうして、私はシグナムさんの話を聞くことにした。

直人ｓｉｄｅ

俺は夜、六課の森で静かに空を見ていた。

「どうして、俺はおびえている？」

そう、あの時俺の体は震えていた。死という恐怖。それが俺を震わせた。

「・・・どうしたんだ、俺は」

闇の使徒との戦いから、どうもおかしい。体は動かないし、力も出ない。俺は闇に向き合えていない。きっとそうなのだろう。そんなことを考えているとき、俺に殺気が来た。俺はとっさに身構える。

「誰だ！」

「・・・・・・」

そこに経っていたのは、ピンクのポニーテイルの女性。それは・・・

・

「あなたは・・・シグナムさん？」

何故か騎士甲冑を纏うシグナムさん。

「このたび、機動六課はお前を不要物とみなし、排除することにした」

「は・・・？」

排除？誰を？

「死にたくなければ、抵抗してみろ」

レヴァンティンが俺の頬を掠める。それによって、血が流れた。

「殺傷、設定？」

「言っただろう。排除する・・・・と」

聞いた瞬間、俺は逃げ出した。何故逃げ出したかはわからない。だが、あのままでは死ぬ。そう思った。

「どうした、抵抗して見せろ」

俺は蹴りを入れられ、吹き飛ばされる。

「メ、メシア！」

『スタンバイレディ！』

騎士甲冑を纏い、剣を構える。

「どうした、震えているぞ？」

「うわあああああああああああ！！！！！！！！」

剣がぶつかり、火花が散る。

「ふっ、その程度か！」

「うわあ！」

吹き飛ばされ、手がしびれる。そんな・・・・こんな！

「どうして、俺が・・・・」

「六課に弱者は要らない。そういう判断だ・・・・」

「そんな馬鹿な！はやてがそんなことを！」

「隊長陣、そして我らの判断だ」

あいつらが・・・？そんな、馬鹿な・・・・

「死ね！」

「くっ！」

メシアでガードし、逃げる。駄目だ、勝てない！死にたくない！

「逃がさん！」

どうして？どうして俺は殺される？

（逃げたら駄目だ。戦わなければ！）

「いやだ！死にたくない！」

（逃げてどうなる？戦うんだ！）

「どうして俺は、戦うんだ？」

どうして・・・・？

俺はどうして戦うんだ？

何故逃げる？

戦うのがどうして怖い？

死ぬのが怖いから？

だったら他者は死んでもいいのか？

いや違う。だったら何故戦う？俺は・・・俺は・・・・！

「紫電、一閃！」

――――ガキィン！

「な、なに！？」

俺は全力で紫電一閃を受け止めた。

「俺は死ねない！例え世界が敵に回っても！全てが敵に回っても！」

抑えていたレヴァンティンをだんだんと切り替えした。

「な、なに！？」

「信じる人たちを守る騎士に、俺はなるんだぁ！」

メシアでレヴァンティンを弾き、斬りかかる。

「う、おおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

俺はシグナムさんに攻撃をする。生き延びるために、戦うために！

「メシアァァァ！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！！！」

全ての魔力と想いを乗せ、俺はシグナムさんに斬りかかった。

第二十七話「恐怖」（後書き）

秋風「はい、更新遅れました」

直人「ずっと3つ目を書いてるからだ」

秋風「いいじゃん。頑張ってるんだから」

直人「まあな」

秋風「それにしても、直人が頼りないって言う意見が多数」

直人「お前がかいてるんだろ！」

秋風「まあ、計画通り？」

直人「お前って奴は！」

秋風「まあまあ、で、今日はこの辺で」

直人「次回、第二十八話『闇の向こう』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十八話「闇の向こう」（前書き）

最近寝不足です。誰か安眠する方法を教えて欲しいです。

では本編どうぞ♪

第二十八話「闇の向こう」

俺は何も考えず、ただ「生き延びたい」ために剣を振るった。そのときだった。

「ストップだよ、直人君」

俺はなのは、フェイト、はやてに取り押さえられた。

「な、のは・・・・？」

俺はそこで意識を失った。

なのはｓｉｄｅ

荒治療・・・それはシグナムさんが直人君を殺しにかかることで、直人君の中に眠る戦いの本能を蘇らせること。

「直人君は・・・」

「あまりのショックに意識が飛んでいるな」

それはかつてのフェイトちゃんと同じ、目に光がない状態だった。フェイトちゃんが優しく直人君の目を閉じる。

「直人・・・・・・」

「案ずるなテスタロッサ。きっと直人は闇に向き合える」

「うん・・・・・・」

「ほな、直人君を医務室へ」

こうして、私たちは直人君を連れ、医務室へと向かった。

直人ｓｉｄｅ

「ここは・・・・・・」

そこはかつての修練の空間。そこにいるのはオリヴィエではない。

『俺』だ。かつてセカンドリミッター開放時に戦った、紛れもない、

相対した俺自身。

「お前は・・・・・」

「久しぶりだな、『俺』」

「・・・・・・」

「ふっ、認めたんだな、おまえ自身の闇を・・・・・もうあの光景はいらねーか」

こいつ・・・・・

「お前だな、俺だけでなく、なのはやフェイト、はやて、そしてヴィヴィオにあんなビジョンを見せたのは」

「くっくっく・・・・・面白いことは共有するもんさ」

「貴様！」

「さて」

もう一人の俺はメシアではない剣を取り出した。

「闘ろうか」

「！」

俺は攻撃される前にバックステップで下がる。

「っ・・・・！」

「なるほど、『危険』だとわかったのか」

「その剣は・・・・」

その黒くまがまがしい剣・・・・形はメシアに似ているものの、その神々しさはない。

「ああ、これか・・・・・これは」

言った瞬間、俺の頬を剣が掠める。

「お前の闇で作った剣だよ」

かすった瞬間、俺の脳裏にあの事故・・・・いや、事件が鮮明に蘇

る。

「ああ！！！！！！！！！！！」

「あははははは！どうだ！苦しいか？苦しいだろ！」

「はあ・・・はあ」

なんだ、今のは・・・・

「これが『全て』だ。この剣のな」

「全て・・・・だと？」

「悪意、憤怒、悲壮、恐怖・・・・お前の中に存在するあらゆる負の感情。それを集約した剣。それがこれだ。これで今度こそ、お前という存在を消してやろう」

「消されて・・・・たまるか！」

俺はメシアを持って立ち上がる。負けられない・・・・負けるもんか！

「おおおおおおおおおお！！」

「はん、あのネーちゃんのお陰で鈍くはないが・・・・」

今度は右肩をかすった。

「あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「俺の方が速い」

く、そ・・・

なのはｓｉｄｅ

直人君が寝てから約2時間。私たちはずっと直人君を見ている。でも、その瞬間だった。

「あああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「な、直人君！？」

突然直人君が暴れだす。私たちはすぐにバインドをかける。

「い、いったいなにが！？」

「直人！」

そこにアリスちゃんが入ってきた。

「直人！どうした！」

「そ、それが・・・・・」

私は今までのいきさつを話した。

「なんて馬鹿なことを・・・・」

「え?」

「そんなことをすれば、直人の闇人格が直人の精神を喰らおうとしてしまう」

「どういうことや?」

アリスちゃんの言っていることがわからない。でも、それをわかったのか、アリスちゃんがちゃんと説明してくれる。

「直人は以前カオスの力を体内に残したままだった。それが原因で悪夢を見た。私が取り除いたけど、それが完全だったわけじゃない。負の感情を大きく煽れば、それが復活するのも当たり前」

「そ、そんな・・・・」

「何か、方法は!?」

「・・・・・ひとつだけ」

アリスちゃんは苦しい表情のままそう言った。

「何か、方法があるの?」

「私が、直人の『中』に入る」

「直人の、中に？」

言ってることがまたわからない。どういうことなんだろう。

「身体で入るわけじゃない。直人と魔力波長が合う私の『精神』が直人の中、つまり『精神世界』の中に入る」

「そんなことが可能なの？」

「私は直人から生まれてる。だからこそできる」

「そんなことが・・・・」

アリスちゃんは魔力を放出し、そしてそれがだんだんと右手に集約する。

「コード、――――――。開放領域１００％」

どこかわからない言葉が入る。さらに魔力が高くなった。

「ア、アリスちゃん！？」

「黙って、集中できない」

やがてその力は蒼を作り出し、球体となった。

「できた・・・・」

「それは？」

「これはゲート、直人の心の中へ踏み込むための鍵」

これで、直人君の心の世界に・・・・

「ねえアリス、私も連れてって」

「フェイト、それはだめ。それは危ない」

「どうして？」

「普通の人間が行くと、帰って来れなくなる可能性があるから」

「それは、どうして？」

「理由は簡単、今の直人は全てを拒むから」

苦しむ直人君の姿。でも、私だってフェイトちゃんと同じ気持ちだった。多分、はやてちゃんも。

「それでも、私は直人君を闇から助けたいの。私は、直人君に助けられたから」

「私もだよ、直人は、私という存在の闇を受け入れてくれた」

「うちは直人君に闇を背負う勇気を貰った」

「「「だから助けたい」」」

私たちの言葉を聴いて驚いたアリスちゃん。でも、すぐにため息をついた。

「貴方たちの直人への気持ちは度を越えてるの」

「愛してる人だったら当然だけど？」

「それでも異常なの・・・でもわかった、貴方たちの覚悟」

アリスちゃんのゲートが輝きを放った。扉が開くのかな・・・・

「飛び込む前にバリアジャケットを装備して。武器も持つ。それが精神世界での『唯一』の武器になるから」

言われるがまま、私たちはレイジングハートたちとソウル・インをして直人君の前に立った。

「じゃあ行くよ・・・・直人の精神の世界へ！」

ゲートが輝きを放つ。そこで、私たちの意識が途切れた。

直人ｓｉｄｅ

「はあああああああああああ！！！！！！！！！」

「らあああああああああああ！！！！！！！！！」

剣を食らわないように防御を繰り返し、攻撃を仕掛ける。やっぱり強い！

「どうした、この程度かよ！」

「カートリッジロード！」

カートリッジを二発ロードする。

「紅蓮、一閃！」

リミットブレイクの技を放つ。だが、それさえも受け止められた。

「甘い、甘いぜぇ！」

「ぐっ！」

そのまま吹き飛ばされる。

「デバイス複合！セカンドリミッター解除！」

二連続で無理をし、体制を整える。

「ほう、考えたな」

「・・・・・」

どうにか、あの剣をあいつの手から落とさないと・・・・

「ふっ・・・・面白い」

今度はあいつの背中に黒い翼が生える。その翼の関節には気味の悪い目玉がついている。

「さあ！楽しませてくれよ！」

「真・蒼雷一閃！」

「漆黒炎閃！」

こ、この技は・・・！

「覚えてるだろ？かつてカオスに飲み込まれた男の技・・・・・そして」

再びあいつは剣を構えなおした。

「初めてお前が負けた男の技だぁ！」

「ぐっ！」

この剣の型、捌き方まで同じ・・・・！

「そらそらそら！」

「ぐっ！くぅ！」

何とか剣を避け、何度も反撃に転じる。だが、それはすぐに切り返されたり避けられる。一発も当たらない。

「おいおいどうした？そんなもんかよ」

「くっ！」

絶対、負けられないんだ！

なのはｓｉｄｅ

「なのは、起きる」

「ん・・・アリスちゃん？」

私は目を開けて立ち上がった。ここが、精神の世界・・・・

「これ、写真？」

そこに浮くのは沢山の写真。壁にも貼ってあったりするその写真は、みんな笑顔の写真。

「あ、これなのはだ」

「こっちはフェイトちゃんや」

「あれははやてちゃんだね」

それぞれが色々浮いている。私、フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィヴィオ、すずかちゃん、アリサちゃん、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、サフィラ、ジュリア、リイン、シグナムさん、ヴィータちゃん、シャマルさん、ザフィーラ、シエル、ルミノ、セレス、ルーテシア、ギンガ、スカリエッティ、ウーノさん、ドゥーエさん、トーレさん、クワットロさん、チンク、セイン、セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディート、そして直人君のお姉さんの千草さん。みんな満面の笑みで笑っている。色んな写真。そ

んな中で、壁にかかった一枚の写真を見つける。

「あれ、これって・・・・・」

そこにはなにかの写真があった。直人君と千草さんの小さい頃の写真。

「直人、可愛い・・・・」

「ホンマや・・・あれ?」

はやてちゃんも気がついた。この写真、大人が二人写ってるけど・・・・

「この人たち、顔がない?」

「これって、直人君のご両親?」

「どうして、これだけ顔がないのかな・・・・」

他の写真には、みんな笑顔で写っている。でも、その写真だけじゃなかった。この一組の男女の写真はどれも顔がない。

「それがもしかしたら、直人の闇への鍵?」

アリスちゃんが考える。直人君のご両親の死・・・・つまり、それが引き金になった。それを知ってしまった真実が。

「・・・・直人君」

すると、奥に扉が出現する。

「あれは・・・・？」

それは黒い扉。白い部屋、そして笑顔がいっぱいの写真の部屋にできた歪みだった。

「あの先に、直人が？」

「いってみよか」

「うん」

みんなで頷きあい、その扉を開けた。

「これは・・・・！」

そこは火災の現場。死んでいる人々、焼け落ちる建物。そしてその女神の像の前に座り込む一人の男の子。それを、私たちは知っている。

「直人・・・君？」

そこにはかつての直人君がいた。

第二十八話「闇の向こう」（後書き）

今回はお休みです。ごめんなさい

直人「次回、二十九話『涙と優しさと』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第二十九話「涙と優しさと」（前書き）

現在豚汁のんでます。なんか旨い・・・

では本編どうぞ

今回のお題

「最近夜は寒いですが、寒い日に食べる料理は？」

第二十九話「涙と優しさと」

なのはｓｉｄｅ

そこは炎が逆巻く事故現場。そこにいるのは幼き日の直人君。

「うっ、うぅ・・・お母さん、お父さん・・・・」

「直人君」

「・・・・？　お姉ちゃんたち誰？」

「えっと、私たちは・・・・」

「私たちは、貴方を助けに来たんだ。さあ、行こう？」

フェイトちゃんが笑顔で言うけど、直人君は首を横にふる。

「やだ・・・お母さんたちも一緒に行く」

「えっ・・・・」

そこにあるのは二人の死体。それは顔のない、直人君の両親・・・・

どうして、顔がないんだろう・・・・

「ほう・・・ここにも獲物がいたのか」

「え！？」

そこにいるのは龍を連れた男。

「炎帝、フィアマ・・・・・」

「あれが・・・」

「直人の闇のきっかけ・・・・・」

炎帝フィアマが武器を構えた。

「そのなり、管理局員か！おもしれえ！俺の祭りにはちょうどいい！」

「ひぃ！」

小さい直人君が悲鳴を上げる。

「大丈夫だよ、お姉ちゃんたちが守ってあげるから」

私たちはデバイスを構える。

「ほんとう？」

「うん、だから安心して・・・・貴方の闇は、私たちが祓うから」

「さあ、祭りを始めようか！」

「あなただけは、許さない！」

こうして、私たちの戦いが始まった。

「アクセル・・・・シューット！」

「はっ！甘いぜぇ！」

フィアマは私のアクセルシューターを弾く。

「くらいなぁ！」

私に向かって炎が向かう。くっ！ここは防御を・・・・

「なのは、避ける！」

「え！？」

アリスちゃんが私を庇って飛ぶ、なんとか無事だけど・・・・

「今のは私でも・・・・」

「駄目、万が一ここでダメージを受けたら、現実世界でもダメージが響く」

そんな・・・・

「だから避けれる攻撃は全て避ける・・・」

「ほう、大層な自信だな。だが『ここ』で俺に勝てる奴はいない！」

今度はフェイトちゃんが攻撃を受ける。そして弾き飛ばす。

「はぁっ！」

「ほう、お前ら、なかなか腕に覚えがあるな」

「おとなしく、倒されて！」

「できねえそうだんだ・・・・ビーストデバイス、発動！」

龍は変化し、炎に包まれた龍へと変わる。こんな・・・・

「気をつけて、フィアマのビーストデバイスは龍を火竜に変えている」

「攻撃も、並じゃないね」

「あとあいつの炎熱はマグマよりも熱い・・・・」

「わかった、気をつけるよ」

こうして、私とフェイトちゃん、アリスちゃんはフィアマに攻撃を開始した。

はやてｓｉｄｅ

うちは幼い直人君を抱きしめる。震えている、ずっと

「怖いよぅ、怖いよぅ・・・」

「大丈夫、うちがついとるよ？」

「どうして？」

「え？」

「どうして、お姉ちゃんは僕を助けるの？」

意味がわからん、こんな疑問、普通子供が聞かへんやろ。

「どうしてって・・・・」

「だって、僕はいけない子なんだよ？」

いけない？何がいけない子なんや？

「僕がここに行きたいって言わなかったら・・・・お母さんとお父さんは・・・」

そうか、忘れとった。直人君の闇・・・・もうこない小さいときから抱え取ったんか・・・

「直人君、どうしてそんな風に思ってしまうん？」

「だって、僕が・・・・」

「そうやない、どうしてそれを一人で背負おうとしてしまうんや？」

「？」

幼い直人君が首を傾げる。これは、本当は本人に言うことかもしれへん・・・・

なのはｓｉｄｅ

「きゃあ！」

「くっ！」

ところどころかすり傷がある。アリスちゃんが一番深手なんだけど・・・・

「なのは、フェイト、しっかりして・・・・」

「私たちは大丈夫だよ・・・でも、本当に強い」

「はっはっはあ！おもしろすぎる！」

でもどうして底なしの魔力なの？強すぎる。

「ここは直人の闇の世界・・・・直人の心の闇・・・それを破壊しなきゃいけない」

「心の闇・・・いったいどこに・・・」

「おいおい、戦いの最中に喋るとは・・・・余裕だな！」

「っく！レイジングハート！」

『オーライ、マイマスター！』

「ディバイン・・・バスター！」

「ひゃっはあ！」

ディバインバスターが相殺された！？いったい、どうすればいいの！？

はやてｓｉｄｅ

「直人君、直人君は勘違いしとる・・・・・」

「かんちがい？」

「せや、直人君言うてたやないか。」

――――罪は、それから逃げることが罪になる

「・・・・・・・」

「直人君、自分を責めたらあかん・・・・・」

「でも・・・・・」

「ああっ！」

「くうっ！」

「うっ！」

すると、なのはちゃんたちが私たちの前に転げてきた。すると、また直人君の顔が真っ青になっていく。

「あ・・・ああ・・・・」

「な、直人君？」

「また、また僕のせいで・・・・・」

「違うよ・・・直人君」

なのはちゃんが立ち上がる。

「そうだよ、直人は悪くない・・・・これは、私たちが選んだもの」

「え？」

「直人君の闇が、消えるとは思わない・・・・でもね、私は直人君の闇を一緒に背負ってくよ」

「私もそう・・・・一人で抱えないで、直人」

「せやで？直人君には、うちらがついとるやん・・・・だから、信じてや？」

「そう、直人はアリスも守る」

「お姉ちゃん・・・・」

直人君から光が漏れる。これは・・・？

「僕、お姉ちゃんたちを信じる」

直人君の身体が、徐々に光り輝いていく。

「だから・・・・」

直人君の身体が・・・・

「一緒に戦う」

今と同じ年齢になった直人君がおった・・・・これはいったい？

「ここは『悲壮』を持つ直人の部屋・・・・でももう違う。僕は僕になった」

「つまりは、精神世界の直人君？」

「そういうことだよ、はやてお姉ちゃん」

言いながら、直人君がデバイスを構えた。

「いこう、なのはお姉ちゃん、フェイトお姉ちゃん、はやてお姉ちゃん、アリスお姉ちゃん」

「うん！」

「行こう、直人」

「準備はええで！」

「精神世界の直人も、私は守る！」

それぞれデバイスを構える。

「来いよ！馬鹿ども！」

「「「「「はあああああああああああああ！！！！！！！！！！」」」」」

全員で攻撃を仕掛ける。これでも駄目！？いや、あきらめへんで！

「お姉ちゃんたち！一斉攻撃だ！」

「うん！レイジングハート！」

「行くよ、バルディッシュ！」

「アイン！いっちょやるよ！」

「トランス、フルブースト、ブレイド！」

「そうてん！りゅうざんは！」

直人君の攻撃を合図に、うちらも攻撃をする。

「エクセリオン、バスター！」

「トライデントスマッシャー！」

「遠き地にて、闇に沈め！デアボリックエミッション！」

「があああああああああああ！！！！！！！！！」

攻撃を食らったフィアマにヒビが入る。よっしゃ！これで決まりや！

「ぐがががが！この闇を破るなんて・・・・なあ！あばよぉ！」

フィアマがガラスのように割れて消えてもうた。そして、事故の現場が消え、殺気と同じような白い部屋が現れた。

「これは・・・・」

「直人君の闇を祓ったんだ・・・・」

「正確には、逃げた」

「え？どういうことや？」

「多分、先にいる闇の本体へ逃げ込んだ。急がないと・・・・」

アリスちゃんの言葉がホンマなら、急ぐしかあらへん！

「そっか、お姉ちゃんたち、行くんだね」

「あ、直人・・・・君？」

いつの間にか子供に戻った直人君やったけど、その後ろから、キラキラと綺麗な光、いや粒子が立ちのぼっとる・・・・・

「僕も、元々は井上直人の闇から作られた、幻影。消えるのが定めなんだ」

「そ、そんな・・・・・・」

「でも大丈夫、僕の記憶は、目を覚ましたときに『本物』の僕に引き継がれる」

「本物も何も、君も直人君や！」

「え？」

「偽者なんていない・・・・あなたという一人の人間なんだよ？」

フェイトちゃんの言葉に、幼い直人君は涙を流す。

「えへへ・・・嬉しいや。そんなこと言ってもらえるなんて・・・・・お姉ちゃんたち、これを」

それは綺麗な金色の鍵。

「これで井上直人がいる場所への扉が開くよ」

直人君の身体が、もうほとんど透けてきている。

「な、直人君・・・・！」

「ありがとうお姉ちゃんたち・・・・・最後に、お願いしてもいいかな？」

「なんや？」

「ぎゅってして欲しいんだけど・・・・・・」

直人君が恥ずかしそうに言う。

「ええよ」

「うん」

「私たちでいいのなら」

そう言って私たちは直人君に抱きついた。

「えへへ、暖かいや・・・お母さんみたい」

そういい残し、粒子は空へと消えていった。うちは流れた涙を拭いた。

「ほな、先を急ぐで！」

「「「了解っ！」」」

こうして、うちらの戦いは続く。直人君、待っててや！

第二十九話「涙と優しさと」（後書き）

直人「なんだこの終わり方」

秋風「え？何が？」

直人「なんか打ち切りみたいに終わったぞ！？」

秋風「んなわけないだろ、次回はちゃんと出るんだからすねるな」

直人「拗ねるわ！なんで俺が別のところにいるんだよ！」

秋風「ふっ、最近は主人公として堕ちて来たからな」

直人「うるさい！蒼雷一閃！」

秋風「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！」

直人「次回、第三十話『決意と決着』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十話「決意と決着」（前書き）

遅れてすいません、スランプに陥ったことで駄文になってます
スランプはどうやって抜け出せるものだろうか・・・・

今日のお題
「スランプの時、抜け出せるコツ、そして曲は?」

では本編をどうぞ♪

第三十話「決意と決着」

そこは修練の場所・・・・・そこに立つのは俺自身。俺は剣を構え、俺を見据える。

「まだ立つか」

「・・・・・負けて、たまるか」

もう体力は限界・・・・だが、こんなところで・・・・・

「・・・・ん?おやおや」

「?」

「面白い客が来たものだ」

「何?」

俺の前が光を放った。そこにいたのは・・・・・

「「「直人(君)!」」」

「なのは、フェイト、はやて、それにアリス!?」

どうしてみんなが・・・

「私たち、精神の世界を通ってここに来たんだ」

「うっ・・・・」

「酷い怪我・・・・今魔法で・・・」

「くっくっく・・・・」

「あなたは・・・・」

黒い俺を見て、なのはたちが驚く。

「なるほど、悲壮の直人を倒したのか」

「倒したとちゃう！一緒に乗り越えたんや！」

はやてが叫ぶ。悲壮の、俺？

「それは後で・・・・貴方は、なんの直人君なの・・・？」

「俺か？そうだな、説明してやる。俺は闇の直人だ」

「闇の、直人・・・・」

「カオスの残滓によって生まれた闇の俺には、あらゆる闇が宿っている。その力を得たのが俺というわけだ」

「あんたの目的はなんや！」

はやての問いに、闇の俺は笑って答える。

「くっくっく・・・井上直人という存在を手に入れるためだ」

「なんですって!?」

「わかっていると思うが、ここは精神世界・・・・俺はここでしか生きられない」

まさか、コイツの目的は・・・・

「そう、人格を破壊し俺が『井上直人』になる!それが、目的だ!」

闇の俺の言葉に、なのはたちがデバイスを構える。

「させないよ、そんなこと」

「直人は、渡さないし、壊させない」

「直人君は、うちらが守る」

「直人を傷つけるなら、そんな『直人』は破壊する」

「みんな・・・・」

「クックック、アッハッハッハッハ!」

突然闇の俺が高らかに笑い出した。

「何がおかしいの!?」

「他人のためにそこまでなれるとは、よほどの馬鹿と見える」

「なんやて！」

「世界とは、人間が支配するもの・・・・・全ては自分のためにと人間が動く」

「そんなことっ・・・・！」

なのはが何か言おうとするが、闇の俺は言葉を続ける。

「人とは、欲望の塊・・・それから身をそらす貴様らが、他者を救えるとは思えんなぁ！」

「だったら、力ずくでもなんとかする」

「直人を助けるためだったら」

「うちらは身をささげてでも戦う！」

「来い！おろかな人間ども！」

こうして、戦いが始まった。俺はその場に崩れ落ちた。

なのはｓｉｄｅ

直人君が倒れた。身体がだんだんと透けている。

「直人君！？」

「まずい！はやくあいつを倒さないと、直人が消えちゃう！」

そんな・・・そんなの嫌！

「アクセル・・・シューット！」

「怖い怖い・・・・・」

闇の直人君は言いながらそれを弾く。

「穿て、ブラッティダガー！」

「サンダーレイジ！」

「おっと・・・」

あっさりと二人の攻撃まで避けた。

「くっくっく・・・こんなものか？」

「はぁ！」

今度はアリスちゃんが背後から切りかかる。でも、あっさりと避けられた。

「この世界では、俺は最強なのさ」

「どういう、こと？」

「カオス・レイ・・・・・それと同じだ」

「「「!?」」」

「そこに倒れている男の闇・・・・消えない闇を糧にした俺は最強の存在」

直人君・・・・いきなり倒れたけど大丈夫なのかな・・・・・・

「だったら倒してみせる、倒して、直人君を助け出す!」

「やってみろ、愚か者たち!」

闇の直人君が地面を蹴り、剣を振るう。

「漆黒・雷斬」

「キャア!?」

「ほう、今のを防ぐか・・・・・」

黒いオーラを纏った剣・・・・なんて威力!

「ハーケンセイバー!」

「漆黒・雷虚!」

「あああああああああああああ!!!!!!!!」

ハーケンセイバーがかき消され、フェイトちゃんが吹き飛ぶ。

「フェイトちゃん!」

「穿て！ブラッティダガー！」

「ダークアクス！」

「くぅ！」

「隙だらけだ」

「がはっ！」

今度ははやてちゃんが蹴り飛ばされた。

「はやてちゃん！」

「さて、これで後2人か・・・・」

「まだ、私はやれる・・・」

「うちだって・・・・」

二人が立ち上がる。でも、二人がかりでも駄目なのに、勝てるのかな・・・・

「くっくっく・・・・・まだやるか？」

「もちろん、あなたを倒すまでは・・・！」

「なら来い」

「なのはっ・・・・っ！」

「大丈夫だよフェイトちゃん、はやてちゃん、私に任せて・・・・・
レイジングハート！」

『エクシードモード』

絶対に負けない、私は直人君を助けるんだから！

「来い」

「レイジングハート！」

『ネオ・アクセルシューター』

「ぬっ！威力があがった？」

「ディバィィン・・・・」

『バスター』

「何！？」

ディバインバスターを発射。闇の直人君がそれを受ける。

「くっ・・・人間にも、こんな奴がいるのか・・・・」

「直人君から、出てって！」

私が言うと、彼はニヤリと口を緩めた。

「それは・・・できない相談だ」

「なっ!?」

ディバインバスターが・・・・

「この程度の攻撃、跳ね返すなんて造作もない」

ディバインバスターが跳ね返された。そ、そんな・・・・!

直人ｓｉｄｅ

俺は・・・どうしたんだ?そうだ・・・・・なのはたちが来て、助けに来てくれて・・・・

「どうして、助けに来たんだろう、『俺』を」

「それは、君が大好きだからじゃない?」

「お前は・・・」

そこにいるのは、夢に出てきた俺だった。いや、なのはたちが言っていた『悲壮』の俺?

「僕も、本当なら闇だった」

「えっ・・・」

「僕の役割は、闇の直人に命じられた『悪夢』の実行」

言った後、小さな俺は少し後悔したような顔になった。

「でも、彼女たちはそれを知らず、僕を助けてくれた」

「・・・・・・・・・・」

「びっくりしたよ、君という存在を助けるために、あそこまで必死になって」

「・・・・・・・・・・」

みんな・・・・・・

「だから、君は答えるべきなんだ、彼女たちの想いに」

「俺は・・・・・・・」

「闇の君は、君の絶望が力になる。君が今ここで絶望すれば、人格は失われ、彼女たちを殺すことになる」

「!?」

そ、そんな・・・そんなこと、させたくない。

「迷うのは、君がどこかで彼女たちに闇を見られるのを恐れていたからだ。」

「ああ、そうだな」

「でも、彼女たちは君の闇を見て、そして乗り切った」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「後は君が、どうするかだよ」

「俺が？」

それは、どういう・・・・

「このまま朽ち果て、彼女達を殺してしまうか、それとも君のその足と翼で、もう一度立ち上がるか・・・・・」

だんだんと、小さい俺が粒子になって行く。

「おっと、もう時間みたいだね。僕は君の中に解けて消える・・・・お姉ちゃんたちによろしくね」

「俺は・・・・・」

なのはｓｉｄｅ

ディバインバスターが私に帰ってくる、そのときだった。

「蒼天・・・・龍斬波」

蒼い龍が、その砲撃を打ち崩した。

「直人・・・君？」

直人ｓｉｄｅ

「ほう、その身体で戦うつもりか？」

「・・・・なのは、フェイト、はやて・・・それにアリス」

「・・・・？」

「ごめん、俺・・・怖かった。みんなに俺を知られるのが」

「直人君・・・」

そう、きっと恐れていた。みんなに知られるのが・・・・でも、今は違う。

「俺は、俺を取り戻す。そして、みんなを守る」

「ほう、それは是非ともやれるならやってみて欲しいな」

闇の俺があの剣を取り出す。もう負けない、自分の闇なんかには！

「行くぞ！」

「来るがいい！」

地面を蹴り、メシアを振る。

「蒼雷、一閃！」

「ふん・・・・っ！」

剣を弾き、闇の俺を斬りつけた。

「馬鹿なっ・・・・」

「これ以上、お前の好きにはさせない！」

「貴様程度、すぐにでも消し去ってやる！」

再び剣が交わり火花が散る。

「おおおおおおお！！！！！！！！」

「ぐっ・・・・！」

「虚空雷閃！」

「暗黒一閃！」

互いの衝撃刃がぶつかる。負けない！

「このっ！」

「甘い！」

俺は一閃を避け、さらに蹴りを入れる。

「ガッ！」

そのまま闇の俺は吹き飛ぶ。

「この、ちっぽけな存在が・・・・」

「・・・そのちっぽけに、お前は負ける」

メシアスワローに変えた剣を持ち、魔力を集中する。

「お前だけは、許さない」

「やってみろ、この臆病ものがぁ！」

奴の身体からは、溢れ出るほどの闇が出てくる。あれが、俺の全て・・・全ての、闇か・・・

「決着をつける・・・カットリッジ、フルロード」

「消えろおおおおおおおお！」

「真・蒼天龍斬波！」

蒼い龍と漆黒の龍がぶつかり合う。くそっ！押されてる・・・！

「くっ！うぅ！」

「消えろ！」

やばい、押されて・・・・

「「「直人（君）！」」」

「え！？」

見ると、なのは、フェイト、はやて、アリスが後ろから支えていた。

「頑張って直人君！」

「私達がついてる！」

「せやから、負けたらあかん！」

「闇を撃ち破って！直人！」

「みんな・・・・よし！」

俺はありったけの魔力をメシアスワローに宿した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

次第に、龍が押し返して行く。

「ばかなっ・・・・」

「消えるのは、お前だぁ！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！」

闇の俺は叫び声を上げ、消えて行く。

「俺は・・・諦めないぞ・・・・・いつか、貴様を・・・・・」

最後まで言わず、闇の俺は消えた。すると、世界が崩れて意識が絶たれた。

なのはｓｉｄｅ

「う、う～ん・・・・」

私達はゆっくりと目を覚ました。ここ、医務室・・・・戻ってきたの？

「そうだ、直人君！直人君！」

「う、うぅ・・・・なのは、フェイト、はやて、アリス？」

「「「やったぁ！」」」

私達は直人君に抱きついた。

「よかった、よかったよぉ！」

「直人！」

「うっうぅ・・・」

「わかった！わかったから離れろ、苦しい！」

「駄目！絶対離れない！」

こうして現実世界に戻ってきた私達は、心から直人君の目覚めを喜んだ。

第三十話「決意と決着」（後書き）

今回はお休みです

直人「次回、第三十一話『鮮烈な一日』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十一話「鮮烈な一日」（前書き）

今回はヴィヴィオのお話です。多分直人に殺意が沸くんじゃないかなぁ・・・と思います。

んでもって忙しくて明日更新できないかもです。申し訳ない。

ではどうぞ♪

第三十一話「鮮烈な一日」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

直人の目覚めから早2日。今回はそんな中でも元気に動き回るヴィヴィオのお話。

マリカｓｉｄｅ

・・・眠いです。眠いんですが・・・

「マリカおねーちゃん、朝だよー」

「うぅ・・・まだ主も寝てるじゃないですか・・・・」

「ダーメ！マリカおねーちゃん朝遅いんだもん」

仕方ありません・・・起きるしかないようですね。

「ほら、早く早く！」

何故ヴィヴィオが私を起こすのか？その答えは簡単。ヴィヴィオの稽古です。ノーヴェさんとチンクさんも、そんなにしょっちゅう来れるわけでもないので、私が見てます。６歳なのに、心なしかたくましくも思えます。

「おねーちゃん！」

「はいはい、ちょっと待ってください・・・・」

今日は基礎的なものが中心のようですね。

「えい！」

「突き出しが甘いです。」

「えい！」

「それでは攻撃主体が緩いです」

私は足を引っ掛けてこけさせました。これくらいは避けられると思ったのですが。

「あうぅ～・・・・」

「ふぅ、大分できるようになりましたね。」

「ありがとうございます！」

朝からこれだと、普段が思いやられますね。

「朝からやってるなぁ・・・」

「あ、パパ！おはよー！」

「主。おはようございます」

「ああ、おはよう」

主はヴィヴィオを抱き上げ、タオルでその汗を拭いてあげてます。
やっぱりいい親子ですね。

直人ｓｉｄｅ

「パパ！パパもお稽古しよ！」

「パ、パパはいいよ。ヴィヴィオが頑張れば」

「え～！」

え～！じゃないよ。朝から汗掻きたくないし。

「一回だけ！一回だけ！」

「はいはい・・・・」

俺はヴィヴィオを降ろす。するとヴィヴィオが構えを取った。ほぅ、なんかいい感じだな。

「パパ行くよー！えい！」

「おっと」

俺はヴィヴィオのパンチを避ける。６歳のパンチならこんなものか。

「えい！えい！」

「よっ、ほっ」

「むー！パパ避けてばっかり！」
娘に手を出せるかっての。うーん・・・・
「わかったヴィヴィオ。３分間でパパに一撃でも当たったら、今日一日ヴィヴィオのお願いを聞いてあげる」
「ホント！？」
「ああ、ただし無理なお願いはやめてくれよ？」
「わかった！えい！」
「っと、簡単には当たらないからな？」
「ヴィヴィオ頑張るもん！」
こうしてヴィヴィオとの模擬戦（？）がスタート。３分もやったらヴィヴィオはヘロヘロになった。
「はい、あと１０秒ですよ～・・・」
「うー・・・！」
ヴィヴィオはすでに涙目だ。
「父上、何をしてらっしゃるのですか？」
「え、シエル？」

「えい！」

「あ・・・・」

余所見をしたせいで、ヴィヴィオに一撃を当てられてしまった。

「はい、主アウトー」

「マジかよ・・・」

「わーい！」

よ、余所見しなきゃよかった・・・・

「父上、これはいったい？」

「ん、ああ・・・・ヴィヴィオとゲームしてたんだよ」

俺はシエルにそれを説明した。

「なるほど・・・・では私にもその権利はあると？」

「お、おい？」

「久々に父上と模擬戦をしたいと思います」

おいおいおい・・・・

「ま、待て！いきなりか！？」

「それで、その・・・・私が一撃を当てたら、私も・・・・・・ゴニョゴニョ・・・」

「お前の場合一撃は俺に当てるだろうが」

シエルがゴニョゴニョと言うが、つまり自分もお願いを聞いて欲しいということらしい。

「ちなみに一撃やったら何して欲しいわけ？」

「その、父上と一緒にデートを・・・」

父親とデートするって子供か・・・・って、こいつまだ9歳か。

「却下」

「あぅ・・・」

「んなことしなくても休暇にいつでも出かけてやるよ」

「本当ですか！？」

「ああ、ホントだ」

この後シエルを説得し、今度一緒に街へ行くこととなった。

「んで？ヴィヴィオのお願いは？」

「んとねぇ・・・・パパと遊びに行く！」

こうして俺の一日が始まる。

あの後、とりあえず風呂に入り、着替えた。朝食を取りに食堂へ行くと、すでになのは、フェイト、はやて、ルミノ、セレス、アリスが席についていた。

「直人君遅いよ～」

「ああ、ごめんごめん」

「さ、食べよ！」

「食べるぞ～！」

「まったく・・・」

俺はため息をついて席に座る。するとヴィヴィオがちょこんと俺の膝に座った。

「ん？」

「今日はヴィヴィオここで食べる！」

「どうしたん？いつも自分の席で食べるのに・・・・」

「今日ねぇ、パパとずっと一緒にいるの！」

「「「は？」」」

瞬間、全員がソウル・インしてデバイスを構える。

「直人君?今度は何をやらかしたのかな?」

「娘にまで手を出すの?直人は」

「答えによっては許さへんで?」

「おいおいおい!ソウル・インしてデバイス向けるな!」

俺はとりあえず事のあらましを説明した。

「なるほど・・・」

「そんなわけで、今日は貰うぞ、休暇」

というか、仕事は昨日こなしたしな。

「ええよ、ゆっくりしてってや」

「ああ」

「わーい!」

こうして、俺とヴィヴィオは一日休暇となった。

クラナガンに来ると、ヴィヴィオははしゃぎっぱなしだ。

「パパとお出かけ～♪」

「はぁ・・・・」

『主、良いではないですか、息抜きというのも』

メシア、お前はいいよな・・・疲れることを知らないから。

『一応精神面では疲れたりしますよ？』

「あ、そうなの・・・・」

「パパ～！アイス～！」

目の前にはアイス屋さん。お前、好きだな・・・・

「はいはい、何がいい？」

「イチゴ！」

「んじゃあイチゴとソーダ一つずつお願いします」

「ありがとうございます」

アイスを受け取り、ヴィヴィオはおいしそうにそれを食べる。

「おいし～♪」

「よかったな」

ヴィヴィオはご機嫌だし、まあいいだろう。

「パパ」

「ん？」

「あ～ん！」

「ああ、あーん」

俺がイチゴのアイスを食べると、ヴィヴィオは満足そうに笑う。アイスを食べ終えると、ヴィヴィオと一緒にショッピングモールにやって来た。

「パパ！おもちゃ買って！」

「何が欲しいんだ？」

「これ！」

俺に見せてきたのは「マジカルリリィ」というアニメのおもちゃだ。心なしか、レイジングハートに似ている気がする・・・・

『主、これは一応、なのはさんをモデルにしてるらしいです』

あ、なるほど・・・にしても、おもちゃにしてはクオリティ高いよな。

『マジカル少女、リリィ！』

向こうではテレビがやっている。幼少のなのはそっくりな女の子と、オコジョが肩に乗っている。ストーリーとしては、クラナガンに暗躍する悪の組織を片っ端からリリィが潰して行くというお話だ。

『受けてみて！正義の魔法！セイントバスター！』

なのはばりの砲撃を放つ女の子。・・・・・魔法ではなく魔砲と例えたほうが正しい気がする。てか、ほとんどなのはじゃん。

「ねえ、パパ～」

「ヴィヴィオ、それって必要なもの？」

「うん！」

そうなのか・・・？うーむ、この前はぬいぐるみとかで満足してたのに・・・しょうがない。

「・・・今回だけな」

「わ～い！」

つくづく甘いな、俺。そんなことのあと、ヴィヴィオとショッピングモール内を歩いていると、ヴィヴィオの目に別のものが止まった。

「あ、わんちゃん！」

ペットショップの犬だ。こういうところで売っているのは珍しい。

「可愛い～♪」

犬の種類はラブラドール（子犬）だ。確かに可愛いな。

「パパ～」

「さすがに駄目」

「ぶー」

ヴィヴィオが口を3にしてうなる。

「マジカルステッキ買っただろ？」

「でも可愛いよ？」

「大丈夫だよ、フェイトママの実家に犬いるから」

「ホント！？」

「ああ。それにザフィーラもいるだろ？（・・・・・あれって狼だっけ）」

どうにか納得してくれた。はぁ・・・もしかしてこんな感じなのか？今日一日。この後昼食となったので、レストランに入る。

「ヴィヴィオ、お子様ランチ！」

「じゃあ俺はあさりのパスタ」

こうして料理が来て注文する。このレストランでは、出てくる料理にピーマンが入っていないので、ヴィヴィオは喜んでお子様ランチ

を食べる。

「おいし～」

「よかったな、ヴィヴィオ」

で、食事をするのはいいけど・・・・

「ヴィヴィオ、また口についてる」

「あぅ」

俺は布巾でそれを拭く。まったく、こういうところは子供だな、ものすごく。それからしばらくして、食事を終えて店を出る。

「パパ、次はどこ行く？」

「そうだな、ゲームセンターでも行くか？」

「行く！」

俺の誕生日（一話参照）以来、ヴィヴィオはすっかりゲームセンターにはまってしまった。

「パパ、次はこれやる！」

「またリリィ？」

「うん！」

それはマジカルリリィの胸のペンダント。駄目だ、ヴィヴィオってこういうの見つけるのは早いから。で、一撃で取る。

「わーい！」

結局お金はあるのでヴィヴィオの気が済むまで遊ばせた。

「たのしかったぁ！」

「よかったな、ヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオを肩車しながら夕焼けに染まるクラナガンを歩く。

「ねえパパ？」

「どうしたヴィヴィオ」

「きどうろっかが解散したら、ヴィヴィオはパパと、なのはママと、フェイトママと、はやてママとシエルお姉ちゃんたちと暮らすんだよね？」

「そうだね」

「みんな家族なんだよね？」

「そうだよ、どうしたんだ？」

「ううん、うれしいなあって！」

いきなりどうしたんだ？ヴィヴィオ。

「嬉しい？」

「うん。ヴィヴィオ、目が覚めてからすぐにパパに会って、その後ママができて、お姉ちゃんやお兄ちゃんができて・・・・ヴィヴィオ、幸せだなぁって・・・・」

「そっか・・・・そうだな」

ヴィヴィオに本当の親などいない。ヴィヴィオは人造魔導士だ。だからこそ、ヴィヴィオの「本当の」親は俺なんだ。

「だからね、パパ大好き！」

そう言ってヴィヴィオが俺の頬にキスをする。・・・・可愛いやつめ。

「ヴィヴィオ」

「う？」

「また来ような」

「うん！」

幸せにする。この先、何があっても・・・・ヴィヴィオの幸せは、俺が守ろう。

後日

「これはどういう状況だ？」

「ヴィヴィオだけずるいから、今日はみんなでおでかけだよ！」

現在、なのは、フェイト、はやて、マリカ、ヴィヴィオ、アリス、エリオ、キャロ、シエル、ルミノ、セレスで歩く。

「さて、今日はとことん遊ぶよ！」

『おー！』

俺の苦労は多分これからも続く・・・・

第三十一話「鮮烈な一日」（後書き）

秋風「というわけで、ヴィヴィオの話でした！」

直人「あの戦いの後にこの話っていうのもどうかと」

秋風「気にするな！」

直人「というか、ヴィヴィオの話は・・・・」

秋風「また今度書く！今度はヴィヴィオ視点だ！」

直人「・・・・そう」

秋風「んでもって本編もどんどん激化させるぜ！」

直人「俺はいつになったらソウル・インが使えるんだか」

秋風「多分最後？」

直人「なにぃ！？」

秋風「んじゃ、今日はここまで！」

直人「次回、第三十二話『新たな戦いへ向かうために』ＴＡＫＥＯＦＦ！」

第三十二話「新たな戦いのために」（前書き）

はい、今回もタイトルが予告と変わってしまいました。ごめんなさい。んでもって急展開です！

では本編どうぞ♪

第三十二話「新たな戦いのために」

あれから一ヶ月。月も、もう１２月だ。クリスマスが近づいている。機動六課は試験運用として作られた部隊だ。なので、４月には解散となる。

「で、なんで俺が呼び出されたんだ？」

そこは聖王教会だ。というのも、騎士カリムに呼び出されたからだ。

「おーい！直人さーん！」

「ん？セインじゃないか」

「えへへ！久しぶり！」

そう言って抱きついてきたのは元ナンバーズ６のセインだ。修道女の格好？

「お前、どうしたんだその格好」

「え？これ？実は今騎士カリムの所で働いてるんだ！」

「へえ」

「あとオットーとディードもね」

そうなんだ。てか、何で修道女？あれ、なんか遠くから走って・・・

・

「お兄様！」

「ごふぅ！ディ、ディード、それにオットー・・・・」

「久しぶり・・・・」

「お兄様、会いたかったです」

「あ、そう・・・・」

なんか、ディードのキャラ変わってない？すごく腹痛いんだけど・・・

「なんか直人さんに会えないってディード嘆いてたから」

おいおい・・・・

「お兄様！今日は一日、私といてください！」

「オットー・・・助けて」

「無理」

二文字で斬った！ちくしょう！

「あなたたち、何しているの？」

「シスターシャッハ」

「お久しぶりです」

「ええ、お久しぶりです天使様」

「あの、本当に天使ってやめてください。恥ずかしいので」

俺が言うと、シャッハさんが微笑む。

「ああ、すいません直人さん。ディード、いい加減離れてあげては？」

「嫌です。今日は一日、お兄様と共にいさせてください」

「シスター、助けてください」

「ええ「多分無理だと思うよ？」え？」

セインの意外な言葉に、俺達はセインを見た。

「だってもうなんか、ディードだけじゃなくてほら・・・」

指を差す先には、木の陰、草むらから視線があった。そこにいるのはウーノをはじめとするナンバーズ。つまりウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、セッテ、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディだ。なんで全員ここにいるんだよ。

「昨日あたしが直人さんが来るって言ったらこんなことに」

あははと言ってるけど、セイン、なんか怖いよあいつら。

「多分原因はディードかな」

「・・・・リミットブレイク！」

「逃がさん！ライドインパルス！」

逃げようとしたが、トーレに捕まった。は、速い！

「ふっふっふ、お前をものにするためにどれだけこれを強化したと思っている」

「違う！なんかそれの使用方法が違う！」

「逃がしませんよぉ、直人さん？なのはさんたちが婚約者でも、私達は愛人になりますから」

ドゥーエがサラッととんでもないことを言い出してピアッシングネイルを俺の首に突き立てた。その他にも、セッテに抱きつかれたり、チンクに手を掴まれている。

「ちょっと待てドゥーエ！なんでお前がそれを知ってるんだ！」

「姉達はスバルから聞いたのだ。まったく、油断も隙もない」

「私とドゥーエの情報網、侮っては駄目ね、直人」

ちょっと待てウーノ！それはもう情報網とかそれ以前の問題に・・・・！

「パイロシューター！」

「光翼斬！」

「アロンダイト！」

そう、今回はシエルたちも来ている。俺はそれをギリギリで避けた。

「この下郎共！父君に手出しをするな！」

「私達の父上に手を出すとは、いい度胸です」

「僕たちが片っ端からやっつけてやるー！」

3人の登場に、驚きを隠せないナンバーズ一同。

「まさか貴方達が来ているなんて・・・・」

「スポーツ大会の時は何者かと思ってたけど・・・・」

「まさか3人の子供！？」

びっくりしてるよ・・・・かなり。俺はナンバーズに事情を説明した。

「な、なるほど・・・・」

「これ以上、父上には絶対に触れさせません」

「そうとも、シエルの言うとおりだ。下郎共に父君を汚させはせん！」

「そうだそうだー！」

「おまえら、もう少し説得力のあるように言え」

現在の状況はシエル、ルミノ、セレスが俺に抱きついていたりする。

「駄目です！お兄様は渡しません！」

「そうだそうだ！兄貴を独り占めなんてずるいぞ！」

未だに言い争うシエルたちとナンバーズ。

「もうやだ・・・・」

俺は小さくため息をついた。

そんな騒動から数十分後、喧嘩はシスターシャッハが鎮圧した。そして、俺は騎士カリムの所へと向かった。

「失礼します」

シエルたちを連れて、俺達は騎士カリムのいる客間へと通された。その瞬間、顔が引きつった。騎士カリムの他に、ありえない人たちがいたからだ。

「レ、レオーネ相談役にミゼット議長、ラルゴ元帥・・・・・それにリンディ統括とクロノ提督！？」

「初めましてだな、英雄よ」

「初めまして、噂は聞いているわ」

「お前を見ていると昔の自分を思い出すよ」

「まあまあ、座ったら？そこの貴方達も」

「ふむ、確かに幼い頃のフェイトにそっくり・・・だな」

俺は動揺しながらも、リンディさんに促されて席に座る。シエルたちは俺が驚いているのにキョトンとしている。

「ねえパパ、このおじさんたちは誰なんだ？」

「ル、ルミノ！そういうことは言うな！」

慌ててルミノの口を塞ぐ。このアホ！とんでもないことを言うな！

「直人さん、とりあえず落ち着きましょう？」

「あ、はぁ・・・」

「初めまして、マテリアルさんたち・・・今は井上君の娘かしら？ミゼット・クローベルよ。本局統幕議長をしているわ」

「ワシはラルゴ・キールだ。武装隊栄誉元帥をしとる」

「ワシはレオーネ・フィルス。法務顧問相談役だ」

「私達も初めましてね。リンディ・ハラオウン。フェイトの母よ」

「フェイト母上の母ですか・・・・？」

「とても私たちからの祖母には見えんぞ」

お前ら言うな。俺もそう思うけど。

「あらあら、嬉しいわ。そう言ってもらえて」

なんか満足気味のリンディさん。

「僕はクロノ・ハラオウン。フェイトの義兄だ」

「フェイトママの兄か・・・・」

ルミノはクロノさんを見ると、クロノさんは顔を赤くして目を逸らした。提督、まさかそういう趣味が？

「なんだその目は！」

「いえ、なんでもないです」

「そして私がカリム・グラシア・・・・管理局の理事官です」

「井上シエルと申します。元は闇の書、星光の殲滅者です」

「僕は井上ルミノ。元は闇の書、雷鳴の襲撃者だ」

「我は井上セレスという。元は闇の書、闇統べる王」

それぞれが挨拶をして、俺は今回の話と、この現状について聞いた。

「それで、騎士カリム。何故今回、俺とシエルたちが呼ばれたのでしょう?それに、伝説の三提督までいて・・・・」

「シエルさんたちについては後ほどお話しますが、今回のメインを話しましょう。この顔ぶれ、何か思いつきませんか?」

「え?」

リンディさんにクロノさん、そして伝説の三提督・・・・そして騎士カリム。これって・・・・

「機動六課の支援者?」

「その通り、私達は機動六課を支援しているわ」

「でも、なんで皆さんが?」

「君も知ってるじゃろう。機動六課が一年で解散することを」

「え、ええ・・・・試験運用期間が一年ですから」

レリックもないし、事実上解散をしてしまう。

「じゃが、君も知っておろう・・・・闇の使徒の動きを」

「はい・・・ソウル・エレメントの封印を放ち、魔王・・・・なのhゲフン、カオスの復活に向けて動き出しています」

あ、危ない危ない、なんか脳内でまた「魔王じゃないもん！」とか聞こえたけど、スルーしよう。

「そう、そのソウル・エレメントはロストロギアであると同時に、闇の使徒にとってはそれは欲すべきもの・・・・そうなると、それに立ち向かう勢力が必要になります」

「それも、尋常ではない部隊だ」

なんか、だんだん話が見えてきたな・・・・まさか？

「あの、もしかして『新しい部隊』についての相談ですか？」

「よくわかりましたね、その指揮をあなたにして欲しいのです」

「ええ！？」

思わず立ち上がってしまう。

「お、落ち着いて直人」

「そうだ、座れ」

「で、でも、なんでまた？」

俺の部隊なんて、とてもじゃないけど・・・・無理だ

「実を言えばはやてでもよかったんだけど・・・・」

「貴方を推薦したのには、理由があるのよ」

「理由？」

「うむ、君は強い。そしてミッドの英雄とも呼ばれとる。そんな君を部隊長にしたら、闇の使徒はどうすると思うかね？」

「一点に、部隊へ攻撃を決意する」

ということは・・・・・

「まさか、父上に囮になれというのですか！？」

シエルが机を叩いて立ち上がった。

「落ち着いて頂戴シエルちゃん」

「す、すみません・・・・・」

「確かにシエル君の言うとおり、これは『囮』でもある。だが、戦力を強化した通常とは違う部隊を作れば、その戦力で闇の使徒への対抗手段も見えてくる」

確かに、ラルゴ元帥の言うこともわかるけど・・・・・

「し、しかし・・・それはほとんど夢物語です。規則などの問題もあるし、保有できる戦力だって・・・・・」

「それを解決するために、私達がいるんですよ？」

「え？」

「機動六課の時と同様に、試験運用部隊として発足させて、一年間で闇の使徒と戦ってもらいたいの」

「でも、俺は正規の局員ではなく、嘱託魔導士ですよ!?」

そもそも研修なども受けていない人間に、部隊長などなれるはずがない。それに・・・・・

「それに、部隊長になれば・・・・俺は戦えなくなる」

そう、それが一番の理由だった。指揮をする大将が自ら先陣をきるなど持っての他。だが、それでは戦う前線の人間を守れなくなる。ある力が、使えない。

「父上・・・・・」

シエルたちが、心配そうに俺を見ていた。正直、辛い。

「それはわかっているわ。でも、だからこそ貴方なのよ」

「どういうことですか?」

「お主の父が、魔導士だったのは知っとるか?」

「え、ええ・・・・」

どうしてここで、父さんの名前が?

「お主の父、井上風斗(かざと)・・・・あやつは陸士００１部隊と呼ばれ

る部隊のトップじゃった」

「父さんが、部隊長？」

そんな話、初耳だぞ！？

「まあ知らんのも無理はない。お主の姉が生まれると引退してもうたからの」

「陸士００１部隊はエリート中のエリートが集う部隊・・・常に先陣にはお主の父、風斗の姿があったものじゃ」

「ランクもＡＡランク。真面目で、何より部下の命を大切にする男じゃった」

父さんが・・・・

「だからこそ、あなたに才能があると思って、推薦したの。シエルちゃんが言ったこともあるけど、でも、あなたとなのはさん、フェイト、はやてさんなら、絶対にやり遂げられると思って」

「君ならば、できると思っている」

「俺は・・・・・・」

どうするべきなんだ？確かに、部隊を立ち上げてしまえば戦力だって整えられる。何よりこの支援者だ。多少の無理だって通るし、情報だって確かなものが来る。それ以前に、どこか、父さんを追いたいという気持ちがあった。でもいいのか？俺は『囮』として動くんだぞ？それに巻き込まれるみんななんて、とても見ていられない。

だけど、一刻も早く、なのはたちと幸せに暮らせる世界を作りたい・・・・

「俺・・・・やります。新しい部隊の部隊長としてやらせてください」

「本当にいいのね?その道は茨の道・・・・困難はかなり多いわよ?」

「わかってます・・・でも、みんなを守る世界を作ることができるなら・・・・俺は」

「すまない」

そう言って三提督が頭を下げる。

「え・・・・」

「君は結婚を控えている男だ、このような無茶、引き受けてくれるとは思わなんだ」

「それに、辛いこともあるでしょう」

「君に重荷を背負わせてしまう」

「いえ、これが俺の道です。俺が切り開きます。その茨の道を」

こうして、俺は一つの決意を固めた。ところで・・・・

「シエルたちについては?」

「ええ、その話ね。実を言えば、この子達は戸籍がないでしょ？」

たしかに闇のマテリアルだったこいつらは、今こそ人だが、戸籍は存在しない。

「だから、戸籍も作っておこうと思って」

「なるほど」

「戸籍では、一応君の娘だ」

９歳の子供・・・俺は１１歳で父？

「その辺は気にしたら負けよ？」

「それに、ヴィヴィオの戸籍もできたから、確認してね」

こうして資料を渡された。なるほど、こいつらを呼んだのはこういう意味だったのか。

「ちなみに、部隊の名前は貴方が決めてね？」

「それと、この話は六課解散日まで内緒にしておいてくれ。」

「あ、はい・・・・・」

「あとそうね、あなたにも正規の管理局員になる必要があるわ」

「その時は君に『一等空佐』の階級を与えよう」

一等空佐!?

「俺が、ですか?」

「うむ、妥当じゃろ?」

レオーネ相談役、あなた無茶苦茶ですよ・・・・

「わかりました。お受けします」

こうして、俺の次の戦場(ステージ)が決まった。だが、それはまだ先の話だ。

第三十二話「新たな戦いのために」（後書き）

秋風「はい、ということで急展開でした」

直人「急すぎるだろ！」

秋風「褒めるなよ」

直人「褒めてない！」

秋風「で、今回直人の父の名前が明らかになりましたね」

直人「今まで本編で出てなかったからな」

秋風「簡易プロフィールだ」

井上風斗（いのうえかざと）
３２（故人）
ランク　ＡＡ
階級　一等陸佐
デバイス　ミッド式
部隊　陸士００１部隊
魔力光　蒼

直人の父。優秀な魔導士だったが、妻との間に千草が生まれてから身を引き、故郷の地球にいた。事故により直人を庇って死亡した。

秋風「こんな感じです」

直人「ちなみに蒼天を愛した混沌はそのまま続きます」

秋風「新部隊では新しい話に話にはしませんので」

直人「次回、三十三話『機動六課のクリスマスパーティー』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十三話「機動六課のクリスマスパーティー」（前書き）

今回はギャグ連発です。こんなので笑ってくれれば幸いです

では本編どうぞ♪

第三十三話「機動六課のクリスマスパーティー」

今日は１２月２５日・・・世間で言うクリスマスだ。そして地球出身の部隊長、八神はやてがこのイベントで何もしないはずがない。そう、何もしないはずがないんだけど・・・・

『機動六課、クリスマスパーティー！』

「おおおおおおおおおお！！！！！！！」

「これは、はっちゃけすぎだろ・・・・・」

はやてがマイクで叫び、六課のメンバーが叫ぶ。そう、この食堂が完全にパーティ会場と化していた。

「にゃはは・・・・直人君だってはやてちゃんの性格知ってるでしょ」

「知ってるけどさ・・・・・・」

ここまでやるとは思わなかった。

「そういえば、フェイトは？」

「フェイトちゃんならほら、あそこ」

そこにはフェイトがステージで歌わされているものだった。

「・・・・・・やっぱりあいつ、魔導士より歌手の方がいいんじ

ゃないか？」

「それは私もそう思う」

「パパ～！一緒に食べよ～！」

ヴィヴィオが皿に山盛りに料理を盛って来た。どっから盛って来た。

「スバルさんがよそってくれた～！」

あいつ、うちの娘を太らせて食う気か！

「父上、私達も食事にしましょう」

「そうだぞパパ！僕はお腹すいた！」

「我も腹が限界・・・・」

「わーったわーった、沢山食べろ」

「「「「はーい！」」」」

こうして食事を食べる４人。まったく、大変だ。エリオとキャロはフォワード、それにルーテシアやナンバーズたちと楽しく食べているのでよしとしよう。

「はい、直人さん♪」

「ドゥーエ」

ドゥーエがシャンパンを出してきた。気のせいか？なんか入れたように見えたんだけど。

「気のせいです。気にしたら負けですよ？」

「じゃああなたが飲めなの」

目の色に輝きを消したなのはがドゥーエの鼻をつまみあげて俺が手にしていたシャンパンを流し込んだ。

「ごほっ！何するのよ！飲んじゃ・・・・た」

ばたんと音を立て、ドゥーエが倒れた。

「お、おいドゥーエ！？」

「ほにゃ～・・・・」

目を回している。何入れたんだよ、このシャンパン。

「ああ、それはドクターが開発した睡眠薬です。そんなに効き目ないですけど、多分直人さん襲うつもりだったんじゃないですか？」

さらっとびっくりすること言ってるクアットロ。

「レイジングハート？」

「はい、マイマスター」

「あのマッドサイエンティスト、潰そうか」

「マ、マイマスター・・・怖いですけど」

「いいから、行くの・・・」

そう言ってレイジングハートを連れて行ってしまった。スカリエッティ、ご愁傷様。

^

「うぅ、恥ずかしかった～・・・・」

入れ違いで、フェイトが戻ってきた。

「フェイトお帰り。すごく上手だったよ、歌」

「ありがと・・・・あれ？なのはは？」

「あー・・・うん、多分どっかの科学者をボコしに行った」

震えているシエル、ルミノ、セレス、ヴィヴィオを見て、フェイトはあははと乾いた笑いをした。

「で、あそこでなんでドゥーエさんが？」

「ああ、それは・・・・」

『ま、まってくれ高町なのは！』

『知らないの、少し、頭冷やそうか・・・・』

『争いでは何も・・・ぎゃあああああああああ！！！！』

遠くから一人のマッドの叫びが聞こえたが、気にしないで置こう。
とおくでドゥーエを覗いたナンバーズが宙を舞うスカリエッティを見て合掌していた。

「なんか私、初めてスカリエッティに同情しちゃった」

「俺もだよ・・・・」

「あ、直人・・・・」

そこにはルーテシアがいた。

「ルー、元気か？」

「うん・・・」

「そっかそっか・・・・・・よかった」

俺はルーテシアの頭を撫でる。すると、ルーテシアが嬉しそうに笑う。

「直人は、あれしないの？」

「え？」

「あれ・・・・・」

ルーテシアの指差す先では、部隊で腕相撲がなされていた。現在１０連勝しているのはシグナムさんだ・・・大方、あんなことをす

るのははやてしかいないだろうけど。

『さあ、誰だ！次に私と勝負するのは！』

もうなんか、ノリノリだな・・・・ってか、シグナムさんも酔ってる？

「わ、私がやる！」

フェイトが名乗りを上げて壇上に上る。

「ほう、テスタロッサ・・・私に勝つつもりか？」

「負けませんよ？シグナム」

うわぁ～・・・フェイトにスイッチ入った。

『レディ～ゴー！』

ヴァイスの声でスタートする。うわ、完全に均衡してるよ。・・・・ん？

「ルー、どうしたんだ？」

「直人、抱っこ」

「お前、これが狙い？」

「うん」

さらっと恐ろしいこと言いおったよ。

「しょーがないな・・・・」

俺はルーテシアを抱き上げる。

「これで満足か？」

「うん！」

ルーテシアはまた嬉しそうに笑う。まあいっか、ルーテシアの笑顔が見れたから。

「あ、お嬢様ずるい！」

「お兄様、私も抱っこしてください！」

「いや、ディード・・・お前身体的にも精神的にもちょっと無理が・・・・」

「そうだな、姉ならいいか？」

「いや、お前身長のコンプレックスはどうした？」

ナンバーズたちも来て、みんなで盛り上がる。まったく、大変だ。でも、悪くもないな。

「あーはいはい、わかったから、順番にしろ！」

俺はため息をつきながらも、みんなを数分交代で抱っこする羽目に

なった。

そんな騒動からしばらくして、俺は水を口に含みながらため息をついた。

「つ、疲れた・・・・」

ナンバーズの中でも、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロは子供とはまた違うので大変だった。

「やあ、お疲れ様」

「・・・・・・一応確認するけど、スカリエッティ？」

「ああ、そうさ」

そこにはミイラ姿のスカリエッティがいた。

「一応聞いとくぞ？大丈夫か？」

「私を見て大丈夫だと思うかい？」

「いや・・・・・」

確かに、無事じゃないよな・・・・

「それにしても、楽しいものだね。」

「まあ、そうだろうな」

「これも君のおかげだ」

「え？」

「見たまえ、彼女達の笑顔・・・・・以前は見られなかったものだ」

むこうではウーノやドゥーエをはじめとしたナンバーズが楽しそうに食事をしたり、遊んだり騒いだりしている。

「以前にも言ったね。私は彼女達を作品だと思っていた」

「・・・・・言ってたな、そんなこと」

「だが違った・・・・彼女達は私の支えとなった、大切な家族だ」

スカリエッティは満足そうに、笑っている。包帯のしたからでも、それは確認できた。

「だから言わせてくれ、ありがとう」

「・・・・俺は何もしてないさ。彼女たちが、自分で『人として生きたい』って望んだけっかだろ？」

「そうだね・・・・だが、私は今とても幸せさ」

「そうか・・・そうだな」

俺とスカリエッティはコップのグラスをぶつけ、ワインを飲んだ。

スカリエッティとの話を終えて食事をしていると、いきなり後ろから衝撃が来た。誰かに乗っかられた？

「なおとく～ん・・・・たのしんどる～？」

すでに酔い始めたはやてだった。

「は、はやて！お前この短時間で酔うってどんだけ酒弱いんだよ！」

「そんなことあらへんで～ほんの2，3杯や～」

ほんのって・・・・ん？

「シャマルさんの手元にある酒って・・・・・・」

「え？ああ、これ？あ、あはははは～」

その酒の名前は日本酒「越後さむらい」と呼ばれる酒だ。甘口ではあるが、アルコール度数４６という驚異的な数値を持っている。ちなみにこの酒は一本１８００ｍｌが４２００円だ。未成年は絶対に飲んだら駄目だぞ？・・・・って、誰に話してんだ俺は。

「間違って飲んじゃったのよ～」

嘘だ！絶対飲ませた！

「なおとくーん・・・・だいすきぃ～」

「あーもう酒臭い！はやて落ち着けって！」

「そんなに、そんなにうちが嫌いなん？」

上目プラス涙を目に溜めて俺を見るはやて。

「待て、わかった！わかったから！」

「はやて？何を抜け駆けしてるの？」

フェイトが笑顔でバルディッシュを構えてる。怖い・・・・・てか、フェイトも酔ってる！

「上等や・・・アイン！」

「は、はい・・・・我が主」

了解しちゃ駄目だろアイン！

「直人君は私のものなのー！」

いつの間にか酔ったなのはも乱入した。そしてこの時一同が思う。

このままでは、自分達の命が危ない

「総員退避―！」

ヴァイスが叫び、撤退しようとするが、すでに遅かった。

「スターライト・・・・・」

「トライデント・・・・・」

「デアボリック・・・・・」

3人のソウル・エレメントの力、そして本来の魔力が周囲で肥大する。あ、もう死んだな。

「ブレイカー！」

「スマッシャー！」

「エミッション！」

『ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！』

もうあらゆるものを巻き込み、食堂はめちゃくちゃになってしまった。この後数日、機動六課の食堂が青空食堂。（外で食べる）ことになったのは言うまでもない。

色々と片づけをして、俺達は部屋に戻った。ヴィヴィオたちはまだ起きている。何しろまだ9時だしな。なのはたちも酔いが覚めたがその時の記憶がなく、俺の話を聞いて顔を蒼くしていた。さてと・・・

「ヴィヴィオ、シエル、ルミノ、セレス、エリオ、キャロ、おいで」

「なーに？パパ」

「はい、クリスマスプレゼント」

「「「「「「わぁ！」」」」」」

それぞれにプレゼントをあげた。

ヴィヴィオにはマジカルリリィの杖の強化版　（エクシードモードみたいなの）。

「わーい！パパありがとう！」

シエルには紅茶用のポッドとティーカップ

「ありがとうございます、父上」

ルミノには可愛らしい耳当てと手袋

「うわぁ！パパ！ありがとう」

セレスには大きなクマのぬいぐるみ。

「ありがとう父君。大切にするぞ！」

エリオには男物の服。こいつ服持ってないから。

「ありがとう、父さん！」

キャロには大きくなってアクセサリーに興味を持ったときのために、

綺麗なブレスレット。で、フリードには名前を刻んだネームプレートを足につけた。

「わあ、ありがとうお父さん！」

「きゅく～！」

こうして子供達は大満足でベッドに入った。エリオとキャロも、嬉しそうに部屋に戻っていった。

「ごめんね直人君、大変だったでしょ？」

「ん？ああ、別にたいしたことないよ（伝説の三提督たちから報酬の前金めっちゃもらったし）」

「でも、高いものばっかり・・・・」

「せや、これものすごい金額とちゃう？」

「気にするなよ。それよりほら」

俺はなのはたちに一つずつ小さな箱を渡した。

「これ・・・・」

「俺から三人へプレゼント」

三人が箱を開ける。そこにあるのは金色に輝きを放つ、誓いの指輪。

「え、これって・・・・」

「父さんからももらったけど、やっぱり自分で買ったほうがいいと思ってさ」

そう、婚約指輪・・・・俺が三人を愛しているという正真正銘の証だ。

「え、いいの？」

「何をいまさら」

「でも、これも高いとちゃうん？」

「いいからつけろって」

俺に言われるがまま、３人は指輪をつけた。

「どうだ？」

「「「ぴったり！」」」

「よかった」

「直人君、ありがとう」

そう言ってなのはがキスをしてきた。

「んっ・・・・・・ああ」

「あ、私も・・・ん」

「んっ・・なんだ、こんなに短くて良いのか？」

「あぅ・・・うん」

「うちも！」

「ん！ふぐっ・・・んん！？は、はやて・・・・おまえな」

「えへへ～」

それぞれキスをしてから、みんなでベッドに入る。

「こんなに嬉しいクリスマス、私初めて」

「私も・・・・」

「うちもや」

「そうか、よかった・・・・」

みんなの笑顔が見れただけで、俺は満足だけどな。

「できれば、こんな平和がずっと続けばいいのにな・・・・・」

「そうだね」

「大丈夫、きっと続くよ」

「せや、うちらが、幸せである限りずっと・・・・」

「・・・・・・そうだな」

今日一日、この幸福な日々を忘れずに眠るとしよう・・・・・・こんな幸福が、一日でも長く続くように・・・・・・

第三十三話「機動六課のクリスマスパーティー」（後書き）

秋風「はい、ということでクリスマスネタした」

直人「大丈夫なのか、闇の使徒」

秋風「大丈夫、多分出すから・・・・次回かな」

直人「大丈夫かよおい！」

秋風「そのために新部隊を作るような期間まで長引かせたんだろうが」

直人「まあ、そうだけど・・・・・」

秋風「その辺についてはまた今度な」

直人「次回、第三十四話『空色の情熱、橙色の決意』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十四話「空色の情熱、橙色の決意」（前書き）

明日から日曜日まで休載します。ごめんなさい！

では本編どうぞ♪

第三十四話「空色の情熱、橙色の決意」

年が明けて、早2週間。今日は久しぶりに、フォワードと模擬戦をやっている。

「はあ！」

「マリカ！」

『わかってます！クリスタルダガー！』

「させない！クロスファイアーシュート！」

クロスファイアーの攻撃が降り注ぐ。ちぃ！

「紫電一閃！」

「何！？」

エリオが紫電一閃！？

「ぐっ！」

俺は何とかそれを受け止め、弾き飛ばす。

「うわっ！」

「フリードォ！」

「きゅく～！」

くっ！連携攻撃が上手い・・・！

「おおおおおお！」

「メシア！」

「オーライ、３ｎｄモード！」

俺はレイピアで突撃する。

『ロードカートリッジ！』

「雷牙閃突！」

「うわぁ！？」

くっ！こいつら日に日に連携が上達してる。これもなのはの教導ってか・・・ん？

「おかしい・・・」

『どうしました？主』

さっきから、妙に攻撃が積極的だ。いや、積極的過ぎる。何か、時間稼ぎに見える。

「なんだ？いったい何が・・・・」

『主！そういえばティアナさんの姿がありませんけど・・・・』

「何！？」

そういえばあいつ、支援に来てない！？すると、俺はティアナを見つけた。それははるか遠くにいる。

「スターライト・・・・・」

何！？

「ブレイカー！」

他の残ったフォワードが離脱し、俺に砲撃が向かってくる。まさか、こんな技も覚えてるとはな！

「メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

ティアナのスターライトブレイカーと、俺の蒼雷一閃がぶつかり、大爆発を起こした。

なのはｓｉｄｅ

さて、直人君は無事かな・・・・あ、煙が晴れてきた。

『っち、まさか・・・ここまでやるとはな』

直人君焦げてる。これは勝負ありだね。

「試合終了、フォワードの勝ち！」

『どうやら、そうだな』

「「「「やったぁ！」」」」

直人君の言葉に、フォワードのみんなが喜んでいた。すると、直人君が降りてきた。

「ふぅ・・・・・」

「直人君、お疲れさま♪」

「ユニゾン・アウト・・・ああ、なのは・・・・」

「どうかな？直人君から見たフォワードは」

どんな答えが来るかな・・・・

「文句ないな、一流のエースじゃないか？」

「本当？」

「ああ、チームの連携と攻撃の仕方・・・どれも良い。それに驚いたのがエリオとティアナだな」

「二人は決め手になるものがなかったからね」

ティアナはまだ実用段階にはちょっと遠いかな？

「でもびっくりした。なのは以外にスターライトを使うとは・・・」

「うふふ、直人君もブレイブスワローを使ってないとはいえ、マリカさんとのユニゾン状態でこうだもんね」

直人君、ちょっとすすだらけ。

「そうだな・・・ま、まだまだ伸びるぜ、あいつら」

「うん、そうだね・・・・」

私はフォワードを集め、今日の訓練を終了した。

直人ｓｉｄｅ

あ～・・・疲れた。

「兄さん、一緒に朝食、食べませんか？」

「ん？ああ・・・・」

ティアナの誘いを受け、俺はフォワードとヴィヴィオと一緒に食事を取ることになった。

「にしても、お前ら強くなったな・・・・」

「でも直人兄ぃも手加減してたじゃん」

「まあな・・・だが、俺は昔シグナムさんとあの状態で勝ったんだぞ？」

「あ、それ見ました。でもお兄ちゃん、リミットブレイク使ってたじゃないですか」

そういえばそうだっけ？

「あの戦い、とても参考になります！」

「そっか、ならよかったよ」

「にしても、このままじゃ抜かれるな・・・俺も」

そのうちなのはたちも抜いてしまうような気がする。

「そ、そんなことないですよ！」

「そうです、兄さんたちは雲の上のような人です」

「おいおい、俺は神様か何かか？」

「一種、そうだと思いますけど・・・・・」

んなアホな・・・

「ごちそうさま」

「あれ、ティアもう終わり？」

「ええ、兄さん、私執務官用のテキストやるので、お先です」

「そっか、頑張れよ」

「はい」

こうしてティアナが退出。そっか、あいつも頑張ってるんだな。

「そういえば、お前ら六課が解散したらどうする？」

「私とティアは、一応古巣の方に戻ります」

「私も自然保護の部隊に戻ろうかと」

「僕は始めての勤務がここなので、色々考え中です」

そっか、色々あるんだな・・・・みんな

「となると、あれは無理か・・・・？」

「どうしました？」

「いや、なんでもないよ。みんなが別々の道を歩むから、大変だろうと思ってさ」

「でも、頑張ります！」

「ああ、頑張れよ」

そんな話をしていると、いきなり緊急のアラートが鳴った。

「なんだ！？」

俺は急いではやてに連絡を取る。

「はやて！」

『キメラの反応を確認！すでに現地の魔導士達が戦ってるらしい！もしかしたらソウル・エレメントが！』

「わかった！フォワード出撃準備！ヴァイス陸曹はヘリを！スバル、お前はティアナと選考して先に行け！俺はデータを合わせてからすぐに出る」

「は、はい！」

こうして、今日も騒がしい一日が始まる。

スバルｓｉｄｅ

あ～！緊張する！ティアはなんかバイクで無表情だし！ああ！厳しい！

「どうしたのよ馬鹿スバル」

「だってティア、直人兄いいないのに・・・・」

「そんなこと百も承知！どうして私たちを先に行かせたと思ってるのよ」

「へ？」

「私達は元々災害救助にいたのよ？だからこそ、私達なら最善の対策が取れると思ったんでしょ？」

あ、そっか・・・

「わかったならしゃきっとする！」

「う、うん！」

こうして、私達は現場へと向かった。

現場に着くと、そこは地獄を見ているようだった。辺りにあるのはこげた死体から切り裂かれた死体・・・さまざまなもの。そして、人がキメラに襲われている。

「があああああああああ！！！！」

「スバル！」

「う、うん！」

すぐにマッハキャリバーを起動し、キメラに一撃を入れる。

「うおりゃぁ！」

「ガア！？」

「あ、やた？」

思ったより簡単に吹き飛んだ？

「クロスファイアー・・・・シューット！」

私に襲い掛かりそうだったキメラを、今度はティアが撃ち落した。

「スバル！何ぼさっとしてるの！」

「ご、ごめん！」

私はキメラに向き直る。後2体！

「リボルバー・・・・シューット！」

「ファントム・・・ブレイザー！」

私達の技が炸裂して、キメラたちは吹き飛んだ。

「よし、撃破！」

「う、うぅ・・・・」

「スバル、生存者！」

「わかってる！」

倒れている男の人を抱き起こした。

「しっかりしてください！大丈夫ですか？」

「き、君達は？」

「時空管理局です、助けに来ました」

「そ、そうか・・・だがもう私は駄目だ・・・」

「そんな、しっかり！」

男の人が弱々しく声を出す。男の人の出血量は酷い・・・

「この先に、村人が避難しているシェルターがある・・・どうか、みんなを・・・」

「わかりました、必ず」

「あと・・・これを・・・」

それは空色に光る、宝玉。これって・・・・！

「少し前に拾った・・・娘も持っているが、奴ら、これをねら・・・て」

「喋らないで、それ以上は傷に・・・」

「頼む、娘を・・・妻を・・・・」

そう言って、男の人は息絶えた。

「・・・・・・・・・」

「スバル、行くわよ。避難シェルターへ！」

「・・・・・うん！」

私は男の人の目を閉じ、ソウル・エレメントを握り締めて駆け出した。

ティアナｓｉｄｅ

「スバル」

「何？ティア・・・・」

「気、引き締めなさい」

「わかってる」

相棒の返事に、私も改めてクロスミラージュを強く握る。キメラだけじゃない、何かが来ている。あの切り裂かれた家や人はの斬り口・・・明らかにプロだ。避難シェルター・・・あれね！

「クロスファイアー・・・・シューット！」

私はシェルターの前にいるキメラたちを倒す。

「時空管理局です！助けに来ました！」

言葉と共にシェルターが開く。よし、ここまではＯＫね！

「た、助け？」

「助かった・・・・」

「みなさん、落ち着いて・・・・私達の援軍もすぐに来ます」

「駄目だ、あんな化け物、敵うはずが・・・・！」

「大丈夫、すぐに強い味方が来てくれますから」

「あ、ああ・・・・」

「大丈夫、大丈夫よ・・・・」

近くで怯えていた女の子を励ます。すると、女の子の持っているものに目が入った。

「これ、あなたの？」

「う、ううん・・・お父さんがくれたの」

「・・・・・そう、あのね？それは私達が保護しないといけないものなの。これがあると、またあの化け物が来ちゃうから、お姉さんにもらえるかな？」

「・・・・うん」

素直に橙色のソウル・エレメントを渡してくれた。すると、鋭いさっきを感じた。

「誰！？」

そこにいるのは、顔まで布で覆った男・・・・・明らかに村人ではないわね・・・・・

「我に名はない・・・・だが仲間は我を影斬（えいざん）と呼ぶ」

「影斬・・・・・あなた、闇の使徒！」

私達は相手の足を見る。兄さんに教わった、闇の眼に対しての対策・・・・顔を見ないこと。

「ふっ・・・・私を炎帝や氷統と一緒にするな・・・・私は闇の眼を持っていない」

「なんですって・・・・！？」

「我が求めるのは純粋な殺し・・・・それ以外は求めん」

「・・・・して？」

スバルが、顔を伏せて呟く。

「む？」

「どうして・・・・・？どうして、村の人を酷い目に合わせるの？」

スバルｓｉｄｅ

わからない、わからない、わからない、わからない・・・・どうしてこんな酷いことをできるか。

「ふっ・・・・こやつらの始末はついでだ。」

「つ、ついで・・・・・？」

「ソウル・エレメントの回収。それが我の任務。だが、余計なものは排除するのも、我の役目だ」

酷い、酷いよ・・・・どうして・・・・・

「戦場に立つ上で涙を流すとは・・・・愚かな」

「・・・・・黙れ」

私は、これ以上あの男の声を聞きたくなかった。死んでしまった男の人の顔が浮かぶ。あの人は幸せを失った・・・・・許せない・・・・！

「許さない！」

私はその瞬間、頭が真っ白になった。

ティアナｓｉｄｅ

「こ、これって・・・・！」

スバルの目が金に！？あれってまさか・・・・！

「スバル！やめなさい！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

スバルが叫ぶ。ま、まずい・・・・！

「ぬぅ！なんという殺気！」

「はあああああああ！！！！！」

スバルが影斬を殴り飛ばし、シェルターの外へと放り出した。

「皆さんはここを動かないで！必ず助けが来ますから！」

こうして私も外へ駆け出した。外では、スバルが暴走の一歩手前だ。私はとっさに、手にしていたものを投げた。

「やめんか、この・・・・馬鹿スバルーーー！」

「あいたぁ！？」

ソウル・エレメント、投げちゃったけど大丈夫かな・・・・

「この馬鹿！何勝手に機人モードになろうとしてるのよ！」

「ご、ごめん・・・・」

「いいこと？あんたの想いの篭ってない力であいつ倒して、あの人喜ぶわけ？違うでしょ！？」

「・・・・うん」

「それに、私達は二人で一つのチーム・・・・だから、勝つわよ！」

私はクロスミラージュを構える。

「・・・うん！」

「ふっふっふ・・・・雑魚二人・・・・勝てるわけもあるまい」

「絶対負けない！貴方みたいな人に！もう誰かの悲しい顔を見たくないから・・・・」

「そして勝つ、私達二人なら・・・・」

「「私達は強くなれる！」」

声が重なった瞬間、私が拾い上げていた橙色のソウル・エレメントとスバルが持っていたソウル・エレメントが光り輝いた。そして・・・・

「相棒・・・・行きましょう」

「マスター・・・準備はよろしいですね？」

そこにいたのは、青い髪をして、ギンガさんにそっくりな女性、そして橙色の髪をした男・・・・それは、私の大切な人に似ていた。

「マッハキャリバー・・・・・？」

「クロスミラージュ・・・・あんたなの？」

「ええ相棒」

「その通りです、マスター」

「ほう、覚醒させたか・・・・まさか選ばれるとは・・・・」

これならいける、負けないわよ・・・・！

「スバル！行くわよ！」

「うん、ティア！」

こうして、私達の第2ラウンドが始まった。

第三十四話「空色の情熱、橙色の決意」（後書き）

秋風「今週の日曜まで出かけるので、休載いたします」

直人「大変申し訳ないです」

秋風「帰ったらすぐ更新します」

直人「次回、第三十五話『二人の絆』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十五話「二人の絆」（前書き）

更新超遅れました！ごめんなさい！

では本編どうぞ♪

第三十五話「二人の絆」

スバルｓｉｄｅ

気がつくと私は武装を解除していた。目の前にいる人が、目に入る。

「マッハ、キャリバー？」

「ええ、そうです。相棒」

でも、どこからどう見たって・・・・

「クイント・ナカジマにそっくりですか？」

「う、うん・・・・・」

「一応、ソウル・エレメントは適合者の思いを描く人間に似るようです」

「そうなんだ・・・・」

「相棒、貴方はしばらく休んでいてください」

言いながら、マッハキャリバーが構えを取った。その背中は本当に、お母さんと重なって見えた。

ティアナｓｉｄｅ

「クロスミラージュ・・・・あんた・・・」

「どうやら、ソウル・エレメントとの融合によってこうなったようです」

「あの、なんていうか・・・・」

「ええ、貴女の兄、ティーダ氏と同じ容姿ですね」

そう、白と黒の服に、そしてオレンジの髪をしているものの、その姿は私のお兄ちゃんと同じ姿だった。

「さて、マスター・・・・お下がりください」

「え!?」

「ここからは・・・私と、マッハキャリバーでやりますから」

「ほう、おもしろい・・・・」

敵も構える。あいつ、強い・・・

「いきましょう、クロスミラージュ」

「そうですね、マッハキャリバー」

言って、二人が駆け出す。え?え?

「クロスミラージュ、後衛頼みます!」

「了解した！」

マッハキャリバーが影斬に攻撃し、さらにクロスミラージュが後ろから銃撃を撃ち放つ。あの銃・・・銃まで、兄さんそっくり・・・

「ほぅ、デバイス風情が、やるな」

「諦めて、投降しなさい！」

「できぬ、相談だ！」

「うぅ！」

マッハキャリバーが吹き飛ぶ。

「マッハキャリバー！しっかり！」

「大丈夫です、このくらい心配要りませんよ、相棒」

そんなこといってるけど、限界みたいね。クロスミラージュ一人じゃ、対抗なんてできない・・・なら、どうする？どうすれば・・・・そうだわ

「スバル、まだやれるわね？」

「う、うん！もちろん！」

「クロスミラージュ、ソウル・インするわよ！」

「しかしマスター・・・あなたの魔力量では負荷が・・・・」

でしょうね・・・・でも、そんなことは今考えてられない！

「私達は今村人の命を背負ってるのよ！？守るべきもののために私達が戦えなくてどうするのよ！？」

「・・・・！」

スバルも立ち上がった。私はもう、迷わないわ！

「行くわよスバル！」

「うん、ティア！マッハキャリバー！」

「まったく、仕方ない相棒ですね！」

「マスターは一度言ったことは意地でも通す・・・・仕方がないか」

「「「「ソウル・イン！」」」」

私達は光に包まれた。

スバルｓｉｄｅ

なんかノリでやったけど、これって・・・・

「リボルバーが、二つ？」

『貴女の母、クイント・ナカジマと同じですよ？』

「あ、そういえば！」

そっか・・・母さん、力を貸してね！

ティアナｓｉｄｅ

「あ、あれ？」

いつも髪を結わいていたのに、今日はない・・・それに、このクロスミラージュ・・・・

『どうですか？貴女の兄、ティーダ・ランスターと同系統のデザインですが』

言われてみれば、そんな感じがするわ・・・・

「行くわよ、スバル！」

「おう！」

戦闘開始！スバルが影斬に突っ込む。

「おおおおおおおおお！！！」

「ぬぅ！」

「スバル！」

私は名前を呼んで下がらせる。そしてクロスファイア撃ち放った。

「クロスファイア・・・シューット！」

『ネオ・ファイア』

「えええ！？」

いつもより違う量と質のクロスファイアが飛ぶ。

「なっ！ぐああ！」

「スバル！今！」

「リボルバー・・・シューット！」

さらにスバルの攻撃も違っていた。

「ぐぅ！」

「あれ！？」

『相棒、ちゃんとコントロールしないと相手を殺しちゃいます！』

『そうですマスター』

え、だって非殺傷設定してるわよ？

『この状態だと、威力が高すぎます。非殺傷でも』

「そういうことは最初に言いなさい！」

「ぐっ・・・・この小娘ども・・・・・！」

影斬・・・・まだ立てるのね。

「スバル、一気に行くわよ！」

「おう！」

「これ以上はやらせん！デビルアーク！」

声と共に、空中から蝙蝠が飛んでくる。

「「！？」」

「我がビーストデバイス、影の牙デビルアーク！その新の姿、見せてくれよう！」

『キィィィィィィ！！！！！！！！！』

高い超音波と共に、蝙蝠が変貌した。

「闇の化身、カースドラゴン！」

『ガアアアアアアアアアア！！！！！！！』

「くっ！」

「スバル！」

私はフェイクシルエットを作動してスバルを逃がす。

「小ざかしい！」

カースドラゴンが辺り一帯に火を吐いた。

「わあああ！」

「スバル！ファントム・・・ブレイザー！」

『ネオ・ファントムブレイザー』

ファントムブレイザーが発射される。でもそれは弾かれてしまった。

「嘘！？」

いつもより、数段威力が高いはず。なのに、なんで・・・・！

「ハハハハハ！愚か者目、貴様らのようなガキどもがソウル・エレメントを使いこなせるわけがあるまい！」

「なん、ですって！？」

「気づいているだろうな、デバイスは・・・・」

どういう、こと？

『マスター、これ以上戦えばマスターの体が・・・・』

「なによ、それ・・・・」

「ティア、なんかこれ、おかしくない・・・・？」

そういえば、さっきから身体に違和感が・・・・

「う、ああ！」

スバルのバリアジャケットが歪む。どういうこと！？

「教えてやろう。貴様らはせいぜい戦闘経験は多くても5年。そんなガキが巨大な力を使いこなせるわけがあるまい！」

『奴のいうとおり、相棒もティアナさんも、現状では能力が完全に制御下にありません』

「「！？」」

そんな、じゃあどうすればいいのよ！？

「形勢逆転だ！力を得すぎたことを後悔しろ！」

「「キャアアアアアアア！」」

私達はそのまま吹き飛ばされる。くっ！

「クロスファイアー・・・」

「遅い！」

「あぁ！」

私はカースドラゴンの尻尾に吹き飛ばされる。

「ティア！このぉ！」

「余所見をできるのかね？」

「え！？」

「ぬうん！」

「うあああ！」

今度はティアナが影斬に殴り飛ばされる。

「スバ、ル！」

「ティ、ア・・・」

まずい、こんな状況、絶望的じゃない！何か、何かいい手はないの？

「（ティア・・・）」

「（スバル？）」

「（ちょっと作戦思いついた・・・・）」

作戦？あのスバルが？

「（言ってみなさい・・・・）」

「（あのね・・・・・・・・・・・・・どう？）」

「（賭けね・・・・それも、なのはさんと戦う時以上の）」

こんな作戦、あんたしか思いつかないわよ。

「（でも、悪くないわ・・・・）」

「（じゃあ、行こうティア）」

こうして、作戦を開始する。

「おおおおお！！！！！！」

「しつこい連中だ！何！？」

そう、数多のフェイクを何度も奴に向かわせる。そして・・・・

「クロスファイア・・・・シューット！」

「ふっ！何！？」

また消える。そう、これも幻影だ。

「でぇい！」

「また幻影・・・ぐふぁ！」

今度は本物のスバルが突っ込む。やった！

「ファントム・・・・ブレイザー！」

「今度こそ幻術だ！」

言いながらも、影斬が防御する。そう、正解よ・・・・行きなさいスバル！

「おおお！」

「そしてこっちが実体・・・・なに！？」

残念、それは外れよ。

「リボルバー・・・シューット！」

「ぬぅ！この程度！」

でしょうね・・・

「クロスファイア・・・・シューット！」

「また幻術！？なっ！？」

数発の弾は消える。けど、それだけじゃなかった。

「幻術に、実体（ホンモノ）を仕込んだのか！？」

「その通り。これが私達の作戦・・・そして・・・・」

「私達の力、舐めないで！ディバイィィン！」

「スターライトォ・・・・！」

「しまった！」

「バスター！」

「ブレイカー！」

私たちの必殺技が激突して、爆発が起きた。やった・・・？

「やった！やったよティア！」

「そう、ね・・・・疲れたわ・・・・」

私はその場に座り込んでしまった。もう、魔力も限界だわ。

「ティア、大丈夫？」

「ええ、なんとか・・・・・」

スバルに差し出された手を取ろうとした瞬間。私とスバルの首に、触手が巻きついた。

「がっ！？」

「あっ！？」

「やってくれたな・・・・小娘」

「ガッ・・・あんた・・・・」

「な、んで・・・・・」

無傷とは言わないけど、あの二つを喰らって無事だなんて・・・・

「ビーストデバイスがウエポンの機能を持っていることを知らんようだな。我が手甲・・・『闇神（やみがみ）』だ。」

そのまがまがしい手甲。そこから触手が伸び、私達の首を掴む。

「う、あぁ・・・」

「が、あ・・・」

「私を本気にさせた褒美だ・・・・せめて楽に逝くがいい」

もうだめ・・・・・助けて、兄さん！

「さらばだ」

「蒼雷一閃！」

その瞬間、蒼い雷がほとばしった。そして、私とスバルが抱きかかえられる。私は、喜びのあまり目から涙が溢れてきた。

「よくやった、スバル、ティアナ」

「兄さん・・・・・」

「直人兄ぃ？」

「ほう、貴様・・・何者だ？」

「機動六課所属・・・蒼天の騎士、井上直人！」

私達の『兄』と呼べる存在が今、目の前に降り立った。

第三十五話「二人の絆」（後書き）

秋風「更新遅れましたぁ！」

直人「遅れすぎだ！」

秋風「すいません、色々と問題があったので」

直人「あれか、スランプか？」

秋風「正直、スバティアの戦闘は初めてだったから・・・・」

直人「だから俺登場か？」

秋風「いいじゃん」

直人「ま、いいけどな」

秋風「では、今日はこの辺で」

直人「次回、第三十六話『英雄の力』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十六話「英雄の力」（前書き）

すいませんが明日も更新できなくなります。最近更新できなくて申し訳ない・・・

第三十六話「英雄の力」

ティアナとスバル・・・・ソウル・エレメントに選ばれたのか？

「よくやった二人とも、後は休め」

「兄さん・・・・」

「大丈夫だ、村人も保護した。なのはたちも、もうすぐこっちに来る」

「は、はい・・・」

「ほう、貴様があの英雄か・・・・」

俺はティアナとスバルをその場に寝かせ、メシアを手に取った。

「お前も、闇の使徒か・・・・・」

「そう、他の者からは影斬と呼ばれている」

なるほど、闇の書の幹部か・・・・・

「なら、あんたを倒す」

「ほう、炎帝の話では話にならないほど弱いと聞いたが？」

「その情報は間違いだ・・・・・さっさと来い」

「ふっ・・・・笑止！」

手甲の触手が刃に変わり、俺に襲い掛かる。

「ぐっ！」

「そらそらそら！」

「・・・・！？」

なんだ、動きが見える！？

「はぁ！」

「ぬっ！」

影斬が一歩下がる。攻め込めなかった・・・・・

「確かに、情報筋とは違うようだな・・・・・」

「言っただろう。以前の俺と同じに・・・・するな！」

俺は飛び、一気に斬りかかる。

「メシア！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

「ぐっ！」

よし、いける！

「なめるなぁ！」

「っ！」

手甲が二つに！？

「らあああああ！！！！」

「ぐっ！くぅ！」

なんてラッシュだ！さすがに捌ききれないぞ！

『主、二刀で行くしかありません！』

「ああ、みたいだな！メシア！」

『了解、２ｎｄモード！』

双剣にし、今度はスピードで勝負する。

「小癪な！」

「くっ！」

闇の使徒の魔力が上がった！？

「カースドラゴン！」

「なに！？」

ここでビーストデバイスか！

「がああああああああああああ！！！！！！！！」

「喰らうがいい！闇の炎を！」

「がああああああああああああ！！！！！！！！」

「闇の炎か！」

「跳ね返すのは不可能だ！消えるがいい！」

跳ね返せないなら・・・・・！

「かき消す！」

『デバイス複合』

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！』

「蒼天、龍斬波！」

俺の砲撃と、闇の炎がぶつかり合う。

「いけぇ！」

「ぐっ！こんなやつに・・・・！」

均衡する力は段々と傾き、俺の砲撃が押し始める。

「ば、ばかな！」

「これで、終わりだ！」

「ぬおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

影斬に砲撃が激突する。やったか！？煙りで見えないが・・・・

「なっ！？」

煙が晴れると、そこには濃い紫色のマントをかぶった男が立っていた。あの男、フェイトが言っていた・・・・

「親方殿！？」

「影斬、ひけ」

「なっ！？しかし！」

「いい、後は私が引き継ごう・・・・・」

「・・・・了解、いたしました」

こうして、影斬が消えた。

「お前、海上にいたやつだな」

「いかにも、闇の使徒の首領でもある」

「・・・・・ソウル・エレメントは渡さない」

「渡すも何も、そんなものには当初から必要としていない」

「何？」

じゃあ、何故ソウル・エレメントが行く先に現れるんだ！？

「ソウル・エレメントは、貴様が思っているのとは違う。」

「どういう、ことだ？」

「ソウル・エレメントは確かにカオスを封印する重要なものだ。それを砕けば封印は解けるが、制御ができない。」

「制御・・・？」

「その辺は貴様のところにいる科学者にでも聞け。聖王を使おうとした男をな」

スカリエッティの事か・・・・

「さて・・・話はこの辺で良いだろう」

言いながら、奴は剣を抜いた。それは黒い、鎌。

「我が名はない・・・だが、この闇の鎌を持つ騎士だ」

「あんたの騎士道は、歪んでいるな」

「管理局という神を気取った者たちに言われたくはない！」

男が鎌を振りかざす。

「くっ！」

「ほう、これを防ぐか・・・」

「でええい！」

鎌を蹴り飛ばし、そのまま斬りかかるが、それが防がれる。

「甘い！」

「ちぃ！」

こいつ、なんでだ・・・？俺の攻撃を全て読んでいる！？

「ふん、弱いわけではないが・・・・私には届かんぞ！」

「くっ！」

こいつ、強い！こうなったら！

「メシアスワロー！」

『了解、セカンドリミッター解除！』

俺の翼が蒼く染まり、バリアジャケットも白と蒼が混ざったものになる。

「ほう、それがリミッター解除か・・・」

「そうだ・・・いくぞ！」

俺は背後に回りこみ、斬る。

「ぐっ・・・さすがだな、英雄」

「お前に英雄と言われても嬉しくない」

「そういうな、『兄弟』」

は？兄弟？

「お前の兄弟になった覚えは・・・ない！」

「ふっ！そういうなよ兄弟！」

激しい火花が散る。鎌と剣・・・二つの武器がぶつかり合う。

「くっ・・・はぁはぁ・・・・」

「ふっ・・・」

おかしい、コイツさっきから全然疲れてるように見えない。

「どうした、こんなものか？」

「さあ、どうだろうな・・・・」

まずいな・・・セカンドリミッターの制限時間がもう少ない。

「いくぞ、メシアスワロー！」

『了解です、我が主！』

俺は魔力を脚に溜め、一気に接近する。

「ほう」

「喰らえ！」

『ロードカートリッジ！』

「真・蒼雷一閃！」

蒼い巨大な雷の攻撃が激突する。直撃だ。

「ふう、やれやれ・・・・」

「なっ！？」

俺は目を疑った。そこに、奴はいない。声は後ろからしていた。

「馬鹿な、今のどうやって・・・・・」

「どうとは、君と同じように足に魔力を溜めただけだ」

魔力を溜めたって、あの一秒も満たない間に・・・・・？

「やれやれ、英雄もなかなかだ。だが、私はそれ以上の存在だ」

鎌が形状を変える。これは・・・・・

「剣に・・・・・？」

「ふっ・・・・・・行くぞ」

一瞬で横に回りこまれる。俺は振り下ろされた剣を受ける。お、重い・・・・・！

「どうだ、私の剣は」

「さあ、どうだろう・・・・なぁ！」

蹴りと手の反動で剣を飛ばし、体制を整える。なんだ？今の剣・・・・さっきの鎌で戦ってたのと全然違う・・・！

「どうした？おじけずいたか？」

「んなわけないだろ・・・・」

まったく嫌になる。さっきから士郎さんやシグナムさん並の剣術・・・・こいつ、只者じゃないな。

「行くぞ」

俺は再び剣を握り、斬りかかる。

「ふっ！」

「でぇい！」

くそ、一撃以降が当たらない！

「（メシアスワロー！後何分だ！）」

『（あと１０分ですね・・・・技もそう撃てません！）』

「（万事休すか！）」

「その様子、あと１０分と言ったところか？」

「『！？』」

コイツ、今なんで・・・・！

「簡単なことだ。今までの攻撃に魔力補助・・・・どれを見ても大分消費している。そしてだいたいを見積もっても１０分が限度・・・・そう考えた」

なるほど、コイツ・・・・・

「どうした？私が恐ろしくなったか？」

「どうだろうな・・・・」

恐ろしいとかそんなものはない。だが、コイツは倒さなくちゃいけない気がする。

「行くぞ、これで最後にしてやる」

「良いだろう・・・・くるがいい」

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ！フルロード！』

残り全てのカートリッジをロードし、魔力を最大にする。

「よかろう・・・・■■■■■■■■！」

『ロードカートリッジ』

なんだ、名前が聞き取れない？だが、迷っている暇はない！

「真・蒼天龍斬波！」

「雷帝・・・・・波動」

蒼い龍と、雷の刃が激突する。

「いけえええ！」

「ぬっ！」

爆発が起きる。二度目の蒼天龍斬波・・・・・もう、体も限界だ。立つなよ・・・・

「ぐっ・・・・・さすが、英雄だ。」

「なっ・・・・・」

馬鹿な、確かに最大出力で撃ったはずだ！

「英雄の力・・・・これほどのものとは知らなんだ・・・・」

「なっ・・・・・！」

男のローブが、はだけていた。俺の砲撃の影響だが、驚くところはそこではなかった。褐色の肌に赤い目。そして金色の髪・・・・だが、ありえないことが、目の前で起きていた。今あげた点以外であれば、ありえない光景だった。

「俺・・・・だと？」

「む・・・・顔が出てしまったな。」

奴は冷静だった。だが、俺は驚きを隠せない。

「なんなんだ・・・・お前！」

「私か・・・・？私は、そうだな・・・・・闇の使徒の首領。名を『アナザー』」

ありえない人間が、俺の前に現れた。

第三十六話「英雄の力」（後書き）

秋風「すいません、もう寝たいのでトークはまた次回。また明日は投稿できないのでもうしわけない」

直人「次回、第三十七話『ＡＮＯＴＨＥＲ』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十七話「ＡＮＯＴＨＥＲ」（前書き）

お久しぶりです！更新遅れました！

では本編どうぞ！

第三十七話「ＡＮＯＴＨＥＲ」

目の前の人間、それは確かに『俺自身』だった。

「俺・・・・だと！？」

「ふっ・・・・驚くのも当然だろうな」

アナザーは小さく笑う。この威圧感・・・・闇の俺以上だ。

「お前は、何者だ？」

「私はお前だよ、兄弟！」

「兄弟！？」

「まあ、少し昔話をしてやろう・・・・今から４年前だ」

４年前・・・・カオス事件の終結した時か。

「俺は、あるバイオラボの中で目を覚ました」

「・・・・！」

「俺はとある計画から生み出されたわけだ。」

「クローン！？」

「そのようなものだな。そして、私を作った者はこう言った」

――お前は、この世界を治めるために生まれてきた！

「私はその言葉を信じ、様々な訓練をこなし、様々な理を学んだ・・・・だが」

アナザーは拳を強く固めている。だが、なんなんだ？

「お前が、現れた」

「俺が・・・？」

「そうだ、お前の生存により、俺は処分対象となったのだ」

「処分・・・対象」

「それを知った私はその研究所を脱出し、私はお前を見つけた」

俺を・・・

「私は落胆したよ。幸せの中で、常に笑顔を絶やさぬ貴様・・・・・世界の裏を知ろうともせず、ただのうのうと生きる貴様を見てな・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・」

世界の裏側・・・・見ていなかったわけじゃない。だが、幸せで忘れかけていたのは事実だ。

「だからこそ、私は闇の使徒を発足した」

「・・・・・本当の目的は、俺の抹殺か？」

「抹殺？そんなくだらないことのために部下を集めるわけがない。私は世界を変えるために戦うのだ」

「世界を、変えるだと？」

「そう、貴様がいる管理局！神を気取った奴らを倒し、私が世界の全てを管理する！」

「なっ！？」

こいつ、そんなことを考えてるのか！

「どうだ？兄弟。私の仲間にならんか？」

「何故、俺を誘う？」

「私はお前の分身だ。お前をよく知っている。お前は真の平和を望む男だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに平和は望んでいる。俺やなのはたちが平和に暮らせる、そんな世界を・・・・・

「さあ、私と来い。全ての人間に等しい平和・・・・・作ろうではないか」

「・・・・・・」

平和を・・・・だが！

「・・・・・・なんの、つもりかな？」

俺は無意識に、メシアスワローをアナザーに向けていた。

「・・・・違う」

「何？」

「俺の望む平和は、少なくとも・・・・・・お前が望む平和とは違う！」

「ほう、何が違う？人々が目指す平和・・・・・・それは戦いがない、平和。私もそれを目指している」

アナザーは笑いながら動かない。そう、違う。俺が目指す平和と、奴が作ろうとする平和は・・・・・・

「少なくとも、人の命が消えてできる平和を、俺は目指さない！」

「ふっ、戯れごとを・・・・・・」

「俺は、俺の望む平和のために戦う！」

メシアスワローを振り、斬りかかる。だが、アナザーはそれを避け、ひらりと崖の上に降り立った。

「いいだろう・・・・・・ソウル・エレメントはお前らに全てくれ

てやろう。せめてものハンデだ」

「何!?」

「だが忘れるな?ソウル・エレメントもまた、魔王・・・・・カオスの一部であることを」

そう言って姿を消した。

「待てっ!くそ、逃げられた!」

ソウル・エレメント・・・・・それがなんなのか、詳しく調べないとな・・・・

「直人君!」

「なのは・・・・・」

「敵は?」

「逃げたよ」

アナザー・・・・・か。もしかしたら、あいつが何か知ってるかな。

「・・・・・・どうしたの?」

「え?」

「何か、あったんだ」

なのはとフェイト、何言ってんだ?

「何にもないぞ？」

「「嘘」」

「うっ！」

こういうとき、いつも鋭い・・・・

「・・・・わかった、後で話すよ」

こうして、俺は機動六課の隊舎へと帰還した。

「じゃ、さっそく話してもらおか」

そこにいるのはなのは、フェイト、はやて、レイジングハート、バルディッシュ、リインフォース、マリカ、スカリエッティだ。

「わかった・・・・ちゃんと話すよ」

俺は話した。アナザーの存在について。

「アナザー・・・・」

フェイトは顔を青くしている。

「フェイト、大丈夫か？」

「う、うん・・・・・」

「スカリエッティ、俺のクローンの話は聞いたことあるか？」

「・・・・ふむ、確かにそんな話はあったな。『英雄計画』と」

「英雄計画？」

「その名の通りさ、君のクローンを世界のトップに立たせる。それが英雄計画」

「なるほどな・・・・・」

「確か、研究所があったはずだ」

研究所・・・・・か

「行ってみるかな。場所わかるか？」

「ああ、わかるよ」

こうして俺はその研究所に脚を運ぶことになった。

「・・・・ここが」

「研究所・・・・とは呼べませんね」

「ああ、廃墟だな」

そう、おそらく奴が暴れたのだろう、ボロボロだ。

「主、大丈夫ですか？」

「・・・・ああ、行こう」

俺はその廃墟へと脚を踏み入れることにする。・・・・・が

「お前ら、出て来い」

「あぅ・・・・・」

「ばれてた？」

「頑張って隠れたのに・・・・」

なのはたち3人がいた。まあ、そうだとは思ってたけど。

「あのな・・・・特にフェイト、俺が今から行こうってのにそれはないんじゃないか？」

「だ、だって・・・」

「俺は、今から俺の闇を見るつもりでいる。」

「だったら・・・・！」

「できれば、見て欲しくはない」

俺はなのはたちを初めて拒絶してしまった。だが・・・・・

「ばかっ！」

「っ！」

なのはに、思い切りはたかれた。

「なんでいつも一人で背負うの！？なんで私達を頼ってくれないの！？」

「・・・・・・・・・」

「お願い、私達も力になりたいの・・・・・」

「私も、直人のために戦いたい」

「うちらも、背負う・・・・・だから」

「主、これは貴方の負けですね」

「・・・・・わかったよ」

こうして、俺は3人と共に研究所に入った。

中に入ると、酷いものだった。人らしき物体が幾重にも浮いている。

「・・・・・・・」

「直人君、大丈夫？」

「・・・・・ああ」

正直、気分が悪い。

「これは・・・・」

フェイトが手に取ったのは日記と記されたものだった。内容は以下の通り。

英雄計画

〇月×日

現在不安定なこの世界を安定させるため、世界にリーダーが必要となる。リーダーといっても、誰かから尊敬されていたり、有名でなくてはいけないことは必須の条件だ。そしてつい先日、大変良いサンプルが手に入った。

「井上直人」

カオスと呼ばれる怪物を討伐した、男の毛髪である。

「がっ・・・・」

フェイトの朗読を聞いた瞬間、俺は嘔吐した。

「直人君！」

「しっかり！」

「はっ・・・・はっ・・・・・じゃあ、ここに眠っているのは・・・・」

――――紛れもない、俺自身じゃないか！

「もう、やめよう？もう十分だよ」

「大丈夫だよ、なのは・・・・・フェイト、続けてくれ」

「う、うん・・・・・」

×月△日

始めは、プロジェクトＦを参考に作り出したクローンだが、クローン体は異変を起こして失敗する。成功サンプルは少なく、成功しても数日で力尽きてしまう。補助がないからだろうか？そう考えデバイスを幾重にも複写。成功例は増えるも、失敗例が１００を超えた。

「デバイスの複写・・・・・」

『恐らく、私のストレージ版でしょう』

「だろうな・・・・だが、何故失敗が起きるんだ？」

『恐らく主の毛髪はすでに「戦いに慣れた」体を持ったものなのでしょう、だからこそクローンではその主の戦闘経験・・・・・「経験値」に耐えられない』

「なるほど・・・・・じゃあ、続きを読むね」

△月〇日
幾重の失敗を積み重ね、ようやく完成した・・・・肌などに違いはあるが、間違いなくそれは英雄「井上直人」だ。そう、同じ名前では不便だ、名をつけよう。名は「アナザー」と名付けよう。

×月〇日
アナザーは優秀だった。教えた魔法も、井上直人のデータどおりに動き、そして戦う。唯一つ違うと言えば、アナザーは本物と違って賢い。それに強かった。また、新たにデータを追加しよう。そう『コピーアラビティシステム』名をつけることにしよう・・・・・

◇月△日
井上直人が帰ってきた。生きていたのだ・・・これでは、この計画は費潰えるだろう。上からも、アナザーの処分が下された。私の計画はなんだったのだろうか?

そこで日記を読み終えた。アナザーは、世界を統一させるために作った存在・・・・・

「俺は・・・・・」

「直人君・・・・・」

俺は、どうすればいいんだろうか・・・・・

「アナザーは・・・・・」

アナザーは俺自身・・・・なら、俺は俺を止めなければいけない。だが、あいつも言ってみれば犠牲者だ。俺はどうすればいいのかわからない。

「直人君」

「なんだ？」

「直人君は、どうするの？」

「俺は・・・・・」

俺は、どうするべきなんだ？

「私は、止めるべきだと思うよ？」

「フェイト・・・・・」

「私も、言い方はあれだけど、クローンだから・・・・・アナザーが管理局を恨んでも正論だと思った。私も、もしそうだったら同じ事をするだろうから」

「お前は、クローンじゃないだろ」

「それでも、これじゃあアナザーは苦しいままだよ」

「フェイト・・・・・」

あいつは、苦しんでいるのか？

「直人君、私も止めてあげるべきだと思うの、彼を」

「なのは・・・・・」

「アナザーはきっとどこかで、直人君に助けてもらうのを待ってるんじゃないかな？」

「・・・・・・・・」

「うちもそう思うで。言ったらあれやけど、あれだって『可能性』だった直人君自身や」

「・・・・俺、自身」

なら、止めなければいけない・・・・確かに、俺自身を。

「・・・俺は、止めたい。本当の、闇に堕ちた俺自身を」

「うん・・・・私も手伝うよ？」

「なのは・・・・」

「力になる、直人のために」

「フェイト・・・・」

「だから、もう一人で背負い込んだらあかんで？」

「はやて・・・・」

温かい・・・・なんでこいつらってこんなに温かいんだ・・・・・・

「なのは、フェイト、はやて・・・・・・」

「「「何？」」」

「ありがとう」

「「「どういたしまして」」」

第三十七話「ＡＮＯＴＨＥＲ」（後書き）

秋風「お久です」

直人「更新遅いわ！」

秋風「しょうがない、色々あったんだから」

直人「まあ、そうだけど」

秋風「とりあえず、頑張りますのでよろしくです」

直人「ったく」

秋風「ちなみに次の次から新章に入ります」

直人「いきなりだなおい」

秋風「まあ、気にするな！」

直人「ったく、次回、第三十八話『卒業、そして掴んだ幸せと・・・・・』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第三十八話「卒業、そして掴んだ幸せと・・・・・・」（前書き）

今回はたんたんと行きます

では本編どうぞ♪

第三十八話「卒業、そして掴んだ幸せと・・・・・」

あれからしばらくの時が流れた。季節は春に向かう。桜の木に花が咲き、美しい景色があった。

「六課も、今日で解散かぁ・・・・・」

「長いようで、短い一年でしたね」

「正確には１１ヶ月な」

長いようで、本当に短かったな・・・・・・

「なーおーと君♪」

「なのは」

「もうすぐ解散式だよ?」

「そっか、じゃあ行こう」

そういえば・・・・・

『（部隊名決めました?）』

「（まあね・・・・・）」

『（少し興味があるのですが・・・・）』

「（内緒）」

「そういえば・・・・・」

「ん？」

「私達の結婚式、いつにするんだっけ？」

そういえばそんなことするんだけ・・・・・

「なのはたちは６月・・・・がいいんだっけ？」

「そう！Ｊｕｎｅ　ｂｒｉｄｅ（ジューンブライド）だよ！よく覚えてたね？」

「ははっ、あんだけ言われれば、嫌でも覚えるさ・・・・・」

「直人―！」

「直人くーん！」

「フェイト、はやて」

「もう、もうすぐ解散式なのに！」

「あーはいはい、わかったよ」

俺が言うと、風が流れ、桜の花弁が宙を舞う。

「すごいねー・・・」

「そうだな、ミッドで桜が見れるなんて・・・・・」

綺麗だな・・・・でも・・・・今は・・・・・・

「なのは、フェイト、はやて」

「・・・・？」

「どうしたの？」

「なんや？」

「幸せに、なろう。そして、本当の平和を作ろう」

「「「うん！」」」

時は流れる・・・・静かに、緩やかに・・・・だからこそ、人は平和に酔いしれ、平和のためにあがき続ける。だから俺も、すべての人々の平和を作るためにもがき続けようと心に決めた。

「次の部隊でも、みんな元気にどうか頑張って」

はやての言葉と共に、機動六課は解散を向かえる。そしてフォワードを集め、桜の木のある場所に集めた。なんでも、模擬戦を全力でやるとか。

「全力全開！手加減なし！機動六課で最後の模擬戦！」

まったく、なのはも好きだな・・・・・

「き、聞いてませんよ！？」

「まあこれも思い出だ、やらせてやれ」

「フェイトママ、頑張って！」

「もう・・・・・」

確かに、これはいい思い出になるな。

「では、私達も参戦しましょうか」

「パパは僕達のところに入って！」

「そうだな、そうすれば数も割れるだろう」

「ええ！？シエルたちずるい！」

「いいではないですか、母上」

「だな、じゃあ行くぞ、シエル、ルミノ、セレス」

こうして機動六課隊長、副隊長ＶＳフォワードＶＳマテリアル＋俺のチームの戦いは始まる。

「レディーゴー！」

季節は４月、その心地よき春に、今日も爆音は鳴り響く・・・・・

2ヵ月後――

季節は移り、6月になる。ミッドチルダの婚礼式典・・・・そこで俺は白いタキシードを着ていた。

「・・・・緊張する」

「まあ、仕方ないですね、主ですから」

「マリカ・・・・それどういう意味だ」

『まあ、仕方がありませんよ・・・・・・』

正直、こういうのは苦手だ。そんなことを思っていると、ノックされる。

「はい、どうぞ?」

「こんにちは～!」

「ん、スバルたちか」

そこにはドレス姿のスバルたちがいた。

「わあ、直人兄ぃかっこいい!」

「ありがとう。みんなも可愛いな」

「あ、ありがとう兄さん・・・・」
「お父さん！僕はどうですか？」
「お、スーツにしたのか。似合ってるぞ？」
「ありがとう！」
「パパ、私はどうでしょう？」
「うん、すっごく似合ってる。フリードもおしゃれか？」
「は、はい・・・」
「きゅく～！」
なんてフォワードと話しているうちに、時間になった。いつの間にか、緊張はほぐれていた。
「じゃあ兄さん、私達は先に行きますから」
「ああ、後でな」
「主、緊張してた顔はどこへやら」
「ああ、後で感謝しないとな・・・・・」
いいながら俺は控え室を後にした。そして、俺はすでに人々が待つ教会の中にいる。姉さんをはじめ、マリカ、それにデバイス一同。さらには知り合いのほとんどがこの場にいる。そして、３人の花嫁

がそこに姿を現した。

「どうかな?直人君」

「少し、恥ずかしい・・・・」

「ホンマや・・・」

「ううん、とっても綺麗だ。3人とも」

「「「・・・・・・・」」」

紅くする3人。まあ、本当のことを言っただけなんだが。

「では、誓いの儀を執り行います。井上直人」

「はい」

「貴方はいかなるときも、この3人を妻とし、生涯愛すことを誓いますか?」

「はい、誓います」

「高町なのは」

「はい」

「貴方はいかなるときも、彼の者を夫とし、他の二人と争わず、妻となることを誓いますか?」

「はい、誓います」

「フェイト・T・ハラオウン」

「は、はい！」

「貴方はいかなるときも、彼の者を夫とし、他の二人と争わず、妻となることを誓いますか？」

「はい、誓います」

「八神はやて」

「はい」

「貴方はいかなるときも、彼の者を夫とし、他の二人と争わず、妻となることを誓いますか？」

「はい、誓います」

俺と三人が了承し、そして指輪を渡す。俺へは、3人が一緒に渡してくれた。

「では、順番に近いのキスを」

順番はなのは、フェイト、はやて・・・・その順にキスをした。回りから拍手が起きた。

「えへへ、これで夫婦・・・だね」

「そうだね、私、名前どうしよう・・・・」

「でもなんか、不思議な感じや」

教会を出て、ブーケを3人が投げる。取ったのはフォワードの3人。
あいつら、結構頑張って取ったな。

「さて、みんなで騒ぐとしようか」

なんか、みんな酒飲む気満々だし・・・・

「かんぱーい！」

こうして、宴は夜遅くまで続いた。

途中何度か乱入で俺を潰しに来る男性局員、なのはたちを潰しに来る女性局員の姿もあったが、みんなで一掃した。

「つかれた・・・・」

「にゃはは・・・・」

「まったくもう・・・・」

「もう動けへんし、飲めへん・・・・」

ったく、しょうがないよな・・・・今現在、俺たちはホテルで休むことになった。ちなみにヴィヴィオ、シエル、ルミノ、セレス、エリオ、キャロ、マリカ、レイジングハート、バルディッシュ、アイ

ンは別室で休んでいる。

「でも、今日からみんな家族だね」

「ああ、そうだな・・・・・」

「じゃあ、その、直人は『あなた』って呼べば良いかな?」

「え?今までどおりでも・・・・・」

「プライベートならそれでええやろ?」

「・・・・はいはい、好きにしてくれよ」

まったく、敵わないな・・・・こいつらには。

「で、もう一つ約束」

「え?」

なのはが人差し指を立てる。

「どんなことがあっても、一人で抱え込まないこと」

「・・・・・・ああ、わかった」

そうだな、もう家族だ。それは、守らなければいけないだろう。そう心に誓い、一日が終わりを告げた。

６月の中期に入り、俺は新たに設立された部隊『光の剣　(ライトニング　ブレイズ)』を発足させた。隊舎の場所は変わらず機動六課と同じ場所。まあ、いくつか改築するところもあり、かなり広い隊舎だ。俺は元機動六課のメンバー全員を収集した。

「あの、直人君？どうして私達、呼ばれたのかな？」

なのはたちの手には、そこに来るようにと書かれた手紙が渡されている。

「・・・・・君たちに、来てもらったのは他でもない。君たちを収集したのは俺だからだ」

「直人が？」

「そう・・・・・君たち元機動六課メンバーを本日付で、闇の使徒対抗部隊『光の剣』のメンバーに任命する！」

『エエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！？？？？？？』

「ちなみに部隊長は俺、井上直人一等空佐だ」

『い、一等空佐ぁぁぁぁ！？』

うるさいな、いちいち驚くなよ。

「でもまあ、部隊長としての指揮権ははやてに任せる」

「え！？うち！？」

「俺はあくまで名前だけだ」

「え？でも、ええ？」

「つまり・・・・」

こういえばわかりやすいか？

「君たちはもう一年、共に戦うって事さ」

部隊長室

「もう直人君！なんでこういうことを内緒にするの！？」

「しょうがないだろ、機動六課と同じ支援者から止められたんだから」

俺はソファーに座りため息をつく。今までのものは返したので、新しい机やソファーが用意されている。まあ、ここははやてが主に使うのでアイン用の机が増えた。

「でも、なんでまた？」

俺は三提督から言われた話などを話した。

「・・・・つまり、囮だ」

「そ、そうなんだ・・・・」

「正直、お前達を巻き込みたくはない。相談役たちにも、意思なきものは除外していいと言われているからな」

「もう、すぐそんなこと言って。いい？私達は家族。一緒に戦うのは当然でしょ？」

フェイト・・・・

「それに、またみんなといられるなら嬉しいよ」

なのは・・・・

「せやね、うちらもまた、直人君の力になれるんや」

はやて・・・・・

「そっか・・・・そうだな。ありがとうみんな」

こうして、闇の使徒に対抗するために作られた独立武装部隊「光の剣」は発足した。

第三十八話「卒業、そして掴んだ幸せと・・・・・」（後書き）

秋風「今回もお休みです」

直人「次回、第三十九話『桃色の優しさ、雷鳴の決意』ＴＡＫＥＯＦＦ！」

第三十九話「桃色の優しさ、雷鳴の決意」（前書き）

すいません、最近遅れがちです

でも頑張ります

第三十九話「桃色の優しさ、雷鳴の決意」

光の剣が発足されてから、早一週間。そこはいつもと変わらぬ六課と同じ場所だ。俺はいつもの通り、朝に目を覚ました。

「ん～・・・ふぅ」

「パパ～おはよー」

「おはようヴィヴィオ。今日の練習はいいのか？」

「うん！今日はパパと一緒！」

「そっか」

俺はベッドから降り、ヴィヴィオと洗面台で顔を洗い、着替えて食堂に向かう。食堂に向かうと、すでに朝錬を終えたなのはたちがいた。

「おはよう、あなた♪」

「あ、あなた、おはよう」

「おはようさん、あなた」

「ん、おはよう・・・・」

なんとも、変な感じだ。なのはとはやてはもう慣れた感じだが、フェイトに限ってはまだ恥ずかしいのか、顔が赤い。

「フェイト、別に無理に言わなくてもいいぞ？」

「だ、大丈夫だよ！大丈夫です！」

「フェイトちゃん無理しちゃって」

「な、な、なのははなんで平気なの！？」

「だって、昔からそう呼ぼうって心に決めてたから」

なのはは上機嫌だ。

「うちも、旦那さん出来たらこう呼ぼう決めとったし」

「うぅ・・・なんか二人ともずるい・・・・」

「まあまあフェイト、時間はたくさんあるんだから」

俺は言いながらフェイトの頭を撫でる。

「ん・・・・頑張る」

「はいはい」

「あ、フェイトちゃんずるーい！」

「うちもうちも！」

まったく、こいつら成長しないなぁ・・・

「お父さん！」

「パパ！」

「お、エリオ、キャロ。おはよう」

「「おはようございます！」」

「いや、敬語使わなくていいって」

駆け寄ってきたエリオとキャロは恥ずかしがりながらも、俺を父と呼ぶ。まあ、いいんだけど、問題は二人が未だに『敬語』という点だ。

「えっと、その・・・・努力します・・・じゃないや、努力するよ、お父さん」

「がんばります・・・じゃない、頑張る！」

なんて二人を、微笑ましく見るフェイト。

「ふふっ、エリオもキャロも、頑張らなきゃね？」

「はい、フェイトさん！」

「がんばります！」

「できれば私も敬語じゃなくても・・・・・」

「あ・・・・」

「ま、時間が経てばなんとでもなるよ。」

「そうだね」

「エリオー！キャローー！お仕事行くよー！」

「あ、はい！それじゃあお父さん、僕たちはこれで！」

「今日も一日頑張ります！」

「ああ、頑張っておいで」

俺が言うと、二人は嬉しそうにスバルたちの所に走っていった。

「・・・・・・・・・・」

「どうしたの？直人君」

「いや、本当は・・・・エリオとキャロはメンバーに入れたくなかったんだ」

「え？」

「どうして？」

「あいつらは、強くたって子供だ。そしてヴィヴィオと変わらない、俺の息子と娘だ。だから、心配でな」

正直、除外をしようとしたのだが、本人たちがやるといってしまったので、当然入れることとなってしまった。

「大丈夫だよ、直人。二人は、心も強いから」

「・・・そうだといいけどな」

そんな不安を思いながら目を覚ますためにブラックコーヒーを口に流した。

エリオｓｉｄｅ

今日は別部隊と一緒にソウル・エレメントの調査となりました。

「なんだか、大規模ですね」

「そうだね、直人兄ぃがすごいから」

ソウル・エレメント・・・・スバルさんとティアさんは手に入れてるけど、僕とキャロは持ってない・・・僕、役に立てるかな。

『マスター、どうしました?』

「ストラーダ・・・うん、大丈夫だよ。なんでもない」

『一人で抱え込まないでくださいね。今の貴方には、家族がいるんですから』

ストラーダのいう通りかな・・・そうだね、僕には家族が・・・

『私たちが欲しかったのは、こんなものじゃない！』

「っ！」

「エ、エリオ君？」

「ううん、なんでもないよ、キャロ・・・・・」

「？　そう、ならいいけど・・・・」

キャロside

なんだか、エリオ君の様子がおかしい・・・・でも、本人が言うなら大丈夫だよね。それにしても、パパ・・・なんて、嬉しいな・・・・

「きゅく？」

「フリード？どうしたの？」

「きゅく！」

え・・・や、やだ・・・顔熱い・・・でも嬉しいな・・・・家族ができたんだもん

『お前は、一族の脅威だ！』

「・・・・・！」

「きゅ？」

「大丈夫、大丈夫だよフリード・・・・私は、大丈夫」

そうだよ・・・・あの時とは違う、あの人たちとは違う・・・・パパも、フェイトさんも、なのはさんも、はやてさんも、エリオ君も、みんな私を受け入れてくれた・・・・

「うん、私は大丈夫！」

「・・・？キャロ、どうかした？」

「え、あうぅえ、だ、大丈夫れす！なんでもないでう！」

か、噛んじゃった・・・・

「いいけど、もうすぐ反応ポイントよ。気を引き締めてね」

「「はい！」」

こうして、私たちは奥地へと向かいました。

エリオｓｉｄｅ

「ひ、広いですね・・・・」

別動隊と分かれた僕たちは、先行して現場に向かいました。そこは見渡す限り草原が広がる場所・・・・ひ、広い

「さて、探すわよ。クロスミラージュ」

「マスター、周辺にキメラがいる・・・・少なからず、その気配がある」

「相棒、私も感じています」

「そっか、じゃあ気をつけて進もう」

「「はい！」」

僕たちはフォーメーションをとり、草原を歩きます。

「こちらフォワード、現場につきました」

『了解だ。気をつけろ、そっちは岩が多い。隠れる場所が多用だからな』

「岩？そんなのありませんよ？」

『何？』

「見渡す限り、草原ですけど」

『何を言っている？おまえ達が向かっているのは荒地のはずだが』

「「「「え？」」」」

お父さんの言葉を聞いた、その瞬間だった。

――ズガアアン！

「「「「！？」」」」

突然壁が競りあがり、僕とキャロ、スバルさんとティアさんを分断しました。

「スバルさん！ティアさん！」

「こっちは大丈夫！」

「こっちも「大丈夫かな？」っ！」

振り返ると、そこにはピエロがいました。黒い、ピエロが

「お前はっ！」

「あはははは！どう？どう？これ、最高でしょ！？」

「貴方は、誰ですか？」

「だめだめ！人と挨拶するときは先に名乗るのが礼儀。これ大切だよ？」

「・・・・機動六課ライトニング３エリオ・Ｍ・井上」

「機動六課ライトニング４キャロ・ル・Ｒ・井上」

「えらいえらい！僕は闇の使徒の一人『ピエロ』さ！」

「闇の使徒！」

まさか、こんなところで出会うなんて・・・・・

「もう一つの名前は『道化の悪魔』だけどね」

「・・・・・・キャロ」

「うん、フリード！」

「きゅく！」

僕たちは戦闘態勢をとった。何が来るか、油断できない。

「あはは、やるの？やるの？失敗作で、欠陥品の君たちが？」

「なっ！」

「知ってるよ！知ってるよ！そこの僕はプロジェクトＦの失敗作！
そっちのおじょうちゃんは力が制御できない欠陥品！」

「だまれっ！」

僕はすぐにストラーダで斬りかかった。でも、それは通り過ぎた。

「無駄無駄！君たちはすでに術中さ！」

「フリード！」

「きゅく～！」

フリードがブラストフレアを放つ。でも、やっぱり通らない」

「しつこいしつこい！しつこいと『また』嫌われちゃうよ？」

「黙れえぇ！」

僕はそのままピエロに斬りかかった。

直人ｓｉｄｅ

現場に着くと、強大な結界が張られていた。

「っく、別動隊は！」

「駄目です、結界に突入できません！」

「じゃあフォワードだけがあの中に！？」

「エリオ、キャロ！」

フェイトが突っ込むが、弾かれてしまう。

「ああ！？」

「フェイト！」

俺はフェイトを受け止め、宙に浮く。

「強力な結界・・・・中で一体何が？」

「少なくとも、フォワードはもう戦ってるね」

「スバルとティアナはソウル・エレメントの力を制御しつつあるから、キメラには負けないだろうが・・・・」

エリオ、キャロ・・・・無事でいろよ・・・・？

キャロｓｉｄｅ

「ハァ・・・ハァ・・・」

「終わり？終わり？つまんないなぁ・・・・えい♪」

「うわあああ！」

「エリオ君！」

エリオ君が蹴り飛ばされる。私のほうへ倒れ、一緒に倒れてしまった。

「・・・どうして？」

「えぇ？」

「どうして、こんな酷いことを・・・・」

「簡単簡単！すごく簡単な理由だよ！」

「!?」

「楽しいからさ・・・・・人をからかう!ああ、もう最高!」

「・・・ないで」

「ん?」

「ふざけないで!」

私は許せなかった、エリオ君が、どれだけ苦しんだか・・・・私が、どんな思いで生きてきたのか、それを知らないのにこんなことを言うのに。

エリオside

こんなやつに、負けたくない・・・・

「もういいや、死ね」

砲撃が放たれた。このままじゃ、キャロが!

「キャロ!下がって!」

もう、家族を失いたくない!

「エリオ君!?」

「きっと、君を守る！」

死なせない、絶対に！

キャロｓｉｄｅ

「だ、だめエリオ君！」

「大丈夫・・・・」

だめ、大切な人が・・・・家族がいなくなっちゃうなんて・・・・

絶対駄目！

「駄目えぇぇぇ！」

その瞬間、遠くから桃色の光と、黄色の光が飛んできた。

エリオｓｉｄｅ

何かが光っていた。そして、僕とキャロのバリアジャケットは解除されていた。そして、僕の前にいたのは・・・・

「お父、さん？」

目の前にいたのは、黄色い髪に、白衣を着たお父さんだった。

「マスター、私です」

「え、その声・・・・ストラーダ！？」

キャロｓｉｄｅ

隣にはお父さんがいた。そして、私の前には・・・・

「フェイトさん・・・？」

ピンクの髪に、紺の服を着たフェイトさんが立っていた。

「マスター、私です」

え、この声・・・・

「ケリュケイオン！？」

「はい、どうやら私もストラーダもソウル・エレメントの影響を受けたようです」

「あはは、まさか先を越されるとは・・・・まあ、さっきよりは楽しめそう？」

二人は答えず、構えを取っていた。

「覚悟はできていますか？」

「私たちのマスターを汚した罪は、この星より重いですよ」

こうして、ストラーダとケリュケイオンはソウル・エレメントの力

を得ました。

第三十九話「桃色の優しさ、雷鳴の決意」（後書き）

秋風「更新遅れました」

直人「駄目男め」

秋風「すいません・・・・思った以上に大学が忙しいです」

直人「とりあえず精進しろ」

秋風「はい・・・・」

直人「で、これまでと？」

秋風「はい、明日頑張ります」

直人「次回、四十話『家族』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十話「家族」（前書き）

遅くなりました、更新です。

第四十話「家族」

エリオｓｉｄｅ

僕の目の前にいる人物。それは間違いなくお父さん。でも、紙の色は青と黄色・・・服は銀色。

「マスター、下がっていてください」

「ス、ストラーダ・・・」

「はい、正真正銘・・・私はストラーダです。今は、この姿ではありますが」

ストラーダは僕に優しく笑ってくれた。

キャロｓｉｄｅ

「ケリュケイオン・・・・？」

「はい、そうですよマスター」

返事をしてくれるケリュケイオン。でも、見た目は髪の毛以外、すべてフェイトさんだった。

「ここは、私とストラーダに任せてください。いきますよ、フリード」

「きゅう！」

フリードは頷いて、ケリュケイオンの肩に乗っている。

エリオｓｉｄｅ

「ケリュケイオン、行きますよ」

「ええ、ストラーダ・・・我らの主を守るために」

二人が構えを取った。ストラーダは僕と同じように槍を、ケリュケイオンはキャロと同じようにグローブをはめていた。二人とも、僕たちが使用している時とは形状が違っている武器だ。

「あらら？あらら？やるの？君たちデバイスごときが？」

「そのごときを試してみますか？」

「行きます！」

言って、二人はピエロへと駆け出した。

「はあっ！」

「フリード！」

「きゅああ！」

二人が果敢に攻める。すごい、押してる。

「あれれ?あれれ?これは規格外」

言いながらも、ピエロは攻撃を避け続ける。でも、掠ってはいる。

「ソウル・エレメントの力とはいえ、やるねぇ・・・・」

ピエロは掠ったところから出た血を舐める。正直、気持ち悪い・・・

「くけけ、くけけ!カルメロ!来い!」

「クケケケケケケケケケケケケケケ!!」

突然、何もない空間からカメレオンの化け物が現れた。

「驚いた?驚いた?これぞ私のビーストデバイス!『カルメロ』だ!」

「カメレオン・・・・迷彩の能力・・・」

「そのとおり!そのとおり!では・・・・」

言葉とともに、ピエロは姿を消した。

「マスター、離れないでください」

「う、うん・・・」

「いただきっ!」

「っ！？」

突然吹き飛ばされる。け、気配が！？

「エリオ君！」

「人の心配してる場合かな？」

そのまま続けてキャロも吹き飛ばされた。

「きゃあ！？」

「マスター！がっ・・・」

「さっきのお・か・え・し♪」

「ぐはっ・・・」

ストラーダとケリュケイオンが吹き飛ばされる。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！フリード！」

フリードももう戦えない・・・どうする？どうすればいい・・・・？

「あきらめな♪あきらめな♪君たちじゃあ僕には勝てないよ♪」

僕たちじゃ、もう・・・・

「マスター・・・あきらめてはいけません」

「ストラーダ・・・」

「ようやく掴んだ幸せ・・・それはレディも同じです」

「・・・・！」

そうだ、僕たちは、いろんな辛い思いをして・・・ようやく幸せを手に入れたんだ。こんなところで、僕たちは死ねない・・・

「あはは！あはは！君たちみたいな木偶人形に、幸せなんて来やしない！消えちゃえよ！」

「僕は・・・僕たちは・・・」

僕たちは、負けない。僕はキャロを見る。すると、キャロも同じことを思ったのか、頷いてくれた。

「ストラーダ！いくよ！」

「ケリュケイオン！私たちも！」

「まさか、あれをするつもりですか！？」

「無茶ですよ、あなたたちには負担がかかり過ぎます」

「大丈夫、僕は父さんとフェイトさんの息子だから・・・」

「私も、パパと、フェイトさんの娘だから・・・」

「あっはっは！あっはっは！木偶人形に親なんていない！消えろぉ！」

敵の魔力砲撃が放たれた。どす黒い紫色の砲撃が飛んでくる。

「ストラーダ！」

「ケリュケイオン！」

「「ソウルイン！」」

僕たちの中に、ストラーダとケリュケイオンが入り込んだ。それによって再びバリアジャケットが装備された。でもいつもと違い、そのバリアジャケットの白衣には、蒼と金色の模様が入っていた。キャロのマントにも、同じものがある。

「キャロ！」

「うん、ケリュケイオン！」

『ブーストアップ！』

ストラーダの矛先に魔力が宿り、僕とキャロの魔力光が混ざった魔力刃になった。

「うおおおおっ！紫電！一閃！」

紫電一閃を発動させる。でも、それはいつもと違って斬撃が飛んだ。それによって、ピエロと力が均衡する。

「くっ・・・・うっ、うぅ・・・・！」

「諦めろ、諦めろ♪諦めろったら諦めろ♪」

くっそ・・・

「・・・・ない」

「・・・ないよ」

「んん？」

「「諦めない！」」

僕とキャロの言葉が重なる。そして、爆発が起きた。

「くっ！ぬうぅ！このガキどもがぁっ！」

ピエロが襲い掛かる。まずい、間に合わない・・・・！

「蒼雷一閃！」

「ハーケンセイバー！」

僕たちの前に、二人の影が現れた。

直人ｓｉｄｅ

なんとか間に合ったようだな・・・・

「エリオ、キャロ、平気か？」

「お、お父さん・・・・」

「フェイトさん？」

こいつらのバリアジャケットが変わってる？ってことは・・・・

「お前ら、まさか？」

「は、はい・・・ソウル・エレメントに選ばれました」

「・・・フェイト、二人を頼むぞ」

「うん・・・気をつけて」

「ああ・・・・」

俺はメシアを構えた。あのピエロ・・・許さねえ・・・・

「怒ってる？怒ってる？」

「・・・メシア、リミットブレイク」

『オーライ、リミットブレイク』

俺の甲冑が紅蓮に染まる。

「・・・覚悟はいいか」

「おもしろい・・・来るがいい」

ピエロの表情が変わる。ピエロも鎌を構えた。そして互いに駆け出し、武器同士で火花が散った。

フェイトｓｉｄｅ

直人、大丈夫かな・・・

「フェイトさん・・・」

「エリオ、まだ無理したらだめだよ?」

「は、はい・・・その、フェイトさん・・・その手は?」

エリオが私の右手を指差した。その手は血で滲んでいる。

「あ、ああこれ?その・・・結界を素手で殴ったの」

「え・・・・?」

私たちはピエロの言葉が聞こえていた。私は思わず結界を殴っていた。

「フェイトさん・・・・僕」

「大丈夫だよ、エリオ、キャロ・・・・あなたたちは人形なんかじ

ゃない、私と直人の・・・大切な息子と娘なんだからね？」

「フェイトさん・・・うっうぅ・・・」

「うぐっ・・・フェイト、さぁん・・・」

エリオとキャロが泣きながら私に抱きついた。私は、そんな二人を強く抱きしめていた。

直人ｓｉｄｅ

「紅蓮一閃！」

「ぎゃひっ！やるねえやるねえ！さすがは英雄！」

「・・・失せろ」

俺はただひたすら剣を振る。

「紅蓮雷閃・・・」

許せなかった・・・エリオを失敗作と呼んだことを

「ぐっ！このっ・・・」

「メシア、リミットブレイクマキシマム」

『オーライ、パワーマキシマム』

許せなかった・・・キャロを欠陥品と呼んだことを

「終剣・紅蓮雷光・・・紫雷烈閃！」

蒼と紅の光が混ざり合い、その斬撃でピエロを斬り飛ばした。

「ちきしょう、ちきしょう、ちきしょう！なんなんだお前！たかが人形のために、なんで戦ってるんだ！」

「・・・・・な」

「あ・・・・？」

もう、許さなねぇ・・・・絶対に

「てめえが！エリオたちを！俺の息子たちを語るなぁ！」

俺は思い切り斬りかかった。

「がああぁぁぁ！」

ピエロはそのまま吹き飛び、姿を消した。・・・逃げられた、か。

だが・・・

「いるんだろアナザー・・・」

「さすがだな、井上直人」

そこにはフードを外したアナザーの姿があった。

「・・・もうフードは付けないのか」

「お前に知られた以上、付ける意味もあるまい」

「そうだな」

俺は言いながらメシアを構えた。

「やめておけ」

「何？」

「今、リミットブレイクの限界値を超えたはずだ・・・」

「・・・・！」

こいつ、見てたのか・・・

「今の貴様とやっても面白くない」

「！」

「では、さらばだ・・・・せいぜいあがくがいい」

そう言ってアナザーは転移した。

光の剣隊舎に戻ってから、驚いたことがあった。俺とフェイトにそっくりな奴らがいたからだ。髪の色以外だが。

「なるほど、ストラーダとケリュケイオンか・・・」

「はい、その・・・父さん、僕」

「パパ、私・・・」

俺は何も言わず、二人を抱きしめた。

「えっ・・・？」

「あっ・・・？」

「今は、何も言わなくていい・・・」

「「え？」」

「お前らは、俺の息子と娘だ・・・それでいい」

俺が言うと、エリオとキャロが俺の服を強く握り、涙を流していた。

「お、とう・・・さん・・・うっあっ・・・・・」

「パパ・・・うっ、うぅ・・・」

「よしよし、怖かったんだな。もう大丈夫だぞ」

「うわあああああああああああああああん！！！！！！！！！！」

「うえええええええええええええええええん！！！！！！！！！！

！」

泣き続ける二人を、俺は優しく抱きしめていた。

アリスｓｉｄｅ

エリオとキャロ、泣いてた・・・私にはよくわからない。でも、二人は悲しそうだった。

「なにか、励ます・・・」

何か案を考えている。だけど、それより気になったのは・・・

「ソウル・エレメント・・・何故適合者がこんなにも・・・・・？」

私の疑問は深まるばかり。そして・・・

「ぐっ！うぅ・・・」

長いことキメラを取り込んでいないせいで、体に負担がかかっていた。

「もう、悲しい思いは・・・直人・・・」

私はそこで闇の中へと堕ちた。

第四十話「家族」（後書き）

秋風「はい、ということでお久しぶりです！」

直人「久しぶりすぎだろ」

秋風「で、もう眠いので申し訳ないが寝る」

直人「おい」

秋風「今日はたくさん更新しますので、でわ～」

直人「次回、第四十一話『暴走する魂』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十一話「暴走する魂」（前書き）

久しぶりの更新です。感想待ってます

第四十一話「暴走する魂」

エリオとキャロがソウル・エレメントに選ばれてからしばらく経った。不気味なほど、闇の使徒は沈黙を守っている。俺は隊長室で通信をしていた。

「ぜんぜんないのか、情報は」

『ああ、そのようだ。』

「地上本部の情報網、特にあんたからなら確かだな」

俺が通信しているのは地上本部の英雄、レジアス・ゲイズ中将。

『引き続き調査を続けるが、お前も気をつけろ。いきなり一等空佐になったお前は睨まれるぞ』

「・・・ああ、わかってる。じゃあな」

『ああ』

こうして通信を切った。ったく、あのおっさんは・・・・

「失礼します」

ん?誰だ?

「どーぞ」

「こんにちは♪直人」

「ドゥーエか。どうしたんだ？」

そこにいたのは管理局の服を着たドゥーエの姿だった。

「うふふ、今日から光の剣に配属されたのよ♪」

あれ？そんな予定あったか？

「私とウーノ、トーレ、クワットロは先行でドクターとね♪」

「スカリエッティは聞いてたけど、お前らは聞いてないぞ」

「私たちはドクターのお付でもあるから」

あー・・・なるほどって

「ドゥーエ、何してるんだ」

ドゥーエは俺の背後に回り、後ろから抱きつく。

「会いたかったわ、本当に」

「あのな、新婚の人間にそういうことするか？」

「いいじゃない、私は愛人で」

「またなのはにスターライト食らうぞ？」

俺が言うと、しぶしぶドゥーエは離れた。

「で？それだけじゃないだろ？」

「ええ、一応調べたものよ」

それは今まで出てきた闇の使徒のメンバーたちの記録

「どうだった？」

「どれも元管理局員、もしくは管理世界の出身ね。データベースで出なかった奴らはいないわ・・・ただ」

「ただ？」

「正式記録では、どの人間も死んでいるのよ」

「何？」

死んでいる・・・アナザーがそういう風に仕込んだのか？

「どれもこれも、みんな改竄の後はない。それほどあの男が技術的面で優れているのか、それとも本当に死んでいるかそれとも管理局に意図的にそうされたのか」

「管理局のことを考えれば、後者だな」

「同感よ」

つまりは全員、管理局に恨みを持つ者・・・

「詳しい資料はまとめてあるわ。はい」

「ありがとう。お前は優秀だから助かるよ」

「そう言ってもらえるとうれしいわ。そろそろ昼食ね。行きましょう♪」

俺はドゥーエに連れられ、食堂へと向かった。

「あ、直人・・・・君？」

瞬間、レイジングハートをソウル・インしようとする。

「落ち着けなのは」

「直人君から離れて！」

「やーよ、いいじゃない」

「直人君は私たちのなのー！」

なんて、ドゥーエと喧嘩するなのはたち。すると、ヴィヴィオが泣きながら俺のところに駆け寄って来た。

「パパ～・・・」

「ん？どうしたヴィヴィオ」

「アリスお姉ちゃんがぁ・・・」

アリス・・・？

「アリスがどうかしたのか？」

「アリスお姉ちゃんが怖い顔で、怖い顔で訓練場に走ってったの」

そうとうその怖い顔が怖かったのか、ヴィヴィオは俺に泣きついていた。

「マリカ、どういうことだ？」

「それが、私は見なかったのですが、何か、不安があります・・・・」

「わかった、ちょっと行って来る」

俺は訓練場へと向かった。

訓練場へと向かうと、そこにはアリスがいた。

「アリス・・・どうした？」

「う、うぅ・・・・」

「アリス？」

「あ、うぅ・・・・」

「アリス？どうしたんだ、しっかりしろ」

「うぅっ！」

アリスが俺が触ろうとすると、手を払った。その手は、狼の爪だ。

「アリ、ス？」

「ぐぅ、う・・・・ナ、オ・・・・・・ト」

「アリス・・・・？」

「逃げ、て・・・・・」

逃げろって・・・

そう思った瞬間、俺は吹っ飛ばされる。

「ぐっ！」

なんだ？

「ぐうぅ！あああああ！」

アリスの体が変化していく。一体どうしたんだ？

「逃、げ・・・・・あああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

まさか、暴走・・・・？

「メシア！」

『了解、捕縛魔法展開』

バインドで縛り付けるが、アリスはそれを取り払った。

「何っ！？」

「がああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

アリスの腕とも剣とも取れないものが俺に襲いかかる。

「っくぅ！メシア、セットアップ！」

『オーライ、スタンバイレディ！』

俺は甲冑を装備し、剣でその攻撃を耐える。

「目を覚ませ！アリス！」

「あがあああああああっ！」

アリスは答えない。ただ咆哮をあげ、ひたすら攻撃を仕掛けてくる。

「メシアっ！」

「ロードカートリッジ！」

「がああああああああああ！」

「蒼雷一閃！」

蒼雷一閃を放った。アリスが同じような攻撃を繰り出す。

「っ！？」

蒼雷一閃とぶつかり合い、光が飛び散る。俺はそのまま吹き飛ばされる。

（今は情報がなさすぎる・・・・一体どうすれば・・・・）

「（直人・・・・直人・・・・）」

俺の頭に、念話が響き渡る。この声は・・・・

「（アリス・・・・！どうしたんだアリス！）」

「（聞いて・・・・私、力が、もう、制御できない・・・・）」

力が制御できない――？

「（どういうことだ？）」

「（私は、キメラを吸収して・・・・力を制御してきた・・・・近頃は出てこなかったから・・・・制御が利かなくなって・・・・）」

「（どうすればお前を助けられる？）」

「（もう、無理・・・・苦しい・・・・・もう、殺して・・・・・）」

アリスが苦しそうな声で訴える。

「がああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

「っく！アリス・・・・・・！」

もう、倒すしかないのか・・・・・？いや、あいつは俺なんだ・・・・・助けたい、どうしても・・・・誰か、誰かキメラに詳しい奴は・・・・・いる！

『我が求めるは癒しの力・・・・・エルフ！』

俺の詠唱とともに、久しぶりにカナリアが姿を現した。

「御用でしょうか、マイマスター」

「ああ、知恵を貸してくれ」

俺はアリスをバインドで抑えながらも、現状を説明した。

「・・・なるほど、それは厄介ですね。」

「何か、方法はないか？」

「・・・・仮説ですが、アリスは人の心とキメラの心が混ざり合った姿です。キメラの心が強いからこそ、今あの状態にあります。」

なるほど、つまり・・・・・・

「人間の心のきっかけを作れば良いのか」

「ですが、それは何をすればいいのか・・・・・・」

確かに、方法がない・・・・

「ぐるるるぅあああああ！」

アリスがバインドを再び破る。

「カナリア、お前は戻れ！」

「は、はい！マイマスターご武運を！」

カナリアが消える。俺は再びメシアを構え、アリスに対抗する。

「っく！どうする？どうすれば・・・・・」

俺は攻撃をかわしながら、メシアで振りぬく。すると、俺はアリスのある言葉を思い出した。

――私は光を浴びて、人の形を得たの

そうだ、あいつは俺の分身でもある・・・・俺の細胞を直接体内に注入すれば・・・・！

「アリス！聞けっ！」

攻撃を受け止め、攻撃を防ぐ。

「ぐ、うううううう！」

「俺がお前を助ける！だから、俺を信じろ！アリス！」

「な、お・・・・と・・・・」

俺はアリスの顔を俺の肩に近づけ、噛ませる。吸血鬼というわけではないが、同じ原理だ。俺の体内の血を吸わせ、無理やり俺の人としての心を分け与える。

「ぐっ・・・・・くぅっ！」

「う・・・な、おと・・・・・」

「頑張れアリス！キメラの心に負けるな！お前を取り戻せ！アリス！」

俺の言葉と共に、アリスが光に包まれて俺を包み込む。そして、その光は訓練場のすべてを包み込んだ。

第四十一話「暴走する魂」（後書き）

直人「何か言うことは？」

秋風「仮面ライダーWかっこいい」

直人「違うだろぉぉ！」

秋風「ぎゃあああああああああ！！！」

直人「読者の人たちに言うことは！？」

秋風「ごめんなさいっ！」

直人「ったく、予告したのに更新しないとか」

秋風「しょうがないじゃん、俺は大学で忙しいんだ！」

直人「理由になるかぁぁ！」

秋風「ぎゃあああ！」

直人「っというわけで、皆さん申し訳なかった。これからも秋風に書かせるので、どうか見捨てないでほしい。感想、待ってます。」

秋風「グフッ・・・」

直人「次回、第四十二話『無限の心』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十二話「無限の心」（前書き）

今回もあれです、頑張ってます

で、またタイトルが変わりました。申し訳ないです。では本編どうぞ♪

第四十二話「無限の心」

なのはｓｉｄｅ

私は午前の訓練の準備のために、訓練場に向かっていた。でも、その訓練場で、爆発音が聞こえていた。あれは・・・・・キメラ！？直人君が戦っている・・・・・

「アリス！俺を信じろ！」

「アリス・・・・・・？」

あのキメラが、アリス・・・？そして、かすかに、怪物から声が漏れた。

「な、お・・・・と」

「ぐっ！うぅ・・・・・・」

直人君がアリスに肩を噛まれた。あれって・・・・・・

「キャア！？」

激しい光が、アリスと直人君を包み込んだ。

直人ｓｉｄｅ

「ここは・・・・・」

そこは何か、よくわからない世界。例えるなら、不思議の国の『アリス』の世界。

「・・・・・・・・」

俺はメシアを持ちながらその世界を歩き続ける。目の前にはまか不思議な世界が続いていく。一つの木に、さまざまな果実が実る場所。チェス版のようなタイルの道。不思議に曲がる木や、歌っている道。立地条件が悪い家や、お菓子の家。待てよ?ここってもしかして・・・

「アリスの、心の世界?」

「正解です」

突然声がして、その方向を振り返る。そこには真っ白なアリスがいた。

「アリス?」

「はい、私は『白の』アリス」

「白の、アリス?」

「白と黒、陰と陽、光と闇、正義と悪、人間とキメラ・・・・・・・相対する存在の明るみの部分。それが私です」

じゃあ、黒のアリスもいるのか・・・・・

「実は、あなたにお願いがあるんです。」

「お願い？」

「私たちを、元に戻してください」

元に、戻す？それに、私たちって・・・・・・

「白の私と、黒の私は、元々一つの存在です。主人格は闇寄りで、アリスという存在が形成されていました。ですが、闇に染まりきり暴走した私を、あなたは光によって抑えてくれた・・・・・それによって今、私が生まれているのです」

つまり、闇のアリスがどこかにいるんだな。

「闇の私の居場所はわかります。ついてきていただけますか？」

俺は頷き、白のアリスについていくことにした。奇怪な森を抜けて、そこは広い草原になった。

「ここは・・・・・」

「ここは、あなたが浄化した世界です」

「浄化？」

「闇に存在するはずのない、輝きです・・・・・さあ、待ち人の場所へ行きましょう。」

草原の中心に、黒いアリスはいた。

「うっ、うっ・・・・・」

「アリス」

「あ・・・なおと・・・・・・なんで・・・・・」

「私が連れてきたの」

白いアリスが微笑む。

「帰って・・・・・・」

「アリス？」

「なおとも、あなたも、みんな、帰って！」

アリスが黒いオーラを放つ。

「っく！アリス！？」

「帰って！帰れ！帰れぇ！」

「きゃあっ！？」

「危ない！」

俺は白いアリスを抱え、距離をとった。あれは・・・・・・

「あれは、黒い私に潜む、本当の闇」

「本当の闇？」

いったい、どういうことだ？

「私と彼女は、本当に表裏一体。キメラの心、人間の心・・・・・その二つが混ざり合ってできたのが私・・・・私たち。でも、主人格の私は、自身にあるキメラの心に怯えてた・・・・・」

白いアリスは、どこか悲しそうになる。

「だから、私は何度も心の奥で呼びかけた。でも、あの子は振り向いてくれない。」

そんなことが・・・・・

「お願いです、私たちを救ってください。このとこしえの闇から・・・・」

「わかった、君は下がってろ」

俺はメシアを構え、黒いアリスを・・・・・いや、アリスを見据える。

「カエレカエレカエレカエレカエレカエレカエ
レカエレカエレカエレカエレカエレカエレカエ
レカエレカエレカエレカエレカエレカエレカエ
レカエレカエレカエレカエレカエレカエレカエ
レカエレカエレカエレカエレカエレカエレカエ
レ！！！！カエレエエエエエエ！！！！！！！！」

アリスが変貌する。腕と足が変形し、翼が生える。そしてアリスはそのまま怪物の中へと消えていく。まるで、自分と世界を閉ざすかのように。そして現れたのは、かつて見たマラキアに似た怪物。

「アリス・・・・・！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

もはや怪物と化したアリスは砲撃を放つ。

「っ！」

何とか避ける。草原はえぐれ、荒地へと変わっていく。

「やるしかないのか」

『主、起動を』

「この世界はアリスの世界だ、下手に攻撃したら、アリスがどうなるか・・・・・」

言いかけて、砲撃が飛んでくる。

「うわっ！」

『しかし、このままあなたはこのまま攻撃を受けて死ぬつもりですか！？下手すればただではすみませんよ！？』

「・・・・・・・・・・・だが」

下手に、攻撃なんてできない。

『ですが、アリスさんの暴走を止めるにはあなたしかいません。この世界で死ぬか、わずかな希望にすがるか・・・・・・』

わずかな希望・・・・・か

「メシア、ブレイブスワロー・・・・・・行くぞ」

『『はい主！』』

「セットアップ！」

『『オーライ、スタンバイレディ！』』

メシアスワローを手に、俺は空を飛翔する。

「メシアスワロー！とにかく避けながら接近するぞ」

『了解です』

「軌道の予測は任せる。行くぞ！」

俺はそのまま突っ込む。マリカがいないことで、この状態は１０分と持たない・・・早急にカタをつける！

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

『バックして上へ！そのまま左に回れます！』

「よしっ！」

怪物は大きく空振りする。それによって地面に手がめり込み、動けなくなる。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「今だっ！」

俺は怪物の体内へと飛び込んだ。

アリスｓｉｄｅ

もうやだ・・・もう誰とも会いたくない、誰とも接したくない・・・私は化け物、私は怪物・・・・・私は・・・・・・・・・・

「アリス・・・・・」

声がした・・・・誰？

「誰・・・・？来ないで」

「助けにきたよ」

「助けなんて望んでない！」

そう、私を助けてくれる人なんていない。私を一人にして！

「大丈夫、誰もお前を怖がったりはしない・・・・・・・」

暗い闇の中、蒼く光る人影・・・・・・

「直人・・・・・」

「アリス、一緒に外へ出よう。」

「いやっ！私はやだ！」

「アリス・・・・・」

「私は自分が怖い！できた絆が、このキメラの血で消えてしまう！この血のせいで、誰かを傷つけるのはもう嫌だ！」

私は頭を抱え、座り込んだ。もう、誰も私の心に入ってこないで・・・・！

「大丈夫、アリス・・・・俺は、お前の味方だ。どんなことがあっても、お前が闇に染まりきっても・・・・・・きっと助けてやる」

「直人・・・・・」

私は顔を上げる。そこにあるのは、直人の優しい笑顔。

「きっと、お前は闇に打ち勝てる。なんといってもお前は、俺から生まれたんだからな」

「直人・・・・・・・」

このとき思った。信じてみたい。もう一度・・・・・

―――この人は、本当に私の全てを受け入れてくれる

自分の一部だからではない。私を私として見てくれる・・・・・

「さあ行こう、光へ」

「うんっ！」

差し伸べられた手を手に取り、私は直人と走り出した。

直人ｓｉｄｅ

「蒼雷一閃っ！」

「があああああああああああああああああああああああああああああああああ」

俺はアリスを抱きかかえ、外へと脱出した。

「アリス、平気か？」

「うん・・・・」

俺は着地し、怪物を見た。アリスの本当にあった闇。それを断ち切

ったのだ。怪物は崩れ去り、砂になった。

「・・・・・アリス」

白いアリスが、こちらに来た。

「・・・・・・・・・・・・・・」

「私は、あなた。でも、アリスというのは、あなた一人・・・・・・
だから・・・・・・」

白いアリスが、段々と薄れていく。

「アリス!?」

「大丈夫、私は帰るの・・・・・アリスの中へ」

アリス・・・・・

「よかったら、覚えておいて・・・・・私の名前はアリスじゃなく
て、アニミス。アニミス・インフェニート・・・・・・」

「アニミス・・・・・」

無限の心・・・・か

「アリス?私は消えるけど、あなたは・・・・・・・・」

――――あなたの信じる道を、進んで頂戴ね

「アニミス！」

「さよなら直人・・・・・・・」

アニミスはアリスの中へとけ、俺はそこで目の前が真っ暗になった。

そうか、アニミスは、俺の心の世界で言う、闇の俺自身だった・・・・・・アリスとアニミスはそれが逆で・・・・・だから・・・・・・あんなにも放って置けなかったんだ。

「・・・・・・・くん」

え？

「直人君！」

「ん・・・・・・？」

ここは・・・・・

「直人君！」

いきなりなのはの顔が目の前にあった。

「な、なのは！？それにここ、医務室！？」

「光に包まれて、アリスと一緒に気を失ってたんだよ？」

「そう、なのか？」

そうか、俺・・・・アリスの心の世界から帰ってきたのか

「ん、んん・・・・・・」

「あ、アリスちゃんも気がついたみたいだね」

「うん・・・・・なのは・・・・直人っ！」

アリスがベッドから飛び降り、俺に抱きつく。

「お、おいっ！アリス！？」

「ひっぐ、えっ・・・・うえぇぇぇん！」

大泣きだよ・・・・・

「ど、どうしたのアリスちゃん？」

なのはも驚いている。

「直人っ！ごめんなさい！ごめんなさい！うわあああああああああ！！！！」

「・・・・大丈夫だよアリス」

アリスはその後ずっと泣いていた。そして泣きつかれて寝るまで、俺はずっとアリスを優しく抱きしめていた。

この後、事情を知らないなのはからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆を喰らったのは言うまでもない。

第四十二話「無限の心」（後書き）

秋風「ということで・・・・・・書いてみました今回の話♪」

直人「ご機嫌だな」

秋風「実はねぇ、今日ゲームセンターで初音ミクのプレミアムフィギアをなんと二つもゲットしたのさ♪」

直人「ああ、あの今ネットで騒いでる２８？のフィギアか」

秋風「そうっ！これがまたいいんだよ♪」

直人「二つも取ってどうするんだよ」

秋風「いいじゃないか、貴重らしいぞ、これ」

直人「本当かよ・・・・・」

クラウド「邪魔するぞ」

ナナキ「やあ、久しぶり」

直人「久しぶり、２回目の登場だね♪」

秋風「久しぶりだねぇ・・・・・なんというか、かなり」

クラウド「確かに、蒼天の騎士伝説以来だからな」

ナナキ「というか、こっちは忙しいからなかなかね」

秋風「まあ、そっちは最終決戦だからな」

直人「大変なのは無理もない」

クラウド「そういうそちらも、問題を抱えていると聞いたが？」

秋風「そうなんだよ、最近盗作っぽいのが増えててさ」

ナナキ「そういえばこの前相談のメッセージが来たね」

直人「一応その件は決着がついたけど別のところでまた同じようなのがあってさ」

秋風「こんな駄目作者のなんて参考にしてもねぇ・・・」

クラウド「俺が思うに、かぶりやすいというのがあるのではないか？」

ナナキ「確かに、思いつきやすいのが多いかもね」

クラウド「それによって『少しくらいコピーしても』という心が生まれてしまう」

直人「確かにな・・・・駄目作者だし」

ナナキ「もしくは偶然かぶるっていうのとかね」

秋風「お前ら、俺を苛めて楽しいか？」

直人「ああ、楽しいな」

秋風「貴様っー！」

クラウド「まあ落ち着け、怒っても始まらん」

ナナキ「そうそう、冷静に冷静に」

秋風「うぅ・・・・・」

直人「さて、そろそろ時間かな？」

クラウド「そのようだな。また来るぞ」

ナナキ「またね♪」

直人「ちょい待った！」

クラウド「・・・・？」

秋風「恒例のお土産だよ。この前はぬいぐるみだけど、今回はフィギアね」

クラウド「お前は俺をどうしたい？」

直人「さあ？」

秋風「ナナキにはなのはね」

ナナキ「ありがとう、もって帰るよ」

クラウド「ではな」

ナナキ「ばいばーい！」

クラウド・ストライフ　登場作品　魔法少女リリカルなのは～片翼の天使の導いた世界～

ＡＣＣの戦いの後に次元漂流者になったクラウド。フェイトと出会い、無印の世界でセフィロスとの死闘を繰り広げる。個人的にＡＳになったときが楽しみ。

ちなみに今回２回目の出演

ナナキ

ＦＦ７でおなじみのナナキ。時空管理局側に保護された。なのはたちとアースラに協力するが、時空管理局の腐っている部分に厳しい突っ込みを入れる。

彼もまたセフィロスとの激闘を繰り広げる。クラウドと同じく２回目の出演。

直人「次回、第四十三話『紅蓮の翼』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十三話「鮮烈な大事件」（前書き）

ということで久しぶりの更新&ヴィヴィオ話です。これからも頑張ります！

第四十三話「鮮烈な大事件」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

元機動六課隊舎。現、闇の使徒対策部隊「光の剣」の隊舎である。
ここ数日ヴィヴィオはもの思いに耽っていた。

「ふぅ・・・・・」

一連の軽いトレーニングやお勉強を終えたヴィヴィオ。だが何か物足りない。

「・・・・つまんない」

ヴィヴィオは一人、そういった。一人で練習しても誰も褒めてくれない、勉強しても楽しくない。いつも父と呼べる存在がいなくなったことで、ヴィヴィオは飽きを感じ始めていた。

「パパ・・・・・」

最近は怪我をしたり会議が忙しかったりと、ヴィヴィオは直人に会えないでいた。さらに言えば、寝てるときは母親たちに独占されたり、姉たちに取られたりしてヴィヴィオの入り込む余地がないのだ。

「・・・・・・・・・・・ヴィヴィオ、いらない子なのかな」

自然と出る、少女の疑問だった。ただ一人でいる自分は、この部隊ではお荷物だ。姉のシエルたちは十分に戦える。他の人たちだって、機動六課を支えてきた猛者たちばかり。自分は６歳だから何もでき

ない。ヴィヴィオは暗い顔で、隊舎を後にした。これが、大事件の始まりとなる。

直人ｓｉｄｅ

会議、会議、会議、会議・・・・・闇の使徒の攻撃でなく、キメラの攻撃が重なったりしたり、ソウル・エレメントの発見が困難だったり、面倒ごとばかりだ。

「あーあ、だるい」

「そんなこと言ってる暇があったら、仕事してよ」

なのはが言いながら仕事をする。

「おう、わかってる・・・・・てか、お前ら休んでいいぞ？」

「みんなでやったほうが早いやろ」

「そうだけどさ・・・ヴィヴィオ、最近一人にしてるから」

最近あいつの相手をしていない。マリカも仕事だし、ザフィーラまで配分にまわす事態だ。今は寮母のアイナさんが実家に帰省しているのでヴィヴィオはずっと一人だ。

「じゃあ私たちが仕事しておくから、ヴィヴィオの相手してあげて」

「え？」

「ヴィヴィオはどちらかと言うとお父さんっ子だから」

「・・・・・・・・・わかった、後頼む」

「「「オッケー」」」

こうして俺はヴィヴィオを探しに行った。

俺は隊舎を歩き、ヴィヴィオを探す。おかしいな・・・いない

食堂

「見てない？」

「ええ、お昼なのに見てないわよ」

と、食堂のおばちゃん

デバイスルーム

「来てませんね～・・・というか、入らないと思いますよ？」

とシャーリー

ロビー

「見てないですよ、朝練習してるのは見ましたけど」

とスバル

結局色々な所を見たが、ヴィヴィオは見つからない。いつの間にか大騒ぎになっていた。

「ヴィヴィオー！」

「ヴィヴィオー！どこー？」

「ヴィヴィオー！出てきてやー！」

いつの間にか大勢でヴィヴィオを探していたが、見つからない。

「あれ、直人どうしたの？」

「ああアリス、ヴィヴィオ見なかったか？」

「ヴィヴィオ・・・ヴィヴィオならさっき、道路のほうに歩いていってた。すごく暗い顔で」

「ええ！？」

まさかあいつ、いじけて出ていったのか！？

ピーピー

「はい、井上です」

『僕だ、ちょっと面倒なことが起きてな・・・』

クロノ提督が、信じられない話を始めた。

「ええ!?ヴィヴィオが狙われてる!?」

『ああ、聖王教会の過激派の一味だ。そちらで対応は・・・・』

「大変なんです提督、ヴィヴィオがいなくなってて!クラナガンに向かったと思うので、すぐに非常線を張ってください!」

『な、なんだと!?わかった、すぐになんとかする!』

こうして、大事件が始まった。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

クラナガンの町を、ヴィヴィオは一人歩いていた。

「・・・・おなかすいた」

お金を持ってないヴィヴィオは、公園で静かに座っていた。いつも父や母と来た公園だが、今は一人だ。

「あ・・・・・」

眼に入ったのはアイス屋さん。いつもは直人がそこでアイスを買う。だがお金のないヴィヴィオはただそれを眺めるだけだった。

「・・・・・ひっぐ、うぇ・・・・」

自然と涙が溢れ出す。自分はこの世界でたった一人なのだ。

「どうかしたのかい？お嬢ちゃん？」

「う？」

「一人の男が話しかけた。神父のような男」

「おじさん、誰？」

ヴィヴィオが首を傾げると、男は笑みを浮かべる。

「おじさんはね、神様に仕える人なんだよ・・・・」

そう言って男がヴィヴィオの口に布を当てた。

「う！？」

そこでヴィヴィオが気を失い、頭にしていたリボンの片方がするりと解けた。

「くっくっく・・・餓鬼が、たやすいものだ」

そう言って、男は転移した。

直人ｓｉｄｅ

ヴィヴィオ！ヴィヴィオ！ヴィヴィオ！俺はヴィヴィオのことを心配しながら、空を飛んでいた。

「直人、ちょっと落ち着いて！」

「落ち着けるか！ヴィヴィオが危ないんだ、早くしないと！」

「直人君、落ち着いて、幸いヴィヴィオの魔力は特殊だからすぐに追えるから」

「せや、焦ってもなんにもならへんで」

「わかったよ・・・・」

俺は3人になだめられ、気を取り直して空を飛ぶ。すると、通信が入った。シエルからだ。

『父上！』

「見つかったか？」

『いえ、今からすぐクラナガンの自然公園へ』

「ああ、わかった」

俺たちはすぐさま公園に向かった。

公園に向かうと、ヴィヴィオの姿はなかった。だが、シエルの手に握られていたのは・・・

「それ、は・・・・」

「ヴィヴィオの、リボン」

青いリボンには、なのはが小さく『ｖｉｖｉｏ』と刺繍したものが入っていた。

「まさか、もう・・・・」

「わずかながら魔力反応があります。転移したのでしょう」

「なら急いで追尾しろ！」

「もうやってます！」

「ならクラナガン郊外の廃棄地区を徹底的に探せ！クラナガンは出入り口全てに検問！急ぐんだ！」

『はっ！』

捜査隊を動かす。どうする、どうすればいい？くそ、俺がもっとちゃんとしていれば・・・・！

「直人君・・・・」

「くそっ！俺がちゃんとしておけば・・・・・！」

「直人・・・」

「アリス？」

「私に任せて」

言うと、アリスの体が光りだした。これは・・・？

「残った魔力を分析、量からしてそうと遠くにはない・・・・・・わかった！こっち！」

言いながらアリスが翼を広げて飛ぶ。俺もその後に続いた。

「アリス、本当にこっちなのか！？」

「私は体にキメラを探すための探知機のようなものがある。それを残った魔力に換えれば、追尾は簡単！あそこ！」

そこにあるのは小屋。よし、待ってろよヴィヴィオ！

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「誰か助けて・・・・パパ・・・・」

「無駄だよお嬢ちゃん、誰も来ないから」

「ヴィヴィオをどうするの・・・・・・？」

「君には死んでもらうのだよ、我が教会に害をなす存在だからね」

言いながら男は剣を取り出す。

「ひぃ！」

ヴィヴィオが悲鳴を上げる。

「パパ！パパァ！助けてぇ！」

ヴィヴィオがボロボロと涙を流す。男たちは笑う。

「さて、聖王教会の名のもと、愚者に死を！」

剣が振り下ろされた。ヴィヴィオは眼をつぶる。

――ガキィンッ！

鋭い音が鳴った。ヴィヴィオは恐る恐る眼を開けた。そこにいたのは、白い翼を持った、自分の父の姿だった。

直人ｓｉｄｅ

「愚者どころか、テメーらは屑だ・・・・・」

「なっ・・・・」

「パパっ！」

ヴィヴィオ・・・・こいつら、許さない・・・・！

「らあっ！」

「ぐはっ！」

一人を斬り飛ばすと、他の男たちがデバイスを構える。

「貴様は！」

「・・・・・・・・・貴様らに、語る名はない」

行って、すぐにリミットブレイク。超高速でデバイスごと相手を打ち砕く。

「ぎゃあああああああ！」

「ヴィヴィオを攫った罪だ・・・その身で償え」

後に知ることだが、男たちは全治2年の大怪我を負ったという。

事件は終わり、ヴィヴィオが泣きながら俺に抱きついた。

「パパッ！パパァ！」

「ヴィヴィオ！お前なんで！」

「だって、だって！ヴィヴィオ、いらない子だから・・・・・」

「バカヤロー！」

俺は大声でヴィヴィオに怒鳴った。周りにいたなのはたちや、シエルたちも驚いていた。だが俺は気にしない。

「ひぅ！」

「俺がいつそんなこと言った・・・・・・・」

「だって・・・・」

「俺が、一度でもお前をいらないなんて思った?言った?」

「パ、パパ・・・・・・・」

言いながら、俺はヴィヴィオを強く抱きしめる。

「俺が、お前を、一番愛してるんだぞ・・・・・・そんなこと言うな、バカ娘・・・・」

自然と、俺の目から涙が零れていた。

「パ、パパ・・・・ごめんなさい・・・・ごめんなさい・・・・・うっぐ、ひっぐ・・・」

「よしよし・・・・・・もう、大丈夫だぞ」

「うえええええええええええええええええええん！パパァァァァァァ！！！！！！」

ヴィヴィオがこれまでにないほどの大声で泣き始めた。俺はただただ、ヴィヴィオを強く抱きしめていた。

事件から数日後
「パパ～」
「ヴィヴィオ」
仕事の休憩時間、ヴィヴィオは俺のところにダイブしてきた。
「どうしたヴィヴィオ」
「えへへ～・・・・」
無邪気に笑うヴィヴィオ。前の甘えん坊ヴィヴィオに、少しだけ戻った気がする。
「パパ、大好き！」
「ふふ、ありがとうヴィヴィオ」
言いながらヴィヴィオの頭をなでる。事件の後は警戒が強化され、ヴィヴィオに手出しする奴はいなくなった。
「さて、と・・・・休憩終わり、パパはお仕事行くから部屋に戻ってなさい」
「やだっ！パパといる！」
甘えん坊になったのはいいが、我侭も一段と増したヴィヴィオ。俺はしょうがなくヴィヴィオを抱き上げる。
「しょうがない、静かにしてるんだぞ？」

「うんっ！」

ヴィヴィオは嬉しそうに笑みを浮かべていた。今日も、忙しい一日が始まる。

第四十三話「鮮烈な大事件」（後書き）

秋風「ということでヴィヴィオの話です」

直人「おい、言うことは？」

秋風「すいませんでしたぁ！」

直人「まったく、放りっぱなしだろ」

秋風「すいません、これからは平均的に頑張ります」

直人「だそうなので、見捨てないでください」

秋風「それでは！」

直人「次回、四十四話『平和と影と・・・・』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十四話「魔王」（前書き）

久しぶりの更新です。この調子で頑張ります！

では本編どうぞ♪

第四十四話「魔王」

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

男は普通の人間だった。男は世界の平和を守るために燃えていた。生まれ持って手にした炎の力を持って、人々を守ろうと心に決めた。だが、運命は残酷だった。世界を守るために入った組織には見放され、囮にされ、そして死に掛けた。そこから男は狂った。何もかもを焼き尽くし、人も、動物も、建物も、その全てを破壊をし続けた。そんな男の前に、一人のフードが現われた。

――共に、世界を変えないか？

破壊に飽きた男は、迷うことなく頷いた。それにフードは笑っていた。

――なら君に、新たな力を与えよう

それは炎の竜の紋章が入ったデバイスだった。手にした瞬間、男を力が飲み込み、力を与えた。

――君は今日から『炎帝』だ

こうして炎帝フィアマは誕生した。

フィアマｓｉｄｅ

「・・・・・・・・つまらねぇ」

ボスは身体を保つためのバイオ装置に入っている。そのせいで指揮は氷統がやっている。まったく退屈だ。

「やあ炎帝」

「嵐王・・・何のようだ」

そこにはすかしたガキ・・・嵐王がいた。

「ボスから命令だよ、ソウルエレメントの地点にある『闇』を集めてこいってさ」

「またそれか・・・おもしろくねぇ」

「それが、面白くなってきたよ。英雄が作った部隊が、ソウルエレメントを追っているらしい」

あの餓鬼がねぇ・・・だが

「俺はあんな雑魚に興味はねぇ」

「それが面白いことに、影斬とピエロが深手を負わされえたらしい」

「ピエロはともかく、影斬が?あいつも腑抜けたもんだ・・・」

「どうだろうね?彼は本気だったらしい・・・もしかしたら、何らかの力を得たかもしれないね」

なるほどな・・・それはいい

「どこへ？」

「俺の勝手だ」

こうして、俺はソウルエレメントの場所へと向かった。

直人ｓｉｄｅ

ソウルエレメントの反応が確認された場所へ、俺は移動している。今回はフォワードたちに休みを出していたので、俺自らの出撃となる。なのはたちはヴィヴィオたちの学校入学手続きやらなにやらで忙しい。そして今回一緒にいるのは・・・・

「直人と一緒にいけるの、嬉しいな・・・・」

「そうか？」

「うん・・・・ね、ガリュー」

そう、今日一緒にいるのはルーテシアだルーの言葉にガリューは頷く。ルーは俺に恩返しがしたいと、協力を申し出てきたのだ。

「でも本当によかったのか？メガーヌさんともっとゆっくり時間をとっても・・・・」

「ううん、いいの・・・・お母さんとはこれからずっといられるから」

ルーテシアは以前にないくらいの笑顔を俺に見せていた。

「そういえばルー、アクスレピオスはどう？」

「うん、クワットロがやったのは解除されているし、何より本来の力も出るようになったから」

アクスレピオスはキャロと同じブーストデバイスなので、フルバックとしての役割は長けている。

「さて、反応地点は・・・・・お？元遺跡みたいだな・・・・・あれか」

その先には古い遺跡があった。

「メシア、周囲に反応は？」

『特にはありませんが、この周囲はかなりの霊気が渦巻いています』

「霊気？魔力とは違うのか？」

『この周囲の遺跡はかなりの人が死んでいるらしいです。戦争なども旧暦には起きていますし・・・・』

詰まる話は・・・

「人々の怨念か？」

『人というのは《肉体》《精神》《魂》の三つから成り立っていますが、この魂の残滓が精神を残し、その地で周囲を彷徨うのです。これを一般的に地縛霊と呼びますが、この世界で厄介なのは《憑依

≫です』

憑依・・・・？

「それって、その魂が？」

「はい、動物などに定着します。人間には魂があるので乗っ取ることはされませんが・・・」

『ガアアアアアアアア！』

突然ライオンが現われる。しかも、魔力を纏った。

「つまり、こういうことか・・・・」

『そういうことです』

「肉ヲよこせェぇぇ！」

喋るライオン・・・・シュールだけど、面倒だな。

「ルー、下がってろ」

「うん」

「メシア！」

『オーライ、ロードカートリッジ！』

「蒼雷一閃！」

「がああああ!?」

ライオンはそのまま吹き飛んだ。さてと・・・

「先を急ごうか、ルー、マリカ」

「そうだね、直人」

「はい、主」

こうして、俺は反応がある遺跡の中へと歩いていった。

フィアマｓｉｄｅ

「来たか・・・・」

ガキを連れてるな・・・それにあれは虫か?まあいい。だが嵐王の言ったとおりだな。

「いい眼になったじゃねえか・・・・」

前にあったときの憎しみの目はないが、ああいう強い意志を持ってる奴と戦うのは楽しい・・・・

「潰しがいがあるじゃねーか・・・・」

さあ、早くきやがれ・・・・

「決着つけようじゃねーか“英雄”」

俺の気分は最高によかった。

直人ｓｉｄｅ

歩いて２０分、中はかなり複雑だった。迷路や罠もある。

「ったく、なんだよここ・・・・」

「すごい危ないね・・・」

「というか危ないですね」

それにしても建物の中にソウルエレメントがあるのは珍しいな。何故だ？

「ねえ直人・・・もしかして、ソウルエレメントを敵が持ってたりするのかな？」

「どうだろうな、敵に適合者がいたらそれはそれで困る」

だがアナザーは俺たちにソウルエレメントを「くれてやる」といっていた。何故だ？カオス・・・いや、魔王を蘇らせるにはソウルエレメントが必要なはずだ。なのに何故俺たちにソウルエレメントを渡す？あいつの余裕はなんだ？

「あいつに、何か後ろ盾があるのか？」

「主、でも管理局という可能性は低いですよね」

「ああ、奴は管理局に処分されそうになったからな」

だが管理局が後ろ盾ではないだろうしな・・・・いや、後ろ盾ではなく、何か特別な力があるのか？かつてのゼオンがそうだったように・・・・

「もしそうなら、やはり魔王の力は絶大か・・・・・ん？」

広間に出ると、そこには肖像画があった。そこに書かれているのは、髪を下ろした金髪の髪に、オッドアイの女性。

「これって・・・・」

「オリヴィエ様ですね・・・・」

そこにあるのはオリヴィエさん・・・・かつて聖王女と呼ばれた女性の姿だった。

「綺麗・・・・」

聖王教会でも、聖王女の肖像画は武装をしていた。だがそこに描かれているのは美しいドレス姿だった。

「・・・・・・・・・・」

「直人？」

「いや、なんでもない」

ヴィヴィオも将来はこんな風になるのだろうか？

「でも、こっちとこっちはなんだ？」

仮面をつけた女性と、威風堂々と立つ男の肖像。

「これは冥王と覇王の肖像ですね。３人は伝説とまで言われていましたから」

「じゃあ、あれは？」

そして別の場所に描かれたそれは俺の目を引く。紫色の髪に、銀と金のオッドアイの女性

『・・・・・・・・あれが、魔王です』

「あれが、魔王！？魔王・・・カオスって女だったのか！？」

メシアの言葉に、俺は驚いた。声とかから完璧男だっただろ！

『そうですね・・・カオスはアルカディで生まれましたが、それは《双子》でした』

「双子！？」

『男と女の双子として生まれた彼女は、ベルカの地へ。弟はアルカディアを統治するほどになりました。いつしか二人は、どちらも魔王と呼ばれるようになりました』

双子・・・じゃあ！

「今まで俺たちが倒してきたのは・・・！」

『弟のクローンなのでしょう。そしてアナザーが蘇らせようとしている者こそ、このベルカで呼ばれた魔王・・・・マリア』

マリア・・・聖女の名前なのに魔王と呼ばれたのか・・・・

『魔王というのは、確かにイメージが悪いですが、聖王は「聖域の王」覇王は「覇道の王」冥王は「冥界の王」そして魔王は「魔法の王」という意味でもあるそうです』

「魔法の、王・・・・・」

『古代ベルカの中で初めて砲撃魔法や、射撃魔法、治癒魔法など、後にミッド式と呼ばれる祖を生み出したもの・・・・それがマリア様だと言われているのです』

古代文献には俺も詳しくはない。やっぱり調べる必要があるな。だけど・・・

「カオス・レイは、弟なんだよな・・・なのになんでこっちに封印されたんだ?」

『カオスは当時、アルカディアで『王殺し』となり、世界を追放されました。以前話しましたが、その魔法具はカオスの意思が宿っており、マラキアもそれを使用しました。』

「ああ、それは知ってる」

『そして、カオスはベルカの血で、今度は姉を殺そうとしたのです』

「！」

実の姉を！？

『文献によれば、それを見た聖王と覇王、そして冥王は魔王と協力してカオスを沈めました。そして戦乱の世が増し、聖王はゆりかごで最後を遂げたといわれています。魔王の存在はあまり世に知られていませんが、世界の危機に唯一４人の王が共闘をしたということで、今も文献には残っているそうです。』

「なるほどな・・・・・・・・」

となると、この遺跡は・・・・・・

「この遺跡は『４人』の王を崇めるための神殿ってわけか・・・そりゃ他人が入っていいもんじゃねぇな」

道は奥に続いている。先を急ぐとしよう。

「よし、先を急ぐぞ」

「うん」

「了解です、我が主」

長い廊下にはいくつもの戦いの歴史を絵にしたものがいくつも描かれていた。聖王と覇王の戦い。ゆりかごの開発を見守るオリヴィエさん・・・・そして戦いに明け暮れる覇王。そんな絵が、いくつも飾られていた。そして、俺たちはその廊下を抜けるところまで来た。

『主、ソウル・エレメントの反応が強くなりました。それに・・・・・』

「ああ、わかってる」

人の気配、そしてさっきがある。闇の使徒だな。

メシアを構えて大広間に踏み込んだ。そこにいたのは俺の敵だった。

「来たかよ、英雄」

ここから、俺と奴の戦いが始まった。

第四十四話「魔王」（後書き）

直人「お久しぶりです」

秋風「はい、更新遅れまくりです。ごめんなさい」

直人「さあ、お前の罪を数えろ」

秋風「ごめんなさいって言ってるじゃん」

直人「っち」

秋風「この調子で早く更新できるように頑張ります」

直人「他の作品もよろしく！」

秋風「それ俺のセリフ！」

直人「次回、第四十五話『英雄ＶＳ炎帝』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十五話「英雄ＶＳ炎帝」（前書き）

やっと更新です。遅くなってすいません

ではどうぞ

第四十五話「英雄ＶＳ炎帝」

「フィアマ・・・・・・」

「なんだ、いい目になったじゃねぇか・・・・・」

俺はメシアを握る。

「それでこそ、だ・・・・英雄」

「お前は、管理局員だったそうだな・・・・・」

俺が言うと、フィアマが眉間に皺を寄せる。

「だからどうした」

「お前のかつての正義の心は、どこに消えた?」

「正義だぁ?そんなもん、この世界に存在するのか?」

「何?」

俺が言うと、フィアマはさらに険しい表情になった。

「管理局が正義だと?笑わせるな」

「・・・・・・・・・・」

「俺は裏切られた、管理局にな!いや、俺だけじゃねぇ!氷統も!

嵐王も！影斬も！その全てが、管理局に裏切られたり、実験台にされた奴らだ！」

管理局の闇・・・・か

「だから俺たちは管理局を許さねぇ！だから全てを燃やす！全てを消す！全てをぶっ壊してやる！」

「・・・・・なら管理局だけを潰せばいいだろ。何故関係のない人々まで巻き込む」

「偽りの平和でぬくぬく生きている奴らにも制裁を下す！闇の使徒が全てだ！」

「・・・・そうか」

俺は悟ってしまった。もう、こいつは怒りと憎しみに飲まれたのだと。

「なら、俺が止めてやる」

「やってみろ！英雄！」

こうして、俺とフィアマの戦いが始まった。

ルーテシアｓｉｄｅ

直人とフィアマが戦いを始めた。私には、今何もすることはできない。

「ガリュー、駄目」

ガリューが加勢しようとしているので、私は止める。

「これは、直人の戦い・・・・なのはさんに言われたから」

私は、ここに来る前、なのはさんと話をしていた。

「ねえルーテシア、今回闇の使徒が出てきて相手がフィアマだったら、直人君に戦わせて上げてくれないかな?」

「?」

「フィアマは、闇の使徒でも直人君の両親の仇なの・・・・」

「仇・・・」

「でも、直人君は憎しみでは戦わない。でも、決着は付けたいはず。だからフィアマとの戦いになったら必ず、手は出さないであげて」

「はい・・・・」

「・・・・・・・・・」

大丈夫、直人は強い、だからこそ信じる。なのはさんも信じているからそう言っていた。

「おおおおおっ!」

「らあああああっ！」

直人とフィアマの剣が交わり、火花が散る。それによって直人からは雷、フィアマからは炎が巻き起こる。私はその戦いを見守り続けた。

直人ｓｉｄｅ

別に許さないわけじゃない・・・理不尽を許したわけじゃない。だけどこいつと戦うと、なんでこんなにも悲しくなるんだろう。

「おーらぁぁぁ！」

「はあああああっ！」

一太刀一太刀から感じる、憎しみ・・・だがそれ以上に来るのは悲しみだ。フィアマは俺に叫びながら剣を振るう。それは悲しい攻撃だ。見える・・・・・

「はっ！」

一閃が入った。

「やるじゃねえか・・・・」

「悪いが、お前と話すつもりはない」

「はん、おもしれぇ・・・・ビーストデバイス！デバイスモード！」

フィアマの周囲で威嚇する竜が、炎に包まれる。それはフィアマのデバイスと合わさり、一本の炎を取り巻く太刀となった。

「なら、もう手加減はいらねえな」

「メシア、ブレイブスワロー・・・」

『『デバイス複合』』

「マリカ」

「はい主」

「「ユニゾン・イン」」

メシアスワローを手に取り、目を瞑る。

「リミットブレイク・・・・セカンドリミッター解除」

俺の背中に６枚の羽が広がる。

「決着を着ける・・・・・」

「いいだろう」

数秒の沈黙・・・・そして

「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

」

俺と奴の魔力がぶつかり合い、崩れた遺跡の天上から空へと飛んだ。

ルーテシアｓｉｄｅ

「きゃっ！」

魔力のすごい波動が流れる。なんて魔力・・・・

「え？あれって・・・・」

そこには、紫色に光る宝玉があった。

「あれがソウルエレメント？」

二人は戦ってるし、今なら・・・・・

――ニクシミハイツノヒモムゲンニアル

「え？」

突然周囲に声が聞こえた。そしてソウルエレメントが鈍い輝きを発した。

直人ｓｉｄｅ

空へ飛んでから、数分の時間が経過。ぶつかっては弾き、ぶつかっては弾く。

「メシアスワロー、後何分だ」

『あと15分・・・・といったところでしょうか』

少ないな・・・・・

「どうした英雄、こんなもんかよ」

「口数が減ったな・・・・お前も余裕がないと見える」

とりあえず俺もどこまでやれるかな・・・・

「マリカ、一気に行くぞ」

『了解です、主』

魔力を底上げして、それをメシアスワローに集中する。

「おおおおおおおお！」

「らあああああああああ！」

再び剣が交わり、激突する。その時だ。

――ドガアアアン！

「なんだ！？」

「！？」

俺とフィアマは手を止める。そこにいたのは、触手を幾重にも持った怪物の姿だった。

「あれは！？」

「はっは～ん・・・なるほどな、ありゃソウルエレメントの暴走だ」

「なんだと！？」

フィアマが笑っていた。

「ソウルエレメントってのは、光と闇が表裏いったいなんだよ。光を持つものがいれば浄化されるが、こんな人間の負が多い場所でほっとかれれば、闇が蓄積しちまうだろうな」

「っく！」

ソウルエレメントが危険というのはそういうことだったのか！

「きゃあああああ！？」

悲鳴が聞こえた。そこにいたのは・・・

「ルー！ガリュー！」

ルーとガリューが絡みとられていた。

「っく！」

俺はフィアマから離れ、一直線にルーの元へと向かった。

「待ちやがれ！逃げるのか！」

「誰が逃げるか！ルーを助ける！」

俺はフィアマに言って、翼を広げた。

フィアマｓｉｄｅ

「はん・・・あのお人よしめ」

つまらねえ・・・他人のためにいっちまいやがった。

――助けて！お兄ちゃん！

「っ！」

不意に、誰かの声が響いた。

「なんだ、今のは・・・」

――お兄ちゃんは、マリのヒーローだよ♪

「やめろ・・・・く、そ・・・」

――お兄ちゃん・・・バイバイ

「ぐっ・・・あああああああ！」

俺はただ叫んでいた。その流れ込んでくる悲しみ、そして怒りが、俺を支配していた。

「はあ・・・はあ・・・・・」

俺は直人が向かった怪物を見つめていた。

直人ｓｉｄｅ

「ルー！」

「直人！」

「待ってろ、今助ける！」

俺は触手を斬りながら前へと進んでいく。

「ルー！」

俺はルーテシアの手を掴もうとする。だが・・・

「キシャアアアアア！！」

触手が俺を襲う。

「ぐはっ！」

刃のような触手や、鉄のように硬い触手が俺を襲う。

『主！』

「わかってる！」

『クリスタルブレイド！』

7本のクリスタルブレイドが周囲の触手を斬り裂く。

「直人！後ろ！」

後ろから猛スピードで触手が突進してきた。

「が・・・は」

「直人！」

「だい、丈夫だ・・・・」

空中で体制を立て直し、メシアスワローを構える。

「おおおおおっ！」

再び触手に躍りかかる。この手のタイプは核を潰せばいい話だ。核はおそらくソウルエレメントだ。

「おおおおおおおおおっ！」

核に近づけば近づくほど、敵は強くなる。いったいどうすれば！

「あああああああああ！」

急にルーが叫ぶ。触手の締め付けが強くなっているのだ。

「ルー！」

俺は急いで飛ぶが、間に合わない！

「くっ！ルー！」

その瞬間だった。周囲の触手が燃え上がる。ルーテシアは空中に投げ出されるが、それを別の人物がルーテシアを抱えていた。

「お前・・・は」

炎の帝王であり、俺が憎むべき相手だった男

「フィアマ！？」

そこに立っていたのは、闇の使徒『炎帝』フィアマだった。

第四十五話「英雄ＶＳ炎帝」（後書き）

直人「・・・・・・・・・・・・・・・」

秋風「・・・・・・・・・・」

直人「何か言えや」

秋風「いた！」

直人「どんだけだ！ほぼ一カ月更新してないじゃねーか！」

秋風「ごめんなさい！」

直人「まったく・・・４つも５つも作るからだ」

秋風「いや、正直スランプだったからどう更新していいものやら」

直人「一度死んでみるか？」

秋風「ごめんなさい」

直人「ひぐらしか！怖いわ！」

秋風「えっと、とりあえず頑張って更新します」

直人「これからもよろしくな」

秋風「一応、今月にもう一回更新しようと思ってます」

直人「次回、第四十六話『炎帝』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十六話「炎帝」（前書き）

今回はこの小説で人気のフィアマの話です。ごらんください

第四十六話「炎帝」

ルーテシアを救ったのはガリューではなかった。灼熱の帝王『炎帝』フィアマだった。

「フィアマ・・・」

「勘違いするなよ」

「？」

「こいつのせいで、テメェと決着がつかねぇからだ」

言いながらルーテシアを俺に投げる。

「キシャアアアアア！」

「邪魔だ・・・」

『ロードカートリッジ』

「天竜・・・炎牙」

龍の牙の如き炎の剣が、触手を斬り裂く。

「強い・・・」

あいつ、こんな能力を残していたのか・・・・

フィアマｓｉｄｅ

何をしているんだろうな・・・俺は

「キシャアアア！」

「邪魔だって言ってんだろうがぁ！」

俺は言いながら触手を引き裂く。なんでだ・・・なんで俺は戦ってる。あいつの実力を確かめに来たのに・・・なんで・・・

――お兄ちゃん

「ぐっ！また、かよ・・・」

なんなんだよ・・・さっきから・・・！

――マリはお兄ちゃんが大好きだよ！

「だから、なんなんだよぉぉぉ！」

俺は無我夢中で目の前の触手を斬り続ける。そんなうちに、俺の頭の中に、記憶の断片が集まり、集約した。

――１０年前

「フィアマ・フレイル、今から君を航空隊隊長及び、一等空尉に任命する」

「ありがとうございます！」

俺は今日から一等空尉だ。これで念願の空へ先頭で飛べる。

「お兄ちゃん！」

赤い髪に赤い目の妹、マリがいた。

「マリ！またここに来たのか！」

「残念でした！今日はお兄ちゃんのお弁当を届けに来たんだよ！」

「母さん・・・・」

父はいないが、３人家族でなんとか暮らしている俺達は、この航空隊１１２部隊の所属だ。部隊長補佐は俺の母。なので妹のマリはよくここに遊びに来る。マリは言わばアイドルのような存在だ。

「そういえばお兄ちゃん！そのバッジ！」

「ああ、俺も一等空尉だ！」

「やったね！」

ハイタッチして、二人で笑顔になる。すると、部下がやってきた。

「フィアマさん！」

「ん？どうした」

「もうすぐ出動です。今日からお願いしますよ、『フィアマ隊長』」

「はは、お前ら耳早いな」

「ええ、そりゃもちろん」

なんだかんだ言ってこの部隊は仲がいいやつらばかりだ。

「さあ、仕事に行ってくるから、マリは待ってろ」

「はーい！」

こうしてマリがその場からさる。

「さて、任務は？」

「ええ、ここから少し離れた遺跡に、テロリストが潜伏しているとか」

「ようし、いくぜお前ら！」

「「「「はい！」」」」

こうして、俺たちは出撃した。

「あー、あー、あっけなかったな」

テロリストは完ぺきに俺たちを甘く見ていたようで、簡単に倒せた。

さて、帰ってマリや母さんと飯を食うか・・・

「ひ、ひっひひ・・・ひひひひひ」

「なんだ?」

「馬鹿だなお前ら、俺たちは囮さ・・・」

「何!?」

「この周囲を占拠するのにお前らの部隊を見逃すはずがないだろ・・・ひひ、ひひひひ!」

まさか・・・と、俺の脳裏に嫌なことが走る。

「俺は戻る。後を頼む!」

「はっ!」

俺は急いで空を飛び、すぐに隊舎へと戻った。すると、途中赤く燃え上がる光を見た。

「隊舎が!」

そう、隊舎が燃えていた。

「母さん!マリっ!」

俺は加速して、そこへ降り立つ。何人もの局員が倒れていた。俺はすぐに別に航空隊と連絡をとった。

「こちら航空１１２部隊！襲撃を受けている！救援を！」

『増援は出せない。現状の戦力で対処しろ』

「な！？この現状を見てそんな！」

『君たちのような部隊に、増援は出せん』

そう言って、通信が切られた。馬鹿な・・・そんな！

「っく！マリ！マリ！」

俺は急いで隊舎の中へと入り込んだ。

「おい！しっかりしろ！」

ところどころで局員が倒れ、こと切れている。すると、目の前にスキンヘッドの男がいた。

「お前が！お前がこれを！」

「ああ、なんだ？この部隊のやつか？哀れだな・・・」

「なん、だと？」

「お前らは見捨てられたんだよ・・・俺達との取引によってな」

男の言っていることがわからない。取引？

「俺たちは数十人の人質を持っていた・・・そして、取引をした。一部隊の壊滅・・・それにお前達は選ばれたのさ！」

男が言う・・・馬鹿な！管理局が、そんな・・・

「お、にいちゃ・・・」

「マリ！」

マリがボロボロで倒れていた。それを見た瞬間、俺の何かが燃え上がった。

「あ、あああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

「なっ！？」

全身が燃えるように熱い。俺はデバイスをそのまま向け、斬りかかる。

「なんだこいつ！こんな奴、聞いてねぇ！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「やめろ・・・待て！待て！」

男の声など、最早聞く価値もない。俺はそのまま、男を殺傷設定で斬った。

「ぎゃあああああああああああああ！！」

男の断末魔が聞こえ、俺の顔に血が飛び散る。だが、そんなことは関係ない。

「マリ！マリ！」

「お、にい・・ちゃ・・・」

マリは血まみれだった。

「待ってろ！今助けてやる！」

「もう、だめなんだ・・・だめなの」

「駄目だ、すぐに助けて、もう、どこか別の地で・・・」

俺は必死に回復魔法をかけ続ける。だがマリの体の血は止まらない。

「ごめんね、お兄ちゃん・・・」

「寝るなマリ！マリ！」

「お兄ちゃん、あのね・・・？世界で一番、大好きだよ・・・」

マリは少し微笑み、そして目を閉じた。すると、別の部隊の管理局員たちが来ていた。上層部の連中だ。

「・・・局員か・・・悪いが、死んでもらうぞ。証拠隠滅のために

な」

「・・・れ」

「・・・？」

「黙れ、ゴミども・・・」

俺の灼熱の憎みにが、体中にしみわたる。破壊したい、消したい、燃やしたい・・・そんな感情が俺の中で燃え上がる。

「・・・撃て」

男の声によって、武装した局員たちがデバイスを向けた。

「その汚らわしいものを・・・マリに向けるなぁ！」

俺のデバイスから黒い炎が巻き起こる。

「ぎゃあああああああああああ！」

男たちがその熱さに悶える。

「死ね・・・ゴミどもぉぉぉ！」

そのまま火炎放射機のようにそれを使い続けた。そして、俺はその全てを燃やしつくした。

「ひゃはははははははははははは！！！！！！！！」

それから俺の快楽は、その破壊によって養われることとなった。

――現代

「っぐ・・・」

なんだ、今のビジョンは・・・

「フィアマ！」

英雄の奴、何を叫んで・・・

「がっ・・・」

後ろから触手に叩きつけられる。くそ、このゴミども！

「燃え尽きろ！」

再び炎を燃やすが、触手はそれに構わず俺に襲いかかる。っくそ！

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ』

「真・蒼雷一閃！」

俺の前に、一陣の風が吹く。馬鹿な・・・

「てめぇ・・・何のつもりだ！」

英雄、井上直人がそこにいた。

「・・・借りを返しただけだ」

「なっ！」

「それより早く決着をつけるぞ・・・そのためにこいつを潰す」

「・・・フン、せいぜい後ろに気をつけろ」

俺は再び、剣を構えて斬りかかる。

「おらあああああ！」

「はあああああああああっ！」

もう二度と人と戦うことなんてないと思った。

「・・・おらぁ！」

全てが狂った俺は、人を殺し続けて・・・俺は・・・

「おい、フィアマ」

「なんだ、英雄」

「俺はあんたが許せない・・・本当なら、うちの墓の前まで土下座させたい」

「だったらなんだ」

俺が言うと、英雄は触手を叩き斬る。

「だが、あんたが罪を償うというのなら・・・・・・俺は」

英雄は一拍置いて、先を見る。

「あんたを、許そうと思う」

「へっ！頭沸いたか！両親の仇を許すだと！？」

「子供ができて、愛すべき妻ができて・・・俺は、幸せになった・・・でも」

「でもなんだ・・・」

「俺一人だけが、幸せじゃいけないと思った。世界中の不幸な奴らを幸せにしたい。お前も、闇の使徒も・・・そして、アナザーも、みんな・・・」

こいつはマジでおかしいな。

「そんな夢物語、本気かよ」

「そのつもりだ」

「この世界に幸せなんてねぇよ」

そう切り捨てて、俺はそのまま触手を斬る。

「ないなら作ればいいさ・・・俺達で、な」

「ああん？」

「あんたの過去を知った。データだが、管理局を恨む理由も知ってる。だが、あんたの妹は、それを望んだのかよ」

何かが刺さった。とても心が痛くなる。だが、俺はもう何もない・・・ただ、壊すだけだった、はずなのに・・・

「フィアマ！後ろだ！」

「ガリュー！」

その瞬間、虫が俺を助けやがった。

「さっきのお礼だよ」

笑顔で言うガキの笑顔が、あいつと重なった。

「っ・・・」

「これでラストだ・・・いくぞ！」

「ちぃ！英雄、今回ばかりはやってやるよ！」

「「おおおおおおおおおおおおっ！」」

二人の斬撃が核を撃ち貫いた。そして光が満ちて、ソウルエレメントが転がっていた。

「・・・・・・・・・・・・やった」

「ふんっ・・・興ざめだ・・・帰る」

「待てよフィアマ！」

英雄は俺の腕を握る。うっとうしい

「離せよ、英雄」

「英雄じゃない。俺は直人だ、フィアマ」

っち！

「いいか！？てめえはどこまでお人よしなんだ！俺は敵だ！仇だ！なのになんで！」

「・・・同じ、今を生きる者だからだ」

「何！？」

「お人よしでもいい・・・俺は、人、戦闘機人、人造魔導素体・・・いろんな風に苦しんでいる奴を見てきた。そのつらい顔をなくしてやりたい。みんなを幸せにしたいんだ」

「だからいい加減にしろ！テメェの甘ったれた考えで・・・・・・！？どけっ！」

その時だった。光線が放たれるのを見た。そしてとっさだった。俺は直人を突き飛ばしていた。そして・・・

「ぐっ・・・が!?」

俺の体に、その光線が撃ち貫かれていた。

第四十六話「炎帝」（後書き）

秋風「今回はフィアマの話でした」

直人「ずいぶんなあれだな」

秋風「この話お前は出番なかったからね」

直人「うっせ」

ルーテシア「私、もっと出番ない」

秋風「ルーは大丈夫、次回活躍するから」

ルーテシア「本当？」

秋風「ああ、こいつよりね」

直人「死ね！このクソ小説家―！」

秋風「ぎゃー！」

直人「次回、第四十七話『命への想い』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十七話「命への想い」（前書き）

はい、ということで更新です。今回はみなさんに質問があるのでよろしくお願いします。

ではあとがきで

第四十七話「命への想い」

突然だった。俺は突然フィアマに押し飛ばされた。その瞬間、フィアマの体を光線が貫いた。

「フィアマ！」

「がっ・・・はっ・・・」

フィアマが崩れる。俺とルーはすぐに駆け寄る

「おい！しっかりしろ！」

「がっ・・・・・・」

血が止まらない。この状態はまずい・・・！

「あーあ、残念・・・外れちゃった」

「お前は・・・！」

そこにいるのは、鳥を従えた少年だった。

「嵐王！」

「やあ、英雄さん・・・久しぶりだね」

「お前が、やったのか・・・」

「うん。本当は君を狙ったんだけどねぇ・・・・・・そこにねっ転がってる馬鹿が悪いんだよ」

馬鹿って・・・

「お前、仲間じゃねえのか！」

「仲間？違うね・・・ただ目的が同じなだけで、仲間だなんて思ったことないよ」

「お前・・・っ！」

俺はメシアを構える。こいつ、許せねぇ！

「ルー！フィアマを頼んだ！」

「う、うん！」

「はああっ！」

メシアで嵐王・・・ノワールに斬りかかる。だが、ノワールはそれを止める。

「やっぱりさっきの戦闘のせいでパワーダウンしてるよ？」

「ぐっ！」

「やっぱり弱いなぁ」

デスゲイル・・・大鎌が俺のほうへ向かう。

「ちぃっ！」

『防御魔法陣展開』

防御し、距離を取った。くっ・・・・セカンドリミッターの反動が、でかい・・・

「どうしたの？やっぱりこんなものなんだ」

言われた瞬間、俺が振ったメシアがノワールの頬を掠める。

「何か言ったか？」

「・・・・・！」

ノワールが醜く顔をゆがめる。

「上等だぁ！」

ノワールがデスゲイズを槍にして突き出す。俺はそれを弾き飛ばすと、今度は蹴りをかました。

「メシア！」

『はい、主』

「俺があいうやつを嫌いだって知ってるな！」

『ええ、もう長く貴方の相棒ですから』

「なら、俺の言いたいこともわかるだろ？」

俺が言うと、メシアはわかっているかのように点滅する」

『ええ、もちろん・・・』

『私を忘れないでくれますか？マイマスター』

『主、私も忘れたでしょ？』

すると、ブレイブスワローとマリカも声を上げる。

「そうだったな・・・じゃあみんなでいうか」

そして、俺たちは声を揃えて言い放った。

「『『『ああいう下衆は許せない！』』』」

声が揃い、再びノワールに攻撃する。

「おらぁ！」

さっきの丁寧言葉とは裏腹に、荒々しい声と気迫で俺に迫る。

「はあっ！」

槍と剣・・・その二つがぶつかり合い、火花が飛び散る。何度も何度も、その攻撃を繰り返す。

「ぐっ！」

「らあああっ！」

くそっ・・・やっぱり押される！どうにか、どうにかしないと・・・！

ルーテシアｓｉｄｅ

「・・・っく」

私はアクスレピオスの魔力補助を使う。キャロとはまた違うけど、応用すればこんなことをできる。血が、止まらない・・・

「お・・・い・・・」

「！」

「お、前・・・な・・・にして」

「喋らないで・・・血が止まらないから」

私は必死に魔力を結集してその血を止めていく。

「む、だ・・・だ」

「え？」

「これは・・・あの、ガキの・・・『呪い』だ・・・」

「呪い？」

「・・・・・この、地をしｔ・・・るだろ」

「・・・うん」

メシアが言っていた。人々の憎しみと怨念・・・その負の感情が漂う死の森・・・

「あのガキは・・・デスゲイルを使って、人に負の感情を撃ちつけ、侵食させる」

「侵食・・・」

フィアマは短く笑って、空を仰ぎ見る。その淀んだ、紫色の空を・・・

「俺はもう、助からない・・・」

直人ｓｉｄｅ

「っく！」

長期戦は不利だ！どうすれば、俺はあいつを倒せる！？

『マスター』

「なんだ、ブレイブスワロー」

『ひとつ賭けをしてみませんか？』

「賭け、だと？」

こんな時に何を言ってんだこいつ。

『今までやったことのない方法です』

「・・・具体的に聞かせろ」

『まず・・・・・・』

ブレイブスワローが作戦を話す。なるほどな・・・

「やってみる価値はあるな」

『でしょう？』

「何をごちゃごちゃと・・・・・・言っているぅ！」

再びノワールが襲いかかる。よし、今だ！

「メシア！」

『了解です、我が主！』

槍を受け止め、魔力を込める。

「はっ！何かと思えば魔力による耐久増強か！くだらねぇ！」

「・・・・・どうかな？」

俺は思わずにやりと笑った。

『遅延起動開始・・・デバイスモード』

ブレイブスワローが俺の手に宿った。

「何！？」

『ロードカートリッジ』

「蒼燕雷動！」

蒼い雷がまるで燕のように低い位置から一気に上昇した。

「ぐっ・・・あ・・・」

「おお」

「なんだ、今のは・・・」

ノワールが信じられないようなものを見たかのように驚いていた。

「ノワールのカートリッジをロードして見たのさ」

思えば、今までこいつを主軸にして戦ったことなかったな。

『いつも私が主軸でしたからね』

・・・そうか

「メシア、一度引っ込め」

『は？』

「ブレイブスワロー、行くぞ」

『オーライ、マスター』

ブレイブスワローの白くも、銀色に光るその刀身が輝いた。

「行くぜ」

『オーライ』

「はい、主」

俺は再び、白銀の羽で飛翔し、ノワールへと向かって行く。

「おおおおっ！」

「なにぃ！？」

俺はいつもとは違うスピードと風に乗り、攻撃する。

「らあっ！」

「ぐああっ！」

「・・・・・・！」

いつもより、疾い！でもこれは・・・・・・・・

「なんだ、こんなものか・・・」

ノワールが立ち上がる。かなり深く斬ったはずなのに・・・・・・・・

『マスター』

「ん？」

『戦法を変えましょう』

「戦法を？」

戦法を変えるって言ったって・・・

『一撃で駄目なら、相手が倒れるまでやればいいでしょう？』

そうか・・・俺の今の武器は『疾さ』だ！

「行くぞ、ブレイブスワロー」

『オーライ、タイムブレイク』

俺の体が超高速で加速する。

「何！？」

「はあああああああああああああああああああっ！」

風が音を上げる。俺は何重にもノワールに向けて剣を振るった。

「うおおおおおおおっ！？」

「はあああああああああああああああ！」

これで、決める！

「メシアっ！」

『ロードカートリッジ』

距離を取り、剣を低く構えた。

「雷燕疾翔！」

「がっ・・・」

その雷の如きスピードの剣を下から低いアッパーのようにして振り上げて通り過ぎたことにより、ノワールが崩れた。

「・・・・・勝った」

剣を上に掲げ、俺は静かにそう呟いた。

ルーテシアｓｉｄｅ

直人が勝った・・・でも、フィアマの血はどんどん広がっていく。

「っく！うぅ・・・！」

「もういい・・・やめろ」

「駄目、絶対助ける！」

「何？」

私は無我夢中で魔力を押しこんでいく。

「私は・・・私は少し前、大切な人を助けられなかった！」

ゼストの顔が浮かぶ。

「だから、もう死なせない！私の前で誰かを！どんな理由であれ！絶対！」

お願い！誰か！なんでもいい！この人を救う力を頂戴！私は強く願う。

「・・・・・・・・」

ガリューが突然私に何かを差し出した。

「これって・・・」

それはさっきの暴走の起因。でも、今はこれに頼るしかない。

「ソウルエレメント・・・・・・お願い、私の声に答えて・・・・・・っ！」

ただ、今目の前にいる人を救いたい。もう二度と人に死んでほしくない。ただそれだけ。だから、お願い・・・っ！

「・・・・・・！」

すると、先ほどとは違った光がほとばしる。そして私の手に収まっていたアクスレピオスが輝きを放ち、人の形を形成した。それは一人の男の人・・・私は思わずその人の名前を呼んだ。

「ゼ、ゼス・・・ト？」

「・・・いいえ、私です」

「アクスレピオス？」

そういえば、キャロやエリオのデバイスも人型になったって・・・

「急ぎましょう・・・貴方の力と、私の力で呪いを打ち砕きます。幸い『彼』が倒したので、呪いは薄れているでしょう」

ゼストの顔と体で、アクスレピオスが喋る。なんか変な感じだけど、今は関係ない。

「うん・・・いくよ」

「セットアップ、スタンバイレディ」

私のバリアジャケットが変わる。

『集中して、呪いを解明して一点に力を』

「うん・・・」

言われた通りに力を流しこむ。お願い、これでなんとか・・・！

「ぐっ・・・あ・・・」

『もっと集中して！』

「っ・・・！」

だんだんと薄れていく呪いの傷。そして、その傷は光と共に薄れて消えた。

「や、やった・・・」

「・・・・・・」

フィアマが薄く眼を開けた。

「大丈夫？」

「マリ・・・」

「え？」

言って、フィアマはまた気絶した。今度は脈も正常・・・うん、大

丈夫みたい。

「ルー！大丈夫か！」

直人が戻ってきた。

「うんっ！」

私は笑顔で、直人に振り向いた。

直人ｓｉｄｅ

「よかった・・・」

今フィアマは眠っている。このまま『光の剣』で保護しよう。多分管理局に連れて行ったら殺されるだろう。

「くっくっく・・・あっはっは！」

「ノワール！」

ノワールが起き上がり、笑っていた。もはや子供らしさなどない。ただひたすら笑っている。その醜い表情で

「お前らにやられるなんてな！あっはっは！あっはっは！」

「何がおかしい」

「今日は引き上げてやる！でも覚えておけ！僕はお前らを許さない

！」

ノワールが転移魔法を発動する。しまった・・・っ！

「待て！」

「じゃあな！あっはっは！」

こうして、ノワールは消えた。

「・・・仕方がない。ルー、帰ろうか」

「うん、直人」

俺はフィアマの肩を担ぎ、ルーと手をつなぎ、その遺跡を後にした。

４人の王を祀る、その遺跡を背に・・・・・・

第四十七話「命への想い」（後書き）

秋風「はい、ということで今回はブレイブスワローが大活躍でした」

直人「というか、今まで出なかったな」

秋風「ああ、メシアが主軸になってたからな。出たのは一部のアリサのデートの時だけ」

直人「にしても、遅延魔法て・・・」

秋風「じっさいありそうじゃね？プログラムを時間差で起動させるの」

直人「まあな」

秋風「さてさて、とりあえず次回もお楽しみに！」

直人「引き続きここへのゲストを大募集だぞ」

秋風「そして新しい質問です」

――心から落ち着く曲は？また、小説を静かな雰囲気で書くための曲は？

秋風「最近はほら、色々と問題が私にあったので」

直人「たくさんの応募待ってます」

秋風「でわｗ」

直人「次回、第四十八話『休息の時』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十八話「戦いの後」（前書き）

とりあえず今回はなのはとフェイトがラブラブです。はやてだけ次回かもっとあとかも。それでは本編どうぞw

第四十八話「戦いの後」

戦いから数時間後。俺とルーはフィアマを連れて帰還した。数時間と言っても、戦ったのでもはや期間は朝の5時だった。フィアマは一命を取り留めたが、未だに眠っている。それというのも、やはりルーの力でも完全に治せなかったらしい。

「ただいま」

俺が帰ると、涙目のなのは、フェイト、はやてに抱きつかれた。どうやら先に帰ったマリカが状況報告をしたらしいが、それが色々と問題だった。

『主がフィアマと決着を着けた』

これが原因だったらしい。俺の心の世界での戦いを思い出したのだろう。とりあえずみんなが泣くのを終えて、フィアマの容体を見た。とりあえず安定はしている。数日のうちに目を覚ますだろう。

「直人君・・・」

「大丈夫だよなのは。俺はもう、大丈夫だ」

言いながらなのはの頭をなでる。みんなにも、相当心配かけた・・・

「うん・・・」

言いながらなのはが俺にすり寄る。一応言うと、今はなのはと二人だ。怪我の容体を見てから、フェイトとはやてには仕事に言っても

らった。なのはは断固として残ると言い出したので、今は二人きりでフィアマを見る。

「あなたと・・・フィアマの決着はついたんだよね？」

「・・・それは、わからない」

結局のところどうなのだろうか。俺はフィアマを許した。だがフィアマは？こいつ自身の中で、俺の勝手な恨みをどう思っていたのだろうか。こいつの罪は消えない・・・でも、世界に裏切られたこいつを、俺はいつしか憎めなくなっていた。

「・・・・・・」

「直人君」

手を引かれ、部屋を出る。すぐ近くの部屋が俺たちの部屋になる。

「どうした、なのは？」

「直人君、私・・・・・・何を信じればいいの？」

「なのは・・・」

「私はね？ジュエルシードをきっかけに管理局を信じて、戦うことを決めたの。それはフェイトちゃんとはやてちゃんも同じ・・・闇の書事件の後、私達は本格的に管理局で自分にできることを目指したんだ・・・・・・」

なのはの声が、若干震えている。俺はなのはの手を一層強く握る。

「なのは・・・」

「でも、その管理局が悪いことをしてて！私達は何にも知らなくて！何もできなくて！私もう！何を信じたらいいかわからないよっ！」

「なのは！」

俺は落ちつけと言う意味で、俺はなのはの唇を奪った。

「ん！？んぅ・・・ん！」

「ん・・・ぷは・・・なのは、落ちつけ・・・」

「で、でも・・・」

もはや完全に泣いているなのはを、俺は一層強く抱きしめる。

「・・・確かに、この世界を支える管理局は、大きな闇を持っている。それがどんな形であるのか、そしてそれによってどこかで苦しんでいる人がいるのかもしれない。でも、なのは一人がそれに苦しむべきじゃない・・・」

「直人君・・・」

「大丈夫、お前も、フェイトも、はやても・・・・・俺を信じればいい」

「直人、君・・・」

信じる者がなければ、その支えになる。俺は今そのためにいる。

「大丈夫、俺たちには家族がある・・・」

「家族・・・」

「家族を信じろ、なのは・・・」

「ふぇ・・・ふえぇぇぇぇん！」

とうとうなのはが大声で泣き始めた。大粒の涙を流し、その心を縛っていた鎖がバラバラと弾け飛んだのを感じた。管理局が正義だと信じ、戦い続けた一人の少女。大切な人たちのために、世界のために、自分を押し殺してきたなのは・・・そんな正義に裏切られた心を、俺はただ支えるしかなかった。すると、なのはがいきなり唇を重ねてベッドに横になる。

「ひっぐ、えっぐ・・・」

「なのは・・・？」

俺が離れようとすると、なのはは俺の服を引っ張って引き寄せる。

「お、おい・・・」

「一緒に、いて？」

「なのは・・・」

「今は、一緒に・・・」

なのはが泣きつき、強い眼差しで俺を見つめていた。

「大丈夫だよなのは・・・俺は、お前のそばにいる」

ベッドに横になり、なのはを強く抱きしめた。外に出たのは、訓練が終わった朝の9時過ぎだった。その間何をしていたのかはご想像にお任せしよう。

とりあえず朝食を取りに食堂へ。なのははシャワーを浴びてから行くらしい。席に座ると、ヴィヴィオがトテトテと走ってきた。

「パパっ！」

「ヴィヴィオ・・・どうした？」

「パパ・・・」

ヴィヴィオも涙目だった。どうやら井上家は涙の感染率が半端ないらしい。あとから追ってきたシエル、ルミノ、セレスにも涙目で抱きつかれた。

「父上・・・」

「パパ・・・」

「父君・・・」

「・・・お前らにも心配かけたな。もう大丈夫だ」

そう言って４人を降ろし、順番に頭をなでた。

「ほら、ご飯にしよう。いっぱい食べないと元気が出ないだろ？」

「うんっ！」

こうしてみんなが食事を始める。すると、シャワーを終えたなのはと、仕事を終えたフェイトとはやても来る。

「直人、もう大丈夫なの？」

「ああ・・・一応な」

とりあえずなのははよくなったけど、フェイトとはやてはこの調子か・・・この部隊の部隊長は俺なんだ・・・しっかりしないとな。

「とりあえず、俺はもう大丈夫だ。お前らがそんなんでどうするよ」

「う、うん・・・」

「せやね・・・」

とりあえず静かに朝食をいただくことにした。

朝食を終え、いつも通りの書類仕事。ヴィヴィオは静かにお絵かきをしている。そういえば・・・

「なあ、なのは？」

「なあに？あなた」

「ヴィヴィオの誕生日っていつなんだ？」

「どうして？」

「いや、推定年齢は5歳だったけど、もう7月だし・・・6歳にでもなるだろ。となると・・・」

「そっか、忘れてたけど・・・学校だね」

そう、この世界にも学校はある。初等部から高等部まで、幅広く勉強ができる。

「そうだね、そろそろヴィヴィオだけじゃなくて、シエル達にも学校に行ってもらわないと」

「できればエリオとキャロもな・・・」

「あの二人はもう高校の課程まで訓練校で終わらせてるで？」

まったく、あの二人は・・・フェイトのために相当無理したんだな。

「なるほど・・・まあ、シエルたちは行くとして、エリオとキャロは考えてみないとな」

一応、健全な子供なんだし・・・

「ヴィヴィオ？」

「なあにパパ」

「ヴィヴィオは学校に行きたくないか？」

「う？学校？」

どうやら学校についてよく知らないらしい。

「そう、学校。たくさんお勉強して、たくさん遊んでくる場所だよ」

「ママとパパも一緒？」

そう来たか・・・

「うーん、一緒にはなれないけど、ヴィヴィオみたいな歳の子たちがたくさんいるんだよ？」

「ホント！？」

と、ヴィヴィオがフェイトの言葉に目をキラキラとさせる。この後シエルたちにも学校の説明をするのに2時間かかり、ルミノにいたっては3時間かかった。

次の日、俺はフェイトと共にヴィヴィオ、シエル、ルミノ、セレスを連れてザンクト・ヒルデ魔法学院を訪れた。それというのも、フェイトの話ではここは聖王協会も系列で持っているらしく、シスターシャッハがいるとか。

「ん？うわさをすれば・・・」

昇降口らしき場所で掃除をするシスターを見つけた。

「シスターシャッハ」

「あ・・・これはこれは・・・直人様にフェイト様」

「お久しぶりです」

「ええ、まったく。今日はどうされました？」

「ヴィヴィオやシエルたちをここに通わせようと思いまして。編入の手続きというのはできますか？」

「ええもちろん。この子たちの素質なら十分に」

シスターシャッハが笑顔で中に案内してくれた。中に入り、説明を聞く俺達。４人は学校に興味津々だ。

「では、一応３人には編入の試験を受けてもらって・・・ヴィヴィオには簡単な質問などを・・・」

一応入れてくれるのは確定なのだが、色々と手続きを楽にするための形式らしい。

「わかりました、じゃあお願いしますね」

「ええ、では４人とも、今度お会いしましょうね」

「はーい！」

「はい、修道女様」

「わかった！」

「わかったぞシスター」

と、答える４人・・・まあ、大丈夫だろう。結果的にヴィヴィオは一年生で、シエルたちは四年生になることとなった。シエルがいるので、先に光の剣の隊舎に戻し、俺はフェイトと町の中を歩く。現在買い物の真っ最中だ。

「あ、直人・・・それは？」

「んー・・・まあ悪くはないけど」

現在部屋に置くインテリアやら何やらを見ている。

「あ、これ綺麗じゃない？」

そこにあるのはいくつも光るビー玉をガラスのバケットの様なものに入れてある置物。中には蒼、桃、金、白のビー玉が輝いている。うん、綺麗じゃないか？

「これにしようか」

「うん」

こうしてこの後も色々と回り、すっかり遅くなっていた。

「あ、もうダイヤがない・・・」

「まじかよ・・・」

今日は休日ダイヤルだからか、エアラインの時間は終電を迎えていた。

「飛べれば楽なんだが・・・」

「こんなことで申請して飛ぶのも恥ずかしいよね」

まあ、仕方がないか・・・

「ねえ、直人？」

「ん？」

「あれ・・・」

フェイトの指差す先には、ホテルがあった。普通に泊まるホテルならまだしも・・・

「なんで、あれ？」

「この辺だったら、一番マシ・・・と思って」

顔を真っ赤にするフェイト。

「別にいいけど、なんでまた？」

「だ、だって・・・・・二人きりになるの、全然そんな機会がないし・・・」

「はぁ・・・わかったよ」

こうしてホテルに泊まり、朝帰りで帰宅することとなった俺とフェイトは、このあとなのはとはやてにこってり絞られた。ホテルで何をしたか・・・・・これもご想像にお任せしよう。

第四十八話「戦いの後」（後書き）

秋風「お久しぶりです」

直人「・・・とりあえず、ぶっとばす」

秋風「しょうがないじゃん！もう流れ的に子供作ってもいい年頃じゃん！」

直人「そうだが、ストレートすぎだろ」

秋風「他の先生はもっと過激だろうが！こっちはまだソフトだよ！」

直人「・・・」

秋風「では、また」

直人「次回、第四十九話『鮮烈の日常』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第四十九話「鮮烈な日常」（前書き）

久しぶりにヴィヴィオの話ですｖｉｖｉｄにつながる話を追加しておきました。

第四十九話「鮮烈な日常」

今日はヴィヴィオ、シエル、ルミノ、セレスの編入日だ。

「ヴィヴィオ、忘れ物はないか？」

「うん！」

「シエル、持ち物確認は？」

「はい母上、万全です」

「ルミノ、ティッシュ忘れてる」

「あ、ママごめん」

「セレス？言葉使いは気をつけなあかんで？」

「うむ、母君・・・同い年の輩とは対等の立場として授業を受けることにしよう」

こんな感じである。なのはたちは自分の分身ともいえるシエルたちにより一層気を使う。

「よし、行こうか」

今日は休みを取り、ヴィヴィオを学校にまで連れていくことにした。学園内は多くの学生たちが学ぶために訪れている、小、中、高等部は統一されているのだと言う。優秀な魔導士の子供や、将来を期待

された子供が通うこの学園で、ヴィヴィオがどう頑張っていくのか・・・ちょっと不安。ヴィヴィオが目の色の違いでいじめられたりしないか心配だ。

「・・・ヴィヴィオ」

「う？」

「ヴィヴィオにまだデバイスを持たせることはできないけど、その代わりにマリカがついてくれるからな」

「ヴィヴィオ、私がついてますからね」

「うん！マリカお姉ちゃん！」

とりあえず、マリカがいればヴィヴィオが何かトラブルに巻き込まれることはないだろう。

「じゃあ頑張っておいで。何かあったらすぐシエルたちのところへ行くんだぞ」

「うん！」

「父上、行ってまいります」

「パパ！行ってきまーす！」

「父君、行ってくる」

「おう、行って来い」

こうして４人を送り出した。

ヴィヴィオｓｉｄｅ

お姉ちゃんたちと別れて、ヴィヴィオはマリカお姉ちゃんとシスターに連れられて教室に入りました。

「今日は皆さんに転入生を紹介します」

「い、井上ヴィヴィオです！よ、よ、よろしくお願いします！」

パパに言われた通りに挨拶をした。すごい緊張してて・・・うまく言えないよぉ

『よろしくー！』

すると、教室のみんなが返してくれる。えへへ、ちょっと嬉しいな。

「じゃあそうね・・・ヴィヴィオさんのコロナさんの隣にしましょうか」

私は言われるままにその席に座ると、隣の女の子が笑顔で迎えてくれた。

「コロナ・ティミルです。よろしくヴィヴィオさん」

「あ、うん！井上ヴィヴィオです！」

こうして私はホームルームを終えた。するとクラスの人達が一斉に私のところへ来た。

「ヴィヴィオちゃんどこからきたのー？」

「ヴィヴィオちゃんデバイスは？」

「ヴィヴィオちゃんどうして目の色が左右違うの？」

「ヴィヴィオちゃんのファミリーネームって、あの英雄と同じだよね」

あうう～・・・そんないっぺんに聞かれても困るよ～！

「ほらみんな、ヴィヴィオちゃん困ってるよ」

コロナちゃんがみんなの前に出て言ってくれる。助かった・・・

「順番に答えて上げてはどうですか？ヴィヴィオ」

「うん、お姉ちゃん」

いきなり出て来たマリカお姉ちゃんに、みんなが驚いている。そういえば『ゆにぞんでばいす』ってはやてママのリインとアインさんだけなんだよね。きちょーって言ってたっけ。

「えとね、ヴィヴィオは地球からじゃなくて、ここの生まれだよ。デバイスは持ってないけど、パパのゆにぞんでばいすのマリカおねーちゃんがサポートしてくれるの」

「マリカです」

そう言ってマリカおねーちゃんが頭を下げる。

「でね、えっと・・・目の色は虹彩異色っていうんだっけ？」

「そうですね、ヴィヴィオの目は少しだけ特別で・・・魔力の宿りなどが違います」

みんながマリカおねーちゃんの言葉に驚いていた。やっぱりヴィヴィオってみんなと違うのかな？

「あと、ヴィヴィオのファミリーネームですが・・・」

「そうそう、英雄と同じだよね～」

「その英雄の娘です」

マリカおねーちゃんの言葉に教室が静かになっちゃった。

「あの・・・みんな？」

『えええ！？』

クラスのみんなが一斉に声を上げた。み、耳がキーンってする・・・

「あの英雄の娘なの！？」

「あの、井上直人一等空佐の！？」

パ、パパってそんなに有名なんだ・・・

「う、うん・・・マリカおねーちゃんはパパのデバイスだし・・・」

な、なんだかよくわからないけど・・・すごいことなのかな？

「じゃあ魔法もすごいの！？」

「えと、ヴィヴィオはまだ魔法についてはよくわかってなくて・・・」

「そーなの？」

「うん、ヴィヴィオはストライクアーツをやってるよ」

「じゃあヴィヴィオちゃんは騎士を目指すの？」

コロナちゃんが聞いてくる。騎士・・・そういえばママは魔導士で、パパは騎士なんだっけ

「うーん、ママは魔導士だし、パパは騎士だから・・・ちょっと迷ってる」

とりあえずこんな感じで色々話した後、学校の授業が終わっちゃった。すると、コロナちゃんに声をかけられる。

「ヴィヴィオさん」

「コロナちゃん」

「あ、コロナで構いませんよ？」

「じゃあ私もヴィヴィオでいーよ」

二人で笑いあう。

「それで・・・一緒に帰りませんか？」

「え？うん！途中でパパが迎えに来てくれるから、そこまでね」

確かシエルお姉ちゃんたちは先に行くって言ってたし・・・いいよね

「そういえば、ヴィヴィオはストライクアーツをやってるとか」

「うん、やってるよ！」

「私もエクササイズのレベルだけとやってるの。今度一緒に練習しない？」

「うん！いいよ！そうだ、先生連れてきてもいい？」

「先生？」

「うん、ヴィヴィオのお師匠で、先生！」

ノーヴェもきっと受けてくれるだろうし・・・

「先生かぁ・・・会ってみたいな」

「じゃあ今度一緒に練習しようね！」

「うん！」

二人で笑いあう。お友達ができちゃった。あ・・・

「直人パパー！はやてママー！おねーちゃーん！」

「ヴィヴィオ、お帰り」

「ただいま！」

「ん？お友達かな？」

「コ、コロナ・ティミルと申します」

コロナがちょっと緊張気味に挨拶をする。やっぱり『英雄』っていうのは緊張しちゃうのかな？

「初めまして、ヴィヴィオの父です」

「ヴィヴィオの母です。よろしゅうに」

「初めまして・・・」

「ヴィヴィオ、もう友達ができたんだね」

「うん！」

「コロナちゃん」

「は、はい！」

「ヴィヴィオをよろしくね。ヴィヴィオはまだまだ世界を知らないから」

むー・・・ヴィヴィオ勉強してるのに・・・

「あ、は、はい！」

こうしてコロナと別れてパパ達と帰ることになった。

「ヴィヴィオ、もう友達ができるなんてさすがはうちの子やな」

「うん！」

「ははは・・・」

「おねーちゃんたちはどうだったの？」

「私達も少し話す相手はできました」

「あいつらおもしろかったな」

「我としては、もう少し静かにやって欲しいがな」

なにしたんだろ・・・

「さあ、今日は帰ったらごちそうだ」

「腕によりをかけるで～！」

「ヴィヴィオも手伝う！」

「父上、私も手伝います！」

「はやてママ、僕も手伝うぞ～！」

「我も料理をするか・・・」

こうしてヴィヴィオの一日は終わりです。これから毎日が楽しくなりそう♪

直人ｓｉｄｅ

「とりあえず、ヴィヴィオはいじめられたりしてなかったみたいだな」

「せやね、楽しかったって言うとったし・・・なによりマリカさんがおるしな」

とりあえずヴィヴィオの出身などもごまかしたし、家族の登録もできてるし・・・教師もシャッハだ・・・とくに悪いことはないだろう。ボディーガードにマリカも置いてるしな。

「これで仕事終わりっと」

俺はコンソールを叩き終え、伸び押してソファに座る。

「はやて・・・お茶入れて」

「はいはい。今日は久しぶりに緑茶やで」

「おー・・・」

久しぶりに飲むな・・・はやての緑茶。

「おいしい・・・ん?」

体がなんか、変?

「・・・はやて、何入れた・・・」

俺が聞くと、はやてがいじわるな笑みを浮かべる。

「えへへ~即効性の媚薬や」

「おい・・・お前そんなもんどこから・・・」

「あなたが悪いんやで?なのはちゃんやフェイトちゃんと先にしておいて、うちとせんとか・・・生殺しもええ所や」

う・・・何故それを

「だから、今日は沢山するんや~」

はやてが俺にキスをする。チャンス

「ん・・・ん!?」

俺はまだ残っていたお茶をすばやく含み、それをはやてに移す。

「確かに、この効力はあるらしい・・・なら、お互い様だ」

「う、ずるい・・・」

「最初にやってきたのははやてだよな~?」

「あうぅ・・・ん!?」

俺ははやてにキスをする。まあ、ぶっちゃけ言って媚薬の出所はシャマルさんだろう・・・そしてだからこそ・・・と言うべきか・・・効果は絶大のようだ。

「はやて、今日は寝かさないぞ?」

「あうう・・・でも、優しくしてや?」

「もちろん」

こうして、俺とはやては部隊長室で一夜を明かすのだった。次の日俺がいないことで、ヴィヴィオが大騒ぎして泣きだしたのは言うまでもない。

第四十九話「鮮烈な日常」（後書き）

すいません、試験中なので後書きしてる余裕ないです

直人「次回、五十話『紅い翼』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！そして死ねくそ作者！」

秋風「ぎゃあああああああ」

第五十話「赤い翼、１３番目の蔵書」（前書き）

はい、ということで５０話突破です。ありがとうございます。

直人「とりあえず今回ヴィヴィオの入学金やら何やらをいただいた。サンキューな」

秋風「こういうプレゼント待ってますｗ」

第五十話「赤い翼、１３番目の蔵書」

ゼオンｓｉｄｅ

「・・・随分久しぶりの登場だ」

「どうしたの？ゼオン」

「いや、アリサ・・・なんでもない」

まあさておき、現在俺はリンディ統括の部下という名目で管理局にいる。今日は休日だ。実を言えば、すずかとアリサの二人とはもう結婚をしている。

「ゼオンさん、アリサちゃん、ご飯できたよ～」

「わかった」

「うん」

食事はアリサとすずかが当番制でやっている。そんなものシェフがやると思うだろうが、現在俺たちは屋敷に住んでいるわけではない。一軒家を海鳴の土地を買って建てた。とりあえず二人が買おうと言ったので一から土地を買い、家を建てた。リンディ統括も気前がいいのか、給料は悪くない。数か月で金を揃え、その家を購入した。

「今日はハンバーグにしてみたよ♪」

アリサとすずかは料理が上手だ。というか、いつもシェフに任せて

いたのにこんなことを簡単にできることに驚いた。理由はアリサだ。
飯やお菓子の作り方に詳しい高町なのはが悔しかったらしく、必死にそれを行い、それにすずかが付き添ったというもの。だから二人とも料理は上手いらしい。

「ん、おいしいわね」

「ああ、また腕を上げたな」

「えへへ、そうですか？」

まあそんなわけで、俺達3人は平和に暮らしている。

そんなある日

「ん？通信か」

俺は回線を開く。そこにはマリカの姿があった。

「マリカ？随分久しぶりだな」

『はい、お久しぶりです』

「どうかしたか？」

『ええその・・・ちょっと』

マリカは少し苦い顔で話し始めた。ソウルエレメント・・・・・・・
かつてクラウン家が開発したというその力。そしてもう一人の直人・

・・闇の使徒の首領アナザーについて

「どうしてもっと早く連絡をしなかった？」

『それが・・・主が、どうしてもゼオンには連絡するな・・・と』

何を考えているんだあの馬鹿は・・・

『今のゼオンやアリサさん、すずかさんは幸せの中にいます。貴方の過去を感じて、そっとして上げたいのかもしれません』

「・・・・・そのソウルエレメントというのは、どこに？」

『アナザーの話では、フィアマという闇の使徒の失敗によりミッドの各地に散らばったらしいです。現在はなのはさん、フェイトさん、はやてさん、スバルさん、ティアナさん、エリオ君、キャロさん、ルーテシアさんが保有しています』

「・・・わかった、俺もミッドへ行く」

『え？』

「そのために俺に連絡をよこしたんだろう？」

俺が言うと、マリカは少しだけ困ったような顔をしていた。

『それは、そうなんですが・・・よろしいんですか？』

「構わん、アリサとすずかにはちゃんと説明する。お前達の所にはしばらくしてから行くことになるだろう。」

『どこか心当たりが？』

「いや・・・少し調べ物をする。では、またな」

『はい。ゼオン』

こうして、俺は通信を切った。その日の夜の夕食で、俺はアリサとすずかにそのことを話した。

「じゃあ、またミッドチルダに？」

「ああ、そうなる。もしかしたら、長い戦いになるかもしれない」

「じゃあ、私達も一緒に・・・」

「それは駄目だ」

俺はすずかの意見を一蹴する。

「なんでよ！」

「当たり前だろ、危険なところに行くようなものだ」

「でも・・・」

「すまないが納得してくれ」

こうして夕食を済ませ、俺は準備をして眠ることにした。

翌朝、アリサとすずかが寝ているのを確認し、次元航空用のポートを開いた。

「さて、行くか」

その転送の瞬間

「「えいっ！」」

寝ていたはずのアリサとすずかが転送ポートに飛び込んでいた。着替えを済ませ、荷物まで持って。

「なっ！？」

そしてそのまま俺たちは転送された。

ミッドチルダクラナガン転送ポート　ロビー

「まったく！お前達は！」

「ご、ごめん・・・」

「ごめんなさい」

ポートで定員以上の転送をしたため警備にとがめられ、さらに罰金まで払うこととなった。だがそこは大した問題ではない。

「来るなと言ったのに、どうしてついてきた」

「だって、ゼオンが心配で心配で・・・」

「私も、ゼオンさんが行くとなると・・・」

まったくこの二人は・・・

「悪かったよ・・・ほら、行くぞ」

「う、うん！」

「はい！」

泣きそうな顔から一気に笑顔に変わった。

「どこに行くの？」

「・・・クラナガンの外れさ」

しばらく借りた車を走らせ、屋敷に向かった。そこは俺の家であり、生まれた場所でもある。

「・・・・・何年振りだろうな」

門にいる警備兵・・・見たことがある。

「アルザック」

「ゼオン様！お帰りなさいませ」

「久しぶりだな」

「はっ！して・・・そちらは？」

そういえばアルザックは知らなかったな。

「俺の妻たちだ」

「アリサ・クラウンです」

「すずか・クラウンです」

「これは失礼いたしました！私、警備隊長のアルザックです」

「親父はいるか？」

「はい、お部屋にいらっしゃるかと」

俺はそれを聞き、中に入ることにした。

「お帰りなさいませ！ゼオン様！」

メイドやら騎士やらが出迎える。まあ、これで驚かないのが流石アリサとすずかと言ったところだろう。俺は親父の部屋に入った。

「よう、生きてるか？親父」

「・・・久しぶりに会って最初の言葉がそれか」

「いつものことだろ」

「はっはっは！確かにな！さて、話をする前に聞きたいんだが、その後ろのお嬢さんたちはどなたかな？」

「えと、私達は・・・」

「俺の妻だ」

はっきりとそう告げる。当然のごとく親父がびっくりする。

「ほう！お前、結婚したのか！」

「まあな」

「こりゃ驚いた！お嬢さん方、できれば名前を教えてもらえんかね」

「ア、アリサです」

「すずかです」

少し緊張気味に二人が言う。まあ、親父だからな

「我が息子ながら、美人な妻を持ち寄る。しかも二人とは、やるな」

「び、美人・・・」

二人が今度は顔を紅くする。この親父は昔から女をおだてるのに手を抜かない。

「孫の顔を見るのが楽しみだ！」

「「ま、孫・・・」」

もう顔が真っ赤だ。やれやれ・・・

「親父、今日はそのことじゃない。別のことだ」

「別のこと?」

俺は話す。ソウルエレメント、そして闇の使徒のことを

「なるほどな・・・つい先日出所したので知らなんだ。なるほど・・・それで?」

「この屋敷の・・・13番の蔵書を調べたい」

「・・・なるほどな」

13番蔵書・・・この屋敷には1から20まで蔵書が存在し、カテゴリーが分かれている。歴史、武器、人の関係、戦いの記録・・・それぞれが分かれる中で13番蔵書にはその中でも黒い歴史・・・ミッドチルダにも、他の世界にも、そして無限書庫にも記録されない・・・いや、記録されてはいけない歴史が数多く保管されている。俺が知りたいのはソウルエレメント・・・そして陰に消えた王「魔王マリア」の記録だ。

「でも、魔王なのにマリアって・・・なんか複雑だね」

「はっはっは!別に魔王だから悪ではない」

「え？」

「魔王とは、魔法の王・・・すなわち、この地にミッド式の魔法を教えた人間と言うことだ」

「なるほど・・・でも、なんでマリアは歴史から消されちゃったんですか？」

すずかの問いに、親父は首を振る。

「それは、今から君たちが見なければいけない・・・この世界の、真実を」

「・・・わかった、鍵をくれ」

「・・・うむ、持っていくがいい」

親父に鍵を渡され、それを受け取る。

「親父」

「なんだ？」

「調べ物が終わったら、飯にしよう」

「・・・ふ、そうだな」

こうして、俺は親父の部屋を後にし、１３番蔵書に向かうことにした。

レットｓｉｄｅ

いつの間にか、あの子も大きくなった。

「世界は・・・もしかしたら終焉に向かっているかもしれん」

だが、それがどう転ぶのか・・・あの子たちにかかっている。

「・・・マリアよ、お前がもたらしたものは間違っていた。だがそれを今、あの子たちが正そうとしている」

私は４人の肖像画の中心にある女性の像を見る。

「どうか二人の天使に加護があらんことを・・・」

私はそれを願うしかないだろう。

ゼオンｓｉｄｅ

「さて・・・」

「広いわね」

「しかも、薄暗い・・・」

俺の後ろにぴったりとくっつくアリサとすずか。

「待ってろと言っただろう」

「だって、心配じゃない」

「それに、歴史のことも気になるから」

はぁ・・・

「好きにしろ」

俺は言いながら廊下を歩く。

「??・・・??・・・??・・・これだな」

今まで蔵書を漁ったことはあったが、１３番は開かなかった。親父にかたく禁じられていたからだ。

「よし、行くぞ」

俺は扉を開ける。そこにいたのは、緑色の葉を携えた妖精だった。クラウン家の蔵書にはそれぞれに召喚獣として妖精（フェアリー）がそれぞれ存在している。

「あら・・・初めましてかしら？」

「・・・フェアリーか」

「ええ、そうよ。私は１３番目を任された妖精『ミント』」

「・・・ミント、検索を頼む」

「いいわよ、何をお望みかしら？」

そう、妖精たちはこの膨大な蔵書の管理、そして検索を任されている。

「キーワード『古代ベルカ』『旧暦の真相』『カオス』『王』『闇の使徒』『ソウルエレメント』『デバイスの融合』『クラウン家』・・・そして『マリア』」

「キーワードを検索。該当外の本を除去、資料結合、本を精製・・・」

すごい勢いで本が作られていく。ページが舞い、俺の手に一冊の本が宿った。『ＶＥＲＡ』・・・地球のラテン語で「真実」を意味する。

「よし、閲覧を始める」

俺はそのページをめくる。古代ベルカの創立。そしてそれを支えた４つの国・・・クラウン家の関係・・・ソウルエレメントのこと・・・なるほど、これは直人に伝えないといけない。

「どう？ゼオン」

「ああ、だいぶ真実に・・・」

――ズガアアアァァァン！

突然爆発が起きる。上か！

「ミント、この本を保存、データ化してバックアップを取り、シャインに入れておけ」

「はいはい」

「アリサ、すずか、ここの家の者たちといろ」

「う、うん」

「ゼオンさん・・・」

「どうした」

二人が俺を不安そうに見つめていた。

「気をつけてね」

「帰ってきてくださいね」

「・・・ああ、必ず！」

こうして、俺は地上へと向かった。

第五十話「赤い翼、１３番目の蔵書」（後書き）

秋風「はい、ということで久しぶりの登場です」

ゼオン「いつぶりだろうな。読者は覚えているのか？」

秋風「どうだろ」

ゼオン「たしか出て来た最後はマテリアルの事件の時だろう」

秋風「だね～」

ゼオン「これから出番は？」

秋風「多分・・・ある」

ゼオン「多分とはなんだぁ！」

秋風「ぎゃああ！」

ゼオン「次回、第五十一話『紅蓮の剣』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第五十一話「復讐の剣」（前書き）

今回もゼオンメインです。直人が出てくるの次回かも・・・

第五十一話「復讐の剣」

ゼオンｓｉｄｅ

俺が外へ出るとアルザックを含む警備兵たちが倒れていた。

「アルザック！」

「ゼオン、様・・・」

「しっかりしろ！」

急所は外れてる・・・とりあえず回復魔法をかけ、次元回路の旅人でミッドの病院へ送った。

「・・・」

「お前、何者だ」

そこにいるのは銀髪にウェーブがかかった少女だった。幼い・・・１０歳・・・いや、もう少し下か？

「・・・・・闇の使徒」

「闇の使徒・・・か」

こんな子供まで・・・

「『流星の姫巫子』・・・リン」

「・・・・どうしてここへ来た?」

「・・・任務遂行のため」

リンがいいながら構えを取る。アルザックや他の警備騎士がやられるくらいだ。そうとうな実力者・・・見た目では判断できない。

「死にたくなかったら、どいてね」

リンが手をかざした。その瞬間、俺は瞬間的にその場にしゃがみこんだ。すると、後ろの木がバキバキと音を立てて倒れる。

「っ!」

「・・・よく、よけたね・・・」

リンが再び手を出そうとする。俺はシャインを取りだした。

「シャイン、セットアップ!」

『イエス、マイロード』

直人とは相対の紅いバリアジャケットと剣を手に取り、またそれを避ける。

「・・・君はどうやら『重力』を操るようだな」

「驚いた。よくわかったね」

重力を少女が手をかざしてその半径・・・だいたい1mくらいの重力を変えている。

「加えて無音か・・・確かに厄介だ」

言いながら俺はシャインを構える。

「理論がわかったところで、無駄・・・」

手をかざす・・・！今だ！

「はあっ！」

「！？」

俺は後ろに回り込み、デバイスらしきブレスレッドを弾き飛ばした。

「よし・・・！」

「甘い・・・」

「！？」

リンは平然と手をかざす。まさか、デバイスがもう一つ！？

「・・・『重力の衝撃（グラビティ・インパクト）』

「ガハッ！」

重力によって叩きつけられる。くっそ・・・

「シャイ・・・ン！」

『イエス、マイロード・・・』

「おおおおおおおっ！」

無理やり魔力を底上げし、重力に逆らう。下手すれば俺の体がペチャンコになるが、魔力を纏った分で緩和され、俺の体は守られる。

「・・・！」

「シャイン！」

『ロードカートリッジ』

「紅炎・・・一閃！」

地面に紅炎一閃を叩きつけ、視界を塞いで脱出する。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ゲホッ！」

やばいな・・・結構直撃で食らった・・・

「英雄って、そんなものなの・・・？」

「ははは、言ってくれるねお嬢ちゃん・・・」

ガキだから手が出せない・・・というのもあるがそれ以上になんだ？この威圧感は・・・

「・・・そういえば」

あの子、さっきから何かを探している・・・？ように見えなくもない。だが、何が目的だ・・・任務・・・と言っていたが

「リンとか言ったな・・・ついでに教えてくれないか。クラウン家に何の用だ」

「・・・ＡＮＯＴＨＥＲから、頼まれた」

「・・・何をだ？」

「１３番目の書蔵庫・・・」

「！！」

やはり、この子の目的はあの本！

「ミッドチルダの黒き歴史・・・・・その最後の鍵・・・」

最後の鍵・・・

「・・・どうして君はＡＮＯＴＨＥＲに従う？」

「ＡＮＯＴＨＥＲは・・・恩人」

「恩人？」

「そう、助けられた・・・施設から」

言いながら再び構える。すると、背後から白いライオンが現れる。

「だから、その恩返し・・・レオ」

「グルゥアアア！」

なんて咆哮だ！

「ビーストデバイス・・・始動」

リンの腕に、レオと呼ばれたライオンが機械化して融合した。あれが、ビーストデバイス・・・クラウン家の技術の一つか

「クラウン家は愚かね・・・自分たちの技術で・・・」

言いながら家の方向に手を向けた。まずい！

「死んじゃうんだから」

――銀獅子咆哮！

銀色の砲撃が発射される。それこそ時空管理局のエースオブエース、高町なのはの砲撃に匹敵するほどのものだ。

「シャイン！フレイムイーグル！」

『『仰せのままに、マイロード』』

間に合え！

「デバイス複合！セカンドリミッター解除！」

デバイス複合でリミッターを外し、羽で砲撃を防いだ。

「ぐ、おおおおおっ！」

なんとか砲撃をそらし、地面に着地する。どうやら、重力効果は消えたらしいな。

「・・・しぶといね」

「それがとりえでな・・・悪いがここには大切な奴らがいるんだ。やらせない」

アリサとすずかがここにいるんだ・・・やらせるわけにはいかない。

「そう・・・でも、私も」

「・・・？」

「ＡＮＯＴＨＥＲとの約束があるから・・・どいてもらう」

今度は獅子の口から魔力刃が形成される。近距離でも戦えるのか・・・

「そうか・・・はっ！」

俺は地面を蹴り、斬りにかかる。

「・・・ふっ」

リンも同じく地面を蹴り、俺と剣を交える。

「はぁっ！」

「ふっ・・・」

剣と剣がぶつかり合い、火花が散る。俺にはマリカがいないので、デバイス複合でセカンドリミッターを開放してられる時間は直人よりも少ない。さらにここ最近実戦を経験していなかったためか、少し鈍っている。鈍っているにしても・・・

（女の子に・・・しかもまだ１０歳にも満たなそうな女の子に負けるのは・・・恥だ！）

「シャインイーグル・・・一気に決めるぞ」

『仰せのままに・・・ロードカートリッジ』

「真・紅天龍斬波！」

紅い龍がリンに向かって行く。

「レオ・・・迎え撃つよ」

迎え撃つだと！？

「魔力最大・・・」

――銀獅子咆哮“改”

先ほど以上の砲撃が龍と激突する。馬鹿な！あれほどの砲撃、あんな子供のどこから・・・

――ドオォォォン！

砲撃と龍は互いにぶつかり合い、爆散して消えた。まさか、“真”クラスの攻撃を相殺するなんて・・・

「・・・時間もない」

もう手加減なんてしてられないな。

「ねぇ・・・」

「・・・？」

「なんで、そんなに頑張るの？」

なんでって・・・

「もう勝負は見えたはず・・・貴方も、心のどこかで思ってる・・・『私に勝てる確率は低い』」

「・・・・・・・・・」

「ＡＮＯＴＨＥＲも、引き際を見て、物事を諦めて利益を得る。貴方の行為は、ただの自殺行為にしか見えない」

なるほどねぇ・・・

「リン、君はまだ子供だから分からないだろう。それに君は女の子だ・・・男の思想なんて理解できないだろう」

俺が言うと、リンが少しムッとする。闇の使徒でも、子供は子供だ。

「男にはな・・・守らなきゃいけないものがあれば、意地でも守り通さないといけないんだ・・・・・昔はそれができなかった。だから今度こそ、同じ過ちは繰り返さない」

「同じことを繰り返すかもしれないのにそれをしようとするなんて、ただのバカ」

「馬鹿で結構。男はみんな馬鹿な生き物さ・・・そして俺以上の馬鹿を、俺は知っている」

俺の目を覚まさせたあいつは、本当にまっすぐな馬鹿だよな。だがそんな馬鹿だからこそ、あいつは大切なものを守れる。俺も、同じでありたい。

「たとえ確率が低くても、0じゃない。何もしないで負けるよりは、全力で当たって負けたいからな」

俺は「さあ」と言いながら魔力を開放する。

「行くぞ、相棒」

『イエス、マイロード・・・貴方とならば、どこまでも』

俺は一気に駆け出し、再び背後を取る。

「っく！」

――銀獅子・・・

「遅い！」

俺は地面に剣を撃ちつけ、煙を作る。

「！？」

「はっ！」

「あぐっ！」

背中を蹴り飛ばし、吹き飛ばす。もう相手が子供だからなんて言ってられない。

「どんどん行くぞ！」

『ロードカートリッジ！』

「虚空炎閃！」

炎の刃が獅子を襲う。

「くぅ・・・！」

「チェックメイトだ」

そして俺は背後に回り、リンの首筋に剣を当てた。

「そ、んな・・・」

「前半は確かに鈍っていた部分もあったからな。だが・・・全開になれば、君の様な子供相手ではどうとでもなる」

「っく!」

さてと・・・この子を拘束して直人に知らせるかな。

「おやおや・・・なかなかやりますね」

「!?」

突然別方向から衝撃が走る。俺はとっさに自動防御で耐える。そこにいたのはシルクハットの上から下まで白で埋め尽くした長身の男。

「誰だ・・・お前」

「初めまして・・・闇の使徒『白炎の紳士』バランと申します。そして・・・」

すると、突然バランの背後に黒いワイバーンが現れる。

「私のビーストデバイス『ブラックワイバーン』」

「・・・な」

「別に戦いに来たんじゃありません。この子を回収しに来ました」

「バラン・・・邪魔」

「おやおや・・・首領からの帰還命令ですよ？」

「ＡＮＯＴＨＥＲが？」

「ええ、なんでも緊急の「貴様ぁ！」おやおや」

俺が繰り出した一撃を、バランと名乗る男は防ぐ。

「話の途中なんですが・・・後にしてもらえませんか？」

「その怪物を、貴様が操っていた・・・なら、１０年前俺の部隊を・・・ティーナを殺したのは貴様かぁ！」

俺はそのままシャインイーグルを構えなおし、再び突っ込む。

「・・・はて、１０年前。ああ、私が闇の使徒となる前・・・このワイバーンを育てていたころですね。残念ながら・・・」

バランは歪んだ笑みを作る。

「殺した人間をいちいち覚えている私ではありませんよ！」

「貴様ぁぁぁ！」

俺は無我夢中でシャインイーグルを振るった。ティーナの仇・・・そして、隊のみんなの仇・・・そんな男が、今目の前にいる。倒さ

なくてはならない。俺の全てを賭けてでも。

「おおおおおおおおっ！」

「・・・・・フム、ああ！思い出しました。確か部隊を全滅したのは一度きり。あの時の生き残りですか・・・あの時の部隊の女性が・・・ああ、なるほどねぇ」

「殺す」

俺は渾身の力を込めてバランを吹き飛ばした。

「・・・・・・なかなか、やるようですね」

バランは服の汚れを落とし、ナイフを取り出した。そんなもので俺の攻撃を防げるとでも思っているのか・・・

「貴方の剣はこれで防げないでしょう・・・でも、これならどうでしょうね。ブラックワイバーン」

バランが怪物を呼ぶと、リンと同じように腕のナイフと一体化した。あれがデバイスか！

「我が剣・・・ダークブレイド。その名の通りの地獄を味わいなさい」

一閃くらっただけなのに、体を闇がむしばむ。俺は激痛で地面に崩れ落ちる。

「ぐあああああああああああああああ！！！！！」

「私に刃を向けた報いです。地獄を味わうがいい」

「ぐああああああああああああ！！！」

終わるのか・・・？俺は、こんなところで・・・

「ち、がう・・・」

「？」

俺は痛みに耐えながらも、シャインイーグルを握りしめる。

「俺は、こんなところで・・・」

そうだ・・・俺は死ねない・・・俺は・・・俺は！

「おお！！！！」

『・・・セカンドリミッター再起動、限界点突破』

俺は、奴を殺すまで・・・死ねないんだ

第五十一話「復讐の剣」（後書き）

秋風「はい、ということで」

ゼオン「暴走モードか？」

秋風「今までは直人しか暴走してなかったからね」

直人「確かにな」

秋風「ゼオンのほうがコントロールができてるっていう認識を読者に与えてたから、今回こうなることはわからない人が多いかもね」

クラウド「邪魔するぞ」

ザックス「ちーっす」

直人「お、クラウド久しぶり」

クラウド「ああ、久しぶりだな」

ザックス「俺は初めましてだけどね～」

秋風「ようこそ！」

ザックス「おう、世話になるぜ」

ゼオン「今回は『魔法少女リリカルなのはA’S～片翼の天使が望む幻想～』より、クラウドとザックスに来てもらった」

秋風「思えば一番ここに来てる回数が多いのクラウドだよね」

ザックス「そうなのか？」

直人「あとは魔法少年シリーズのソラ君かな」

秋風「確かに」

ザックス「へぇ～」

クラウド「確かに、俺は3回目か4回目だな」

秋風「結構人が来たからねぇ～」

直人「そう言ってるけど俺も結構遊びに行ってるな」

ゼオン「確かに」

秋風「まあ、それはさておきザックスと言えばクライシスコアだよな」

直人「お前はかなりプレイしたからな」

ザックス「そりゃ嬉しいね」

ゼオン「まあ、最初は操作に手間取って何回もザックス殺してたけどな」

ザックス「うぉい！」

クラウド「確かに、いつもとは違う方法でプレイをしなければいけないからな」

直人「しかもディシディアやったあとだったしな」

秋風「いいじゃん。あのゲームはプレイよりムービーでしょ」

ゼオン「確かにな、アンジールにジェネシス・・・そしてセフィロスとザックスの戦い・・・ＰＳＰとは思えない完成度だったな」

直人「そういえば、お前は誰が好きだったんだっけ？」

秋風「俺？俺はシスネが大好きだよ」

ザックス「シスネかぁ・・・なかなか意外なところついたな」

ゼオン「こいつの携帯の待ち受けにはかなりの量のシスネが存在するぞ」

ザックス「マジかよ・・・」

クラウド「確か、俺は会ったことがない気がするな」

直人「そういえば見たことないかも」

秋風「まあ、気にすんなや」

ゼオン「そういえば他にもアンジールやジェネシスの戦いのムービーを取っていたりしたな」

ザックス「あれは名シーンだろ」

直人「今回U．T．先生の作品ではアンジールがデバイスだけどな」

ザックス「おう、俺のな！」

クラウド「初代のバスターソードの持ち主・・・本来なら人として会ってみたかったがな」

秋風「ジェネシスには会ってるもんな」

クラウド「ああ」

直人「さて、そろそろ時間だな」

秋風「こうれいのお土産タイム！」

直人「今回クラウドには新しく出たフェイトのフィグマと、ネンドロイド。ナナキにはなのはを上げてきて」

ゼオン「ちなみにザックスには八神家全員な。未来に出るリインフォース？もいるぞ」

ザックス「さんきゅー！」

クラウド「感謝はするが・・・飾らんぞ」

秋風「あはは・・・」

直人「あ、そうだ。今度俺とマリカとゼオンでそっち行かせてくれよ」

クラウド「余裕があれば聞いてみよう」

ザックス「じゃ、またな！」

クラウド・ストライフ
リリカルなのはの世界に次元漂流して無印を終えた状態。ナナキと共にアースラでフェイトと行動を共にする。ちょっとだけ、フェイトと距離が近くなったようにも思える。

ザックス・フェア
ファイナルファンタジー7:クライシスコアの主人公。死んだはずが神によって生き返った。八神家に居候として住み、闇の書蒐集に協力する。デバイスはかつての師であり仲間であり上司だった『アンジール』

直人「次回、第五十二話『過去と今』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ」

第五十二話「過去と今」（前書き）

久しぶりの更新です。待ってる人お待たせしました

第五十二話「過去と今」

「・・・殺す」

「来なさい、愚かなる騎士よ」

敵は目の前、ただ壊すだけだ。

「・・・シャインイーグル、殺傷モード」

『・・・・・承認できません』

「強制承認ロード」

『・・・オーライ、マイロード』

殺す！

「ほう、なかなか・・・」

『ロードカートリッジ』

「・・・紅炎一閃」

振り下ろし、斬りつける。鮮血が飛び散る。

「っぐ・・・だが！」

「があああああああっ！」

前方にワイバーン・・・だが、関係ない

『ロードカートリッジ』

「邪魔だ」

「ぎゃあああああああああっ！」

斬り飛ばし、どける。目標は目の前の敵、そして目的は破壊

「仕方ありませんね・・・」

剣が交わり、火花が散る。パワーは互角・・・ならば・・・

「オーバードライブ」

『・・・・・オーライ、マイロード』

体から力が溢れる。これの継続時間は3分・・・決着をつける

「行くぞ」

「ええ、来なさい」

俺が斬りかかると、ワイバーンが剣となり、それを防ぐ。

「ただ単純に突っ込んでは私には勝てませんよ」

「黙れ」

耳障りだ・・・その口を塞ごう

「シャインイーグル」

『オーライ、ロードカートリッジ』

「むっ！？」

「紅炎龍斬波」

紅と黒の龍砲撃が放たれる。これで死ね・・・

「これは避けられませんね・・・離脱しましょう」

「させるか・・・」

俺は奴の背後に回り込み、龍砲撃の中に突っ込ませる。

「ぐあああああっ！」

男は黒焦げになり、その場に倒れる。少女・・・リンは脱出したらしい。別にあの子に用はない。あるのは、この男だけだ・・・

「ぐっ・・・これが、英雄の力ですか・・・」

「死ね・・・そして償え」

俺は剣を振り下ろした。

――ガキィン！

しかし、その剣は阻まれた。そこにいたのは俺が良く知る蒼き騎士だった。

直人ｓｉｄｅ

「・・・ゼオン、何をしている」

俺はその瀕死の男の前に立ち、その一太刀を防いだ。

「直人・・・か」

「久しぶりだなゼオン・・・これは、何の真似だ？」

「どけ、直人・・・俺は、この男を殺さなければならない」

こいつ、初めて会った時みたいに闇に飲まれてやがる。

「何故だ？」

『まさか・・・』

「こいつがティーナを・・・そして、かつての仲間たちを・・・！」

・・・そのまさからしいな。闇の使徒の中に、ゼオンの部隊を壊滅させたやつがいたとは

「っく・・・逃げるしかないようだ」

そう言ってシルクハットの男は消える。

「どけ、直人・・・奴を追う」

「・・・・悪いが、それは聞けないな」

俺はメシアスワローを構える。

「何故だ・・・」

「俺はこれから奴を追うと言ったんだ。どけ、直人！」

「断ると言っている」

「どけ直人！出ないと貴様を殺してでも押しと通るぞ！」

「上等だ！ガチでやってやる！」

俺はメシアスワローを構える。

「「おおおおおおおおおおおおっ！」」

メシアスワローとシャインイーグルが交わり、衝撃波が生まれる。

「おらあああああっ！」

「はあああああっ！」

っく！やっぱりあいつの方が上手か・・・だが！

「メシアスワロー！あいつを止めるぞ！」

『オーライ、我が主。セカンドリミッター解除』

「セカンドリミッター解除」

『オーライ、マイロード』

「「だあああああああああああああああああああっ！」」

セカンドリミッターを外し、再び交わる。

「メシアスワロー！」

『ロードカートリッジ』

「シャインスワロー！」

『ロードカートリッジ』

「真・蒼天・・・」

「真・紅天・・・」

魔力を剣先に込めて、それを振り下ろす。

「「一閃！」」

爆発が起き、俺は吹き飛ばされる。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ぐっ・・・何故だ・・・何故お前は邪魔をするんだ・・・」

「・・・ゼオン、お前今何しようとしてるかわかってるのか？」

「な・・・に？」

あいつ、やっぱり我を忘れてやがったな・・・

「お前の今そのツラ、鏡で見ろ・・・んなツラでアリサとすずかになんていうつもりなんだ！」

「！？」

「・・・マリカはお前に協力を申し出したけど、俺が反対していたのはなんでか知ってるか、ゼオン・・・」

「な、に？」

「・・・・お前が、俺と似てるからだ・・・」

そう、一番の理由はこれだった。

少し前

「ゼオンに協力要請を送っただぁ！？」

「はい、その方が「馬鹿！」いっ！」

俺は思いっきりマリカにげんこつを喰らわせた。

「痛いです主・・・何をするんですか」

「お前なぁ・・・なんで俺がわざわざあいつを遠ざけたかわかんねぇのか」

はぁ・・・

「何故です？主」

「あいつは４年も闇に囚われ、そしてさらに４年間、眠り続けていたんだ。ようやく掴んだ幸せを・・・潰して欲しくないんだ」

「しかし・・・それは主も同じではないですか」

「確かにな・・・でも今は、あいつらが一緒にいて、一緒に戦ってる。俺はそれだけで幸せなんだよ」

あいつらと言う家族がいる・・・そして俺は復讐の輪廻から抜け出せた。だからこそ戦っていられる、あいつらと一緒に・・・・・

――ピーピー

「ん？通信？はい」

『久しぶりだね、井上直人』

「貴方は・・・レット卿」

『今、闇の使徒がここを襲撃しているんだ・・・救援をザ・・・ザー・・・』

「レット卿!?レット卿!」

っく!予想するべきだった!ビーストデバイスも、ソウルエレメントもクラウン家の技術だ・・・先日出所したレット卿が狙われる可能性もあった・・・!

「マリカ、緊急出撃警報!」

「はい!」

「フォワード、ならびに隊長メンバーは出撃準備!バックアップチームはデータの解析を・・・いや、フォワードは現状待機!俺が出る!」

こうして、俺は空を飛んでクラウン家へと向かった。

『主、もうすぐ降下地点です。魔力反応あり』

「・・・なんだ、この膨大な魔力は・・・」

肌で感じる、その恐ろしい魔力

「これは・・・」

ゼオン?でも、どうしてこんな、黒い気が・・・

「嫌な予感がする。急ごう」

『はい、我が主』

こうして俺達は降下して行った。

「あれは・・・」

「真・紅天龍斬波！」

なんだあの膨大な闇は・・・！

『主、あの目・・・』

その憎しみに囚われた目・・・俺自身も体験していることだった。

「殺傷設定！？」

『主！このままでは・・・！』

こうして、俺はゼオンが振り下ろした剣を受け止めた。

「・・・もうやめろ、ゼオン。あんたはまた『そっち』に堕ちる気か」

「・・・・・・・・・」

「あいつらがいて、それでも堕ちるって言うなら・・・」

俺は再び剣を構える。

「俺があんたを殺してでも止めてやる」

「・・・・・「ゼオン！」「ゼオンさん！」アリサ・・・すずか・・・」

避難していたアリサとすずかが飛び出してきた。

「直人、もういい・・・後は私達が」

「わかったよ・・・」

こうして、俺は屋敷の中に入り、生存者たちの確認へと向かった。

ゼオンｓｉｄｅ

「ゼオン・・・」

「ゼオンさん・・・」

「アリサ・・・すずか・・・俺は・・・」

「「ばかっ！」」

「おごっ！？」

思いっきり殴られた。地味に痛い。

「馬鹿・・・どうして、どうして・・・」

「うっうぅ・・・」

「二人とも・・・」

殴り飛ばした後、抱きつかれる。

「・・・・・すまない」

「私達が、傍に・・・傍に、いるから・・・」

「お願いだから、もう・・・やめて・・・」

「・・・ああ、二人とも」

俺は泣きじゃくる二人をただ抱きしめ続けた。

直人ｓｉｄｅ

しばらくして、ゼオンが戻ってきた。

「直人、すまなかったな・・・そして、ありがとう」

「俺は何もしてないさ・・・」

「そうだ、お前に渡す者がある」

そう言って渡されたのは一冊の本だった。

「これは？」

「・・・俺が１３番書蔵庫で見つけた資料をまとめたものだ」

「１３番って、まさか・・・！？」

マリカが驚いている。１３番って・・・？

「そうだ・・・あらゆる世界の黒歴史・・・そう言われる部分である決して表の世界史に乗ることはない情報がある」

「・・・ということは？」

「魔王マリア・・・そして闇の王であるカオスとの戦いの記録が載っているはずだ」

「魔王マリアの戦い・・・」

メシアが言っていた、聖王、覇王、冥王、魔王・・・４人の王が一度だけ共闘したというあの戦いか・・・

「わかった、受け取っておく」

本をもらう。

「じゃあ、俺は帰るぞ。ゼオン、お前は来なくていい」

「何故だ？俺は協力を・・・」

「もう少し、頭冷やせ・・・アリサと、すずかと一緒にな」

こうして俺はクラウン家を後にすることにした。

光の剣隊舎

「ただいま～」

「あ、直人君！どうだった！？」

「ああ、大丈夫だよ・・・・・・なのは」

「ふぇ？ふえええええ！？」

何となく、なのはに抱きついた。

「ど、ど、ど、どうしたの！？」

「・・・何、なんとなくな」

「えへへ・・・」

このあとフェイトたちに見つかり、同じことをした。

第五十二話「過去と今」（後書き）

秋風「久しぶりです」

直人「お前ってホント駄目だな」

秋風「何が？」

直人「どんだけ浮気して書いてるんだよ」

秋風「いいじゃん！頭に浮かんできたから書きたくなったんだもん！」

直人「黙れ、だからいつまでたっても作品が終わらないんだ」

秋風「うっ・・・」

直人「次回、第五十三話『裏の物語』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第五十三話「裏の物語」（前書き）

今回は物語です

第五十三話「裏の物語」

古代ベルカ諸王時代・・・天地統一を目指す戦いがあった。のちにゆりかごと呼ばれる兵器によって閉じるこの戦い。その戦いとは別に、その史実を覆す一つの戦いが存在した。

『四王の共同戦線』

当時三大王国にある『聖王』『覇王』『冥王』の異名を持つそれぞれの王。そんな中にもう一人だけ、王の称号を持つ女性がいた。

『魔王　マリア』

魔王とは『魔法の王』魔術、魔法の頂点に立つ女性だった。元々は異界の地より現れた彼女は小さな村を作り、それが国にまで発展した。天地統一に興味のない彼女は、聖王、覇王、冥王とは対立も共闘もせず『中立』の立場を貫いてきた。王は言った。

――人が人を殺し、何故天地を統一する必要があるのか？

当時より王と言う割には欲求心が薄いマリアは人一倍戦いを嫌い、平和を愛した。こんな彼女に、覇王と冥王は

――王の器にはふさわしくない

と、嫌っていた。逆に聖王は

――本当の平和を作ろうという願いは素晴らしい

と、彼女を大いに評価した。しかし、三大国の中心にあった彼女の国は格好の標的だった。その領土を奪えば、前線基地としてしようできるのだから、どの三大国も欲しがるものだ。だが戦いを嫌うからと言って、戦力がないわけではない。

――我らは戦いに介入しない、だが自国に踏み入れるものには容赦はしない

自己防衛という立場で国を守るマリアは常に戦場の中心に立ち、戦い続けた。その威風堂々たる姿と、妖艶なる振る舞いは勝利の女神とも呼ばれた。だが彼女の戦い嫌いは有名だった。何故彼女は戦場の中心にいたのか？それは彼女が後に生み出す『非殺傷魔法』である。人を殺さず、戦いを制す。後の新世紀の中心となる『現代ミッド式魔法』の祖ともいえる魔法の確立である。

――人は争いをやめない。だがその争いの結末はどちらかの死で決着をつけるものか？

マリアの作り出した『非殺傷魔法』によってマリアの国は『人を殺さず戦いを制す』力を得た。その異様なる力をみた他国はそれを恐れ、このような異名をつけた。

『魔王　マリア』

その力より悪魔の力、その技術によって魔法の王、そのような意味を込めて誰かがそう言った。それは全土に知れ渡り、マリアは『聖王』『覇王』『冥王』に続く『魔王』の称号を手にした。そのマリアは

――私の名で国が守れるなら喜んでその称号を頂こう

こうして三大王国はマリアの国に手出しができなくなった。そしてマリアの国は戦乱の時代にも関わらず『平和』の国となった。だが、その平和も長くは続かなかった。突如この地に異形なる軍団が舞い降りたのだ。それを率いる男は同じく魔王だった。だがマリアは知っていた。その魔王の正体を

『混沌（カオス）の零（・レイ）』

アルカディアと呼ばれる、古代ベルカを凌ぐ力を持った世界を滅ぼした混沌の王にして、マリアの双子の弟だった。実を言えばマリアは一度レイに殺されかけた。その王の座が姉に取られることが気にくわなかったのだという。それによって、マリアは信頼できる家臣と共に、この古代ベルカの地へと逃げたのだ。つまりこの『ミッド式の祖』となる魔法の技術は、元々はアルカディアで開発されていた技術だった。それをマリアが完成させたものなのだ。平和な象徴である自国を守り続けるマリア。マリアは3人の王に手紙を送った。ベルカの力を合わせ世界を救うため、共に闘って欲しい。覇王と冥王はこれを渋った。平和なる象徴といい、そしてどこの国にも協力しなかった国に、誰が協力するものかと。しかし、聖王は違った。

――この世界の平和の象徴の貴女の国、私も同じ理想がある。喜んで協力しましょう

こうして二人の王は手を結び、世界をかけて戦い続ける。聖王オリヴィエは自国の技術として、クラウン家の『ビーストデバイス』『ソウルエレメント』と呼ばれるものを提供した。ビーストデバイスは生命体とデバイスを融合させるもの。ソウルエレメントはその悪の力を吸い取り『聖なる力』に変える特殊魔法球。それは封印にも使用できるものだった。これらによって異形を押し返す二人の王。

しかし、そう上手くは行かない。カオス・レイはその力によって軍の半数を死に追いやるという結果を見せた。それによって世界は恐怖した。マリアの国はともかく、聖王オリヴィエの大国の兵士が負けるという事態だった。それでもオリヴィエはこう言った。

――恐れてはいけない、真の平和のため、この世界のため、私達は戦わなくては

そしてマリアもこう言った。

――世界は闇に包まれようとしている。今こそ立ちあがり、光を手にしましょう

国民は絶望から立ちあがった。自分たちを治める王自らが世界のために命を投げようとしている。それなのに自分たちは何をしているのだろうか？恐怖におびえ、ただ死を待たなくてはいけないのか？いいや違う。戦うのだ、世界のために、明日の平和のために。こうして光を取り戻した二大王国は戦い続ける。そして世界の生死を分けるという戦い。この戦いにおいてマリアとオリヴィエはカオス・レイに挑む。苦戦を強いられる二人の前に、そして軍の前に援軍が現れた。共闘を渋った『覇王』と『冥王』の二人、そしてその国の軍だった。本当の世界の危機・・・二人の王が立ち上がったというのに、我々が戦わないわけにはいかない。そう言って援軍をよこしたのだ。こうして『聖王』『覇王』『冥王』『魔王』は肩を並べ『混沌の零』に挑んだ。その死闘の末、カオスを追いこむところまで行くと、ソウルエレメントによってその闇を封印し、マリアはその体と共にその闇を封じ込めた。

――享年２５歳　魔王　マリア　混沌との戦いによって死す

この後聖王によってカオスの体は地底深くに封印された。そのマリアもソウルエレメントと共に葬られた。その世界の闇を封じ、平和を愛した彼女は、平和の象徴となった。だがそれ以後、彼女のことは人々の記憶から薄れて行く。

――世界を愛した彼女が今後悪に利用されないように、そして真の平和を願って

『聖王』はそう言ってマリアのことを言うのを禁じた。彼女を封印しても、後の時代で必ず彼女を利用する人間が現れる。そうならないためにも、彼女の存在は『抹消』されなければならない。そしてカオスの存在も。だからこそ彼女は表の世界史から抹消された。彼女の国も、聖王の国の一部として扱われた。そしてこの後は歴史通り、ゆりかごが全てに決着をつけ、その地に落ちた。カオスが封印された神殿の真上に。そして『聖王』はゆりかごと運命を共にした。

光の剣　ロビー

直人ｓｉｄｅ

『・・・・・・・・・・・・』

長きにわたる物語・・・それを読み終え、本を閉じた。フォワードメンバーはその悲しい物語に涙を流した。ナンバーズも同じだ。隊長メンバーも目が紅い。残念ながらヴィヴィオはその長い話に疲れて眠ってしまっている。

「魔王マリアの戦い・・・か」

本を眺め、それを見る。平和を愛し、世界を愛した女性の悲しき最後。人々の記憶から消えて行き、表の歴史には乗らなくなった女性。

「ねえ、もしかしてＡＮＯＴＨＥＲは・・・」

「・・・ああ、マリアを復活させるつもりだ」

平和を愛した彼女は、恐らく協力を拒むだろう。だが『闇』と共に封印されているのならどうだ?そしてＡＮＯＴＨＥＲたち『闇の使徒』が持つ技術があるとしたら?彼女は操り人形として利用されてしまう。

「・・・阻止しなきゃいけない、それだけはなんとしても」

世界を守るために、平和を掴むために、あいつらの目的だけは、絶対に阻止しなければいけない。

「これより光の剣は闇の使徒よりも早くソウルエレメントを確保し、闇の使徒を討つ！」

『了解！』

ＡＮＯＴＨＥＲ・・・俺は、お前の好きにはさせない！たとえこの世界が偽りの平和で成り立っていても、絶対にそれを阻止して見せる。

ＡＮＯＴＨＥＲｓｉｄｅ

リンが悲しそうな顔でこちらに来た。

「ごめんアナザー・・・本、取ってこれなかった」

「気にするなリン、別にあんなやつらに本があってもどうにもならない。君がクラウン家に打撃を与えただけで十分だよ」

「ホント？」

「ああ、ホントさ。それより“彼女”と遊んであげてくれ、寂しそうだ」

「うん！」

嬉しそうにリンが部屋を出て行った。

「・・・戻りました」

「御苦労・・・『白炎の紳士』おやおや、ボロボロじゃないか？」

「少し苦労しましてね・・・本気を出さないというのは難しい」

・・・ふん、どうだか

「“彼女”の様子は？」

「相変わらず無気力、無表情、自分が誰なのか？自分は何をすべきなのか？まったくを持って何も」

「・・・そうか」

計画は彼女がしっかりと目覚めないと遂行できない。

「・・・やはり、アリスを渡したのは失敗だったな」

ハンデとしてソウルエレメントを渡したと言ったが、ソウルエレメントは悪に反応してしまう。正義の彼らしか適合できない。破壊も不可能ながらくたなど、我々が持っていても意味がない。

「早く眼を覚ましてくれ・・・・・・“魔王　マリア”」

???side

・・・ここはどこ?私は誰?

「遊ぼう?」

「・・・・・・・・・」

私の前に少女が現れた。この子は誰?何故ここにいるの?

「今日は、綺麗なお花を持って来たよ?」

花・・・?

「・・・・・・・・・」

「綺麗な髪をしてるね・・・絹みたい」

言いながら少女は私の髪にくしを通して髪を整える。

「・・・・・・・・・」

「ねえ、どうして喋ってくれないの？」

喋る？

「・・・怖いの？」

怖い？私が・・・？何を？

「大丈夫、私達が守るの」

・・・守る？私を？貴女が？

「絶対貴方を守るからね・・・・・・・・・・

魔王、マリア」

第五十三話「裏の物語」（後書き）

秋風「ということで、裏の物語でした」

直人「これって、構想練ってるの？」

秋風「全然？全部走りながら考える」

直人「大丈夫かよ」

秋風「大丈夫ＩＦだから原作に縛られない！」

直人「それっていいことか？」

秋風「というか、今回はなんか短かったｏｒｎ」

直人「というか、俺はほとんど出番がないのか」

秋風「うー・・・ん、もうすぐ終わるし」

直人「まじで？」

秋風「うん」

直人「というか、さ・・・これ」

秋風「うん、半端ない感想を返して大変だった」

直人「放置すんな」

秋風「ごめんなさい」

直人「次回、第五十四話『少女たちの戦い』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第五十四話「少女たちの戦い」（前書き）

ぶっとんだタイトルですが、今回はある意味戦いということです。
マテリアルたち三人が活躍します

どうぞお楽しみください

第五十四話「少女たちの戦い」

シエルｓｉｄｅ

最近、父上が忙しい。まあ、魔王マリアの捜索とソウルエレメントの捜索をしていれば当たり前ではあるのですが・・・どうも、疲労困憊に見えてしまいます。

「・・・・・父上、仕事のしすぎはよくありません」

「大丈夫だよシエル、ありがとな」

この笑顔、父上ながら反則です。母上から生まれた私ですが、やはり父上は素晴らしい方のようです。

「ルシフェリオン、私はどうすれば？」

『・・・そうですね、直人様を外に連れ出すというのはどうでしょう？』

なるほど、デートですか・・・気分転換にもいいかもしれませんね。

「・・・しかし、どう誘えば？」

『策として、無理やり連れ出すのは無理でしょう。なので子供の体としての策はズバリ『おねだり』かと』

おねだり・・・つまり、ルミノがいつもやっているようなことを・・・

『別にルミノほど激しくとは言いませんが、貴女なりに『誘う』というのはどうでしょう』

「なるほど、そうしてみましょうか」

さっそく実行を・・・

「シエル～僕がなんだって～？」

「元星光の殲滅者が感心せんな・・・抜け駆けとは」

意気込んでいたせいか、まったく気配を感じませんでした。まさか、聞かれていたとは・・・

「ほら、行くぞシエル！」

「え、え？ど、どこへですか！？」

「もちろんパパを連れ出しにだ！」

こうして走っていってしまう二人。

「ま、待ってください！」

私も頑張って追いかけることにしました。

直人ｓｉｄｅ

「・・・どーしてこうなった？」

肩車にルミノ、左手にセレス、右手にシエルが手を繋いでいる。俺達は現在、クラナガンの街中を歩いている。

「父上は働きすぎです、今日は私達と遊んでください」

「そうそう！パパ！楽しい所に連れてって！」

「その通り、我らがいっぱい遊べるところだぞ！」

はぁ、まあ最近相手してなかったし、してあげるか・・・

「どこに行きたい？」

「ショッピングがいいです」

「ゲームセンター！」

「ボーリング！」

・・・どれか一つにして欲しいんだけど

「ショッピングなんていつもしてるじゃん！」

「ボーリングなど疲れてる父上には酷です」

「ゲームセンターなど父君の金を無駄にするだけではないか！」

と、喧嘩を始める三人。やれやれ、現在は9時か・・・

「わーった、わーった・・・全部回るから、順番にな？」

結局じゃんけんで順番を決めて『ゲームセンター』→『ショッピング』→『ボーリング』となった。最初にゲームセンターに入ると、すぐにルミノがお金を両替する。お金の大切さを分からせるためにいつもおこずかいはためるように言っているのだが、こういう場所に来ると3人はすぐにお金を両替に走る。しかしながらやるゲームはさまざまでシエルはシューティングゲーム、ルミノはＵＦＯキャッチャー、セレスはメダルゲームへと走る。まあ、別にそこにずっといるわけでもなくお金を配分して遊んでいる。

「元気なこった」

「父上、一緒にシューティングをしましょう」

「ああ、いいよ」

こうしてシエルと勝負するのだが、射撃魔法のサポートは全てメシアとマリカがやるので苦手だ。空中の敵を倒すゲームでクリアはするのだが得点に随分と差が出る。

シエル　得点　９８点　空戦ＳＳ

直人　　得点　８１点　空戦ＡＡＡ

・・・１７点も娘に差が開かれた。

「うふふ、父上はまだまだですね」

「みたいだな」

・・・今度練習しよう

「パパ！あのでっかいの取って～！」

と、今度はルミノが俺の服を引っ張る。そこにあるのは某ネズミ王国のぬいぐるみだ。大きさはそうだな６０センチくらいはあるだろう。昔アリサに取ってあげた犬のぬいぐるみよりでかい。

「こんなでかいのか？」

「うん！」

まったく、こいつも子供だな。あんまりお金を使いたくないのでメシアにデータを解析させる。

「（一番取りやすい確率は？）」

「（頭が４０％、胴体が５２％、引っかけて落とすのが３０％です）」

・・・世界一デバイスの無駄な使い方だけど、気にしない。正攻法で胴体を掴んで取るので一回２００円を3回目で取った。つまり使用料は６００円。

「わーい！パパ、ありがとう！」

「父君、次は我が欲しいのを！」

いつの間にか戻ってきたセレスが指差す。綺麗な時計だ。

「はいはい・・・」

この後シエルにはまた別のものをせがまれ、取ってあげるのだった。ちなみにお土産として大量にお菓子を取ることにした。またなのはたちに仕事押し付けてきちゃったし・・・

次はショッピングだ。こちらはシエルがリクエスト。どうやら欲しい服があったらしい。クラナガンにも地球の様なショッピングモールが多く、地球のブランドも数多く取り入れられている。ってことは、これ違法で扱ってるのか？

「・・・まあ今度しょっぴくとして、シエルは何が欲しいんだ？」

「夏用の服と、水着です」

水着・・・？

「この前母上に言うと、“スクール水着”というのしかないらしく・・・」

・・・・・スクール水着って

「僕もそう言われたー！」

「我に関してはそれさえもないらしい」

なんだか可哀想になったので、ショッピングモールの女性エリアに足を運んだ。とりあえず子供用の水着を選ぶ三人なんだが・・・

「父上、これはどうでしょう？」

と、ビキニを押しつけてくるシエル。いや、どうと言われましても・・・

「パパ！これはー！？」

きわどい水着を押しつけるルミノ。フェイトが見たら怒りそうなのでやめさせた。

「父君、これはどうだろうか？」

・・・なんでパッド重ねのやつ？そんなにはやてと似たくないのか

「そうそう、父上・・・こちらの方へ」

俺はシエルに引っ張られて水着コーナーから、アクセサリーのコーナーへと引っ張られる。

「ん？」

「これです」

と、指をさすのは透明な薄い紫の星のペンダント

「これが欲しいです」

どうやら昔なのはにプレゼントしたペンダントのことを知ったらしい。ルミノとセレスもウルウルした目でこちらを見るので、買ってあげた。シエルには今言った、星のペンダント（薄紫）で、ルミノは蒼い雷のペンダント、そしてセレスは黒い雪の結晶のペンダントだった。

この後、セレスご希望のボーリング場へと行くことになった。服だけでもえらい出費なのに、この後遊ぶってのも財布が寂しくなる一方だ。

「父上！勝負です」

「ほーう、負けないぞ？」

こうしてゲーム開始。じゃんけんの結果俺が最初になる。

「よっと」

投げた球は見事にピンへ当たってストライクとなる。

「おお！パパすごーい！」

「だろ？」

「よーし、次は僕だ～！」

言いながらルミノが投げる。これまた４、４で８ピン

「次は私ですね」

言いながらシエルが投げる。シエルは見事ストライクだ。

「我も負けんぞ！」

言いながら投げるのだが・・・

「へぶっ！」

一歩踏み出した瞬間、盛大にこけた。

「おいおい、大丈夫か？」

「あうぅ～父君～」

思いっきり顔をぶつけたのか、相当痛そうだ。鼻血は出てないし、問題はない。

「ほら、気を取り直して頑張れ」

「うむ、父君！」

こうして気を取り直すセレス。3、5と8ピンこの後もみんなは頑張っていた。結果的に総合で一位は俺、二位はシエル、三位と四位はルミノとセレスだった。

「ではお客さま方は3ゲームなされたのでくじ引きをどうぞ」

こうしてくじを引く俺達。俺は見事ハズレだった。

「では私が・・・えい！」

「僕も！」

「我もだ！」

クジの結果

シエル　一等　最新ゲーム機　P○3　120GB

セレス　二等　最新ゲーム機　P○P　3000

ルミノ　特賞　最新ゲーム機　W○iとゲーカセ3セット

・・・なんか俺、ゲームに勝って勝負に負けた気がする。ちなみにここの店長が泣いてたのを見てしまった。ご愁傷様です

この後商品のカセットがないシエルとルミノのために、電気屋に寄って勝った。なんだか知らんが、大量に買い込まされた。フォワードの分だのヴィヴィオの分だのと、コントローラーから何まで。今日だけでエライ出費だ。時刻は7時過ぎ。食事を終えた俺達は車に乗り、運転する。助手席にはその今日の荷物が大量に置かれ、後ろの席には三人が仲良く眠って座っている。

「・・・やれやれ」

『主、今日はどうでしたか？』

「ん？ああ・・・楽しかったよ」

まあ、出費はどえらいことになったけど。

『主、気が付きましたか？』

「ん？ああ・・・・こいつらには随分気を使わせたみたいだな」

今日一日、俺を気分転換させるために、あれやこれやと奔走してくれた3人。幸せそうに眠っているのをミラーで見る。

『確かに、少しだけ主は頑張りすぎです。ＡＮＯＴＨＥＲは強い・・・だからと言って、根気を詰めては意味がありません』

「・・・わかってるよ。今日の一件でな」

はぁ・・・俺は最近どうも回りが見えてないな。心配させてるのに気付いてやれないとか

『まあ、その頑張り屋なのは昔からですけどね』

「ははっ・・・そうか？相棒」

『ええ、とっても』

そんな会話をしながら、俺達は隊舎へと帰るのだった。隊舎に変えると、なのはたちがいた。

「ただいま」

「「「おかえり、あなた」」」

最近になってフェイトが慣れたようだ。

「ただいま戻りました、母上」

「にゃはは、シエル眠そうだね」

と、優しくなのはがシエルの頭をなでる。

「ママ～疲れた～」

「はいはい、荷物持ってあげる」

フェイトは言いながらぬいぐるみとゲーム機を持ってあげた。

「母君、我は限界だ・・・」

「もう、だらしない子やなぁ」

いいながらはやてもセレスを抱き上げる。ロビーに入ると、フォワードとヴィヴィオが迎えてくれた。

「パパ～！」

「ヴィヴィオ、ただいま」

「お帰り～」

そういえばヴィヴィオは今日はリオって子の家に遊びに行ったんだっけ？

「お友達の家はどうだった？」

「楽しかった～」

「そうかそうか」

言いながらヴィヴィオを抱き上げる。

「そうだ、お前らにお土産な」

「「「「わあ！」」」」

大量のお菓子に目を輝かせる４人。なのはたちもお茶を持ってきてお茶会をした。

「お前ら、こんなに食って太っても知らんぞ」

紅茶をすすりながら言う俺。

「「「「「「うっ！」」」」」」

それに反応するスバル、ティアナ、キャロ、なのは、フェイト、はやて、マリカ

「ま、いっか」

ヴィヴィオはヴィヴィオで買ってきた任○堂ＤＳでポ○モンに夢中だったりする。

「パパ！ミジ〇マル以外可愛くないよ！」

いや、知らんがな

「ヴィヴィオ？ゲームは一日一時間だよ？」

「はーい」

となだめるなのは。母親のいたがついてきた。まだ２０歳だよな、お前

「主、そういえばこの子たちのアクセサリーは？」

マリカが言うのは多分寝ている３人のペンダントだろう。

「ああ、なのは達のをみて欲しいっていうから買ってやった。ヴィヴィオと、お前らのもあるぞ」

ヴィヴィオには紅と緑が入り混じった長方形があるペンダント、スバルには蒼い翼があるペンダント、ティアナにはオレンジ色の〇に×が入ったのがあるペンダント、エリオには紅い十字架のペンダント、そしてキャロにはピンク色のイルカのペンダントだった。

「わあ！直人兄ぃ、ありがとう！」

「兄さん、大切にしますね」

「父さん、ありがとう！」

「パパ、ありがとうございます！」

「パパ！つけていい～？」

と、大喜びだった。解散して、部屋に戻って３人を寝かせた。今日は疲れたな。

「ねえあなた、私には？」

「私にはないの？あなた？」

「あなた？うちにもないんか？」

こいつらはこいつらでウルウルした目で俺を見てくる。

「・・・ほい」

なのは、フェイト、はやてに、それぞれ魔力光と同じ色をしたピアスをあげた。ぶっちゃけて言おう、今日だけで２０万近くの金額が飛んだぞ。

「うふふ、ありがとあなた」

「嬉しいよ、あなた」

「うふふ、あなたはやっぱりわかっとる♪」

「はいはい・・・」

こうしてみんなは眠りについた。俺は天井を見ながら思う。

（どうかこんな生活が、これからも続きますように・・・）

第五十四話「少女たちの戦い」（後書き）

秋風「はい、ということで日常でした」

直人「いいのか？ここに来て」

秋風「もう知ったことか！」

直人「あ、そ」

秋風「んでもってまあ、もうすぐ終わるね、これ」

直人「やっぱり？」

秋風「だってさ、もうマリア復活してるよ？」

直人「そりゃそうだけど、俺とゼオンにないのか？ソウルエレメント」

秋風「さあ？どうでしょうねぇ（ニヤリ）」

直人「もうやだ」

秋風「また次回～♪」

直人「次回、第五十五話『宣戦布告』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

第五十五話「決戦　それぞれの剣」（前書き）

超久しぶりの更新です。私自身が敵キャラの情報を忘れるほど二か月ぶりですが、どうか感想を！そして読んでください！

第五十五話「決戦　それぞれの剣」

今日も光の剣の隊舎は平和だった。静かに時は流れる。だが、その平和も・・・今日崩れることとなる。

直人ｓｉｄｅ

現在、俺は調査で発見された二つの宝玉を見つめていた。蒼と紅のソウルエレメント・・・魔力反応が小さく、発見が困難だったのだがこうして全てが揃っている。
桃色をなのは、金色をフェイト、白をはやて、水色をスバル、オレンジをティアナ、薄いピンクをキャロ、黄色をエリオ、紫をルーテシアが保有している。そして覚醒してソウルデバイスとして正常に起動していた。

「・・・・・さて、どうしたものか」

『主、あまり根気を詰めるとひどいですよ？』

「分かっているよ・・・ありがとな」

現在９月、あまりにも敵が動かない。これではまた一年が過ぎる。奴らの狙いはなんだ？

――ピー、ピー

「ん？」

地上本部の緊急通信だ。誰からだ？

『ワシだ！』

「レジアス中将？」

『現在クラナガンが攻撃を受けている！至急応援を頼む！』

「なんですって！？」

俺は立ち上がり、すぐに隊舎の中の警報を鳴らした。

『敵は得体のしれん白い化け物だ。魔力ダメージのみで死者は出ておらぬが、闇の使徒の動きと見て間違いない！』

「わかりました、なんとか持ちこたえてください！」

『主・・・』

「ああ、ＡＮＯＴＨＥＲが動いた！」

ＡＮＯＴＨＥＲ　ｓｉｄｅ

「・・・流石魔王と言ったところか」

「・・・・・・・・・」

私の問いに、彼女は答えない。だが解せないことが一つ・・・

「何故殺さない？」

「・・・・・我が、魔力・・・人を、殺すため・・・に、あらず」

「・・・・・・致し方ない」

カオスの媒体キメラと、通常のキメラ・・・さらにこいつの人形兵ならば敵の処理など容易い。

「ＡＮＯＴＨＥＲ・・・」

「どうしたリン」

「私、行かなくていいの？」

「ああ、リンはマリアを守ってくれ」

「うん」

リンは頷いて走っていった。

「さあ、管理局よ・・・復讐者達の協奏曲を楽しんでくれ」

直人ｓｉｄｅ

「ディバイン、バスター！」

「サンダースマッシャー！」

「蒼雷一閃！」

「彼方より来たれ、宿り木の枝・・・ミストルティン！」

現在、敵を殲滅中だ。だが、対して強くない。俺はユニゾン状態で戦う。

「こう戦うと、昔を思い出すな」

「うん、カオスと戦って以来だよね。防衛戦は」

言いながらスフィアを飛ばし、キメラの撃破をする。

「うりゃあああああ！」

すると遠くでアリスがキメラを吸収しつつ、別の敵を蹴散らす

「直人！てつ、だって！」

「わかった！契約の元来たれ、ケルベロス！」

魔法陣が光り、召喚される。

「久々に出番か・・・」

「ああ、アリスの援護を頼む！」

「よかろう」

そのまま俺達はフォワードとフォーメーションを組んで戦う。だが、一向に数が減らない。

「ティアー！減らないー！」

「わかってるわよ馬鹿スバル！クロスミラージュ、後どれくらい持つ！？」

『あと３０分です。魔力をもっと落としますか？』

「ええ、お願い！」

『マスター、ティアナを援護します』

「うん！行くよ！ウィングロード！」

「待てスバル！先行し過ぎるな！」

嫌な予感がする・・・

「大丈夫です！」

しかし、そんなことを言った直後だった。突然オーロラが結界が辺りを包む

「これは！？」

「しまった！」

それは分断だ・・・触れば焼けるほどの激痛が伴うだろう。キャロやエリオの結界と同じ・・・やはり来たか！

「久しぶりだな、井上直人・・・いや、蒼天の騎士」

「ＡＮＯＴＨＥＲ！」

そこにはＡＮＯＴＨＥＲと闇の使徒たちがいた。そして闇の使徒たちがそれぞれに散る。

「さあ、始めようよ・・・お姉さん」

「前みたいに、負けないよ！バルディッシュ！」

『ハイ、マスター！』

フェイトの前に、風王が降り立つ

「行くわよ？欠陥品の夜天の王さん？」

「誰が欠陥品や！この年増！行くでアイン！リィン！」

『『はい（です）！我が主！（はやてちゃん！）』』

はやての前に、氷統が降りる

「今ひとたび、勝負！」

「行くわよスバル！クロスミラージュ！」

『オーライ！』

「うんティア！マッハキャリバー！」

『オーライバディ！』

スバル、ティアナの前に、影斬が降り立つ

「さあ、できそこないの坊やたち、遊びましょ～！」

「行こうキャロ！ストラーダ！」

『はい、マスター！』

「うん！エリオ君！ケリュケイオン！フリード！」

『もちろんです、マスター！』

「キュク！」

ピエロの前に、構えを取るエリオとキャロ、そしてフリード

「さて・・・決着とやらを付けるのですか？」

「貴様を殺そうとは思わない・・・だが、お前を許すわけにはいかん！フレイムイーグル！」

『イエス、マイロード！』

ゼオンが剣を構える。その決意に満ちた目は、前の復讐の目とは違っている。そして、俺となのは、アリスの前に現れたのは・・・

「決着を付けるぞ！ＡＮＯＴＨＥＲ！行くぞみんな！」

『もちろんですよ、主』

『我が主！行きます！』

『マスター、全てに決着を！』

「いいだろう、そこの娘達ともども、相手をしてやる」

「ＡＮＯＴＨＥＲ！貴方を逮捕します！レイジングハート！」

『オーライ、マイマスター！』

「全部決着付ける！この世にキメラも私も存在したらいけないから！」

こうして、俺達の戦いが始まった。

一方の光の剣

ヴィヴィオｓｉｄｅ

「はやてちゃん！直人君！応答してください！」

シャマルさんが必死に念話を送っている。今この隊舎はしゅうげきされている。

「っく！非戦闘員は退避しろ！」

ザフィーラが人型になって戦う。でも怖いのはいっぱいいる。

「ＩＳライドインパルス！」

「ＩＳツインブレイズ！」

「ＩＳレイスストーム！」

「おらあああっ！」

「なんばーず」のみんなが戦うけど、すごく疲れてる。

「っく！なんだよこの数は！」

「セイン！ディープダイバーで直人の所へ行くのよ！」

「あ、あたし！？」

セインさんが驚いてる。

「直人と連絡を取れないということは、前線に何かがあったということだ！行け！」

「うん！」

こうしてセインさんが消える。

「シグナム、行くぞ！」

「ああ、トーレ！」

「姉達も行くぞ！ザフィーラ！いいな！」

「うむ！心得た！」

シグナムふくたいちょーと、トーレさん、チンクさんとザフィーラが一気に突っ込む。すごーい・・・

「ヴィヴィオ、今のうちに逃げるわ・・・・・・ウーノ、ドゥーエ、クアットロお願い！私も援護に回るわ！」

「わかりました。ヴィヴィオ、こっちよ」

「仕方ないわね・・・戦闘力で考えても」

「ま、三十六計逃げるに如かずですわ、お姉さま♪」

こうして、私はウーノさんとドゥーエさんが私を連れていくことになりました。

スカリエッティＳｉｄｅ

私は現在、隊舎に来るキメラを見ていた。やはり美しくない・・・

「私がこれをするかもしれないというのは・・・本当に不愉快だ」

「ドクター、まだ？」

「ああ、大丈夫だよディエチ、ぶっぱなしたまえ」

「分かった・・・イノーメスカノンＶ２・・・発射スタンバイ」

『オーライ！』

イノーメスカノンが答える。私の改造でデバイスになったイノーメスカノンがエネルギーをチャージする。

「さて・・・これは管理局のためではない。私と彼の友情の花火だ！」

「・・・一応、撃つのは私なんだけど、ブラスターカノン！ディスチャージ！」

『３、２、１、Ｌｅｔ’ｓ　ｐａｒｔｙ！』

ディエチが引き金を引く。それによって周囲の敵が消えて行く。

「ふふふ・・・もし事件を起こしていたらこれを完成させる時間がなかったからな。素晴らしいものだ！」

さあ、どんどん行こうではないか！

ルーテシアｓｉｄｅ

「ガリュー！地雷王！お願い・・・！」

私は別の場所でセッテやウェンディと戦う。

「お嬢様いたらうちら意味ない気がするっす・・・」

「そうでもない・・・みんながいないと困る」

私が言うと、ウェンディは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そりゃ嬉しいっす。昔じゃ聞けなかった言葉っすね」

「そう、かな？」

「そうですね、お嬢様・・・私もでしたが、昔は色々アレでしたので」

そんな冗談交じりに話して戦うと、増援が来る。

「さーて、祭りッス！ライディングボード！」

『オーライ、相棒火力はどれぐらいだ？』

「うちの性格わかってるはずっす！」

『ヤーハー！フルパワーだ！ＭＡＸチャージ！』

ウェンディのデバイス、性格凄いことになってる。

「行きます・・・」

『オーライ、マイマスター』

セッテのデバイスはご主人似だね・・・・・っと、私も負けてられない、かも

「いっきに行こう・・・」

「了解っす！」

「はい」

こうして私はスフィアを展開する。これなら・・・

「ガアアアアアアアアアアアアアアッ！」

突然だった。背後から、私へキメラが襲いかかってきたのは

「お嬢様！」

「しまっ・・・」

防御、間に合わな・・・

「アクス・・・」

「潰せ、フレイムライザー」

『イエス、マイブラザー』

突然、私の回りを炎が取り囲み、バリアーの様に広がった。ウェンディとセッテが唖然とする。そして私の前に現れた人物を見て驚いた。そこにいたのは・・・

「フィアマ・・・」

前とは違う炎帝が、私の前にいた。

第五十五話「決戦　それぞれの剣」（後書き）

秋風「まさかの、久しぶり更新だよ」

直人「お前、リオスの番外編はどうした」

秋風「まあ落ちつけ。もうちょっとだ」

直人「そんなんでコミケも間に合うの？」

秋風「だまらっしゃい！」

直人「とりあえずここから超戦いばっかりです」

秋風「作者の私のネタと、気力が続く限り頑張ります」

直人「冬コミも間に合わせろよ」

秋風「わかってるよ！」

直人「次回、五十六話『雷光ＶＳ風王』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

秋風「ちなみに今回出て来たウェンディ、ディエチのデバイスと、フィアマのデバイスについては←の通りです」

イノーメスカノンＶ２
イノーメスカノンの改良型。なのはの砲撃、フェイトの砲撃を参考にエネルギーを切り変えたり、散弾や鉄甲弾、多重スフィアを完備した最高傑作。攻撃面で中距離、接近に弱いディエチのために中距

離支援用の銃と、短剣が追加装備となっている。さらになのはの使用するビットも完備した。ＣＶはｌｅｔ，ｓ　ｐａｒｔｙのあの方

ライディングボードＶ２
ライディングボードの改良型。前作のライディングボードよりもスフィア発射数が増えている。射撃制度も的確で威力もだいぶ向上している。さらに今まで火力不足だったライディんグボードのカノンの威力も大幅に上昇した。
ＣＶはもちろんジャックポッドなあの方

ブーメランブレイドＶ２
ブーメランブレイドの改良型。前作よりもブーメランの飛距離、威力が向上している。さらにビーム状の刃が出ることで攻撃範囲が飛躍的に広がっている。前作の欠点であった狭い場所での戦闘においては小型のブーメランを８つ仕込んでおり、それを取り出して攻撃をすることができる。
ＣＶは飛来骨なあの方

ということです。ＣＶはもう大体分かるでしょう。ちなみにこれらはＶｉＶｉｄとＦｏｒｃｅを見ている人へ補足すると４年後に登場する彼女達のデバイスのプロトタイプにあたる。性能はＶｉＶｉｄとＦｏｒｃｅよりも若干の劣りがある。しかしながらその差はわずか５％となる。

第五十六話「雷光ＶＳ風王」（前書き）

なにやってんだ俺は・・・宿題を終わらせず、冬コミを終わらせずに連続投稿とか・・・ま、ネタが出た以上走り続けるのは小説家の本能かｗ

では、どうぞ！感想バンバン待ってます！

第五十六話「雷光ＶＳ風王」

フェイトｓｉｄｅ

私の前には今、かつて私と直人を圧倒したノワールがいた。

「やあお姉さん・・・久しぶりだね」

「・・・ノワール、貴方を逮捕する」

「逮捕？ははっ・・・正義の味方を気取るんだ。管理局の闇を知っても」

「・・・・・・」

確かに、管理局には大きな闇を持ってる。でも・・・違う

「確かに、管理局には大きな闇があり・・・それを否定はできない」

「ほら、やっぱり・・・「でも」！？」

「だからこそ、直人のようにそれをただし、それによって救われる人もいる」

そう、私は救われた。だからここにいて、彼を愛した。だから私にとって・・・

「管理局の闇がそれなら・・・直人は、光・・・だから私は、彼の傍にいて、正義のために戦う！」

「やれやれ・・・あなたも人が良すぎる。貴女はどんなに言おうと、こちら側の人間だというのに」

「どういう意味・・・？」

私の言葉に、ノワールは笑う。

「だって、プロジェクトFで生み出された貴女が、そちら側にいることはおかしいと思わない？」

「！？」

どうして、それを・・・

「どうして、それを知っているのか？そう思ってる」

「・・・・・・」

「答えは簡単・・・まあ、秘密裏のことだから知らないだろうけど」

「まさか・・・」

そんな・・・もしかして・・・

「そう、僕も『プロジェクトF』によって生み出された個体さ」

「！！」

「もっと言うと・・・僕は『プロジェクトF』ナンバー１０・・・

管理局が誇ったクローン兵器の完成型。通称『パーフェクトウェポン』さ」

パーフェクト、ウェポン・・・

「貴女母、プレシア・テスタロッサとジェイル・スカリエッティが開発、完成させた技術。管理局が得ないはずがない。そしてその結果・・・その計画で依頼と実験を重ね合わせて誕生したのがあそこで戦う『エリオ・モンディアル』だ」

「エリオが・・・」

「おかしいと思わないかい?彼は元々家族が息子のクローンを欲しいがまま作り出された。なのにわざわざ魔力変換資質を組み込まれて誕生したんだ。管理局関係者が絡んでもおかしくない」

ノワールが言うことは最もかもしれない。確かに見落としていた。あの子が、そういう実験に関わっているかもしれない。だからこそ家族が拒んだのかもしれない

「来るといい、こちらに・・・そして、共に管理局を討って真の正義は誰なのか・・・教えてやろうじゃないか・・・姉さん」

「姉さん・・・?」

「そうだよ、最初にプロジェクトFとして完成した・・・第一号、フェイト・テスタロッサ」

「・・・・・・・・・」

私は・・・

『サー！』

「バル、ディッシュ？」

『何をしているのですか！しっかりしてください！』

「で、でも・・・」

私は、どうすれば・・・

『サー、貴女は忘れてしまったのですか？彼との・・・直人との誓いを！』

――大丈夫だ、ずっと傍にいる

そうだ、私は・・・直人と約束したじゃないか

４カ月前　結婚式の一ヶ月前

「・・・っ！」

久しぶりに見た・・・私が母さんに鞭でぶたれ続ける夢を・・・私が絶望した、あの事件を・・・

『サー？どうかいたしましたか？』

「ううん・・・なんでもないよ、バルディッシュ」

『そうには見えませんが・・・』

「・・・ちょっと、外で空気を吸う」

そう言ってバルディッシュを持って外へ出る。ミッドチルダで借りる、管理局員用の住宅。現在は直人、なのは、はやてと共に、そこで暮らしている。一緒だけど、今日は直人としか寝ていない。なのはとはやては残業だし・・・

「はぁ」

『サー・・・』

「バルディッシュ・・・私駄目だね・・・どこまで行っても、幸せを掴めない」

『そんなことは・・・』

「直人と出会って、直人は私を救ってくれた。でも、私自身・・・踏ん切りがつかない」

過去は、変えられないし、変わるものではない。過ぎてしまったことは取り返しはつかない。

「私・・・心のどこかで生まれたことを後悔している」

『・・・・・・・・』

「プロジェクトFで生まれて・・・母さんを死に追いやって・・・

そしてエリオや、いろんな子を見て来た・・・」

だからこそ、私は幸せになる権利はない。

「だから私は・・・」

「・・・フェイト」

「!?」

後ろを振り向くと、コートを羽織ったパジャマ姿の直人がいた。

「直人・・・」

「どうした、こんな寒い時間に」

「・・・・・聞いてたの?」

私が言うと、何も言わないで私の横にいた。

「なあフェイト、覚えてるか?」

「え?」

「中3で管理局の試験を受ける時の筆記勉強」

「え?あ、うん・・・直人、すごく覚えるのが遅くて、何度も同じ所をやった」

「そうそう・・・で、お前が怒ったけど実際間違ってたのはフェイ

トだった」

「そ、それは・・・私がうっかり・・・」

直人はクスクスと笑っていた。

「その後の祝勝パーティはお前が酒飲んで大変なことになったよな」

「うぅ、なんでそこまで覚えてるの・・・」

そう、その後のパーティで私は酒を飲んでべろんべろんになってしまった・・・らしい

「なあフェイト?」

「何?直人」

「俺さ、前にも言ったけどスカリエッティに感謝した」

「うん、聞いた・・・」

「あいつがいなきゃ、俺はフェイトとエリオに会えなかった。その方が俺は不幸だ」

「・・・・・・・・」

私は何も言えなかった。どうして、直人はそんなことを言うのか理解できなかったから

「プロジェクトFがなければお前と今こうして、話すことも、一緒

にいることもできない」

言いながら、私にコートをかける。そして、私の頬に触れた。

「もう自分を許せよ、フェイト」

「え・・・」

「お前はプロジェクトFで生まれた自分に後悔したんじゃない。恨んでいるんだ。他人のために、お前の優しさゆえに、恨んでいる」

「・・・！」

そんな・・・私は・・・

「だからもう、これ以上自分を苦しめるな」

「だって・・・私は・・・」

ボロボロと、涙がこぼれる。すると、私の涙を拭って抱きしめてくれた。大きな腕が、私
を包み込んだ。

「俺が傍にいる。ずっとそばにいて、幸せを作ってやる。幸せを守ってやる。だから・・・生まれて来ないほうが良かったなんて、そんなこと言うな・・・」

「うっ・・・ううっ・・・直人・・・うぇぇぇ・・・」

私はその晩、ベッドの上で直人に抱かれ、泣き続けた。

回想終了

そうだ・・・私は・・・

「さあ、こっちに来なよ姉さん・・・僕たちと一緒に・・・」

「で・・・」

「え?」

「私を、姉と呼ばないで!」

私はスフィアを飛ばし、ノワールに攻撃する。

「なんでさ、僕は真の平和を見せてあげるんだよ?幸せを掴めるんだよ?」

「平和と幸せなら・・・もう、私は持ってる!直人と作り上げて、守っていく!」

「・・・人がせっかく言ってるのに、しょうがないな」

その瞬間、ノワールの表情が変わった。

「死んでも知らないよ?」

風が渦巻き、フェニックスが槍になる。前に見たときより黒く淀ん

でいて、見ているだけで吐き気がする。どれだけの人の負を取りこんだのか・・・

「私は、負けない。バルディッシュ！」

『ネオ・ソニックフォーム』

私はソウルインからネオ・ソニックフォームになる。

「行くよ、バルディッシュ！」

『イエス、サー』

「はあああああああっ！」

「があああああああっ！」

私とノワールの武器がぶつかり、火花が散る。その攻撃と特性は今までだったら負けていたかも知れない。アリスや、直人の特訓がなかったら一瞬で負けてたかもしれない。

「バルディッシュ！」

『ロードカートリッジ』

「はあああああああっ！」

『ネオ・ライオットブレード』

私はライオットブレードでノワールを斬りつける。

「この女ぁ！」

その鋭く速い突きを紙一重でかわす。しかし体の所々をする。そのたびに色々な人の負の感情が私の中へと流れ込んでくる。

「っく・・・！」

「あはははは！これを喰らって闇に落ちちゃえ！」

「落ちない！私には、光がある・・・直人がいてくれるんだ！」

『ロードカートリッジ』

自分の最後の限界分をロードする。この一撃で、決めるしかない！

「疾風迅雷！」

『ジェットザンバー』

「ぐあああああああああああああああああああああああっ！」

ノワールが悲鳴を上げる。最大魔力で放ったジェットザンバー・・・やっぱり痛いよね・・・でも・・・

「私は、貴方を救うから・・・きっと・・・貴方にも、光を・・・見せて・・・あげ・・・」

そこで、私は限界を超えて気絶した。

優しき雷光　フェイト・F・井上　ＶＳ　風王　ノワール

勝負結果　引き分け

第五十六話「雷光ＶＳ風王」（後書き）

秋風「ということでフェイトＶＳノワールでした」

直人「このノワールの設定は最初からこうだったの？」

秋風「というかね、今回プロジェクトＦの概念が凄いからんできて大変だった」

直人「原作では色々と苦しめられたからな」

秋風「過去は変わらないし、変えられないから・・・」

直人「今回は結構回想がまともだったな」

秋風「でしょ？今回凄く頑張って書いたよ。てか、この後さ・・・ルーはともかく、ソウルエレメント保有の決闘グループの回想なかなか辛いよ？」

直人「いつも突っ走って書いてるお前ならどうとでもなるだろ。むしろ、どうとでもなれ」

秋風「ひどい！？」

直人「次回、第五十七話『夜天ＶＳ氷統』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

秋風「無視して締めた！？」

第五十七話「夜天ＶＳ氷統」（前書き）

はい、お久な更新です！

で、今回皆さんにお知らせです。冬コミの参加が確定しました！

３日目　東地区　キのブロック―４５です！大通りなのですぐ見つかると思います。ちなみにサークルでの参加となってます。名前は「Ｐｏｌｙｃｊｈｒｏｍｅ」です！

その場所で秋風という人はいますか？と聞けば、私しかいないのでそこで呼んでください！他の作家の方、そして読者の方とお会いしたいと思っております。

では、長くなりましたが本編どうぞ！

第五十七話「夜天ＶＳ氷統」

はやてｓｉｄｅ

うちは今、前に負けそうになった女の前にいる。そう、あの女・・・氷統のリーヴァ

「できそこないの欠陥品が・・・私に勝てるかしら？」

「そんなもんやってみな分からへんで、この年増」

「と、年増ですって！？このガキ・・・！」

『わ、我が主・・・気を付けないと来ますから・・・』

ちゅうても、うちはガチンコでぶつかるの苦手なんやけど・・・

『我が主、幸い空と結界は大きいです。ならいけるはずです』

「おっしゃ、ほな行くで！」

「来なさい！」

「『穿て！ブラッディダガー！』」

うちとアインの声でスフィアが飛ぶ。しかし、リーヴァはそれを避けてスフィアを出現させた。な、なんちゅー量や・・・

「散りなさい！」

『我が主！』

「分かってる！」

うちはすぐに防御陣を展開してそれを防ぐ。やっぱり殲滅型のうちは辛い・・・

『リィン・・・頼めるか？』

『はいです！お姉ちゃん！』

『我が主、一度ユニゾンアウトします』

やっぱりそれしかない・・・か

「アインス！頼むで！ユニゾンアウト」

アインスがユニゾンアウトする。本は予備として二つ作ったので、私は通常のバリアジャケット装備となる。

「はあああああああああっ！」

「っく！この程度で負けないわよ！」

リーヴァが凍りの槍を取り出し、接近戦を仕掛ける。驚いたことに、アインスを上回る槍技を見せるリーヴァ

「ぐっ・・・」

「甘いわね・・・私がビーストデバイスに頼る人間に見えるかしら？」

「・・・それ以前に、その体は・・・」

アインスが声を漏らす。その、体？

「そうよ！私の体はあらゆる所を弄られた！人間として生きて行くにはあまりにも無理な体にね！」

そう言ってリーヴァが上着を取った。下着だけになった彼女の体・・・

「そ、それは・・・」

うちから思わずそんな声が漏れた。右手は知っている。第３の目があることを。だがそれだけではなかった。右腕には何か、赤ん坊の顔が４つか、５つ埋め込まれている。左肩には龍の顔・・・そう、大きさはフリードくらいか・・・そして左手やおなかの部分にも、動物の体の一部が見えた。

「驚いた？私の体には今、２０人の胎児や幼児、３０匹の使い魔が体に宿っているわ」

「なん、やて・・・？」

「私は戦争が絶えないある世界で、瀕死の状態で管理局の研究員に拾われた。その時は神に感謝したわ。このくだらない世界から助け出してくれた・・・とね。でも、私はすぐにそれを恨んだわ」

ま、まさか・・・

「そう！私は助けられたのではない！実験動物（モルモット）として拾われたのよ！」

「そんな、ことが・・・」

「体を弄られ、生まれて間もない能力のある胎児、戦争で拾われた能力のある幼児が次々と私の体の中に入っていった。生まれて間もない子供の悲鳴、幼児たちの叫び声・・・貴方は聞いたことある？使い魔の悲痛の雄たけびを、聞いたことがあるかしら？そしてその結果私はあらゆる能力を手に入れた・・・かのように見えたわ」

見えたって・・・どういうことや

「私はその時あらゆる能力を手に入れていた。五代元素を操り、動物を操り、あのエースオブエースのような砲撃を無限に耐えられる体になり、私は文字通り『人間兵器』になったわ・・・

「人間、兵器・・・」

「だけど・・・そう、最後の胎児を入れたのが管理局の研究員のミスだったのよ」

「え・・・？」

「その子供の能力は『魔法除去』わかる？全ての魔法を無効にする。これによって私は無敵になるはずだった・・・でも、その子の魔法を使う才能は乏しかった故、暴走が起きた」

暴走って・・・

「その拒絶反応が起き、私のその植えつけられた『稀少技能』は全て消え去ったのよ！」

「！？」

「そして残ったのはこの体に苦しむ私、埋め込まれた生命・・・それによって研究所は破綻し、私は処理対象となった・・・わかる？管理局は私を弄り続け、そして最後はゴミの様に破壊しようとした！私に神は降りて来なかったけど、私には死神が降りてくれた。」

――世界に復讐を果たさないか？

「私は嬉しかった・・・生まれて初めて手を差し伸べてくれた！生まれて初めて人に抱きしめてもらえた！こんな体で！こんな姿で！だから私はＡＮＯＴＨＥＲのために戦う！ＡＮＯＴＨＥＲのために管理局を破壊し、世界を変える！」

リーヴァが言う。管理局の闇が、ここまでひどいだなんて・・・

「・・・・・・」

「貴女は？」

「え？」

「貴女は何故戦うのかしら？管理局のため？それとも自分自身のためかしら？」

うちは・・・うちは・・・

――俺達は、きっと幸せだな

「・・・！」

「あら、答えられないのかしら？それとも、何を信じていいのか分からない？」

「・・・る」

「は？」

「うちにだって、守りたいものくらいある！」

結婚から　二ヶ月後

「ん～・・・お休みは久しぶりやねぇ」

「そうだな・・・やっぱりのんびりできるのは悪くない」

「それ、前にも言うてへんっかった？」

「どうだろ」

二人で笑いながらクラナガンを歩く。光の剣が出来て間もなくの、二人きりでの休日

「この前は急だったしなぁ」

「そやねぇ・・・あ、今日はどこ行こか?」

「うーむ、同じところを何度も行くのもなぁ」

うちと二人で歩きながら考える。すると、何か視線を感じた。そこにいたのはグラサンと帽子とマスクと言うなんともまあ見るからに怪しい人物達。明らかに見たことがある連中やった。

「・・・・・・・・・」

「ん?どーしたはやて」

で、直人君はまったく気づいとらんし

「・・・よぅし」

うちは直人君の手を握り、走り出す

「行くで!」

「はっ!?ちょっとはやて!」

「目的地はいらへん!とにかく行くで!」

こうして、うちは直人君とクラナガンの街を走り抜けた。

この後うちらは食事をしたり、買い物をしたり、ゲーセンに行ったり、気ままに、その時の気分で行動し続けた。

「は～・・・疲れた・・・」

うちらは今、公園のベンチに座っている。

「でも、楽しかった」

「だな・・・でもはやて、どうしてそんなに走ったりしたんだ？」

「ああ、それはやなぁ・・・」

うちはスフィアを浮かばせ、草むらに発射した。

「せい！」

「！？」

すると、そこからシグナムたちが出て来た

「シグナムさん！？アインスさんにシャマルさん・・・ヴィータまで！？」

直人君が驚く。まあ、当然やろうな

「まったく・・・撒いたと思うたらしっかりついて来て」

うちは立ち上がってみんなを見る

「主はやて・・・これはその」

「えーと、ごめんなさいねはやてちゃん」

「す、すみません我が主」

「デートを監視するなんてええ度胸やないか」

そう、今日一日うちと直人君を監視していた。

「ど、どうしてみんなが・・・」

「その、だな・・・お前と主がどのようにデートするのか気になるとアインスが」

「待て将!最初に言いだしたのはシャマルだ!」

「ええ!?みんな賛成したじゃない!」

などなど、言い争う。もはや怒りを通り越して呆れてしまう。うちがため息をつくと、直人君は笑っていた

「どうしたん?直人君」

「いや・・・・・みんなはやてを思ってるんだから、許してあげたら?って」

「それはそやけど・・・」

「はやては今、俺の家族だ。だから、はやての家族は俺達の家族・・・こんだけ賑やかで楽しくて、俺達はきっと、幸せだな」

直人君の言葉に、自然の笑みがこぼれる。みんなもそうやった

「せやね、その通りや」

「じゃ、帰ろうか。みんなが待ってる」

直人君が言いながら買い物の荷物を持つ。うちらを夕焼けが優しく見守っている気がした。

回想終了

せや・・・あの笑顔を、あの温かさを・・・家族を、守るんや

「うちは、みんなの幸せを決して手放さん！守り通す！」

「そんな薄っぺらい幸せなんて、ぶち壊してあげるわ！」

「なめんなや！うちと直人君、なのはちゃんとフェイトちゃん！そして子供たちの未来のためにも、ここで負けるわけにはいかんのや！」

スフィアを飛ばして弾幕を張り、魔法陣を展開した。

「うちは絶対、負けへん！」

本を開き、詠唱する

「遠き地にて、闇へと沈め！デアボリック・エミッション！」

デアボリック・エミッションが発動し、広域魔法が周囲を包む。しかし、リーヴァも一筋縄では倒れない。

「魔力大解放・・永遠の氷河よ！全てを死に誘え！アイス・エイジ！」

闇の広域魔法と氷の広域魔法が激突する。それでも結界が壊れないのは驚きや・・・でも、それでも・・・負けへん！

「くううううっ！」

「はあああああっ！」

爆発が起き、相殺が起きる。でも、これじゃ終わらへん・・・

「そうやろ！アインス！」

「はい！我が主！」

いつの間にかアインスがうちの傍を飛んでいた

「「ユニゾン・イン！」」

リィンとの多重ユニゾン・・・ソウルエレメントの力だからできる力

「っく・・・この程度で―」

「これで終わりや！」

再び魔法陣が展開され、うちは再び詠唱する

「響け、終焉の笛！」

目の前に魔法陣が展開され、うちは叫んだ

「ラグナロク！」

ラグナロクが発射され、それが一直線にリーヴァに向かって行った。

「あああああああああああああああっ！」

そして爆発と光がリーヴァを包み込んだ。

「や、やった？」

煙で辺りが見えない・・・

『気を抜かないでください、我が主』

「うん、わかっとる」

うちはゆっくりと降り立ち、そのラグナロクが落ちた場所を見る。

そこにはまだ、人影があった。とっさに身構え、煙が晴れるのを待つ。煙が晴れると、そこにはボロボロで立つリーヴァの姿があった。

「・・・・・・」

「まだよ・・・まだ、終わってない」

『はやてちゃん・・・あの人から、もう魔力を感じないです』

それは、うちもわかる

「私達は変えるのよ・・・世界を・・・真の、平和へ・・・・」

「勝負はついたで・・・もう、やめや」

「違う・・・私は負けない・・・私は・・・私は・・・」

一歩、また一歩、ボロボロの体で、おぼつかぬ様子で歩いてくる。

槍を途中で落とすのも気づかず、槍を構えたように歩き、私の元へ歩いてくる。

「私は・・・世界を・・・ＡＮＯＴＨＥＲと・・・」

そこで崩れ落ちる。

「・・・・・・・・・」

『我が主・・・』

「・・・リーヴァも、管理局の闇の犠牲者や」

うちはリーヴァを寝かせる状態にする。

「もしかしたら、うちも間違えたらこうなってたかもしれへん・・・」

だからこそ・・・

「今は静かに眠りや・・・リーヴァ」

結果

最後の夜天の主　八神はやてＶＳ永遠の氷統　リーヴァ

勝者　八神はやて

第五十七話「夜天ＶＳ氷統」（後書き）

秋風「ということで久しぶりに更新です」

直人「おそすぎるだろ」

秋風「しょうがないだろ、冬コミまで時間ないんだから」

直人「で？完成度は？」

秋風「線書きは終わった。後はあれだ・・・ペン入れと色塗り」

直人「はやくやれ」

秋風「ごめんなさい」

直人「ちなみに冬コミのやつは？」

秋風「うん、冬コミは３日目、東　３－キ４５Ａです」

直人「なんとお誕生日席！」

秋風「大通りなので見つけやすいと思います。是非来てくださいね！」

直人「次回、第五十八話『鋼の走者、流星の射手ＶＳ影斬』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

外伝「主人公設定」（前書き）

えーと、リクエストにお答えして
直人の現在の状況を教えます

外伝「主人公設定」

井上直人

２０歳

時空管理局本局勤務　一等空佐　現在、闇の使徒対策特別部隊「光の剣」の部隊長

髪の毛　短髪の黒　イメージはそうだな・・・衛宮士郎とキョンを足して割った感じ（分かりにく！？（。□。

目の色　黒かかったブラウン

家族　姉　妻３人　息子１人　娘５人　ユニゾンデバイス２人

名前の由来　偉人事典で適当にチョイス（おい

デバイス　メシア　ブレイブスワロー　マリカ

基本使用魔法　古代ベルカと現代ベルカのハイブリット式

魔力ランク　通常時　　Ｓ－
　　ユニゾン状態　　ＳＳ
　　デバイス複合時　ＳＳＳ＋＋
　　聖王魔力覚醒時　測定不能

得意とする魔法　魔力付加の剣技

苦手とする魔法　射撃魔法（ただし、ユニゾン状態なら問題ない

好きな物　蒼天に舞う騎士参照

嫌いな物　→に同じ

今夢中になっていること　育児

今悩んでいること　妻の積極性　妻のＦＣと自分のＦＣへの対処
ドゥーエの迫り

安らぎの時　子供たちと静かに昼寝

外伝「主人公設定」（後書き）

こんな感じですかね？

暁　零さんを始め、他の読者の方も知りたいことがあったら感想と一緒にバンバン送ってください。でわｗ

第五十八話「銀の走者　流星の射手ＶＳ影斬」（前書き）

コミケの提出日まで時間がないのに書いてます。ほんと、何してんだろ

みなさん、コミケで会おう！

第五十八話「銀の走者　流星の射手ＶＳ影斬」

ティアナｓｉｄｅ

私とスバルの前にいるのは、あの男・・・影斬

「ふっ・・・またむざむざとやられに来るか・・・笑止」

「この前の私達と思わないほうがいいわよ？」

私はクロスミラージュを構えながら言う。スバルも戦闘態勢に入る。

「人は３日あれば変わるという・・・あれから数カ月！貴殿らの力見せて見ろ！」

影斬が駆け出し、スバルも駆け出す。

「スバル！」

「うんティア！」

スバルとの作戦はいつも通り。でも相手は闇の使徒の一角・・・慎重にことを進ませなきゃいけない。

「でああああああああっ！」

「おおおおおおおおおっ！」

既に最初からビーストデバイスを纏った影斬と、ソウルエレメント

を携えて戦うスバル。私は私にできることをする。

「クロスミラージュ」

『オーライ、シルエットオン』

シルエットを展開し、スバルをその中に混ぜ込ませる。

「ふっ・・・この間と同じ戦法か・・・笑止！」

翼を広げると、そこから不快音が鳴り響いた。

――――――――――――――――！

その音によって地面が割れ、私達も振動で吹き飛ばされる。

「きゃあああ！？」

「ううっ・・・」

影斬にまだ一撃も入れられない・・・どうすれば・・・

「その程度か、管理局・・・」

「まだに、決まってんでしょ・・・」

「そうだよ・・・まだ、まだ！」

私達は負けられない。世界のためなんかじゃない、私達の未来のために、みんなのために・・・

「ふっ・・・さすがはクイント、そしてティーダの身内・・・か」

「「!?」」

あの男、今・・・なんて!?

「なんだ、疑問に思わないのか?拙者がお前達の攻撃パターンを読み、完全に見切っているのを」

「なん、ですって・・・!?」

「貴様ら二人の血・・・断たねば拙者、死にきれんのだ」

「どういうこと・・・!?」

この男、兄さんや、スバルのお母さんとどういう関係に・・・!?

「いいだろう、教えてやる・・・」

言いながら影斬は上着をめくった。そこにあるのは腹の傷・・・って、晒し?

「あんた、女だったの!?」

「拙者は女を既に捨てている・・・そのようなことは無意味。そしてこの傷は、クイントとティーダ・・・あの二人のいた部隊に傷を付けられたものだ」

おかしい・・・兄さんは空の人間であり、クイントさんは陸・・・

捜査が同じにならない限り、一緒に戦うことなんてありえないのに・・・

「拙者は・・・いや、私は元々時空管理局に勤める人間だった。時空管理局隠密部隊・・・当時最強と言われた影の部隊」

聞いたことない・・・隠密部隊？

「主に反管理局世界の制圧、穏健派の抹殺と言った任務を背負っていた。だが、そこに上層部の穏健派から過激派へメスが入った」

つまり、検挙ってこと・・・？

「当然過激派の下にいた我々は検挙される・・・検挙されることを恐れた我々はその部隊を後に、犯罪者のレッテルを張られて逃走を続けていた」

「もしかして、お母さんは・・・」

「そう、我らを逮捕するつもりだったようだ。その時ともにいたのが空士ティーダ・ランスターだ。一度は彼に憧れた私だ・・・迷いもあった。だがもはや、そんなことを考えている余裕もなかった。クイント・ナカジマの必死の投降の呼びかけと、ティーダの存在によって隙が生まれ、私は別働隊の狙撃を喰らい渓谷へと落ちたのだ」

傷から見て、あれは質量兵器・・・兄さんやクイントさんがそんなものを使うとは思えない。

「ランスター、気がついたようだな・・・これは『私の仲間』が撃ったものだ」

「「！？」」

なん、ですって・・・！？

「逮捕を恐れたのか、投降した仲間が使った質量兵器を受けて谷底へ落ちた・・・そして私は瀕死の重傷を負った」

言いながら、影斬は服をしまって構えを取った。

「瀕死の重傷から一命を取り留めてから数年後、私は管理局へ復讐をしようとした。あるテロリストグループにまざって・・・だが、そこでも裏切りが起きた。内通者がいた」

「内通者・・・」

それによって私達は全滅した。そこで出会ったのが・・・

「ＡＮＯＴＨＥＲ・・・」

「そうだ、銃弾の雨を浴び、最早死が目前だった私を救ってくれた。そして彼はこう言った」

――お前は、俺の陰にならないか？

「私を救い、必要としてくれる。裏切りなどない・・・新たな世界と秩序！それをもたらすのがＡＮＯＴＨＥＲだ！貴様ら管理局の様に裏切りを持たぬ！」

私は何も言えなかった。管理局の闇・・・それがこんなにも人を不

幸にしていく。スバルも同じ思いなのか、何も言えない。

「行くぞ、愚かなる管理局員・・・全てを散らして逝くがいい」

・・・っく！

「して？」

スバルが、小さく呟いていた気がした。

スバルｓｉｄｅ

わからない・・・分からない分からない！あの人の考えが分からない！どうしてお母さんが投降を呼びかけた時に従わなかったの？きっとお母さんなら保護してくれた！ティアのお兄さんなら助けてくれた！なのになんで！？なんで闇に自分を落としていくの！？

「どう、して・・・？」

「スバル・・・？」

「どうして、貴女は自分を痛めつけるの・・・？」

「何？」

私は思ったことを全てぶつけた。

「貴女は女を捨てた・・・人であることを捨てた・・・そしてＡＮＯＴＨＥＲの影になった・・・それは、本当に貴女が幸せになるの

？」

「何を言うかと思えば・・・私にとってＡＮＯＴＨＥＲは神であり、私の光だ。それを信じて何が悪い」

「・・・違う」

「・・・何が、違う？」

「あなたは、本当はそんなことを思っていない」

初めて会った時の影斬と、お母さん達の話をした時の影斬の言葉と表情の違和感を、私だけが気づいていた。

「私が嘘をつく・・・？何を戯言を・・・」

「貴女はきっと、どこかで救いを求めてる・・・本当の自分を押し殺してる！」

「ほざくな小娘！私が救いを求めるだと！？もう私は救われている！ＡＮＯＴＨＥＲの手によって！」

「違う！」

私は彼女の言葉をさえぎり、大声を上げる。人が救いを求める目を、私は知ってる。だから言える。光を求める人の悲しみ・・・それを救うんだ

――俺は呼ばれたらすぐお前らの所へ飛んで行ってやる

そうだよね、直人兄ぃ・・・

機動六課解散まであと数週間　3月

私はいつもとは違ってティアとランニングをしていた。踏ん切りがつかない・・・銀制服と呼ばれた特別救助隊への招待・・・でも、これからは私一人になる。それがとても不安で、怖い

「ったく、いつまで悩んでんのよ、あんたは」

「ティア・・・」

「私だって・・・一人なんだから」

そうだ・・・ティアだって一人なんだ。執務官候補として、フェイトさんたちと一緒とはいえ、一人で戦うことになる。

「・・・・・・あれ？」

不意に空を見ると、蒼い光が宙を舞っていた。

「ねえティア、あれって直人兄ぃかな？」

「あら、ホント・・・兄さんだわ」

直人兄ぃは戦いの後、闇の使徒との死線を潜り抜けてトラウマに襲われたと聞いた。直人兄ぃはそれでも闇からなのはさんたちと一緒に這い上がったという・・・すごいなぁ・・・

「あれ？直人兄ぃこっちにくる？」
空を飛びながらこっちに直人兄ぃがゆっくりと降りて来た。
「よう、スバル、ティアナ」
「直人兄ぃ」
「兄さん、訓練・・・ですか？」
「はは、いや・・・恥ずかしながらリハビリ」
直人兄ぃは自分が一時的に弱くなったということを教えてくれた。
だから力を戻すために夜に訓練するのだという。
「お前ら、もう終わりか？」
「はい、もうすぐ終わりです兄さん」
「そっか、なら・・・姉さんから送られてきた手作りのお菓子と紅茶、御馳走してやろう」
「ほんと！？」
千草さんの料理大好き！こうして、私達は兄さんと一緒に夜食を食べることになった。
ティアナｓｉｄｅ

夜の訓練場で、兄さんがシートを広げ、お菓子とお茶を用意してくれた。

「「おいしい」」

スバルと私、はもって声が出た。本当においしい。地球の一流レストランで働く兄さんのお姉さんの料理・・・前に兄さんが作った料理も食べたけど、そっちもおいしかった。

「紅茶もいい物を騎士カリムからもらってな。まあ、たくさんあるから食べろ」

「そういえば兄さん、ヴィヴィオはいいんですか？」

「ああ、最近はよく遊んで走り回っててな、疲れてるせいかぐっすりだ。なのはたちもいるしな」

「へぇ～」

言いながら兄さんが紅茶を渡してくれる。紅茶も・・・

「「おいしい」」

ま、また被った

「ははは、お前らはやっぱりいいコンビだな」

「そうかな？」

「ああ、人ってのは人生の中で良くても一人か二人、最高の相棒っ

てのができるもんだ。どんなに喧嘩しても一つの目標に向かう相棒がな」

「・・・・・・・・・」

そこで私は黙った。たしかにそうだ。私とスバルは最初、色々あってもいろんな現場を乗り越えて、一緒に戦ってきた。同じことを思ったのか、スバルが兄さんに語りかける。

「ねえ、直人兄ぃ？」

「ん？」

「直人兄ぃはさ、六課が解散したら・・・どうするの、かな？」

「あー・・・それか、実はいろんな方面からスカウトが来ててな」

やっぱり、兄さんは凄いんだ

「特別救助隊、執務官、自然環境部隊、武装隊、教導部隊、捜査部隊・・・ま、他にもいくつかな」

「そんなに・・・」

「でもな・・・」

言いながら兄さんが空を見上げる。

「俺に出来ることが何か、ちょっと考えて足りない」

「え？」

「俺には特別救助で人を必ず助けられる自信はない。執務官として事件を解決できる自信もない。自然環境部隊で動物達を守る自信がない。武装隊で死なない自信がない。教導部隊で教える自信もない。捜査部隊だって、捜査を有利に進められる自信がないしな」

短く笑って、私達を見る。

「スバル、お前が考えていること、ティアナが考えていることを当てよう。『次の部隊で離ればなれでやっていく自信がない』だろ？」

「「！！」」

私達は驚く。まだ人ことなのに、当てられてしまった。

「お前らは顔に出やすいんだよ。不安だったり本音が言えないのは、目を見ればわかる」

言いながら紅茶を飲んで、次のを注ぐ

「ま、わからんでもない・・・独りは不安だよな」

「ううん、違うよ・・・きっと私も自信がないんだよ、直人兄ぃ」

スバルが静かに呟いた。

「目標だった場所だから、すごくうれしいはずなのに・・・不安と怖さが消えない。あたしのまわりにはいつも支えてくれた誰からがいたから」

「私も・・・初めて相棒ができたから・・・」

自然と、私も声が出ていた。すると兄さんが立ち上がり、私たちを抱きしめた。

「な、直人兄ぃ!?」

「に、兄さん!?」

「ふふふ、可愛い妹たちだよ、お前らは」

兄さんが笑っていた。すると座り、片方ずつ私達を膝の上に座らせた。

「俺もな・・・小学校の時事件に巻き込まれて・・・姉さんと二人になった。でも姉さんが就職して、独りで学校に行く時は怖かったし、苦しかった・・・でもな」

兄さんの手が、頭に触れていた。

「その不安ってのは・・・たった一歩踏み込めば怖くはない。その不安を乗り越えた先は『お別れ』じゃない『新しい旅立ち』だ」

それを言われて、急に体が軽くなった。そして、目から涙がこぼれる。

「うっぐ・・・えっぐ・・・」

「うっ・・・うぅ・・・」

「たーく、しょうがねえ妹達だな。じゃあ、約束だ」

「やく、そく・・・？」

兄さんが笑顔で頷いた。

「お前らに何かがあった時、俺は呼ばれたらすぐお前らの所へ飛んで行ってやる」

「ほんと？」

「おう！」

私とスバル・・・確かに新しい旅先は違うかもしれない。でも・・・きっとまた一緒に戦う日が来るし、なにより・・・兄さんが一緒に戦ってくれる。だから信じよう・・・そう思えた。

回想終了

ティアナｓｉｄｅ

「兄さんが言ってた・・・不安だったり本音が言えないのは、目を見ればわかるって」

「貴女の目は、すごく悲しかった。だから私にはわかる！」

「黙れ、黙れ、黙れぇ！」

影斬が声を荒げる。

「お前達に私の何がわかる！私は崇高なる影！それ以外の何でもない！」

再びビーストデバイスが展開される。

「だったら私達は戦う・・・兄さんが私達にしてくれたように・・・」

「直人兄ぃがしてくれたように・・・」

「「貴女を救う！」」

スバルと叫ぶと、風が巻き起こった。

「もう、死ね！」

影斬の攻撃で全方位からナイフが飛び、私達に突き刺さった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

と、思ったでしょ？

「な！？消えただと！？まさかシルエット！？」

「その通り・・・！」

私達は実は他の場所に移動していた。

「長話ありがとう・・・おかげで準備は整ったわ」

「この卑怯者っ・・・！」

「悪党のアンタに言われたくないわ・・・！スバル！」

「おおおおおおおおおおおおっ！」

スバルが突っ込む

「こざかしい！」

刀が一閃スバルに直撃するけど、それはフェイク。本物は・・・

「こっち、だよ・・・」

「いつの間に！？」

バインドで固定し、スバルが背後に回り込んでいた。

「貴女は、私達が救う！」

「兄さんたちにできなかったことを私たちが！」

「お、おのれ・・・！」

そう、これが勝利への一撃！

「一撃必倒！」

「一撃必中！」

「や、やめろ・・・」

「ディバィィン・・・バスター！」

「スターライト・・・ブレイカー！」

スバルの一撃で大きく吹き飛び、宙に舞ったところをスターライトブレイカ―が包み込んだ。

「あああああああああああああああああああああああああっ！」

影斬は悲鳴を上げ、倒れた。そして手を上へ伸ばす。

「ＡＮＯＴＨＥＲとの未来を・・・」

「・・・ごめんなさい。貴女の未来は違うけど、きっと光がさすから」

銀色の走者　スバル・ナカジマ　流星の射手　ティアナ・ランスター

ＶＳ

混沌に暗躍する影　影斬

勝者　スバル・ナカジマ　ティアナ・ランスター

第五十八話「銀の走者　流星の射手ＶＳ影斬」（後書き）

秋風「というわけで、スバティアでした！」

直人「回想二人割かよ」

秋風「難しかったぜ」

直人「というかお前原稿はどうした原稿は」

秋風「いまやってるよ！もうちょっと待てよ！」

直人「まったく、だから駄目男なんだ」

秋風「うっさいよ！」

直人「次回、話『若き龍騎士　龍騎の召士ＶＳ混沌の道化師』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

秋風「コミケ参加するのでよろしくね！」

第五十九話「若き槍騎士　竜騎の召士　ＶＳ　破壊の道化師」（前書き）

冬コミの原稿は終わったんですが、今度はモンハンが発売したことで著しく遅れました。申し訳ない。

現在ジンオウガを十体以上倒したんですが、逆鱗がでないというｏｒｚ

とりあえず小説とモンハンで小説８、モンハン２の勢いで頑張ります

では本編どうぞ！

第五十九話「若き槍騎士　竜騎の召士　ＶＳ　破壊の道化師」

エリオｓｉｄｅ

「さあさあ！楽しい祭りの始まりだよぉ！」

ピエロが不気味に笑う。僕はストラーダを構え、キャロもケリュケイオンを構えている。

「君たちと戦うのは久しぶりだねぇ・・・強くなったのかなぁ？」

まるで僕たちに来いというかのように、笑う。

「・・・貴方は、なんで闇の使徒に！」

「理由？理由なんかないさぁ・・・僕は破壊の使徒だからねぇ」

言いながらピエロは僕と同じように槍を構える。この前と装備が違う！？

「ケルメロは武器を自由自在に操れるのさぁ・・・そう、迷彩や変換資質だけじゃない能力変化が僕の武器♪」

いいながらピエロが僕に斬りかかる。僕はそれを受け止めて斬りかえす。この前よりも攻撃が良く見える。

「あれあれ？君、強くなったねぇ」

「・・・・・」

お父さんの日々の鍛錬、シグナム副隊長との訓練、フェイトお母さんとの訓練が成果として出ている。さらに言えばキャロのブーストで身体能力は向上している。

「ストラーダ！」

『オーライ！ネオウンヴェッターフォルム！』

ウンヴぇッターフォルムのバージョンアップとして形成されたネオウンヴェッターフォルム・・・この前まで使いこなせなかったけど、今なら！

「おおおおおおっ！」

「けけけけけけ！」

互いの刃が交わり、火花が散る。

「っく！」

ブースト保護されていても、追いついていくのがギリギリだ・・・！

「やるねぇやるねぇ！」

「でえぇい！」

「おおっと！」

しばらく攻防が続く。でも、突然僕の足が膝をついた。

「うっ！？」

「隙ありぃ！」

しまっ・・・

「フリードォ！」

「きゅく～！」

火球がピエロに激突し、ピエロが僕から距離を取った。

「大丈夫！？エリオ君！」

キャロが僕の傍に駆け寄る。

「あ、ありがとうキャロ・・・助かったよ」

フリードの火球だったんだ・・・

「流石だねぇ・・・そんな高位な龍を操るなんてルシエの一族は素晴らしい」

「私はこの力を平和のために使う・・・貴方の様な人には負けません！」

「言うねぇ、世界に絶望した二人がここまでとは・・・いやぁ、素晴らしい！」

と、ピエロが拍手をする。隙だらけだ・・・今なら・・・！

「ああ、坊や！やめておくといい！僕には攻撃が通らないから！」

ピエロは笑う。するといつの間にか、カメレオンが目の前で剣になって浮遊していた。

「平和ねぇ・・・君たちにとって平和って何？」

「え・・・？」

「平和って人それぞれ違うんだよ？知ってた？」

平和・・・僕が望む平和・・・

「そうだねぇ、エリオ君・・・君はどんな平和を望むのかな？」

「・・・っ！僕は、キャロや！お父さん達と！笑顔でいられる平和を作りたい」

「じゃあキャロはどうなのかな？」

「わ、わたしは・・・エリオ君と同じ・・・お父さんやお母さんと・・・」

キャロがそこまで言うと、ピエロは大笑いを始めた。

「ぎゃはははははははははははははははははははははははは！！！！！」

「な、何がおかしい！」

「平和ねぇ・・・実にくだらない」

「なんだと！？」

ピエロは笑いながら言葉を繋いでいく。

「お父さん達と笑っていられる世界ねぇ・・・その世界はどれくらいの広さなのかなぁ？」

「え・・・？」

「君たちは自分達が平和ならいいと思ってるんだろ？」

そ、そんなことない・・・！

「違う！」

「じゃあどうして、身内しか出なかったのかな？」

「っ・・・！」

「結局さ、そんなものなんだよ・・・平和なんてね」

ピエロは笑みを崩さない。その笑みは憎しみさえ覚える。

「世界の平和・・・世界の管理・・・確かにご立派だ。でもさ、その平和とやらのために何人の人間や、動物達が、世界が消えたんだろうね」

「なっ・・・」

「平和は世界の破壊によって生まれる・・・そう、この世界は破壊によって生まれ、破壊によって終わる」

ピエロは声を大きくしていく。

「そう！僕はそのためにいるんだから！」

「いったい、どういうこと・・・？」

キャロが小さく声を上げる。確かにその通り。いったいどういうことなんだ？

「僕は生まれつき『破壊衝動』という稀少技能があってね・・・それを抑えられないんだよ！」

「破壊、衝動？」

ピエロは石を拾い、それを粉々に砕く。

「そう・・・生まれたときからそうさ。おもちゃを壊し、壁を壊し・・・君たちの年ごろにはフフ、親を壊した」

「「！？」」

親を壊したって・・・殺したってこと・・・？

「それからさ・・・僕は１０歳で殺人の指名手配になった。そして

襲ってくる局員を殺しまくった。もう殺した人数なんて覚えてないよ」

「そ、そんな貴方が、なんでＡＮＯＴＨＥＲに・・・」

普通だったら、そのＡＮＯＴＨＥＲさえも、殺そうと考えるはずなのに・・・

「ＡＮＯＴＨＥＲはね、僕が唯一壊せない個体なんだ」

「こわせ、ない？」

「そう、おもしろいことにどんなに魔力を当てても、どんなに攻撃をぶつけても、彼は壊せない。そしてＡＮＯＴＨＥＲはこうも言ったよ」

――君の破壊を、俺の創造のために使ってみないか？

「嬉しかったなぁ・・・初めてだよ。僕の破壊が認めてもらえたのは」

言いながら剣を取った。それは黒く染まり、毒々しいものを放っていた。

「僕の『殺人』と言う名の『芸術』・・・楽しんでね」

「ぐあっ！」

「きゃあ！？」

僕たちはそのままその剣圧に吹き飛ばされ、瓦礫に叩きつけられる。

キャロside

痛い・・・体中が。悲しい、こんな世界が・・・

「お父さん・・・」

見えない結界の先を見ても、お父さんの姿はなかった。

――光の剣隊舎　設立当初

「ロ・・・キャロ！聞いてたか？」

「はぅえ！？えっと、はい！」

「お父さん、もう一度言ってください。僕達が、なんですか？」

エリオ君が真剣な眼差しでお父さんを見ていた。

「お前達を光の剣のメンバーから外したいと思ってる」

「どうしてですか！？僕たち、一生懸命機動六課で頑張ったじゃないですか！」

エリオ君の言うとおりだ。私も頑張った。だからお父さんと戦いたいのに・・・

「はぁ・・・エリオ、自分の歳言ってみ？」

「じゅ、十歳です」

「キャロは？」

「十歳です・・・」

歳が、どうしたのかな？

「俺はな、別にお前らが戦力にならないなんて言ってねぇんだよ」

「じゃあどうして・・・」

「それはな、お前達が俺の息子と娘だからな」

真剣な目で、お父さんは私達を見た。

「エリオ、キャロ・・・お前達はまだまだ子供なんだ。普通なら友達を作り、勉強をして、いっぱい遊んで・・・そんな年頃なんだ」

「でも・・・」

「俺は、そんなお前達を戦場に送りたくない」

「でも僕の力は！誰かの役に立つための力です！管理局で活かせるなら、活かしたい！」

「わ、わたしも・・・戦いは苦手だけど、でも・・・」

すると、お父さんは私とエリオ君を抱えてソファーに座った。

「わわ!?お父さん?」

「お、おとうさん?」

「エリオ、キャロ・・・俺の子供のころのこと、知ってるな?」

「は、はい・・・」

お父さんの過去。目の前で私達で言うお爺ちゃんとお婆ちゃんがなくなった、そんな事件。

「あの事件からなのはたちと出会うまで、俺は友達も仲間も一人しかできなかった。しかもそいつは学校にあんまり来ない奴でな、いつも学校で独りぼっちだった」

静かで優しくも、どこか悲しい声をお父さんが出していた。

「お前達にはな、友達をたくさん作って、たくさん子供らしくして、だんだんと大人になって欲しいんだ」

「お父さん・・・」

「だからお前達を光の剣から外し、普通に学校で生活をして欲しい・・・・・・な?」

お父さんが私達を握る手が、少し強くなった。

「お前達は背伸びなんかしなくていいんだ」

「お父さん・・・」

「なんだ、エリオ」

「僕、今回だけは我儘を言います。嫌です。僕はこの部隊で、みんなと戦いたい」

「エリオ・・・」

「エリオ君・・・」

エリオ君はお父さんの膝から降りて、まっすぐお父さんを見つめていた。

「僕たちは確かに子供で、お父さんの言うとおりのことをするのかもしれません。でも！僕みたいな子供をもう出さないためにも、この部隊で一年間、またみんなと戦いたいんです！」

・・・・・そっか、そうだよね

「お父さん！私も！エリオ君と同じです！」

「キャロ・・・」

「この戦いが終わったら、絶対に学校に行きます！」

「友達もたくさん作って、お父さんに紹介もします！」

「「だから、一緒に居させてください！」」

エリオ君と私の声が合わさり、同時に頭を下げた。

「・・・・・・・・・はぁ、お前らはいったい誰に似たんだか」

「お父さん・・・」

「わかったよ、俺の負けだ」

言いながらお父さんはため息をついて、小指を出した。

「じゃあ、約束だ」

「約束？」

「そう、俺とお前達との約束だ。約束内容は『最後まで信念を貫き通すこと』」

「「信念・・・」」

「お前達は自分でそう決めたんだ。途中で投げ出したり、諦めたりするな。わかったな？」

「「はい！」」

こうして私とエリオ君お父さんの小指が絡まり、一つの約束をした。

回想終了

・・・そうだ、まだ、あきらめちゃだめ

「エリオ君、立てる？」

「うん、もちろん・・・」

「あらら？まだやるのぉ？寝ておけば楽に壊れたのにさぁ」

あきらめちゃだめ、約束を果たすんだ・・・！

「エリオ君、ブーストなしでどこまで耐えられる？」

「５分、耐えるよ。行けるよね、ストラーダ」

『問題ありません』

最大にして最後の竜魂・・・フリード、ヴォルテールとは別にいる、
最後の騎竜・・・私もまだ見たことないし、呼んだこともない・・・
一族の裏歴史に眠る最後の竜・・・呼ぶんだ、必ず！

エリオｓｉｄｅ

「ストラーダ！」

ネオウンヴェッターフォルムで再びピエロに斬りかかる。

「無駄無駄、何を考えてるか知らないけど、そんなのじゃ・・・・」

「それでも！戦う！」

魔力を込め、それを振り下ろす。

「紫電、一閃！」

「なっ！？」

シグナム副隊長直伝の紫電一閃を避けられる。まだまだ・・・！

「蒼雷一閃！」

「ガッ！？」

お父さんの蒼雷一閃が入った。これで・・・！

「なめるなぁ！」

剣が伸び、僕の肩に突き刺さった。

「うあああああああああああああああっ！」

「エリオ君！？」

「僕のことはいいから！早く！」

僕は剣を抑え、片手でストラーダを振り下ろした。

「ぐあっ・・・このガキぃ・・・」

肩が焼けるように熱い。でも、やらなきゃ・・・

「エリオ君！」

合図が来た！

キャロｓｉｄｅ

エリオ君の怪我を早く治さないと・・・だから答えてね。天の帝『セレスティア』

「彼方より来よ、人々に忘れ去られし天空の支配者・・・我が手に宿り、我が力取り、悪を焦がせ・・・天龍『セレスティア』！」

それはお父さんが見せてくれたルシエの一族に伝わる伝説の竜。ヴォルテールをもしのぐ、最強の竜種。優しさと想いに反応して生まれるその龍は、悪しき心があれば受け付けることはない。私はただ願いを込め、召喚を行った。そして光がほとばしる。

「――――――！」

そこに現れたのは白銀の竜。長いとぐろを巻くその姿はフリードたちとはまた違ったもの。フリードが頭を下げているのを見た気がした。

「セレスティア！私達と戦って！」

「――！」

セレスティアは私達の所に降りてきて、ピエロを見据えた。

「聞いてない・・・こんなの聞いてないぃ！」

ピエロが襲いかかる。

「セレスティア！」

「――――――！」

白いフィールドバリアがピエロの動きを封じた。

「なっ・・・！？」

「セレスティア！『メテオフレア』！」

「――――――！」

その白くも美しい炎がピエロを包み込んだ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああっ！」

そしてピエロはその場に崩れ落ち、私達は勝負を付けた。

若き槍騎士　竜騎の召士　ＶＳ　破壊の道化師

勝者　若き槍騎士　龍騎の召士

備考　エリオ・モンディアル　肩の刺し傷によって戦闘続行不可能
ピエロ　メテオフレアにより稀少技能『殺人衝動』消滅

第五十九話「若き槍騎士　竜騎の召士　ＶＳ　破壊の道化師」（後書き）

秋風「ということでエリオ＆キャロでした」

直人「おい、俺の出番はいつだ」

秋風「大丈夫だよ、次回だから」

直人「本当かよ・・・」

秋風「ちなみにセレスティアの設定は←の通り」

セレスティア
ルシエの一族に伝わらない裏の歴史へと消えた白銀の竜。使役条件は『純粋なる想い』。ルシエの一族でその力がゆえに使用することができる人間はごくわずかで、それの最後を受け継いだのが偶然にもキャロだったということである。発動経緯に至っては『直人との約束』が引き金で、それまでは召喚の自信がなかった。能力としては『邪悪抹殺』という力があり、負の力を完全に破壊できる。

　ちなみにセレスティアの存在はゼオンの１３番目の書蔵庫に入っていたもののひとつである。つまり、これはマリアも使役することができたということである。

直人「・・・なるほどね」

秋風「さてさて、冬コミの絵も終わったし、これからはモンハンしない時はガンガンやるよ！」

直人「モンハンすな！」

秋風「次回、第六十話『蒼天の騎士　不屈のエース　蒼天の影　ＶＳ　もう一つの蒼天』ＴＡＫＥ　ＯＦＦ！」

秋風「最近感想来なくて寂しいです！感想待ってます！」

第六十話「紅蓮の騎士ＶＳ白炎の紳士」（前書き）

ども、秋風です

実はですねぇ友人に

最近新しい小説ばっか書いてるけど前のは書かないの？バカなの？死ぬの？（。Д。）

と言われたので急遽書きあげました。書いてやったぞぉ！こらぁ！

というわけで、書きました。直人の戦いは次の話です。すっかりゼオンを忘れてました。ちなみにゼオンの由来って何？って聞かれたんですけど、たまたま金色のガッシュを読んでいたらこれいいねということになりました。最初はアポロだったし（笑）

ではどうぞ！

第六十話「紅蓮の騎士ＶＳ白炎の紳士」

ゼオンｓｉｄｅ

白いシルクハットの男とワイバーンがいた。かつて俺の部隊を全滅させた男・・・絶対に許さん！

「ふふふ・・・さあ始めましょうか！」

ワイバーンに掛けられた剣を引き抜き、バランが襲いかかる

「シャインイーグル！」

『ロードカートリッジ』

「紅蓮一閃」

紅蓮一閃により男は弾き飛ばされる。

「なるほど、おもしろい・・・」

バランは空中で回転し、地面に着地した。

「前回の貴方は私にたいして殺意しかぶつけてきませんでした。我を忘れ、ただ無心に突っ込んでくるだけ。これは非常に面白くない」

「だったらなんだ・・・」

バランは笑いながら剣を担ぐ

「しかし今の貴方は・・・ふふっ、真っ直ぐな瞳と信念を持っている。その冷静な判断と攻撃・・・素晴らしい！」

「だから、何だと言っている・・・！」

「つまり・・・」

バランは言いながら手を広げる。

「そういう人間こそ！破壊するのが楽しいのだよ！」

再び剣が交わる。先ほどよりも重い剣撃がのしかかる。

「ぐっ！」

「さあ見せたまえ！君の力を！」

「シャインイーグル！」

『オーライ！モードチェンジ！』

シャインイーグルの光が収束し、剣の形が変わった。メシアスワローと似た形状ながらも、その威厳を欠かさない金色の刃が輝いていた。

「ほう・・・」

「初代のクラウン家の当主・・・ゼオン。そのクローンである俺ならば、これも使いこなせる」

「面白いですね。その覇気は・・・」

「クラウン家の秘剣『クロスハート』・・・プログラム上不可能ではない。これで貴様を斬る」

ずっしりと、その魔力が俺を覆って行く。クロスハートは実際には存在しない剣だ。シャインイーグルのプログラムを書き換えたものだといえばわかりやすいだろうか

「いいでしょう・・・その力！見せてもらいましょう！」

ふたたび互いに駆け出すと、刃が交わる。それによって衝撃波が生まれ、互いに吹き飛んだ。

「うっ！」

「むっ・・・！」

「クロスハート・・・！」

『ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

剣が割れ、双剣へと変化する。双剣は輝きを増して、金色の剣と銀色の剣へと姿を変えた。

「おおおおっ！」

「やりますねぇ！」

俺が双剣であるにも関わらず、バランはそれにまったく引けを取らずに対抗してくる。これが、闇の使徒の幹部・・・！この前のリンとはまた違う！

「ワイバーン・・・やりなさい」

『――――――！』

ワイバーンが咆哮を上げて焔を吐いた。

「クロスハート！」

『ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

ベルカ式の魔法陣が俺を包み、その焔を防御する。やつはビーストデバイスではないのか！？

「何か勘違いしてるようですね・・・私のこのワイバーンはビーストデバイスではありませんよ」

「何！？」

「貴方はワイバーンナイトの話をご存じか？」

バランは言いながらワイバーンを撫でる。ワイバーンはそれに嬉しそうに答えた。まるで犬や猫のように嬉しそうに声を出していた

「ワイバーンナイト？」

「龍騎士です。龍に騎乗し、戦う空の騎士」

聞いたことのない名前だった。龍を召喚する召喚士の話ならば知っているのだが・・・

「簡単な昔話をしましょう」

笑いながらバランはワイバーンを撫でた

「ある世界に騎士がいました。騎士は戦いにおいて自分の存在を実感できる騎士でした。騎士は幸せでした。その戦いが、存在を実感できることが、しかしその世界では次第に戦いが減っていき、騎士は存在を実感できることが出来なくなりました。騎士は次第に自分の国で暴れまわり、民を、仲間を殺して行きました。しかしそれにより騎士はお尋ね者になりました。戦いがやりにくくなった騎士は黒魔術師に頼んでどこかの異世界へと送られました・・・」

「まさか・・・お前」

俺が予測したことが正しいなら、こいつは・・・

「異世界から来た、騎士・・・」

「そうです。私はもう覚えていない世界より此処に現れ、生を実感し続けた」

そのいやらしい笑みを見て、俺の手に段々と力がこもっていく。そんなことのために・・・そんなくだらないことのために、俺の仲間は・・・！

「そんなことのために、ティーナを！みんなを・・・！」

「私には人とは私の存在を証明するための道具でしかない！私の目的はただそれだけなのですよ！世界を変える？そんなこと知ったことではない！Ａｎｏｔｈｅｒもそのうち殺す！そしてまずは貴方だ！」

バランがワイバーンにまたがり、剣を槍へと変えた。

「さあ、始めましょう！」

「許せねぇ・・・」

今までこんな奴のせいで死んだ人のためにも、ティーナのためにも、部隊のみんなのためにも・・・！

「おおおおおおおおおおおおおおっ！」

「はあああああああああああああああああっ！」

クロスハートと奴のデバイスが激突する。俺はそのまま押されて地面に叩きつけられる。

「っく！」

『マスター！次が来ます！』

「ちぃっ！」

低空で槍が俺の横を通り過ぎようとする。俺はそれを受け止める。そのワイバーンに騎乗した状態のせいで、その速度をギリギリでし

か捉える事が出来ない。

「さあ、終焉ですよ！」

奴の槍に魔力が溜まっているのがわかった。まずい・・・

「？」

そんなとき、俺のポケットから紅のソウルエレメントが輝きを放った

――数日前

「で？結局俺が言ったのに手伝うと」

光の剣隊舎で、俺は直人と話していた

「ああ、アリサ、すずかにも了承は得た」

「そ、ならいいよ」

と、やけにあっさりと認めてくれた。何故だ？

「随分とあっさりしてるな」

「お前のことだから、アリサ達に知らせないと最初は思ってたから反対したんだよ。了承得てんなら俺はいいよ」

なるほどな・・・

「で、もう一つ別に理由があるんだ」

「何？」

もう一つの理由？

「これだ」

そう言って俺に見せたのは紅く輝く玉だった。

「これは？」

「ソウルエレメント・・・の一つだ」

「なるほど、これが」

と、手に取り、それを見る。それはまばゆい光を放っていた。

「予想なんだが・・・コレの適合者はアンタじゃないか？」

「何故そう思う？」

「何となくだ」

俺が理由を尋ねると、バッサリ切られる。こいつ、こんな性格だったか？

「まあ、冗談として・・・今までソウルエレメントはその魔力色に反応していた。それも結構な実力者や、強力な力を持った人間にだ」

「なるほどな・・・それで、俺と？」

「オリヴィエの力を一時的に得たんだ。後はそのきっかけがなんなのかだけどな」

「わかった、これは預かっておこう」

そう言って俺はそれを受け取った。

「もうすぐ、Ａｎｏｔｈｅｒと決着がつく・・・そんな気がするんだ」

「そうだな・・・全てに決着を付ける。俺も・・・」

「おい、分かってると思うが・・・」

「殺しはしない・・・アリサたちとの約束だしな」

俺がそう言うと、直人は少しだけほっとした顔になった

「ならいいけど・・・」

「それもそうだな」

「それに、あんなやつを殺しても、何の価値もない」

直人が笑っていた。最近はいい笑顔だとも思える

「直人、変わったな」

「そうかな？」

「ああ、いい顔になった」

初めて会った時はどこかに負の感情が見えたが・・・

「多分、家族が増えて幸せになったからだな」

「そうか」

「お前も、幸せになれるといいな」

俺はその言葉に驚きながらも、笑っていた

「ああ、そうだな」

回想終了

そうだ・・・俺は、こんなところで死ぬわけにはいかない・・・！

「ソウルエレメントよ・・・仲間たちの無念のために、ティーナの無念のために・・・そして、今家に待つ家族のために！俺に力を貸せ！」

必死でそう叫んだ。その瞬間だった。紅いソウルエレメントは眩い光を放った

「!?」

「っ!なんです!」

そしてそこに立っていたのは金髪の女性・・・俺はその女性の名を呼んだ

「ティーナ・・・?」

「マスター、大丈夫ですか?」

「お前、クロスハートか・・・?」

「はい、そうですマスター・・・」

ティーナは言いながら向かってきたワイバーンを素手で殴り飛ばした

「なっ!?」

「バカな・・・!」

「行きましょう、マスター・・・全てに決着を」

「わかった、行くぞ!」

そう言って俺は立ち上がった。

「「ソウル・イン!」」

俺のバリアジャケットは今までの者に紅いジャケットに金色のライ

ンが入ったものだった。そして剣も今まで以上に魔力と形が増大していた

「これなら、行ける」

「舐めるなぁ！」

再び、体制を整えたバランがワイバーンと共に突っ込んでくる

「この一撃は・・・仲間と、ティーナの無念のための一撃だ・・・覚悟しろ」

『ロードカートリッジ』

5発のカートリッジをロードし、クロスハートが輝きを放つ

「終剣・紅蓮円舞、如月・・・」

「はあああああああああああああああああっ！」

俺の想いをこめた一撃だ・・・これで決める

――ガキィィン！

互いの刃が交わり、バランが通り過ぎた

「「・・・・・・・・・・」」

そして俺の肩から血が溢れる

「・・・・っ！」

「ふふ、私のか・・・！？」

だが、バランの腹部からも血が噴き出し、ワイバーンの翼が片方斬れていた

「俺の、勝ちだ・・・！」

剣を空に掲げ、仲間たちに向けてその言葉を言った。見ていてくれたか・・・？ティーナ。こうして俺は気絶した

紅蓮の騎士　ゼオン・クラウン　ＶＳ　白炎の紳士　バラン

勝者　紅蓮の騎士　ゼオン・クラウン　ただし、気絶により戦闘続行不可能

第六十話「紅蓮の騎士ＶＳ白炎の紳士」（後書き）

秋風「今回、ゼオンのことをわすれてたので入れました。申し訳ない」

ゼオン「頼むぞ、数少ない出番なんだ」

秋風「まあ、次回は直人だけどね」

ゼオン「・・・次回、第六十一話『蒼天の騎士　不屈のエース　蒼天の影　ＶＳ　もう一つの蒼天』」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8169j/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜蒼天を愛した混沌〜

2011年1月10日03時30分発行